

移民の生活の歴史 (1)

半田知雄

(この巻は第一部から第三部まで収録)



目次

再刊のことば

第1部 契約移民―金となる木をさがして

1. 第一回 かさと丸移民 13
かさと丸のサントス入港／サンパウロ移民収容所の日本移民
2. 「配耕」先、六農場の地理 40
3. 「配耕」と移民列車 45
4. ブラジル産業史のうえからみたコーヒー農場の地位
ブラジル産業の移り変わり／コーヒー栽培の歴史とサンパウロ州のコーヒー地帯 56
5. コーヒー農場における第一回移民 66
コロニア／ズモーン農場の場合／カナアーン農場の場合／フロレスタ農場の場合／サン・マルチーニョ農場の場合／グアタパラ農場の場合／ソブラード農場の場合
6. 第一回移民の経験―いわゆる「失敗」の原因について 110
7. 第二回旅順丸移民 123
ジャタイー農場／サンタ・マリア農場／サンタンナ

農場／第二回移民の成績とその後の移民輸送

8. 移民とはどういうものか―日本の近代化の下積みと
なつた農民たち

146

9. ファゼンダ生活の一農年（一九二二―一九二三年）

159

農年の切れ目―出るもの、はいるもの／コルシヨン
作り／はじめの食べ物／コーヒーを入れる／ファゼ
ンダの洗濯と薪取り／鋤の柄のすげ万、その他野良
仕事に必要なもの／便所のこと／仕事はじめ―出勤
風景／除草の仕事を習う／コーヒー園の食事／たば
こ一服／帰宅（プラ・カーザ）／ビッショ・デ・ペー
（砂蚤）／土曜日／斧つかいの名人／土曜の晩／日曜
日／コーヒー園の間作／夜逃げのこと／ブラジルの
夏／病人、葬式／パン焼きと豚殺し／日本移民の食
生活／新移民とブラジル語／子供のたのしみ／ファ
ゼンダの正月／臨時収入と不慮の欠損／作物のとり
入れ／牛車の季節／山たて（コロアソン）／パトロンの
農場入り／コーヒー採取（アパンニャ）／コロノの
暮らしぶり／日本人コロノの家！ファゼンダの人間
的環境／ファゼンダの組織とコロノ制度／フェスタ
（祭り）の多い六月／山崩し／総勘定／エンボーラ

10. 一九二七年の調査にあらわれた移民の生活

305

第2部 初期移民の都会生活 313

11. サンパウロ市における初期の日本人 313

12. 当時のサンパウロ市 231

13. コンデ街の生活 342

移民にとりつきやすい家庭労働／大工、塗工と家具商／自動車運転手／在留同胞のオアシス、コンデ街

14. ビッショ賭けの話 364

15. シネーマ 373

16. フロントン 380

17. あそび 384

第3部 独立小農への発展

18. 独立小農と近代自作農の出現 390

19. 自作農へのあこがれ 396

20. 米作をめざした初期の日本人 402

21. 日本人植民地の三つの型 408

22. 原始林の開拓 409

みどりの地獄

23. 原始林開拓の先駆者 412

測量隊の仕事／ヤマキリ（山伐り）森林伐採の仕事）／山焼き

24 開地風景／衣服／食物／あらやまの仕事 431

25 ・初期植民地の一年間 446

はじめの無知／プランタデイラ／コーヒーの植付け
／家づくり／衣服／食物／正月・新年宴会／綿つみ
／カザメント（結婚）／天長節／ばった軍襲来

26 ・植民地の建設―入植当時の悲惨な経験 474

平野植民地の開拓／イタコロミー（第一上塚）植民地の創設／ビリグイ植民地／バイベンとブレジョン植民地

27 地権問題―植民者にふりかかる人為的災難 521

（注・この巻には第三部まで収録）

第4部 植民地建設途上の諸問題

・植民地の自治機関と教育

日本人会・青年会／小学校／青年の夜学

・移民社会における結婚

・連れ家族の悲哀

第5部 地方史―各植民地の歴史

・サントスおよびジュニア線の同胞

第一回移民と当時のサントス市／サントス市およびその

周辺の邦人とその職業／ジュキア線の同胞

・イグアツペ植民地の建設―桂、レジストロ、セッテ・
バーラス

サンパウロからレジストロへの道／イグアツペ植民地と
いう名称／桂植民地の開拓／レジストロおよびセッテ・
バーラス／初期植民者の生活／産業の移り変わり／植民
地夜話／現勢概覧

奥モジアナ方面の米作者

初期の人たち／米作者の特殊ないき方／二種の分益農／
初期の米作法／低湿地の米作／台地の陸稲（おかぼ）づく
り／初期の大農とその生活／ジャーナリズムに喧伝され
なかった奥モジアナ地方／イーリヤ・グランデの悲劇／
冠婚葬祭／追補

34・カンポ・グランデにおける沖縄県人の発展―第一
回移民の足跡をたどって

カンポ・グランデ周辺の開拓／市外と市内の日本人／変
わりつつある生活

・サンパウロ市郊外の農業と日系農家の生活
郊外農業のはじまり／郊外農家の生産と生活様式／元祖
自慢／各集団地の歴史／当時の販売法と天秤姿の野菜売
り／初期の運搬機朗とトラックの出現／貧弱な生活程度
／近郊農業の特殊な例外／都会との文化交流と生活の改
善

・アリアンサ移住地の特色

確実なる計画と秩序と統制のある組織のもとに／移住者は出稼ぎものではなかった／先駆者の苦闘／初期入植者の生活／移住者が直面した現実／「アリアンサ」というところ／「コーヒーよりも人をつくれ」

ブラジル拓殖組合の創設になるチエテー移住地

移住者の不満と事務所員の苦労／初期入植者の生活／入植者は依然として少なく……／市街地（ノーボ・オリエンテ、現ペレイラ・パレットス）の発展／漬物において
38・多くの障害をのりこえて建設したバストス移住地
バストス移住地／移住地の經常方針／開拓の第一歩／植民地の動き／初期移民者の生活／満一年の保健状況／市街地および小学校建設／十一年間の入植者家族数／失敗した土地選定法／やせ地に栄えた産業／バストス移住地の特色／植民者の精神的傾向／スポーツのバストス／郷土愛／現在のバストス市

39・旧移民の多いトレス・バールラス移住地

トレス・バールラスとアサイー市／移住地の特色／はじめて原始林に斧をおろす／入植初年度／開拓二年目からの植民者の動き／ブラ拓の指導方針／テーラ・ローシヤ地帯の植民地

40・北パラナ（パラナ州北部）への発展

一九三〇年以前の北パラナ／ロンドリーナ地方の開拓

第6部 全盛期の植民地（一九三〇～四〇年）

全盛期のコーヒー地帯

初期植民地全盛時代の生活……………

植民地

の気風／小パトロン気分（住居、食事）／つきあい（お産とお葬式）／新しい日本人会／青年会とスポーツ／弁論大会／巡回シネーマ／流行歌／東亜共栄圏の夢と棄民思想／ブラジル育ちは気がきかない／初期植民地崩壊のきざしと青年会の反同化的傾向／おやじたちの不満・地方都市の出現と発展

ペンソンの役割／町の青年会の役割／学生寄宿舎、裁縫学校／うどん・しるこ屋／地方都市日本人の職業別／地方都市の生活・戦前の植民地における二世の性格・ノロエステ線における日本人の勢力・日本人はなぜ農業に執着したか

第7部 移民と風物

・ 米食と風呂

・ 日本移民の食物の特長

虫の話

草の話

初期植民地の気風

オスピタリダーデ（旅人をもてなす）／相互扶助と平等主義／もののやりとり

52・ブラジルの田舎者の生活

住居とその内部／寝室とあかり／食生活／たばこ／入浴／洗濯／家禽、家畜、その他／作物／性格、趣味、教養／服装／女たち

第8部 移民社会の中心地サンパウロ市

53・一九三三年におけるサンパウロ市の日本移民572
コンデ街の模様／コンセリエイロ・フルタード街／コンデ・ド・ピエヤールとイルマン・シンプリシアーナ街／ピニエイロス区

第9部 深まりゆく移民のなやみ

54・二つのナシヨナリズムの間にはさまって苦しんだ移民

55・ナシオナリザソンと外国語出版物（とくに新聞）の発行禁止

56・新聞と、その果たした役割
はじめての新聞、週刊『南米』／『日伯新聞』の出現／『伯刺西爾時報』の登場と「日伯」／その他の新聞／「日伯」「時報」の対立時代／新聞の果たした役割／各新聞の特色

57・一九三三年から四一年末まで

移民二十五周年祭／移民二分制限法／ポルトガル語ので

きない教師は日本語を教える資格がない／十四歳以下の児童に対する外国語教授の禁止令／日語教師の生活は苦しかった／だれが親孝行を教えるか／ただ悶々として／かくれて教えても効果はあがらない／二世教師は植民地で孤立した／早く同化した二世とその親たち／二世の自覚のはじまり／サンパウロ市の日系インテリ青年たち／ヨーロッパ戦争と深まりゆく移民のなやみ／一喜一憂の時代／世の中一般が変わっていく／枢軸国民は敵国人／一九四一年、戦前最後の年

58・太平洋戦争中の在伯同胞 付―戦争中の日本移民の心理状態

第10部 戦後の混乱と新しい生活への歩み

59・終戦直後における同胞社会の空気

あるサロンでの会話／デマはどうして流されたか／計画的な陰謀も片鱗をみせる／「公報」を待つ心理

60・混沌たるコロニアの状況

カンポス・エリーゼオス宮の説得／オズワルド・クルー
スの暴動／終戦一周年／郵便再開／邦字新聞の再刊／永
久帰国者の出現

61・テロ事件とその犠牲者

62・ブラジル人側に残された資料による臣連事件の理
解

臣連事件に対するブラジル人の態度／ブラジルの新聞に

見る臣達本部と臣連実践綱領／デマ宣伝と偽造写真、その他／脅迫行為のいろいろ／各地指導者の臣連理解／偏執狂的頭脳の指導者たち

6 3・戦後コロニアの対立抗争はどのように解釈されたか

6 4・建設への道

6 5・「涯しなき思想旋風を衝いて」――終戦後七年の信念派の理論

6 6・人種的偏見のない明るさ

追補 日本移民の人種的差別観

6 7・一世青年と異人種間の結婚

6 8・「新来」と「ブラジル・ボケ」

6 9・二世と日本文化――逆効果をもたらした教育

7 0・日本移民の宗教生活

第11部 コロニア統一への動き

7 1・戦災同胞救援運動

7 2・トビ魚一行の訪伯――涙で仰ぐ日章旗

7 3・サンパウロ市創立四百年祭への協力運動

日本館のにぎわい／日本美術紹介としての役割

7 4・サンパウロ日本文化協会の創立

第12部 コロニアの現状

7 5・戦後移民の渡伯 付――日本の企業進出

7 6・一九六七年五月の皇太子夫妻歓迎について

77・現代の奥地シチアンテ（北パラナ同胞の現状）
ロンドリーナ市のスケッチ／農村をのぞく／シチアンテ
の生産様式（過去）／シチアンテの生産様式（現在）／
奥地の非コーヒー地帯／今後の行き方に対する諸問題／
二世の成長とその教育／二世の政治運動／二世の結婚問
題／世代の差と教養のへだたり／寺院、盆おどり、その
他いろいろな「会」／冠婚葬祭／家庭生活／最後に、さ
らに奥地の町を

78・単一性から多様性への発展
二世が大きくなって／土地がやせて／勝ち負けの争いも
あって／教育の目標もかわって／自由な選択ができて／
階層の分化もおこって／社会的地位の入れかわりもお
こって／新しい方向への動きもあって／発展の意味もか
わって／発展のための必然的多様化

79・エピローグ

用語解説

参考文献

（挿絵・半田知雄）

（注・原本には写真もあるが、小さく不鮮明なため転写はしていな
い。本文庫のいろいろな本にある写真とおなじためでもある）

第1部

第一回 かさと丸移民―金となる木 をさがして

第一回 かさと丸移民

かさと丸のサントス入港

六月十八日をブラジルの日系人は「移民の日」として記念する。一九〇八（明治四十一）年六月十八日に、第一回かさと丸移民がサントス港に着いたからである。

ブラジルにおける日本移民の生活の歴史をつづるにあたって、私は、かさと丸のサントス着からはじめる。

第一回のかさと丸移民であった香山六郎（こうやま・ろくろう）の『移民四十年史』によると、船は六月十七日の夜、まずサントス港外に仮停泊して夜明けを待っていたのである。

星のふるような晩だったという。

「夜明けには南米大陸の山々が見えるぞ、との船員の話で、移民はにわかになぜわづきだし、活気だった」

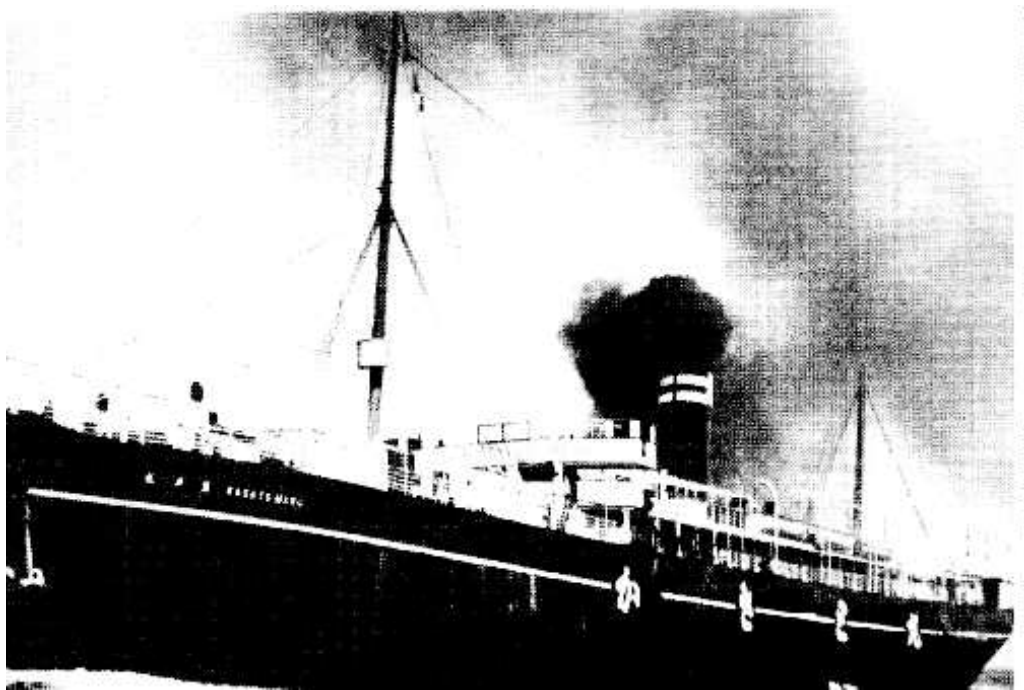
「明日はいよいよサントス入港だ、かさと丸ともお別れだ。移民の心は、雄々しいうちにも故国の船に別れる哀愁があった。移民の子供を抱きあげて、お別れの頬ずりをする船員もあった。沖縄移民のひくシャミセンの音は、夜の海にながれた（注）」

一万二千里の船旅を終わって、サントス港外に仮停泊した夜の移民の気持ちに胸にせまる。おそらく、サンパウロ州の冬、六月の空には、あざやかに南十字星もかがやいていたことであろう。いままで船酔いで頭があらなかった人もあったにちがいないが、明日はサントス入港という声をきいて、生きかえたように頭をもちあげたことであろう。身のまわりのものをかたづける人、祝宴を催すもの、あわただしい動きのなかにも、やはり故国の船に別れるさびしさがあったにちがいない。

明ければ六月十八日「晴、木曜、此朝サントス入港、午後五時船渠（ドック）着、航程二二〇里、総里一万二千里」、移民と同船した皇国殖民会社社長水野龍（みずの・りょう 五十歳）の『笠戸丸航海日誌』は、簡単にこの日のことを記録する。

「この朝入港」は午前九時半であった。船はまだ岸壁に

着いていない。検疫は簡単にすんだ。サンパウロからの
出迎え人が乗船してきた。ペトロポリス（注②）日本公使
館の三浦荒次郎通訳官、サンパウロ移民収容所の日本人書
記鈴木貞次郎、皇国殖民会社代理人ラファエル・モンテイロ
およびサンパウロ藤崎商会店員の後藤武夫の四人がそれ
であつた。



船内には「金のなる木のコーヒー園を眼前にして、八

百の移民たち（契約移民七百八十一人と自由渡航移民十人その他）がみな興奮のルツボのなかに陶醉している（注㉓）」のであった。ちょうど、六月のサン・ジョアン祭近くであつたので、フォゲッテ（爆竹）が上空にまいあがり、爆音をとどろかせていた。バロン（火をともした紙風船）もとんでいたという。「移民たちは、感嘆して大空をみあげて、ブラジル国民が彼らを歓迎していると思った（注㉔）」

「万歳！ 万歳」感激のうちに、六、〇〇〇名級のかさ丸は、日章旗をひるがえして午後五時半、第十四号岸壁（注㉕）に横づけになった。すでに新月が山の上にかかつていたころであつた。

移民の上陸がはじまつたのは、翌日（十九日）の午前七時からである。彼らは日の丸とブラジルの黄緑（アウリ・ベルデ）の小旗を手にして船から降りてくる。

第一回かさと丸移民の上陸光景は、このときレポに加わったコレイオ・パウリスターノ（注㉖）の記者が発表した記事がなにより参考になる。

はじめて見る日本人は、いったいどんな服装をしてくるだろうか、まず、ブラジル人はそう思ったにちがいない。「彼ら（移民）は男女ともすべて洋装であつた」と書いている。「男たちは中折れ、または鳥打ちをかぶり、女王ちは下着―カミゼッターにスカートのつながった着

物をきて、腰のまわりはベルトでしめ、ごく簡単な婦人帽をゴムひもで頭につけ、ピンのかざりをつけていた。その髪形は、かつて日本画で見たものを思いださせるが、あの絵にあったような大きなカンザシーグランポス・コロサーイス―はつけていなかった」(浮世絵の美人画でも思いだしていたのであろうか?)

「男女とも安価な靴(深ゴム・編上げ・短靴)をはいていて、底には鉄のビヨウが打ってあった。そして、すべてのものが靴下をはいている」ことに注目している。

「男たちのなかの幾人かは最近の(日・露)戦争にいったもので、その胸には勲章をさげていた。

彼らの一人はメダルを三つもさげていたが、その一つは金で、戦功によって与えられたものであった。

多くのものが絹の小旗をもっていた。塗りのある細い竹の棒の先には黄色い金属の玉がついていた。この旗は対をなしていて、一つは白地の中央に赤い丸があり、他のものは黄緑で、日本とブラジルの国旗であった。これはわざわざ、われわれをよろこばせるためにもってきたものであった。なんと上品な心づかい! 尊い教育のたまものである(東洋のキヌでつくったブラジル国旗、記者の感激がおもいやられる)。

彼らのヨーロッパ式衣服は、みな日本で購入したものであった。そして、それらは、日本人の大工場で仕立て

られたものであった（日露戦争を中心として日本の繊維工業はますますさかんになって、すでに国産洋服―木綿―ができていることなどめずらしいものではなかったが、記者はブラジルの工業力に比べてとくに注目しているのである）。

ヨーロッパ的服装は、〃日の出の国〃に普及しつつある（しかし当時農村で洋服をきていたのは、学校の男の先生くらいであったろう）。移民たちは自分の金で衣服を購入したのであったから、清潔な新調品で、気持ちのいい印象を与えた。女たちは木綿の白い手袋をはめていた」おそらく、気の毒なほどよごれ、つかれてやってくる南欧移民にくらべて、手袋まではめてくる日本移民の服装には、驚異の目をみはったにちがいない。

サンパウロ移民収容所の日本移民

移民たちは船と並行して停車した汽車に乗りこむ。二等車であった（ブラジルには三等車はない）。出発は午前十時、いよいよサンパウロ市の移民収容所へ向かうのである。六月の空は晴れ渡っていた。車窓という車窓からは日本・ブラジルの小旗をつきだし、列車はしばらく平地を走り、やがて海岸山脈をのぼりだす。原始林におおわれた山腹には、黄、白、むらさきの花も咲いている。

岩間からは幾条もの水が、しぶきをあげて深い谷間へおちていく。頭をあげて遠く目をやれば、黒々と連なる山頂に一片の雲がうごく。全く「エストラレンジエイロは旅愁を忘れた（注ㄴ）」ほどすばらしい眺めであった。



山脈の頂上アルト・ダ・セーラ（現パラナピアカーバ）駅で機関車が替わる。移民たちの特別列車は、サンパウロ市にはいると、引込み線によって、移民収容所のプラットフォームへよこづけになった。三時間余の旅で「すでに午後一時を過ぎていた（注∞）」。

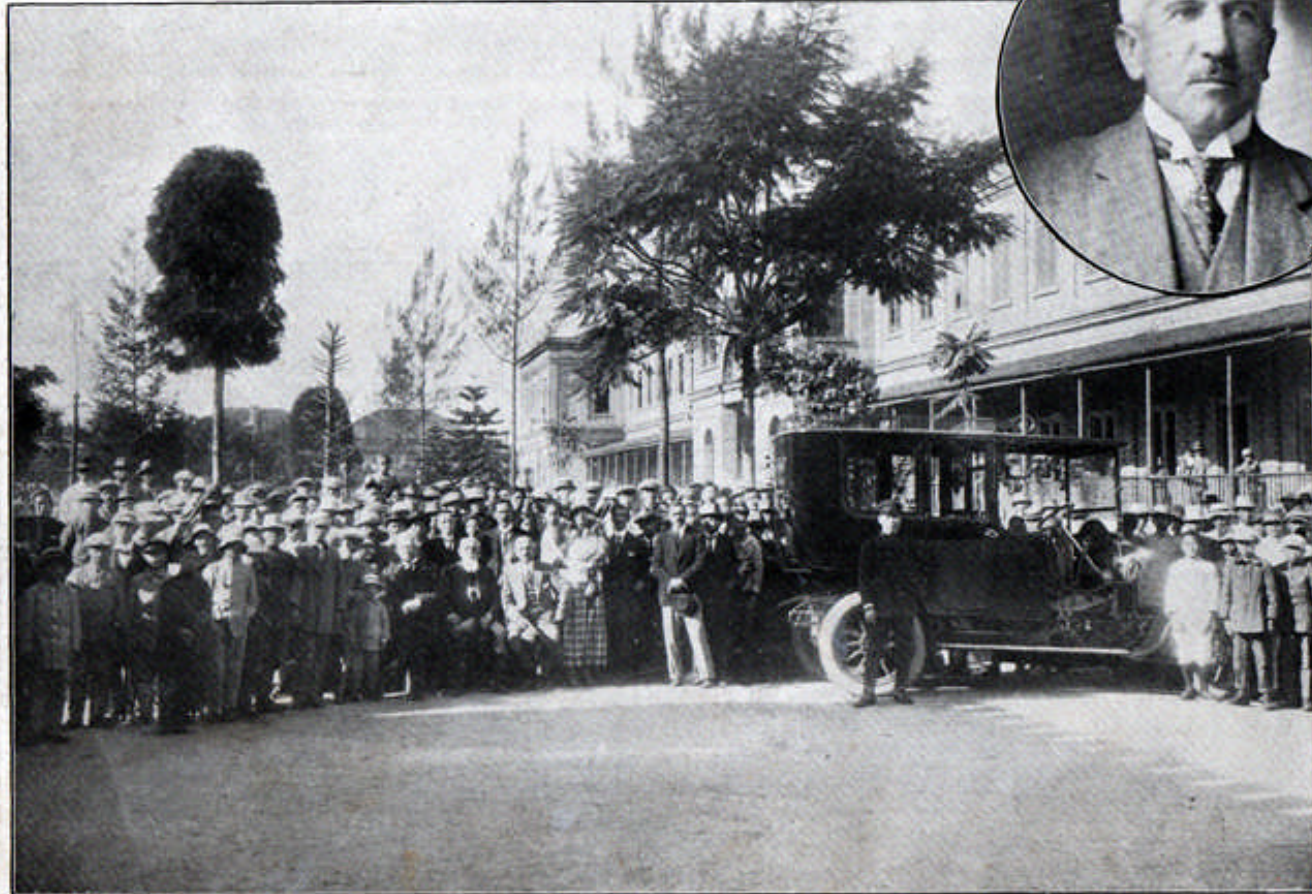
収容所では、所長をはじめ、移民関係の官吏および、前からサンパウロ市に着いていた日本人通訳五人男にも迎えられた。通訳五人男とは、シベリア経由で、移民たちになきがけして、ブラジルに着いていた嶺昌（みね・あきら）、大野基尚（おおの・もとなお）、平野運平（ひらの・うんぺい）、加藤順之助（かとう・じゅんのすけ）、仁平嵩（にへい・たかし）なのであった。ちなみに、この収容所は一八八六年六月十五日に落成し、その後一八九〇年改築されたもの。兵舎のような建物で、収容人員は二千人といわれていた。

午後五時の夕食だったという。おすなおすなの雑踏、ガランとした天井の高い大食堂にならんだ十数のテーブルで、二回にわたって食事が給与された。バカリャオ（干鰯）とじゃがいもとを煮こんだおじや（カンジャ）にパンだった。当時収容所の書記をしていた鈴木貞次郎の説明によると、日本移民へのごちそうだとのことであった。肉のスープとパンが普通なのであるが、干鰯（輸入品）をだしにつかったところにブラジル人の厚意を思わせるものがある。

コレイオ・パウリスターノの記事をつづける。

「移民たちは一時間ほど食堂ですごしたのち、自分たちに関わりあてられた寝台、寝室をみるために、そこを出なけ

所 容 收 民 移 州 聖



サントス港から移住者は皆サンパウロ市の移民収容所に来る。汽車賃も宿泊費も皆聖州の負擔で其上此州では家族移住者一人毎に十五磅宛の渡航費補助がある。(右上)は収容所長。

Imigração de São Paulo e Sr. Ferraz

(注・写真は1921年ころのもの)

ればならなかったが、彼らの去ったあとのサロンは、完全な清潔さ―リンペーザ・アブソルター―がたもたれていてみんなをおどろかせた。たばこのすいがら一つ、つばを吐いたあと一つない。きたならしくつばをはきちらし、たばこのすいがらを足でふみつぶす他の国の移民たちとは正に対称的である。

彼らはいつも、きわめて規律正しく食事をした。そして、最後に残ったものは、さきのもより二時間もおくられたのに、ヤジをとばしたり、がまんできないでさわいだり、抗議の声をあげたりはしなかった「寝室へはいった移民たちが、どんなふうであったかの報告はないが、『ブラジル日本移民の草分け』の三三七ページには「移民の寝台に対する設備は不完全で、かつ数もたらないらしく見えた。エルクラノ（収容所の一役人）の話によれば、夫婦者だけが銅色に塗った鉄製寝台を供給され、やや厚い綿布を敷いて寝るが、独身者は蒲（がま）で編んだむしろを敷いて板の上に寝ることになっている。

もちろん、夫婦者の数が少ない場合は独身者も寝台を占有することは自由である」と書いてあるから、のちに鉄製の二段になった寝台が幾百とならんだ大寝室の光景はまだみられなかったようである。まして、夜中にナンキン虫の襲撃をうけて大きわざをするようなことはまだなかったかもしれない。しかし、はじめて寝台にねて、睡

眠中ころげおちるようなことはあったろう。「四十年史」によると、日本移民は、ここではじめて水洗便所なるものを使ったのである。

記述をふたたびコレイオ・パウリスターノの記事にもどそう。日本移民が規律正しく種痘をうけた話もあるが略してとばす。

「移住してきたすべての日本人は、一般に背が低い。

頭が大きく胴体が長くよく発達しているが足は短い。

十四歳の日本人は、わが国の八歳の小児より背が高いとはいえない。日本人の平均身長は、われわれのなかの低位のものより低い。むろんもつと高いものもいた。

彼らはわれわれの間の中くらいに相当するだろう。

しかし、とくにわれわれが注目したのは、男子の体が頑丈できたえられていることである。しかも筋肉はそんなにふくれあがっていない（ふしぎに思うだろうがほんとうだ）。それでいて丈夫だ。骨組はひろく、胸は充実している。

その黒い髪の毛は、女性の大きな髪かたちにおいて、とくに目だっている。男たちは頭髪を分けるように刈っている。すべてのものが分け髪にしているが、あるものは横のほうから、他のものはまん中から分けている。ていねいに櫛でとかし、みんながつけているネクタイとよく調和している。また、それは彼らのふしくれだった

手ともふつりあいのものではない」という観察をくだしている。習慣や教養の方面では、「彼らは従順で社交性がある。そしてわが国の言葉を熱心に学ぼうとしている。また食堂では、御飯一粒、おつゆ一匙こぼしていない。食事ののち（一時間半から二時間かかる）食堂の床は食事前と少しも変わっていない。寝室はほとんど掃きだす必要がないくらいだ。たまに紙きれやマツチのすりがらがおちていることもあるが、これは時によると収容所の使用人たちの所為である」

といい行儀のいいことをほめている。よほどはじめの印象がよかったとみえて、ほめどうしである。さらに、「彼らがその妻を信用している程度は最高で、自分たちのポルトガル語の勉強を中断しないために、日貨をブラジル貨にかえる両替を彼女たちにまかせているほどだ。彼らはみなお金をもつて来ている。十円、二十、三十、四十、五十円、ある場合はそれ以上であるが、それほどではなくともみんないくらかずつもっている」

彼らがその妻を信用している程度は最高だというのは移民の妻が文盲でないことを知っておどろいたのだろうか。むろん、当時のブラジル人は、日本人の亭主カンパクについては、おそらく知るところ少なかったにちがいないから、亭主カンパクの裏には、こうした妻への信用もあるのだ、といっているのでもなさそうである。むろ

ん、ブラジル渡航を前にして結婚したり、形式的に家族を構成するために、妻としての籍を入れたりしてきた当時の若者たちのあいだには、おそらく日本の伝統的な家父長制の姿はみられなかったであろう。それにしても多額の金銭を妻にまかせっきりで、自分は収容所の使用人などをつかまえて、今こそいい機会だとばかりポルトガル語の練習をやっているような夫の態度は、なにかめずらしいものに感じたようである。当時多くのブラジル人は妻に金銭の管理をゆだねる習慣をもっていなかったのではなからうか。日本人のカンパク亭主は「妻を奴隷のようにみさげ、こきつかう」とヨーロッパ人に非難されながらも「さいふ」をわたして、家計のやりくりをまかせる習慣があることなどを考えあわせてみると、これは興味ある記述であろう。

「移民たちは、たびたび風呂にはいるので、からだは清潔だ。また、さっぱりした着物をきている。

すべてのものが、歯みがき粉の箱、歯ブラシ、舌かき、櫛、かみそりなどをもっている。石けんをつかわず、水だけでひげをそる。

彼らの荷物は小さいものばかりである。それでも約八百人に対してその量は一千百個に達し、多くは柳行李またはズツクの袋で、みたところ、労働者の荷物とは思えない。わが国の労働者のもちいるブリキ箱、コ

モ包みの荷物とくらべると、比較にならない。これらの荷物のなかには、歯みがき粉、缶詰、食物調理用の醤油（モ―リヨ）、薬品、衣服、木の枕、その他の日用品、防寒用のふとん、大工道具（これはわれわれのものとはずいぶんちがつている）、一、二冊の書物（めちやくちやな落書きでいっぱいだと私は思う）、便箋のはいった箱、墨、御飯をたべるときにつかう小さい棒（アルミ製もある）、

ひらたくて幅のひろい小さな匙（しゃもじ）、その他彼らが必要とするこまごまとしたものがはいっている。日本着は、模様をそめつけた幼児用の着物―キモノジニヨ―をみいだしただけである」

よくもみたものだと感じする。おそらく、なにかもめずらしかったのであろう。また彼が考えていた移民という観念にはそぐわないような物品ばかりであったにちがいない。

そこで、コレイオ・パウリスターノの記者が結論として述べているところは、このような清潔さ、規律正しさ、従傾きというような日本移民の習慣や性格が、労働のうえでも発揮されるなら「将来、サンパウロ州の富は、日本人に負うところ多く、彼らは生産活動の一分子として、申し分ないもの、とみとめられることになるだろう」ということであつた。しかし、これはその当時全然予想も

つかないものであったことはもちろんで、記者もつづけていっている。「人種的には、われわれと非常にちがってはいるが劣等ではない。われわれは国内労働における日本人の活動について、いまから早まった判断はさけないと思う」とことわっている。

さて、移民の仕事としては、税関吏の荷物とりしらべに対する立ち会いが残っている。コレイオ・パウリスタ―ノ紙の記事では結論のまえのところに荷物検査のことが記してある。

「彼らがもってきた一千百個の荷物のなかでは、厳重なとりしらべがあつたにもかかわらず、税関吏は、ただ一つの課税品もみいだすことができなかった。しらべはほとんど丸二日かかった。

税関の役人たちの言明によると、こんなに規律正しく、冷静に、その所持品のとりしらべに立ち会って、ただ一度もかくしだてでとがめられるようなことなかった人たちは、はじめてであつたという」

これは「税関の役人たち―エンプレガードス―の言明による」ものであるが、これに立ち会った移民たちの話は少し変わっている。移民たちは荷物をしらべるものが、役人であろうとエンプレガードであろうとそんな制度上の区別はわからない。おかみの仕事をするものはみな役人だと思っている。荷物の検査は六月二十二日からじ

まった。「芸技の肖像のついた色づけ絹ハンカチ

が税関吏の手から、そのポケットに、ニコニコとしまいがまれた（注⁹）」には移民たちのほうがびっくりした。税関吏が無断でニコニコとちようだいするのである。「吏」とある以上、日本語では役人であり、ブラジル語ではフンシオナリーオである。「盗むの平気ね」とあきれかえるものもあった。

しかも、検査は寛大であつたといわれる。

「南欧移民の荷物など、汚れた衣類の小包みと炊事道具のガラクタばかりで、税関吏の立ち会うことも稀だつたという」しかし「ただ一つ（日本移民の持ち物で）税関吏をふしぎがらせたものがあつた。法華坊主くずれの東京移民の、茨木家族が持参した十二個からの蚕繭（かいこ）棚であつた。棚の柵ばかりでなく、藁までそえてもつてきていた。そのころブラジルでは、養蚕業などほとんど発達していなかつたので、説明しても判断もつかないものであつた（注¹⁰）。」

移民たちは、すでに目的地のブラジルへ着いたものの収容所の高い塀のなかでは、まだまだ気持ちが悪く落ち着かない。だが、落ち着かないままに、目的地へついた以上なにかためになる仕事をしないで、むなしく時をすごすという法はない。そこで、ブラジル人記者も観察してい

るように、きつそく収容所内の掃除人夫などをつかまえて、ブラジル語の勉強である。むろん、まだ日本人以外の人種には慣れていない日本移民のなかには、「大入道のような黒人掃除夫が通るたびに肩をすぼめてよける」、ような婦人もいた。しかし、若い娘たちなどはグループになつて彼らに会話をいどむ。

「エステ、コーモ・セ・シャーマ？」（これはなんといいますか、と自分の目を指さす）

「……………」

「シン・シン」（はい、なるほど）

「コーモ・セ・シャーマ？」

こんどは鼻をさす。つぎには口をさす。人夫たちはニヤニヤしながら教える。娘たちはこれを熱心にノートする。「小児のごとく無垢」な乙女たらであつた。ところが彼女たちがその学んだばかりのポルトガル語をフラীগ所長の前で披露するときがきた。娘たちの一語が発せられるごとに、彼は満面朱をそそぎ、最後の……という言葉をきいたとき、ブル、ブルと身ぶるいした。それでも所長はわずかに「エスター・ボン」（よろしい）といったが、すぐ身を転じて、掃除人夫の係であるエルクラノをよびよせ、全人夫を食堂に召集させた。むろん「以後彼らにまちがった卑しむべき言葉を教えるものあるときは、断然解雇」すべきことを、きつく申しわたしたの

であつた（注一）。

移民たちは、市内見物も望んでいた。

収容所生活六日目、細雨のふるなかを午後一時から、沖縄移民たちの外出があつた。彼らを引率して来た嶺通訳は、「街で何事か不祥事がおこりはせぬかと心配していた」そうであつたが、別に大事はおこらず、ただ東洋人をはじめて目にするヤジ馬たちが「日本人の前にたちふさがつて、低い鼻を見つつ、自分の偉大な鼻を指さきでおさえてみせたが、東洋の君子国移民は、体面を重んじてケンカもできず、ニヤニヤ笑つていた（注二）」。

移民としての観点からみたコレイオ・パウリスターノの記者と、街のヤジ馬とは違つた印象をうけたようである。

さらに中央のラルゴ・ダ・セーでは、日本婦人と子供の一行はめずらしがる民衆にとりかこまれてしまった。

「二時間ばかりは前進もできなかった。ウソのような事実」だつたと「四十年史」には記されている。だが、これがラルゴ・ダ・セーの出来事であつたかどうかは確言できないようだ。「移民の草分け」の三八八ページによると、「市街を見物させよ」という所長の命令で、いやいやながら五人男の通訳が、移民たちを案内したことは事実であつたが、「黒い喪服のような西洋服を着た女が、赤い花をくつつけた扁平な麦わら帽子をかぶつて、ゲイ

シヤというオペラにでてくる女の、よちよちした歩行ぶりについてくる一隊の同胞女人諸君には、さすがの通訳諸君も当惑して、わずかにブラッス区を一巡して、ここはサンパウロ市だと称し、市のセンターである三角区（トリアングロ）に達したものはなかったというのも笑話の一つであつた」という。コレイオ・パウリスターノの記者のほめた洋装も、本場のものにくらべると、全くカリカツ―ラそのものであつたことは、彼女たちの日本的な歩き方を想像すればわかることだろう。

移民たちは六月二十七日から七月六日にかけて、それぞれコーヒー農場へ送られるのであるが、そのまえに、二つの仕事ののこつていた。その一つは、彼らが日本で皇国殖民会社とむすんだ契約とは別に、これからやとわれていくコーヒー農場主と彼らとのあいだで新たに契約をとりかわすことであつた。

移民たちが会社と日本でとりきめた契約期間は、第一回のコーヒー採取期（約半年）であつたが、ブラジルでは一般のならわしにしたがつて―例外もあつたが―農年ということにきめられたのであつた。

（皇国殖民会社がサンパウロ州政府とむすんだ移民導入上の契約に、「コーヒー農場にはいったものは、少なくとも第一回の収穫を行ない、かつ農場主に対して負債

（旅費の一部をたてかえてもらったもの）の弁償が終わったあとでなければ……」とあるように、移民たちはコーヒー採取の労働と負債弁償の義務を負わされていたのである。

州政府が渡航費の補助として支払った金額は、

十二歳以上のもの 英貨一〇ポンド

七歳以上十二歳までのもの 五ポンド

三歳以上七歳までのもの 二ポンド一〇シリング

であつたが、このなかで農場主が政府に償還しなければならぬ部分があつた。それは、

十二歳以上のものは 四ポンド

七歳以上十二歳までのものは 二ポンド

三歳以上七歳までのものは 一ポンド

ずつであつた。これは移民の負担であつたものを農場主がたてかえておいたものであつて、いわゆる「農場主に対する移民の負債」だったのである。

だから、日本を発つ前に、移民が会社と結んだ契約のなかにも、

一、契約年期 第一回コーヒー採取期間約半か年

としてあり、また旅費を規定した部分には、

一、旅費、往復とも自弁、ただし、往航船賃のうち、一定額（年齢により差等あり）をサンパウロ州政府が補助する。補助費中十分の四は雇主に対して償還

となっている。

しかし、この契約期間と補助費一部の償還との関係については、なにも注釈がないのである。そこで、「ブラジルに於ける日本人発展史」からその解説を読みとってみると、左のような意味になる。

「契約期間約半年」というのは、サンパウロ州政府の渡航費補助に対するもの（すなわち、補助費中十分の四を雇主に償還するための期間ともうけとれる）であって、移民が目的地到着後、各雇い主との間にむすぶようになっている契約にともなうもの（期間）とは別である。皇国植民会社はこの契約によつて、渡航者の立場を保証し、またサンパウロ州政府に対しては、渡航者の義務を明示したものである。（ただ）渡航者が、いかなる農場主にやとわれるかは、サンパウロ到着のうえで決定するものである。そのやとわるべき農場主と移民との契約の仕方により、条件は必ずしも同一ではないのであるが、皇国植民会社は、その義務期間中コーヒー採取賃（その他の労賃）に関するかぎり保証する、というのである（注一三）

「移民たちはその配耕にさきだち、各自その雇主との間に入耕条件に関する契約書をつくり、これに調印した。彼らは、日本出発前、皇国植民会社との契約にお

いて、コーヒー採取期間六か月間における日給または請負労働を承知した。しかし、いまこの移民たちが、各雇主との間にとりむすんだ契約は、一農年ということだった。それは彼らがその自由意思によって、この国の労働上の習慣に従ったものと解すべきであろう」『ブラジルに於ける日本人発展史』は移民たちが日本で会社と結んだ契約と、ブラジルへきて農場主とのあいだに結ぶ契約のくいちがいについてこのように説明するのである。

「移民はコーヒー採取期半ばに到着した。すなわち皇国殖民会社との契約による賃銀取得期は、わずかにその後半をのこすのみであつた。この後半を終わって、コーヒー農場にのこされるものは、コーヒー樹の手入れである。そして日本移民がこの手入れに従事するためには、やはりコロノ（家族労働者）としての一農年の義務を負担しなければならぬのであつた（注「4」）」ともいつている。ブラジルと日本という遠い距離、しかも慣れない貧乏移民会社の世話ときているので、移民はとまどうことが多かった。

もう一つは、彼らが移民会社に預けておいた金を、この際、ぜひ返してもらいたいと、強硬談判におよんだ事件であつた。

あるグループの移民たちは、神戸で、会社の勧告にし

たがって、所持金をまとめて、ブラジルへつくまで保管してもらいように預けてしまったのであった。収容所についてから移民たちはいつ金をもどしてもらえるか、心まちにしていたのであるが、会社側からはなんの音さたもない。いよいよ農場へ発つというのに、一文なしでは心細い。移民たちは不安になってきた。そこで収容所内に水野の姿をみとめるや、みなよってきて、催促したわけである。水野は「その金はまだ日本から送金してきていないから支払うわけにはいかない」とつつぱねたというのである。

ここに「移民会社への苦情と不満の第一声があがった」と「四十年史」は記している。

ことにいちばん多額をあずけていた沖縄移民の不安は大きかった。代表城間英次郎は強硬に水野にせまった。

「水野は城間を突き飛ばして、かたわらの事務所へ避難した」というのである。この不穏の空気を心配したブラジル業務代理人の上塚周平（うえつか・しゅうへい 三十三歳）は、いろいろ事情を説明したうえ――と筆者は想像するのであるが――、もしそれでも納得いかないなら「おれの首を切ってくれ」と城間の前に頭をつきだした。こうなったうえは万事休す、城間はうなだれて立ち去った。そして、移民たちは代理人の説明どおり、「日本から金がとどけられるまで、待つよりしかたがない」とい

うことになって、会社とのあいだに妥協がなりたったのであった。移民たちが預けた金というのは、金額にして七千六百七十五円、そのうちで沖縄移民がいちばん多くて五千五百二十円、つぎが鹿児島移民の一千六百三十円、さらに山口移民の五百二十五円であった（注15）。

もちろんこれらの金は、そのまま船の金庫におさまっていたのではなかった（注16）。皇国殖民会社は、まず、法令によって外務省におさめなければならなかった供託金十万円の金を集めることさえできなかった。四苦八苦のうえやっと集めたのが八万円、これでなんとかしてくれ、と時の通商局長にたのみこんで、かんべんしてもらった。この話はどの移民史にもかいてあって有名であるが、神戸を出帆する際雑用の金にいきづまった。しかし窮すれば通ずで、思案のはてに気づいたのは、移民の持参金を借りだすことであった。船中で金をもっていることは危険だから移民会社へあずけたまえ、サントス着と同時に払いもどしてやる（注17）というわけで借用に及んだものであってみれば、ブラジルへ着いたからといって、その金がもどせるわけはなかった。移民たちに水野がどう返事したか、上塚代理人がどう説明したかつまびらかでないが、移民たちは会社から一パイくわされたかっこうになってしまった。もちろん会社側としては、はじめからだます気持ちはなかったろうし、日本では会

社側の留守役が金策してあとから送金することになっていたのであるが、供託金さえまけてもらわなければならなかった会社に、そうそう七千六百七十五円の金が借りだせるわけもなく、また水野は船中でも文なしで、ボーイにチップもだせない身分であり、そのために騒動も起きている（注一八）。

一説によれば、これがついには殺人事件にまで発展しているのである（注一九）。彼の日記をみると、ブラジルへ着くなり各方面から小金を借りだしている。第一回移民の運命は、こういう貧乏会社の無理のうちに、すでにその暗いかげをやどしているのであった。

六月二十七日から、移民たちの農場入りがはじまる。午前四時、収容所から特別仕立ての移民列車で沖縄県人二十四家族百五十二人が、カナアーン農場へ向かう。また同日は、やはり沖縄のものだけ二十三家族百七十三人のフロレスタ農場組も発つ。

二十八日は鹿児島県人二十七家族百一人がサン・マルチーニョ農場へ向かう。同日は、鹿児島、高知、新潟の連中二十三家族八十八人がグアタパラ農場へ向かう。

二十九日は午前五時、福島、熊本、広島、宮城、東京のもの五十二家族二百十人がズモーン農場へ発つ。

七月六日は、山口、愛媛などの十五家族四十九人が、

しんがりとしてソブラード農場へ向かった。この連中は収容所から徒歩で、未明のサンパウロ市街をソロカバナ駅までいったのである。

農場へ向かったものは総計七百七十三人、そのうち男は五百八十六人、女は百八十七人であった。

サンパウロ市にのこった自由移民、職業移民など八十人あり、そのうちに三組の夫婦者があった。サンパウロ市のことは、のちにまとめて書くことにする。

大きな収容所も七百八十一人の移民を送りだしたのちは、がらんとした空倉庫同様にさびしいものとなる。

注

(一) 香山六郎編著『移民四十年史』三十二ページ。

(二) 当時リオ・デ・ジャネイロ市は、まだ黄熱病のある不健康地とみなされていたので、各国公使館は避暑地ペトロポリスにあった。

(三) 日本移民五十年祭委員会編『かさと丸』三十七ページ、筆者鈴木貞次郎。

(四) 同上。

(五) 同上、ただし、パウリスタ新聞社編『コロニア五十年の歩み』十四ページには同じ筆者の記事であるが、「第十号倉庫前」とある。

(六) サンパウロ共和党機関紙、一九〇八年六月二十五日

第一面の記事。筆者は「・アマンデイオ・ソブラール」。

(7)『移民四十年史』三十三ページ。

(8) 聖州新報社編『在伯日本移殖民廿五周年記念鑑』十一ページには「午後二時半着」とある。なお同所には「二列車に分乗した日本移民が着いたのは……」とあるが、他の文献には「二列車」という字がみつからない。同じ编者による『移民四十年史』には、この句は削られている。

(9)『移民四十年史』三四ページ。

(10) 同上。

(11) 鈴木貞次郎著『ブラジル日本移民の草分け』三八九～三九一ページ。

(12)『移民四十年史』三十四ページ。

(13) ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、二七〇―二七一ページ。

(14) 同上、二七四～二七五ページ。

(15) 同上、二九七ページ。

(16)『かさと丸』三十二ページ。

(17) 同上。

(18) 同上、三十二―三十三ページ。

(19) 同上、三六ページ。

2 「配耕」 先、六農場の地理

当時日本人はコーヒー農場（ファゼンダ・デ・カフエー）を「耕地」とよび、移民会社が移民を農場へ送りこむことを「配耕」といつていた。ちなみに、農場主を「耕主」とよび、農場へはいることを「入耕」、出ることを「出耕」または「退耕」と称していた。ハワイ移民時代からの名称であった。

第一回の日本移民は、六つの大農場にわけて送られた。大農場というのは、数千町歩の広大な土地を所有し、百万本以上のコーヒー樹を擁する農場のことである。そこには、数百家族の外国移民、あるいは国内の家族労働者―コロノ―が働いていた。コロノたちはコーヒー農場の労働力として、ブラジルの経済をささえるコーヒー生産の直接のいない手だったのである。

いま、サンパウロ州におけるコーヒー栽培の発展経路をたどって、六農場の地理的説明をこころみよう。

◇イツエンセ線イツー駅フロレスタ農場

ここへは、「ヒゲで移民を威圧した（注一）」といわれる大野基尚が、沖縄県人二十三家族、百七十三人をひきつれて

はいった。

イツー駅とは、もちろん今日のイツー市であって、いまはサンパウロ市から車道で九八キロメートルの地点にある。カンピーナス（一〇九キロメートル）を中心とする地帯に属し、サンパウロ市にもいちばん近く、またサンパウロ州のコーヒー栽培地としては、カンピーナス、ジュンジアイーとともに、パラíba河流域に次ぐ、古い地帯に属する。

イツー市は一六一〇年の創立といわれ、サンパウロ州における共和主義運動の一中心地であつた。イツエンセ線といわれた鉄道は、イツーの資本家たちによつて、イツアーナ鉄道会社がつくられ、はじめは、カンピーナスからイツーまでの鉄道を一八七〇年に起工し、一八七三年に二か年半でつくりあげたものであつた。一八九三年、イツエンセ線はソロカバナ鉄道会社に合併され、ただちにソロカバナ線マイリンケ駅にむすばれることになり、二方からの運輸の便がひらかれたのであつた。一方はジュンジアイーから、一方はマイリンケからというように（注^二）。

日本移民がはいったころは、むろんソロカバナ鉄道の一部となっていたのであるが、まだ古いイツエンセ線というよび方がのこっていたようである。ソロカバナ線といけばマイリンケで乗り換えた。いまはバスで一直線で

ある。

つぎは、リベイロン・プレット（サンパウロ市より車道五九三キロメートル）を中心とするモジアナ地帯であつて、グアタパラーとマルチーニョ・プラード両駅はパウリスタ線に属し、カナアーン、ズモーン両駅はモジアナ線であるが、ともに、リベイロン・プレットに近く、この地帯の中心部を形成している。

わが移民のコーヒー園労働は、長くこの地帯を中心として行なわれたもので、リベイロン・プレットには、その後、総領事館分館、移民会社出張所などもできて、移民の便利をはかった。ブラジル日本移民の初期活動地帯で、コロニア史に忘れられない地方である。

◇モジアナ線カナアーン駅カナアーン農場

Canaa はむかし Chanaan と書いた。サンパウロ市からいけば、リベイロン・プレットより四〇キロメートルほど手前であつて、駅が農場と同名のカナアーンであるところからかんがえると、この農場のおかげで駅ができたところともみられ、大農場であることを示している。むかし、鉄道は、ファゼンデイロ―農場主―が農場をひらくあとから、その仕事をたすけるためにおっかけたといわれたものであつた。

ここへは、のちのサントス副領事で、最初のブラジル

語講義録（伯刺西爾時報創刊号一九一七年から発表）の執筆者である嶺昌が沖縄県人二十四家族、百五十二人をつれてはいった。

◇モジアナ線ズモーン駅ズモーン農場

サンパウロ州第一のコーヒー農場といわれ、コーヒー樹数三百万本を擁するところで、ここを開拓したのは、飛行機の発明で有名なサントス・ズモーンの父エンリッケ・ズモーンであつて、わが移民史上でにぎやかなところである。

普通はモジアナ線ズモーン駅となっているが、くわしくは、リベイロン・プレット経由、ファゼンダ・ズモン鉄道ズモーン駅である。駅は農場の中央部にあり、雑貨店、薬局、レストランなどが軒をならべ、さながら小さな町をなしていた。

リベイロン・プレットから延長二三キロメートルの鉄道は、途中に二つの駅があり、最終がズモーン農場のあるズモーン駅であつたが、現在はこの鉄道は存在しないで、ズモーン駅はズモーン町となってなごりとどめている。当時はイギリス人経営の会社組織になっていた。日本人は、ときにはズモント耕地ともいっていたが、おそらく当時のブラジル人もズモンテ、あるいはズモンチと発音していたのではないかとおもう。正しくはズモーン

である。

ここへは「感情家、潔癖家（注³）」の加藤順之助が、福島、熊本、広島その他で、五つの県人の寄せ集め五十二家族二百十人をひきつれてはいった。

◇パウリスタ線グアタパラ駅グアタパラ農場

この駅は、リベイロン・プレットとアラクアラをむすぶパウリスタ線上にあつて、駅と農場が同名である。この農場は、七人の合資会社で、そのうちの一人が社長をつとめている。農場内にはコーヒー運搬の鉄道もあり、面積九、〇〇〇アルケール、百八十万本を有する大農場であつた。

ここへは「すぐれた指導力」をもった平野運平が鹿児島、高知、新潟の二十三家族八十八人をつれていった。

◇パウリスタ線マルチーニョ・プラード駅サン・マルチーニョ農場

同じパウリスタ線であるが、グアタパラ駅の手前から北上する線に、マルチーニョ・プラード駅がある。今日、プラードーポリスという町があるが、その名からおして、旧サン・マルチーニョ農場となにか関係があるだろう。

ここも、コーヒー二百数十万本を擁するサンパウロ州有

数の大農場であった。ここへは「移民の草分け」の著書で知られている鈴木貞次郎が、鹿児島県人二十七家族、百一人の通訳としてはいった。サン・マルチーニヨは、はじめ平野がグアタパラとかけもちで移民を連れこんだのであるが、かけもちの不可能なことがわかり、平野はグアタパラをうけもち、鈴木は、サン・マルチーニヨ支配人の申請により移民収容所から一週間おくらせて、通訳として現地におもむいたものであった。

◇ソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅ソブラード農場
ここはボツカツー市を中心とする地帯で、いわゆる旧地帯のうちでは、当時多くのコーヒー新樹を擁していたところで、近くにサン・マノエル市がある。サン・マノエル市はサンパウロ市から今日では車道二八八キロメートルで、一八八五年に市制がしかれたところである。

トレゼ・デ・マイオは今日では鉄道の駅をもたない町となっているが、あの当時は、ソロカバナ線の汽車で、ビットーリア（いまのビトリーナ）から乗り換えていったものであった。ビットーリアからでる支線は、トレゼ・デ・マイオ駅を中心として北東へはポルト・マルチンズ駅へでて終点となり、ここはチエテー河畔の港であった。もう一本は、アラクワエー駅へつづいてとまりとなっていた。おそらくコーヒー栽培の衰退と、河川運輸の廃

止によって、この地帯の鉄道は早くなり、また、車道の便は、この複雑な交通・運輸機関を、無用の長物と化したのであろう。トレゼ・デ・マイオ駅はむかしからサン・マノエル市と連絡があつた。

このソブラード農場は、かなり評判もよく、したがつて、移民史をかざる「騒動」は記録されていない。「人にすかれた人柄」の仁平嵩が山口、愛媛の一五家族、四十八人をつれて、しんがりとして七月六日サンパウロ移民収容所を出発して「入耕」したのであつた。

注

(1)『かさと丸』八五ページ。

(2) Francisco Nardy Filho 【A Cidade de Itu】 vol. 1 による

(3)『かさと丸』八三ページ。

3 「配耕」と移民列車

移民列車は午前四時から五時にかけて収容所を出発した。六月末のこの時刻は、まだくらい。サンパウロ州でいちばん日の短いときだ。

移民たちは六組にわかれて出発したのであるが、同じ方向へ向かうものは同時にたったようである。客車一台のものから二台以上になったものもある。特別仕立ての二等車であるが、これは一般庶民の乗るもので、日本の三等車級であった。車内はむろん、真ん中に通路があり、両側に二人ずつの席、木のバンコ（腰かけ）があった。ただパウリスタ本線の広軌では、一方が三人席になっていた。ジュンジアイーまではサンパウロ鉄道会社に属し、石炭をたいていたが、モジアナ線はカンピーナスからもうたきをたいていたし、パウリスタ線もジュンジアイーから薪の汽車であつたと思う。ソロカバナ線は、サンパウロ市からもう薪をたいていた。未明の空に火の粉をふきあげて走る汽車は、火事場を通過していくようなすごい感を与えた。

途中、他の列車との連結のこともあつてゆっくりいったにちがいない。移民の客車には一般旅客は乗せない。また、彼らがプラットホームにでてさまよわないように、各客車には鍵がかけてある。移民たちはむろんそんなことを気にしない。ただ、これから乗りこもうとする農場の想像話でにぎわう。駅に停車したからといって、言葉ができないので、窓から自由にものが買えないのがもどかしい。

移民の汽車には、通訳という人がいるはずであるが、

彼らは、この一段上位（？）の人を「つかいだて」することを遠慮する。通訳にしても、本を読むならともかく、話し言葉、俗語の類は、どうも苦手である。えらそうにふんぞりかえっていたほうが無難だ（だから不親切だという悪評もかった）。

むろん、腹がへれば、収容所からもらってきた弁当がある。パンと肉の腸詰めだ。パンは輪型の大きなもの、どんな大食漢にも、空腹を感じさせないだけの量はある。だが、大麦の粉のまぜてある皮のかたいパンだ。イタリヤ人の好物だが、日本移民にはちよつと難物である。しかし、かじっていれば塩気があるので、結構食える。ただ、このぼそぼそしたパンは、米の飯を食うようには、のどへはいつていかない。まだ、ゆつくりパンをかんでたべる習慣がない。

つぎには腸詰め。黒味がかつた肉の棒ははじめてだ。肉にはちがいないが、鼻さきへもつていくとプーンとにんにくのおいがする。塩と胡椒とにんにくで詰めこんだ腸詰め、肉のおいは特殊なものだ。ナイフで小さくきざんで口のなかへ入れてみるが、ねちやねちやとしていて、てんでのどをとおらない。かじりかけた大きなやつを、ポイと窓外へなげだしてしまうものもある。

「おい、それは腸詰めというもんで、外国のごちそうなんだぞ」と物知りらしいものが説明するが、彼自身、う

まそうにたべている様子もない。

そのうち、ある男が、駅に着いたとき、これをブラジル人にやってみた。彼はまるで、棚からぼたもらいの笑顔をつくつて、オブリガード（ありがとう）をくりかえす。

「なるほど、そうだったか」

そこで商才のある男は、つぎの駅に着くまでに、みんなから腸詰めをもらい集めておく。そして、今度は、それを駅で売るのである。むろん、値段などにかまっていられない。むこうがくれる札と、こちらからだす一本の腸詰めとをとりかえるのである。

安いので、たちまち売りつくした、とある人の追想談のなかにでていた。

「このやろう。もらったものを売りやがる。けしからん！」と、見ていた一人がうらめしそうにどなりつけた。「君らが捨てるというからもらったものを、なんの文句がある！」とやりかえされた。これではケンカになるはずがない（注一）。

ところが、この腸詰めをたいせつにして、全部はたべずに、農場までもちこんだ移民もあった。これは沖縄の連中だった。

駅に着くたびに、ものめずらしそうに、ブラジル人がわいわいよってくる。ははあ、日本人がどんな人間なのか見にくるんだな、と移民たちはだれでも思う。ところ

が、彼らはべつに日本移民が通過するのをあらかじめし
っていて、見にくるのではないのである。ただ、小さな
町の人たちは、一日に、上り下りの二回、あるいは四回
くらいとおる汽車をみるために、カンカンと着車をしら
せる駅のつり鐘がなると、ぞろぞろと駅へおしかけてく
る。しりあいのものでも降りたったり、あるいは客車の
中に見つけると、あいさつしおしゃべりをはじめめる。長
いプラットホーム一つある駅。別に改札口をとおらなけ
れば構内にはいれないというわけでもなし、町の暇人に
とって、ここを訪れることは一日中のたのしみの一つな
のであった。しかし、はじめてみる東洋人の顔。そのず
んぐりしたかつこうと着なれない洋服姿は彼らの好奇心
をそそる。

シーナ？ ジャッポーン？ 彼らは思わずつぶやく。

そのうち、移民列車をのぞきこんでいた一人から万国
信号（てまね）による商売がはじまる。移民たちがもつ
ているハンカチを売ってくれないかという。まず、窓外
で札がひらひらとふられる。ところが、こちらは汽車の
上のことだ。いつハンカチだけをとられないともかぎら
ない。むろん先方でもお金だけとりっぱなしにされては
たいへんだという心配はある。当方が札とハンカチを手
にして、ころあいをはかり、さあよし、と手をひき交換
する。こういう珍風景が車窓をにぎやかにする。札には

一〇ミルとかいてある。日本金に換算すると、そのころ六円ほどになった。その絹ハンカチは神戸で三十銭で買ったもの、いい国だなあところニコ顔だ。つぎには、男の扇子を見つけたブラジル人が、また札をふる。今度は五ミルの札だった。

「おい、これはたいしたものだ」と連中は大はしゃぎ。各駅でこんなふうだから、移民たちは、もうないか、もうないか、と荷物をさがしては売りとばす。

汽車の中でさえもこれだから、耕地（農場）はさぞかしたいしたものだろうと、みんないろめく（注^ニ）。

寿司や折詰めの買えないさびしさも、こうしてわいわい騒いでいれば、忘れてしまう。

ただ一つ、まことにふしぎなものを移民たちは見た。

ぼんやりと駅の壁によりかかっていた一人の男が、まっ黒な腸詰めは一切れと思えるようなもの、いや、犬の糞に似ているといったほうがいいかもしれない。それを指のあいだにおさえこんで、ナイフでその一方をゆっくりとけずりつつは、手のひらにおさめ、またけずっては手のひらにためる。それを、やがてごしごしと両手でもみあげ、今度は耳の上にはさんでいた紙きれ（とうもろこしの皮である）に包んで、いつのまにか一本のシガレットにしあげてしまったことである。

これはのちに、フーモ・デ・コールド（縄タバコ）であ

ることをしらせられたのであるが、なんとも不思議なたばこもあるものだ、とあきれかえるのであった。

こうした経験は、どの移民列車にもみられることで、移民たちには、生涯忘れられない記憶となつてのこる。

ズモーン農場へ向かったものが、リベイロン・プレツト駅頭で、楽隊をもつて迎えられたのは有名な話となつている。農場内には、ここからコーヒー運搬用の延長二十三キロメートルの鉄道がとおっていたはずだから、移民たちもそれに乗せられたにらがない。ズモーン農場はイギリス人の経営であつた。

目的地の駅に着くと、みな、それぞれ農場から迎えにでた汽車なり、荷馬車なりに、荷物とともに乗せられる。むろん、女や子供だけを荷馬車に乗せて、男たちのなかには農場まで歩くものもある。ひさしぶりでテクテクと土の上を歩くのもいい。パウリスタ・モジアナ地方は、ほとんど赤黒い粘土質の土壤だ。馬車のあとにあかいほこりがまいあがる。

農場へつくと、農場主（パトロン）や支配人（アドミニストラドル）、監督（フィスカール）という人々の出迎えをうける。みな、つば広の帽子をかぶり、皮のゲートル（ポライナ）をはめている。堂々たる風姿である。これにピストルを腰にさげているものもある。

農場主や支配人が簡単に祝辞を述べる。通訳がこれを

日本語で移民たちに伝える。しかし、はたしてそれが通弁であったのか、創作であったのか、移民にはむろんわからない。わからないままに、祝辞であったことの記憶がのこる。万歳が三唱されて、ペンソン（食堂）で夕飯がふるまわれることになった。

日本人は米が好きだというので、ご飯が出る。これは、油でいりつけたような、少しばかりシンのあるブラジル飯であった。だが、久しぶりの飯はうまい。豆がでる。しかし、豆が油のはいった塩煮だというのはショックであった。ああ、甘い豆だったらなあ……というためいきが聞こえる。

「おや、ブラジルの煮豆には、こんにやくがはいっている！」と一人がさげんだ。

「どれ、どれ」ともう一人。どんぶりから自分の皿へ、こんにやくらしきものをすくいとって、またさげぶ。

「ブラジルのこんにやくには毛がはえている！」

実はこんにやくではなくて豚の皮で、一切れに数本、まだ毛がのこっていたのであった（注③）。

とにかく、くさい腸詰めよりもうまい飯であった。黒砂糖（マスカーボ）のにおいがプンと鼻にくる甘ったるいコーヒーをほうろうびきの茶碗（カネーカ）で一杯のんで食事は終わったのである。

いよいよコロニア（ここでは家族労働者たちの住居区）

入りだ。

ファゼンダ（当時は耕地といていた）とよばれるコーヒー農場は、一万に事務所を中心として、農場主邸宅、支配人住宅、コーヒー乾燥場、蒸気機関のコーヒー精選所、果樹園などの区域があつて、ここをたんにファゼンダともよび、また、セーデ（本部）ともよんだ。それから、他の一方には、監督の住居、ペンソン（食事給与所）などがとつつきにある労働者区域があり、一列に十棟、二十棟、あるいはそれ以上の家屋がならんでいる。これがコロニアとよばれるものであつて、一棟は二家族、ときには三家族がすめる長屋であるが、農場によっては、二列になつていて、なかの道路がルーア（通り）とよばれているところもある。

いま、農場の全景を遠望するとすれば、むろん、コーヒーの樹海といわれる数十万、あるいは百万以上のコーヒー樹が、数千町歩の広大な地上を黒々とおおい、その一角は、大小様々な家屋と果樹園のうつそうとしたマンガの樹、また、富豪邸宅の象徴のようにそびえる帝王椰子とレンガ敷きの広いコーヒー乾燥場とが見える明るい区域がある。ここがセーデであることはすぐわかる。そして、そこから一直線に横のほうに、規則正しい白亜の家並みが数百メートルの距離にのびているあたりは牧場である場合が多い。もし、こうしたコロニアが、幾組にも

わかれているとすれば、少しはなれたところに、別な住居群が、ここでも一直線にのびている。全体の感じは、碁盤目にうえられたコーヒー園といい、方形の乾燥場といい、等間隔にならんだコロニアの家並みといい、いかにも近代的風景として目にはいる。しかし、内状は、かならずしも近代的といえるものではなかった。

さて、一度コロニアに落ち着くと、もう移民たちは、自分らが農場にやとわれてきた契約労働者であることをはっきりと意識させられる。農場主や支配人は、その下の監督や通訳をとおしてだけコロノと連絡する。コロノたちは、ローソク一本のくらいコロニアへ案内される。土間の家が多い。床板のあるところなどめったになく、レンガ敷きなら上等なのであった。

はじめから寝台があるわけではない。まにあわせに板の寝床でもつくってもらえた農場は特別待遇のほうだ。普通は農場へはいつてからみな自分たちで工夫する。夕方着いた組は、もうそんな時間はないから、そこいらに一夜だけ、日本からもってきたふとんを敷いて寝る。土間に枯れ草か、とうもろこしの皮（パーリヤ）を敷いた上に、ゴロ寝しなければならぬ連中もあつた。その晩、彼らは移民の身の上について、なにか、いままで自分が想像していたものとのちがったものを感じるのであつた。

注

(一) 輪湖俊午郎著『バウル―管内の邦人』中、「十二人伝」三五―三六ページ。

(二) 同上。

(三) 『移民の草分け』三九一―三九二ページの挿話。ソブラード農場でおこった話。

4. ブラジル産業史のうえからみたコーヒー農

場の地位

移民たちは、サンパウロ市の移民収容所から、六つの大農場へわけて送られたのであるが、ここではコーヒー農場（ファゼンダ・デ・カフェー）がどんなものであるかを説明するための順序として、まず、ブラジルの産業史についてちよつとふれてみる（この一章の内容は、アンドウ・ゼンパチ著『日本移民の社会史的研究』第二章「巨大私有地の発生」にくわしい）。

ブラジル産業の移り変わり

一五〇〇年、ポルトガル人によってブラジルが発見された当時、この南米大陸の一地方には、わずかな未開人が住んでいただけで、交易でもうかるような住民はみあたらなかった。また、金銀が産出されている様子もなかった。それで、ポルトガル王室では、しばらくはたいした興味を示さなかった。ただ、赤い染料のもととなるパウブラジルの木の採取およびヨーロッパへの輸送のために、ここにフェイトリアという監理所をもうけ、ここから材木をつみだすことにした。しかし、ブラジルの木を盗みにくる異国人、ことにフランス人や、その他フェイトリアを襲う海賊があらわれたりするので、ポルトガルでは、ブラジルを自分の領土として確保するために、どうしてもここに植民を行ない、この地にポルトガル系の人間をふやすことを考えなければならなかった。

しかし、当時インド貿易に熱中していたポルトガル王室は、金を使って直接植民事業をいとなむことを好まず、一五三四年から一五三六年にかけて、ここを十五区の封建的世襲領「カピタニア」にわけて、十二の領主「カピトン」あるいは「ドナタリオ」に与え、彼らの手によって植民事業をおこそうと計ったのであった。しかし、予期したほどの植民も行なわれず、そのうえ、土人の襲撃

にあつたりして、ほとんど失敗に終わった。例外として、北部のペルナンブーコ、南部のサン・ビセンテ（サンパウロ）が成功しただけだった。しかも、カピタニア制が廃止されるまでの二十年間に、わずか三千人ほどの植民があつたにすぎなかったといわれる。

ブラジルが、ポルトガルの植民地として経済的価値を生みだすことになるさとうきび栽培は、すでに、最初の植民者によつてペルナンブーコやサン・ビセンテにころみられていたのであるが、その後、北東地方（ペルナンブーコやバイア方面）が、いちはやく砂糖生産によつてさかえたにもかかわらず、南部がその繁栄にあずからなかつたのは、地味、気候が北東地方におよばなかつたばかりでなく、ヨーロッパに遠く、輸送の便が悪かつたことにもよる。

さとうきび栽培が本格的になつたのは、カピタニア制が廃止され、総督政治がしかれた一五四九年以後であつて、このときからバイアには、総督府サルバドール市の建設があり、また、総督によつて、砂糖生産が奨励されてからである。当時は、流刑人や土人（奴隷）を使って栽培事業をいとなんでいたのであるが、土人は生産労働に適しなかつた。

ところが十六世紀の半ばころから、アフリカ黒人を奴隷として輸入して、新しい労働力がえられるようになった

てから、この事業はたしかな軌道にのったのであった。

こうして、ブラジルには、奴隷労働を生産のもととする家父長的な社会が形成されることになる。彼らは、はじめ、数十人、のちには数百人の奴隷を使い、これを手下の白人や白黒の混血人に監理させ、だんだん生産を高めていった。一五八三年のある記録によると、すでに農場主たちは、ヨーロッパの「領主―コンデー」のようで「出費をおしまぬ」「ゆたかな生活」をしていたのであった。

農場では（ぜいたく品はヨーロッパやアジアからの輸入品をもちいていたが）、一般には自給自足であつて、多くの必需品（塩と火薬は別）は農場内で生産し、また、土人や海賊の襲撃にそなえるためには銃その他の武器もたくわえていた。農場はエンジェーニョ・ヂ・アスーカル（砂糖製造所）とよばれ、農場主は、セニョール・デ・エンジェーニョ（製造所の殿様）と敬われていたが、このセニョールは数千町歩の農場内で絶対権力を有する点で、封建領主を彷彿させるものがあつた。

こうした社会形態は、コーヒー樹栽培の農場に至つてもなお続くのである。彼らは商品生産者として、奴隷を生産手段のごとく私有する資産家でもあるし、一方では、農場内において領主的な権力者でもあつた。婦人の地位は低く、長子相続の社会であつた。これをどのような社

会段階として規定するのか、それはその方面の専門家にまかせるとしよう。とにかく前近代的生産形態の社会であつたことはまちがいない。

砂糖のほかに牧畜もあつたが、これは国内の需要を満たすためで、食料に供すると同時に砂糖農場内で使役する年やラバを飼育したものである。綿花の栽培も行なわれたがあまり安定したものでなく、独立後の第二帝政時代の末期、アメリカの南北戦争のおかげで景気がでたこともあるが、戦争の終結とともにおとろえた。こうして砂糖生産は、十七世紀の終わりころ、ミナス・ジェライス州に金鉱が発見されるまで、ブラジル産業の中心となっていたものである。

だが、十八世紀の後半から金産額が急に減少したところ、リオ・デ・ジャネイロ州では、パライーパ河流域にそろそろ新しい産業が芽生え始めていたのである。それがコーヒー栽培であつた。

コーヒー栽培の歴史とサンパウロ州のコーヒー地帯

コーヒーの原産地はアビシニア（エチオピア）ということになっている（カフエーの名はアビシニアのカッ

ファという町からだという)。いつごろブラジルにもたらされたかについて、はっきりしたことはわかっていないが、だいたい十八世紀のはじめか、中ごろにかけてであろうといわれている。そのころ、コーヒーの存在はすでに全ヨーロッパに知られていた。

ブラジルでは最初、北部のパラー州で栽培されたが、これは、オランダ領ギアナ方面からうつされたものであった。

しかし、パラー地方は、気候が暑すぎて栽培に適しなかった。

試作はだんだん南下して、バイアからリオ・デ・ジャネイロにうつり、はじめは大西洋岸と海岸山脈のあいだの低地で試みられたが、やがて海拔二〇〇メートル以上のところで試され、さらに西方、あるいは西北方へ移って、今日のリオ・デ・ジャネイロからミナス・ジェライス州へまたがるパライーパ河の流域に最初の好適地を見出したのであった。

ここで、ちよつと政治面をふりかえってみると、ブラジルは一八二二年九月から帝政として独立し、これが途中摂政時代を経て、一八八九年の十一月十五日の共和宣言まで続くのである。そして、摂政時代をすぎた第二帝政（ドン・ペードロ二世）時代になると、コーヒー農場主は、新しい貴族の階級に加わるほどの勢力を得てくる

のである。一八四五年、サン・マテウス農場を訪問した皇帝ドン・ペードロ二世は、農場主の歓待にむくいるために、サン・マテウス男爵（女性であったのでパロネーザ）の爵位を送ったのは有名な話である。そして、これからのち爵位は多くコーヒー農場主に贈られるようになる。

ここで付言すれば、第二帝政時代（一八四〇～一八八九）は、ブラジルの「文明開化時代」とよばれた時期で、リオを中心として工業がおこり、銀行が創設され、鉄道、郵便、電信がはじめられ、教育、学問、芸術がすすんで、にわかに文明社会を現出したのであった。

しかし、この時代にコーヒー生産が砂糖生産をしのぐものとなってきたことは新しい特長であった。

この期間、数回の対外戦争があったが、一八六四～一八七〇年のパラグアイの戦争は、国庫の大出血をよぎなくし、そのため戦後の軍費削減で、皇帝に対する陸軍の不満があらわれる。次いで、一八八八年の奴隷解放が無償でなされたために、農場主たちの支持を失ったりして、一八八九年の十一月十五日帝政は瓦解して、ブラジルは共和政体となるのである。

共和制を経済的にささえていくのは、もはや北東部の砂糖生産者ではなく、南部（リオ、ミナス、サンパウロ）のコーヒー生産者であった。

十九世紀の半ばころまで（ドン・ペードロ二世の第二帝政初期）パラíba流域で生産されたコーヒーは、リオ・デ・ジャネイロ港から海外に輸出されたのであるが、コーヒー栽培史上、いわゆる「北部地帯」の全盛期でむかしの砂糖農場主の繁栄を再現して、コーヒー農場主はセニョール・デ・カフェーとなり、二千人の奴隷を擁する農場まで出現したほどであった。

しかし、まだセントラル鉄道のなかったこの時代に、輸出港から遠距離での栽培は不可能だったので、パラíba流域は、サンパウロへ向かって南下するほど、コーヒー栽培の適地であることがわかっていたにもかかわらず、かなりむずかしいことであった。

しかし、やがてサンパウロからサントス港への道路もひらけて、一八五〇年までには、六〇キロ一俵のコーヒーがラバの背によって二十五万俵もサントスへ送られている。

国有鉄道としてのセントラル線が完成したのは、一八六〇年であった。この時代、コーヒーはサンパウロ、リオ、およびミナス三州の重要産物となり、ことにリオ、ミナス二州の比重は大きかった。一八七〇年から一八八〇年の十年間の総生産額は、三百万俵に達した。

しかし、このころからサンパウロ州の生産は年々上昇をたどることになる。それは、サンパウロ・レールウエ

イ（イングレーザ線）が一八六七年に、サントスとサンパウロを経てジュンジャイーをむすぶことになったからであった。この地方は、テーラ・ローシャ（紫赤土）、サルモイロン、あるいはマサペー土壤であって、ブラジルにおけるコーヒー栽培の最適地とされるところで、カンピーナス、リメイラ、アララス、リオ・クラークその他の地方にひろがっていた。だからこの地方は、つぎつぎと原始林がコーヒー園にかえられ、一八九〇〜九一年度になると、もはや、リオ・デ・ジャネイロ港をおしのけて、サントスは、ブラジルのコーヒー輸出港として第一位を占め、ブラジルの経済を双肩になうサンパウロ州となるのであった。

このころから、リオ・デ・ジャネイロを輸出港とするリオ、ミナス地方と、サントスを海外へのはけ口とするサンパウロのコーヒー地帯との差は決定的なものとなり前者の衰微と後者の隆盛とは年を追うにしたがって著しくなっていた。後者は、さらにその財力にものをいわせて、どんどん民間資本による鉄道を敷設して、好適地を奥へ奥へと発展させていったのである（注一）。

さて、わが移民史の背景としての、この産業史的スケッチでは、もう一度奴隷解放のことに言及しなければならない。ブラジルの奴隷解放は（むろん北アメリカもそうであるが）、いわば上からの革命であって、これによって

一挙に近代的な民主主義が実現されたわけではなかった。解放前から、将来をみこして、サンパウロ州のコーヒー栽培者などはヨーロッパ移民を誘入してみたが、当時の社会はまだ前近代的な気風を濃厚にのこしていたために、移民との折り合いが悪く、失敗に終わったことがある。その後、コーヒー景気の上昇とともに、イタリア、ポルトガル、スペインの移民を迎えることになり、サンパウロ州のコーヒー農場にも、だんだん近代的な気風がめばえてくるのであった。

一九〇八年日本移民がブラジルへ着いたときは、一八九六年からあらわれた生産過剰のきざしが、一九〇六〇七年度の大豊作のために恐慌となつて、大農場主は苦境時代にあつたが、まだカンピーナスを中心とする地帯は、やや樹齢をかさねたとはいえ、生産量はさほど低下せず、さらにリベIRON・プレットを中心とする「モジアナ地帯」は、サンパウロ州の東北部を占めて生産のうえでそのころ全盛をきわめていた。

しかし、一九〇八年は、前年の豊作のあとで、すごい不作であつて、移民たちのコーヒー採取量があまりに僅少であつたことは、移民たちの大きな不満の原因となつた。コーヒー樹には一年おきに結実の増減があらわれるのが普通なのである。

思えば、奴隷解放後二十年目、共和政体となつてから

十九年目、しかも一八九六年以後のコーヒー不況から、コーヒー農場労働者である移民たちもまたおそろしい窮乏にみまわれ、そのためにイタリア移民などは、本国政府から一九〇二年には輸送さしとめを命じられていたとき、不況とはいえ、生産を中止するわけにもいかない立場にあつた農場主たちの要求にこたえて、ここに、「試験的に」日本移民はいってきたのであつた。

注

(一) 資料の多くはアウグスト・ラーモスの『オ・カフエー』六一〜六三ページによる。

5. コーヒー農場における

第一回移民

これから「入耕」後二日目からの移民の生活について記述するわけであるが、移民たちが、各農場に着いて、仮宿泊所（多くは労働者住居区中の一棟）に、カンテラまたはろうそくの光をたよりに、一夜をすごしたことはすでに記した。いま、個々の農場における彼らの生活を語

るにあたって、まず、一般にコロニアとよばれている家族労働者住居区域と、その住居とはどんなものか、また、コーヒー採取とはどんな仕事かについて書くことにする。

コロニア（注一）

どこの農場でも、コロニアの様式は似たようなもので、二家族または三家族が一棟に住めるようになってい

る。
木造もあるが、主としてレンガ造りで、屋根はパウリス
タ式といわれる丸がわらで、天井板はなく、床はレンガ
敷というのが普通で、土間のところもめずらしくない。
おもて側は白くシツクイが塗ってあるから、外観は明るい
感じである。

こういう家が一直線に数十軒ならんでいるのである。
一棟で二家族分のものは、真ん中から二つにわけて区切
られているが、三家族分のものは、三つの住居に区切ら
れて、あいだにはきまった部分は、表と裏とがあるだけ
で、家のわきの空地がなくなる。だから住むにも不便な
ので三家族分一棟というのはごく少ない。

一家族分の住居は、たいがい四つの部屋にわかれている
が、内部の部屋の入口には戸のない場合が多い。各部屋

に、普通一個の窓があいているが、木の戸だけでガラスはない。おもてからの入口のところが客間兼食堂となり、その他が家族の寝室になるわけだが、利用法はむろん一定していない。客間兼食堂（サーラ）の奥の間が、炊事場となっているところもあるが、多くは裏へひさしをおろして別についている。ここの一隅にかまど（フォゴン）が立ったまま煮たきできる高さにしつらえてある。焚き木を燃すところ（炉口）は一つだが、縦に長くて、鍋がならべて二つ三つかけられるようにできている。たいがい先住者が築いてくれているので、新築の家でないかぎり、新たに作るめんどろはない。ただ設備に気をくばるファゼンダのコロニアであれば、レンガ積みのがつしりしたフォゴンができている。

しかし、これらの家屋はむろん日本式ではないから、寝床はついていない。どこの国の移民でも、寝床は簡単なものを自分でくみたてるか、経済的に少し余裕ができれば、家具としてのベッドを購入し、どこへ引っこすにもそれを持ちあるくことになる。おそらく、よほど手まわしのいい農場でないかぎり、各家族の人数もわかっていなかったろうから、日本移民のために、寝床を前もってつくっておいたところはなかったであろう。移民たちは、たいがい最初の四、五日を、家のふりわけ、寝台づくり、食料品買入れなどのためについやすことになる。

水は、コロニアの裏側にある共同の水タンクや井戸からくんでくる。便所は特別できていないから、たいがい、マングロンといって豚を放し飼いにする割木の柵のかけを利用する。ヨーロッパ移民の女たちは、便器をつかう習慣があるので小用は屋内ですますことができる。薪は荒地やコーヒー園からひろってくる。風呂は、各自がこれから工夫すべきものに属する。

さて、寝台づくりのことであるが、移民たちは、まだブラジル式に簡単な木の棒で柵の寝台をつくることを知らないから、農場の製材所から供給された板で、一見、日本式ともみえる寝床をつくることになる（注③）。

ここにふとんを敷いて、はじめは一家族全部がならんで寝るようにする。そしてこれが不便に感じられてくれば、家族員がそれぞれ別にベッドをつくる。

むろん第一回移民は構成家族と称する形式的な、渡航許可をえるためのより集まり家族が多かったので、はじめから、それぞれ別な部屋で寝起きするようにとり計らったかもしれない。

その他、テーブル、腰かけ、食器棚など、いろいろな家具が必要で、はじめからこれを工夫するものがないでもないが、テーブルなどはあとまわしで、腰かけだけはぜひ必要だから、長い板の三、四人かけられる「バンコ」

をこしらえる。これが二個もあれば、客のある場合でも間に合う。だが、夜話しにくる連中はたいがい日本式の寝床のほうに、すわったり、あぐらをかいたりして語り合うことを好む。

食器棚は、売店（アルマゼンまたはベンダと称する）から、やすくわけてもらおう空箱を利用する。これを二つ重ねれば立派な食器棚となる。

農場内の売店で食料品も買い入れる（味噌、醤油はいくらか船から買ってきたものもあったろう）。

精米（アグーリヤ種）一俵五〇キロが一九ミル・レイス、メリケン粉一袋（三〇キロ入り）一三ミル九〇〇レイス、豆（フェイジョン）一俵（六〇キロ）一六ミル・レイスはズモーン農場売店の値段であつた（「四十年史」）。店のものからすすめられて、干し肉、干鰯、豚の脂、塩、砂糖（おもにマスカーボという黒砂糖）なども買い入れる。灯火用の石油とカンテラも必要だ。石けんは最初はほとんど日本からもってきたものを使う。

こうして、彼らは一応ブラジル食の材料は買い入れるのであるが、女たちにブラジル式料理法を教えてやるものはいない。通訳とて、まだ移民たちと変わらないブラジル生活の新米であるから、指導する資格はない。ブラジル人を講師にまねいて、移民の主婦たちに講習してもらい、これを通弁するなどは思いもよらないことだった。

いや、こんな場合の通弁こそ、当時の通訳たちがもつとも苦手とするところであつた。たとえば、売店での買物のとき、移民たちがいいだすものをポルトガル語で求めてやるができなかつたという話がある。移民たちは「酢がほしい」といった。通訳が、どんなに顔をすっぱくして説明しても通じなかつた。事情がわかつてから、あとで売店へいって見たら、酢はビンにはいって、すぐ目につく商品棚にズラリとならんでいたというのである。そんなわけで、せっかく材料を買いこんでも、これ进行处理する料理法をしらず、干し肉、干鰯はただ火であぶってたべるだけになる。水につけておいてやわからかにすることすら、しばらくは知らずにいたのである。移民たちが今までに食べたブラジル食といえば、移民収容所のスープと、農場に着いたときの食事給与所「ペンソン」で食べたブラジル式油飯、あの毛のはえたこんにやく（トウシーニヨ）のはいった豆だけであつた。

しかし、それをすぐまねてつくるようなことはしなかつた。彼らが食べたいのは、ポロポロ飯の湯づけでもいい、とにかく日本食なのであつた。ことに塩魚の一片をかじりながら、湯づけをたべる生活をはじめたいのである。

移民たちにとって、農場生活はすでに最初の晩からある種の幻滅をもたらすものであつた。これについて「四十年史」は、サンパウロ市の移民収容所と、耕地の移民

小屋との文化の差があまりに甚だしいので、第一印象を悪くした、といっている（注³）。

これはズモーン農場のことであるが、二日目の朝、加藤通訳が仮宿泊所をみまわったとき、土間のうすい枯れ草の上に一夜をすごした移民の一团には、これは人間の待遇ではなくて馬小屋だという苦情がわきあがっていた。ブラジルではごく普通なことも、日本移民にとってはひどい冷遇と感じられたのであろう。

加藤が「おはよう」といって入って行くなり、一人の青年は、枯れ草の上に四つんばいになって「ヒ、ヒーッ！」とはねまわりそれにこたえた。みんなどつと笑った。この光景を目前にした加藤通訳は、なんだ、人をばかにしたそのまねは、というわけでぶんぶん怒ってしまった。しかし、なかには事情を聞いて、なぐさめてもらいたかった者もあつたろう。それを逆に怒りちらされて、移民たちはすっかり「激昂」してしまつたという。「加藤はこうした感情のユーモアを解せぬ人」であつたと「四十年史」は評している。ズモーン生活の第一歩は移民と通訳との感情のいきちがいをもってふみだされた。おそらく、どの農場でも、移民たちの不満は、まず日本語の通じる通訳に対してむけられたにらがない。

七月六日（注⁴）の仕事はじめには、「配耕」前、農場視察をとげていた通訳とか、農場のブラジル人監督か、

あるいは仕事に熟練した労働者が移民たちについていて、コーヒー採取の指南をしたはずである。

まず、手のひらで小枝になっているコーヒーの実をこきおとす。大きなコーヒー樹は地上から三メートル、あるいはそれ以上のびているから、高いところのものは、三脚のはしごをたてて、その上で仕事をする。地上には大きな布が敷いてあるから、コーヒーの実はその上に落ちる。赤いさくらんぼのようにつやつやとした実、もしくは、すでに乾いて黒くなったものが木の葉や小さな枯れ枝とともに布の上に落ちていく。

このこきおとし（アパンニヤ）の仕事が終わると、こんどは布の上におとしたコーヒーの実をふるい（ペネイラ）にかけて砂、ほこりを取り、これをあおいで木の葉、その他のごみをのぞくのである。こうして、敷布をとりさり、こき手がつぎのコーヒー樹に移ったあとは、布からはみだして直接地べたへ落ちたコーヒーの実を、ほうきかくまででかき集めて、またこれをふるいにかけて、きれいな実だけを残すのである。採取したコーヒーの実は、これを五〇リットルの丸いますで計って袋につめるか、あるいは五〇リットルのところに横線のはいった袋にその線までつめる。袋は木綿のズックかジュッタ（ジュート）製のものであった。農場によっては、一〇〇リットル、あるいは一二〇リットルの袋を使うところもあった。

この袋には番号がはいっていて、家族名の代わりになるものであった。監督はコロノをよぶとき、この番号をおぼえていて、何番には仕事のミスがある！と怒鳴るのである。仕事のミスとは、コーヒーの積み残し、または、地上にまだ落ちたままコーヒーが残っていることである。

コロノたちが採収したコーヒーの袋は、農場の馬車で乾燥場へ運んでいく。監督は袋の番号とともにコロノたちの採取量を手帳に記入しておく。空袋は次の便でコロノのもとへ戻されるのである。

むろん、こんな仕事は別に難しいものではなかった。しかし、熟練までは、やはり日数を要する。ことにふるいの使い方は、手ぎわがよくないとはかどらない。ペネイラは直径八〇センチほどの丸いもので、コーヒーの実がもらない程度にあらいう金網を張ったものである。へりは高さが二センチくらいしかない。ただ、なかほどが、かなり深くなっているだけだ。これをうまく手で動かしごみを一か所に集め、空中に実とともにね上げて、ごみは風にとばし、実はふるいに戻すのである。熟練してくると、コーヒーの実はふるいの手前から右肩の上方へ、すすると帯状にまい上がり、すべてのごみを風にとばした後は、まるでたたみこまれるようにふるいに戻るのである。

むろん、金のなる木を目前にして、移民たちが、いか

に熱心に仕事を覚えようとしたか想像はつくが、最初の農場に落ち着くことのできなかった第一回移民の大部分は、おそらく仕事に熟練するには至らなかったに違いない。

仕事は監督の角笛（ブジーナ）の合い図で、日の出から日の入りまで続く。女たちは宵のうちから翌日の弁当の用意をして、朝は男たちとともに仕事場へおもむく。仕事場の遠いところは、「あしたに星をいただき、夕に月影をふんで帰る」ことも珍しくなかったのである。

ズモーン農場の場合

ズモーン農場へは、通訳加藤順之助に引率されて、福島、熊本、広島県人を主に東京市の一家族を加え、五十二家族二百十人がはいった。そして、仕事は七月四日からはじめられた。

いよいよ金のなる木のコーヒー樹を前にして仕事をはじめるといので、皆はりきっていたのであるが、移民たちのコーヒー採取量は、信じられないほど少なかった。

朝は六時が就働時間であったが、畑が遠い場合は四時から起きて家を出た。

「最初の日などは、皆三時におきて勢ぞろいした。そし

て、はしごをかついだ男、乳のみ児を背負った女、弁当をさげた子供たちの一群は勇み立ち、露を蹴って先を争いながら、コーヒー園へ馳せつけたのであった（注⑤）「
こうして、汗まみれ、土まみれになって働いたにもかかわらず、三人家族で一俵から一俵半、いや半俵（注⑥）くらいしかとれないものもあった。

仕事に慣れないせいもあったろう。イタリア移民などは、四人家族で三俵半から四俵摘んだ（注⑦）といわれる。しかし、これは収穫期のはじめころのことであった。

日本移民がはいったころは、もう収穫期も半ばをすぎ、残っている五十年以上の老樹などは、ほとんど結実の姿を見ないくらいであった。しかも、実は黒くひからびていたものが多かった。その年は、ひどい凶作だったのである。

そういうわけで、仕事に慣れたらもつと摘めるだろう、という希望も、だんだん失われていったのである。

（採取したコーヒーは一般に、円筒形のますで計る。分量はアルケール（alqueire）で50リットルが普通であるが、90リットルのもある―のちには50リットルに統一される―。これを「俵（袋）」とするところもあるが、^⑧アルケールを「袋とかぞえるところも多かった。^⑨アルケール一袋は、100リットルから120リットルになる。

「アルケールの採取賃は4500〜5000レイスであった。

ズモーン農場は1袋1ミルであったというから、2アルケールの採取賃である」

いかにブラジルのミル・レイスがよかつた時代とはいえ、三人家族で一日の賃金が「ミル・レイス（六十銭）では一人の稼ぎが20銭にしかない。

会社の宣伝によると、「一人で3俵はつめる。3人家族で9俵だ。一日で5円40銭になる（注8）」というのであった。

これでは移民たちの腹がおさまるはずがない。仕事に手がつかなくなるのもあたりまえだ。

「オーイ、家長集まれやーイ！」とはしごの上からどなっているものがある（注9）。すると、ぞろぞろそのほうへ集まっていく。しんばうしきれなくなった移民たちの家長会議が始まるのである。

「あすから仕事をよそうじゃないか、食うものがなくなったら耕地の牛をつぶして食うさ。移民会社の野郎どもがきたら、竹槍で串ざしにしてやれ！（注10）」などと激烈な言辞を弄する者までとびだす。

女房のもとへかえると、「だれがこんなところへ連れてきたんか、わしは明日にも日本へ帰してもらうよ。だまされてやってきたのはあんたじゃないか、責任はあんた

にあるんだ」とくっつかられる。ならずものをかき集めてきた第一回移民だ。酌婦上がりや、田舎芸者出の女房もいる。平気で亭主を罵倒する。たちまち、怒鳴りあいのけんかになる。

彼らは農場へ着いた最初の晩、馬糞のまざった枯草の上に寝かされ、そのうえノミにせめられて一睡もしなかったという経験がある。「まるで地獄のごつある。こういうところにや辛抱でけん(注一)」と泣き出した女もいたのである。荷物の到着がおくれ、鍋、釜がないために、移民たちは、ブラジル人に炊事をしてもらっていたが、油飯はどうしてもたべられない、骨つきの肉は食う気がしない。とうとう自炊をしようということになり、売店から鍋を買ってきて、めいめい煮たきをすることにしたが、ブラジル米の白い飯に干鰯の火あぶりだ。なにか野菜ものがほしいので、つくり荒らした畑のさつまいもの小さいのをとってきては味噌汁まがいの塩汁をつくってすする。

栄養失調になるのはあたりまえだ。

夜の寝台ときたら、この大農場にも似ず、板の供給がなかったので山から切ってきた椰子の木を割ってならべたもの。その上に蒲の葉を敷いて、ふとんの替わりにした。コロニアの住居が不足していて、一軒に何家族もの寄合世帯、これでは人間の気持ちが悪くは着くはずがない。

コーヒーの収穫の少ないことが、いよいよ決定的になると、てんで働く意力がなくなってしまう。より集まりの構成家族に家長の統制力なんていうものはなかった。家長が家族中でいちばん年下だ、なんていうのもあった。構成してきた「連れ家族」のなかには「おじ」とか、年上の「いとこ」とかも相当あった。すでに移民収容所で点呼があったとき、こんな若い家長がこの家族たちに対して命令がいきとどくのか、と役人にあやしまれたことがあった。「連れ家族」の連中は、責任がないから、なまけるだけなまける。こんなところに、いつまでぐずぐずしていられるか！ と早くとびだしたい気持ちだけで勝手な熱をあげ、通訳にくつてかかる、業（ごう）をにやした通訳は、「おれになんの責任があるんだ！」とばかりふんぞりかえってしまう。まったく「不親切な人なもので……（注「二」）」とあとになっても不平をいうものがあつたが、加藤通訳の進退きわまつた気持ちにも同情される。

加藤通訳がそれから十年後に書きのこした文章（注「三」）によると、第一回移民の七分の一が純農にすぎず、その他のものは、

「巡查、監守、村長、学生上がり、商売に失敗した小商人、網なき漁夫、石炭の臭気失せざる炭坑夫、鉄道工夫、校長になりそこねた小学教員、腰弁の下級官吏、三百代言、株式に手を出して零落したる穀屋の亭主、書

生、田舎俳優の成れの果て、博徒、船員上がりの男、或いは酌婦上がりの女、田舎芸者もあれば、宿場女郎が世話女房に化けているのもあった」のである。

このような人間が渡航に際して、支度金、日本内地旅費、宿泊料、補助金残額、手数料など、一人で約百五十円ほどつかっているというし、なかには、もうかる出稼ぎだというので、高利でその金を借りてきたものもあった。しかも、五十一日の航海のちにブラジルに着き、いよいよ仕事を始めるまでには日本を出発してから七十日にもなっていたのである。出稼ぎ者にとって七十日の長さは、今日のわれわれには想像もつかないものであったにちがいない。彼らはおそらく、一日の収入といえども、自分たちの運命を決するものとして考えていたに違いない。そのうえ、食物、住居、気候、フアゼンダの環境、支配人の尊大、監督の横柄さ、ままならない通訳、なにもかも氣にくわないものばかり。このように考えてみると、彼らの気持ちも理解できるのではないかと思う。

すでに農具、食料品の購入などで借金のできているものもあった。どう計算してみてもたべていける収入ではない。

仕事をはじめてから数日して（注一）、リオ公使館の三浦荒次郎通訳官と皇国殖民会社の代理人上塚周平とが、

加藤通訳の案内でコーヒー園に顔をだした。移民たちの不満が彼らにむかつて爆発したことはいうまでもない。

三浦通訳官のとりはからいで、いままでよりも結実の多い畑にまわされたが、家族三人で一袋か一袋半の採取高にすぎなかった。それでも、「まあ、まあ辛抱してくれ」というようなことで、なんとか話をまとめ、三日ほど農場に滞在したのち、三浦と上塚は、サン・マルチャーニヨ農場へ発っていったのであった。

二人は、サン・マルチャーニヨ農場に着くと、その通訳をしていた「移民の草分け」鈴木貞次郎に「ズモーン耕地（農場）におけるコーヒー採取高の惨状を語り、なんとか彼（原文には私）に暇をとって、失望落胆している彼ら（移民たち）にコーヒー園におけるコロノ生活がどういうものかを説明し、とにかく契約年限をすますよう慰撫してくれ（注15）」と依頼した。

ところが、鈴木がズモーン農場へいってみると、こんどは加藤通訳とコロノのあいだでもめていることがわかった。加藤は慰撫、説得などはダメだと言って、てんで相手にしない。むろん彼はせっかく頼まれてきたので、いろいろ説明はしたものの、移民たちはこのままではとても食っていけないこと、加藤通訳が不親切であることを主張してやまなかった。

一方、上塚と三浦の一行は、六農場をつぎつぎと歩き

まわったが、移民たちの不満は、どこへいっても大同小異であつた。七月十四日（「四十年史」）さすがの上塚も、サンパウロ市にもどつてくると、事務所の椅子に腰をおろして、がっかりしていたという。書記の香山六郎が、「耕地（農場）の模様はどうでした？」とたずねると、「みんな食えんといつて騒いでいた。コーヒーがなつておらんので、一日三人家族で一生懸命働いても一俵半か二俵しかちぎれぬ。まったくあれでは食っていけん」といい、

「みんなの不平はむりもない（注「6」）」と嘆いていたといわれる。

それから数日後のこと、農場側からの通知によつて、上塚は宮崎信造を通訳としてズモーン農場へおもむいた。移民たちの要求をきくと、「移民会社の宣伝どおり、一日の賃金が三人家族で九円から十円になることが約束されないかぎり、働かない。水野、上塚のうそつきめ、一日一円にも足らない収入で、一人百五十円以上の旅費を払つて知らぬ他国にくるものがあるか」というのであつた。（注「7」）

これは農場の現実には照らして不可能なことであつた。話はまとまらないまま、とにかくなんとか善後策を講じなければならぬことを決心した上塚は、サンパウロ市へもどつた。そして、八月十五日には、一度サンパウロ

市にもどった宮崎信造に託して、移民たちの預金の「一部」をもってズモーン農場へおもむかせた。その翌日、宮崎が農場を去った夜、移民たちは各県代表の会議をひらいて、つぎのことを決議したのであった。

一、他の結実多い耕地へ移耕させてもらうこと。
二、移民の要求を耕主側へ通弁せず、移民に傲慢不埒の加藤通訳罷免の貫徹を計ること。

ズモーン農場から、移民たちがさわいでおさまらず、との急報が上塚代理人のもとにとどいたのは八月二十二日であった。

八月二十三日の水野の日記曰く―、
「午前五時四〇分発にてルス停車場発、三浦通訳官、収容所長、上塚代理人、宮崎信造通訳、デビー及監督ダリー諸氏と共にゾモント耕地に向う。午後六時四〇分着、デビー氏住宅に宿す（注18）」と。

翌日はきつそく移民たちと農場側との調停がはじまったのであるが、「上塚代理人の温情主義、地に平身低頭、移民への涙の哀願も水の泡」と「四十年史」が記しているとおりに、移民たちの主張は、もう妥協点をのこしえないうものとなっていたのであった。

彼らの移民会社やその一党に対するうらみには深刻な

ものがあつた。「水野、上塚が急行すると竹槍、鍬、鎌をとってこれを迎えるさわざ」と「日本人発展史」が記しているが、暴力沙汰には発展しなかったとはいえ、そうした不穏な気がただよっていたことは事実だったといえよう。

移民たちは仕事場のコーヒー園で、水野、上塚の一行を迎えたのであつたが、このとき東京代表（といっても一家族だけであつたが他の県人に対して代表となつていた）の法華信者茨木友次郎は、三脚はしごにかけのぼつて、アジ演説をぶつて、闘争魂を発揮したといわれる。

彼らの強硬な主張に屈した会社側の上塚は、地にひれ伏し、

「諸君を今日の窮状におとしいれた責任は私どもにある。申しわけの言葉もないが、しかし、私どもはいままで、諸君が幸福であるようにと努めてきた。不幸にして不景気の絶頂、あまつさえ、コーヒーの凶作である。私どもの希望は、これがため果たされず、諸君が苦しまねばならぬ破目となつた。私の生命を捨てよといわれるなら、もとより生命はおしくないが、願わくば、もう少し生かしておいて、諸君のためにつくさしてもらいたい。私は生命にかえて、諸君のために尽すことを誓約する（注

19）」

と哀願した。

結局ズモーン農場の五十二家族二百十名は、農場五十六日間滞在のち、全員引き揚げとなり、一同は、ふたびサンパウロ移民収容所へもどったのであった。加藤通訳はこのときかぎり、移民通訳を断念して浪々の身となった。収容所へもどった五十二家族はあらためて州労働局のあっせんで各地に就働することになる。

五十二家族二百十名のなかから独身者二十八名は、サンパウロ―パラナ線ファッシーナ方面の鉄道工夫となりリオ州マカエーからきた有川新吉通訳（かさと丸とは別渡航者）に連れられて出かけていった。福島、宮城の十五家族は目黒静が先頭になってソロカバナ線アグードス駅より四〇キロ奥のベアード農場にいき、熊本七、広島二の九家族は、ノロエステ線チビリサー駅サン・ジョアキン農場へ書記香山六郎に引率されておもむいた。

その他の二十八家族は、ソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅のソブラード農場、およびイタチーバ農場（あるいは同駅とも解せられる文面だが線・駅名不明）へそれぞれ契約したものがあり、サンパウロ市にとどまって、家庭奉公、大工、左官の職についたものもあつた。また別にアルゼンチンへ転向したものもあつた。とにかく、このとき各地へちらばつたものは、のちにそれぞれ後続部隊をえて、各方面の先駆者となつたのである。

カナアーン農場の場合

モジアナ線カナアーン駅カナアーン農場は嶺昌通訳が、六月二十七日、沖縄県人二十四家族百五十二人（他の記録では百五十五人）をつれてはいったところである。

（このとき農場にはイタリア人百九十家族、スペイン人八十四家族、オーストリア人二家族、ポルトガル人六家族のほか、ブラジル人二十四家族がいたという（大江寅次著『ブラジル移民五十年』二十八ページ）。すでに三百四家族のコロノがいたところへ日本人二十四家族がはいっていったのである）

ここの採取賃金はコーヒー五〇リットルの一袋が500レイスであったが、やはり結実は少なかった。契約は一年として「入耕」したのであるが、彼ら沖縄移民たちは「暑い気候や粗食にも充分耐えた」（「四十年史」）し収容所でもらった肉の腸詰めを農場まで持ちこんだほどであるから、案外、油ものの食事にも平気だったにちがいないが、「日本出発の際、渡航支度金の負債（一人あて約百五十円）を一日も早く郷里へ送金したい焦燥感」にかられて、とても落ち着いて「どこでも大同小異であった」農場の仕事をしている気にはなれなかった。彼らには、

かさと丸入港に際しての「サントス港の海の色が、故郷をしのぶ憧憬」（「四十年史」）となり、コーヒー農場よりも港町のほうが労働賃金も高かろうと考えて、農場を逃げだすものがあらわれた。懐中の寂しさからサンパウロまで汽車でくると、こんどはサントスまで徒歩でいったほどであるといわれている。

十月二日のことであった。移民入耕後九十七日を経過した日、嶺通訳の通報で上塚代理人がカナアーン農場へかけつけたときは、すでに六家族（三十一人）は逃亡したあとであった。ここでも移民会社の勧誘員が「あまりふいたたたき」とわかったが、残りの十八家族には、できるだけの説諭をもって逃亡を思いとどまるようにしたのであった。しかし、逃亡者は、やはりそのあとを絶たなかったといわれている。

どこの農場でも、移民逃亡がはじまると、嚴重な夜警をつけるのが普通である。農場には「カッパンガ」とよばれる警備に動員される労働者の一団がいた。これは法規外の警察隊だともいえる。なぜなら、農場内の支配権は農場主にあったし、農場内の出来事、たとえばコロノとの対立抗争のようなものは、よほどコロノ側に言い分がないかぎり、農場主の言い分が正しいとされたからであった。むしろ農業労働者保護法（パトロナート）はあったが、これも仲介者がなければ利用はむずかしかったの

で、とても日本人コロノには頼れるものではなかった。もしストライキがおこって、農場内のカッパンガの手におえないような場合には、近くの町の警察から州警兵（ソルダード）の出動があった。むろん、これは農場主の要請に応じるものであった。

ところで、「夜逃げ」は決して一家族だけが単独で計画するものではないから、実際は逃亡者が一家族だけの場合でも、近所のものは、たいがい便利を計ってやる。ときには、前もって送別の宴をはり、成功をいのる場合さえもあった。彼ら逃亡者は、目的地に着いたら、その地の事情を通告して、残ったものの参考に資する義務を負うことになる。だから農場主からは「退耕に際しては団結して事をおこし、あるいは夜逃げをなし、また、他の誘惑に乗ぜられて退去すること、その方法が巧妙となり、辛辣味を加えてきた」ことがのちに問題となるのであった。

これは、どこの農場でおこったことか場所をあきらかにしないが、夜逃げについて、こんなエピソードがある。夜番が、こつそり日本移民の家屋を見まわっていると、壁のすきまから、カンテラの光がもれて、屋内の明るいことを示していた。近寄ってそのすきまに目をあててなかをのぞいてみると、なんと日本人は、男も女もみなよりに集まって、白い煙のでる爆弾の製造中ではないか。

「うーむ、これが日露戦争で勝利をえた日本人であつたのか」と思い、さわらぬ神にたたりなし、ぬき足、さし足、夜番はなに知らぬふうで、その場を逃げだした、というのである。

これがどれだけ信じるにたる話か、ちよつと疑わしいが、むろん、爆弾とは逃亡中の兵糧「にぎり飯」であることは説明するまでもないであろう。ただ、このように協力して事にあたつたといふことの説明にはなるだろう。

逃亡者は、かならずしも農場のある駅から汽車に乗るとはかぎらない。つぎの駅、またそのつぎの駅で汽車に乗る。その間、森林や牧場、あるいはコーヒー園中の雨やどりの小屋（ランシヨ）に寝る。あまり用心がすぎて、汽車のなかで追手につかまって、つれもどされたなどの話もある。

夜番にまつわる悲喜劇もいろいろある。なぜなら、日本人はまだ屋内で便器をつかう習慣がなかつたので、やむをえず、女でさえも夜、屋外に出なければならぬことがあつた。街灯などはないのであるから、むろんまっくらである。そこで、あやしい女とか、逃亡者とかにまぢがえられることもあつたのである。

多くのものが協力して事にあたれば、夜番がとおりすぎたか、あるいはまだ家の近くにいろか、いろいろ合い図ができる。夜番はカービン銃（カラビーナ）をもつてい

るので、ちよつとうす気味悪い。しかし夜番も人間だ。自分が銃をもっている以上、いつまた不意うちをくらわされるかわからない、という不安もある。だからあまり身に危険がせまるようなことはしない。当時、まだ懐中電灯などはなかった。

話をカナアーン農場のことにもどそう。

逃亡の六家族は、サントスのシリア人の宿屋にとまりこんで、宿賃支払い不能とでた。そこでホテルの主人はサンパウロの移民会社へ彼らの宿賃を請求してきた。会社は一コント五〇〇ミル・レイス也を支払って一応清算し、彼らをサントスの築港労働へあっせんした。かくて彼らはサントス市における日本移民の先駆者になったのであった。

フロレスタ農場の場合

ついでに、沖縄県人だけがはいったもう一つの農場、イツエンセ（いまはソロカバナ）緑イツー駅フロレスタ農場のことにふれておこう。

ここには六月二十七日に、ひげで移民を威圧した通訳大野基尚とともに二十三家族（「四十年史」には二十六家族）百七十三名がはいった。ここの契約は例外で六か月であった。コーヒーの結実も多く、移民たちもよく働いたと

いう。

しかし、負債として日本に残してきた渡航費を年内に送金返済したいという望みはみな同じで、そのためには、収入はやはり充分とはいえなかった。そうすると、六か月の契約でさえもあせらざるをえなかった。

焦燥したあげくは、やはり、甘い儲けを夢見て、農場を逃げだすことになるのである。

この農場へはいった沖縄県人代表の城間真次郎は、あとで移民逃亡の原因をつぎのように発表した、と「四十年史」に出ている。

『渡航費の借金返済を急ぐため、儲からぬコーヒー耕地より、儲かるところへと移転したい（と考えた）。

その遠因は、われらが那覇出発前、小禄村の宮里某が、北米、カナダ方面より日本金三千円儲けて帰国したときのみやげ話によるものと思う。

「私はカナダで一か所に定住せず、いつも金もうけのある場所をさがし回ったため、かく半年に金を集めたんだ。諸君もブラジルにいったら、いつも耳をたててどこにいかなる仕事があるか、どこにどのくらいの金儲けがあるか、この種の話ばかりきいて歩きなさい」と聞かされてきた連中ですから、金の儲からぬコーヒー耕地をとび出し、サントス方面へ早くも走った…」と報告するのであった。

このフロレスタ農場では、翌年一月二十五日、残った五十二名の沖縄移民も問題をおこし、農場からの通知で調停にかけた上塚代理人と農場主との交渉中、「農場主の嫌忌にふれた」事件がおこって、全部退去を命じられてしまった。このとき、五十二名のものが、コーヒー樹間に間作としてつくっていたとうもろこし、豆七百俵、それから請負で焼きあげた木炭などみな没収されてしまったといわれる（注20）。これは、コーヒー採取後まで残った移民たちが最後の希望としてつくっていたものであった。

ところが、ここに二年も辛抱して働いたものもあったと他の記録にあるので、かならずしもわるい農場ではなかったようにも思われる。ただし、イツーは共和革命の発祥地（帝政末期共和党代表会議の地として名高い）だけあって、農場主の権力は非常につよく、コロノのあつかい方もかなり専断的なものがあつたことが想像される。

ここで、沖縄移民の家族構成について述べてみると、それがいかに出稼ぎを主としてつくりあげたものであり、手足まといの女子供を少なくしているかがわかる。これを野田通訳官の「移民調査報告書第五」（「日本人発展史」二八六ページ）によってみると、

「元来彼らは夫婦の一家族に独身男子一名、又は数名を合併し、表面一家族なるが如くよそおいたる虚構の家

族組織にして、多くは他人同志の集合なれば、他の外国移民が、もっぱら、夫婦・親子および兄弟姉妹の關係をもつて構成せる眞の家族とは、全くそのおもむきを異にし、これがため、耕地役員および他の労働者をして、日本人は一妻多夫の家族制を有せる未開の蛮人にあらずやと疑わしめ、勢いその輕蔑をうけたのみならず、本邦移民自身においても、一家族として和合すべき筈なく、寢食および労働上に、しばしば衝突をかもし、その結果、まず眞家族の附屬物にすぎざる独身者より漸次耕地を逃亡し、サンパウロ市及びサントス港等に出でて他の職業に従事し、中にはコーヒー園において労働するよりも、却つて多額の収益をえたるものあり。而して誘惑的報道をうると同時に、一面園主より逃亡者に対する罰金を課せらるるに至れる労働者は、彼是れ打算のすえ、むしろ耕地を去る方利益なりとし、眞の夫婦者にして逃亡したる輩も少なからず、入園後八カ月を経たるときには、在園移民の数一一九名ありしが、本宮巡回の当時（一九〇九年九月下旬）には著しく減員してわずかに二三名となれり」とある。

もちろん、ここで問題にしていることはいわゆる「虚構の家族組織」であつて、実際には独身青年が多かつたということである。

もちろんこうした家族構成は、沖縄が筆頭であつたが、

そのつぎは鹿児島であつた。それは、これらの地方が、いかに出稼ぎを必要としていたかを示すものである（もちろん、ここでの判断は第一回かさと丸移民についてだけで、決して日本全国を比較してのものでないことを承知してもらいたい）。

これを数字のうえで調べてみると、沖縄は四十七家族で鹿児島は四十六家族であるが、前者は全数が三百二十五名であるにかかわらず、女は法律上主婦となっているものが四十八名で、これに三人の独身女性が加わるが、これに対して男の独身者は二百二十六名である。しかもみな働きざかりで二十歳前後がいちばん多い。鹿児島はこれにくらべれば、やや極端な構成がやわらげられてはいるが、それでも、女の全数が四十九名で独身女性が三名。沖縄にくらべて一名だけ多い。これに対して男子総数百二十三名中独身者が七十四名になっている。

ここで、ついでだから第一回移民百六十五家族全員七百八十一名をみると、そのなかで男の数は五百九十三名、女の数は一八十八名である。かくて四百五人の独身男子がのころ。これでは出稼ぎの夢がくずれたとき、結婚難にみまわれるのはあきらかである。ただしいわゆる構成家族の中心にはやはり絶対多数の夫婦もの、しかも二十代の若ものが多かったということは、ブラジルにおける日本移民の発展の基礎をなしたものだといわれている。

サン・マルチーニョ農場の場合

九月三日、ズモーン農場をひきあげた移民たちの一部が、ノロエステ線へ出発した日（注²¹）サン・マルチーニョ農場の鹿児島県移民が紛擾をおこしたことが、農場の総支配人から収容所長のもとに入電し、また四日には、州農務長官から、リオの日本公使館へ急電がとんだ。曰く――

「サン・マルチーニョ農場にストライキ勃発、形勢不穩、警察隊を派遣することになるかもしれない（注²²）」と。

そこで、三浦通訳官と水野龍、上塚周平の三人が、サン・マルチーニョへ急行することになった。移民収容所からは、フラーガ所長が出向いた。

サン・マルチーニョ農場は、通訳鈴木貞次郎が、平野運平のかけもちの不便をさけるため、農場総支配人の要請によって、移民たちの「入耕」から数日おくれではあったところ。鹿児島県人二十七家族百一名がいたのであった。

「この賃金規定は、コーヒー採取賃は一二〇リットル（²³アルケール）の一袋が「ミル・レイス、臨時労働（大工仕事も含む）」が²⁴ミルないし²⁵ミル五〇〇。もし

除草取にはいれば、コーヒー樹手入れ質が一千本につき年額八〇ミル・レイス、一人で三千本うけもてば二四〇ミル、三人で九千本の七二〇ミル、これを三か月払いでうけとれば二四〇ミルとなる（注²³）。」

そのほかにコーヒー園間作として自家食糧もとれるようになった。

サン・マルチーニヨの移民たちが罷業をはじめた九月二日は「入耕」後二か月であって、移民たちは、まだ給料というものを見ていなかった。そこになにか不安が感じられたにちがいない。それに、国へ残してきた借金のこともあるから現金がほしくなったのであろう。

彼らが農場側へ提出した要求というのは――

一、賃金支払いを月ごとにする

（農場の支払いは三か月ごとになっていたし、「入耕」の際の契約書にもそのことは明記してあり、平野通訳の説明もあつたはずである）

二、各家族に五百ミルずつ前貸をすること

（当時は日本金にして三十円、あるいはそれ以上）そのほかにも大工賃金を五ミルに増加すること、ほかに「代用紙幣――バーレ」の問題もあつたが、前記の二つが主要なものであつた。

移民たちは、これらの要求をまとめるための相談で無

断休業をしていたのである。むろん、これらの要求は農場側からは、全然相手にされなかった。ただ、総支配人の回答として文献に伝えられているのは、「三か月払いの制度をかえて、毎月払いにすることはできない（注²⁴）。ただ八月末日までの精算書はできているから（もし残金高をしりたければ）みせてもいい。食科品を供給するほか、一家族に対して、二〇ミルないし三〇ミルの前貸はする。その他の要求は全部拒絶する（注²⁵）」というのである。

農場側の拒否の理由を通訳鈴木貞次郎が説明するところを「五十年の歩み」から再録すると、

「サン・マルチャーニヨ耕地は株式組織の農事会社で、経営資金が勝手にいつでも引出せるものではない。必要な支出を変更する場合、重役会議を経なければならぬ。小数（イタリア人、スペイン人、ドイツ人、中国人など五百家族もいる。今、日本人は二十七家族中の二十五家族が休業しているのである―筆者注）の日本人コロノのために、このような措置をとることはみとめない」

「各家族に対する五百ミルの前貸というのが如きは論外である。一体、何びとが前賃に対する保証と責任をもつか、といわれれば返答の余地はない。もつとも千万である」

というのである。

サン・マルチーニヨ農業の特殊性は「食えないから」というのではなかった。

「支配人バセラルは、私（鈴木通訳）の懇請を容れて、日本人を（他のコロノから）独立させて結実量の多い区に働かせた。従って、いずれの家族にも、食料を支払って残金があった。これがいけないのだからどうにもならない。彼等は残金をうけとりたいということで、三カ月毎の支払いを一カ月払いにしてもらいたいという。なお、日本に借金してきたからその返済のために各家族五百ミルレイスの前貸してもらいたいという乱暴な理由で同盟罷業をした」

と鈴木は後日『日伯毎日新聞』に発表している（注26）。

しかし、これが農場側から、暴動に発展する可能性のあるストライキとみられた原因はほかにあった。

それは、片言のポルトガル語で、二、三の青年が総支配人バセラルと交渉した際、なんのことやらさっぱり理解できなかった総支配人は、いずれ通訳からくわしい説明があることと思い、シーシー（「五十年の歩み」にはシン、シン）と答えていたのを、日本人青年たちは要求がうけいれられたものと解し、あとで通訳が説明すると、「小細工を弄して」交渉をぶちこわした、といって憤慨し

だしたことである。このシー、シーについてのちに通訳が総支配人にただすと、「そんなこと（要求をうけ入れること）ができるわけがないではないか」と笑いだしたという。しかし、移民たちは、あくまで要求貫徹の態度をくずさなかった。

そのうち、デマがとびはじめた。

支配人と通訳の身边があぶないとか、売店から日本人が釘をたくさん買いこんだのは、爆弾製造の材料にするのだとか、途方もないうわさである。なにしろ、日露戦争に勝った小さい人間どもは何をやるかわからないというのがブラジル人の頭であった。総支配人もそんなことを信じたらしい。それが州司法長官、移民収容所長、日本公使館などへの打電となってあらわれたわけである。

あくまで初志貫徹という罷業者に対して、このとき農場側のとった態度は、全員追放ということであった。

しかし、三浦、水野、上塚らが到着して農場側と話し合った結果、首謀者その他の七家族を追放することになった。鈴木通訳は、はじめ、身もとのはっきりした扇動者二人だけの追放で充分だと思っていたのであるが、支配人の全員追放よりは七家族追放のほうに賛意を表したのだという。

ところが、ここはズモーン農場の場合とはまったく反対で、移民たちはサン・マルチーニヨ農場が気に入くわな

くてごね出したわけではなかったの、いよいよ退去命令がでると、「自分たちには農場を追放される理由はない。罷業じゃなくて、交渉のため休業しているだけだ。断じて退去しない」とがんばりだす始末。そのうえ「もともとこんなことになったのは、移民会社が嘘八百をならべて、われわれをこんなところへ連れてきたのがいけないのだ」と移民会社に矛先を向けだす。そして代理人上塚に対しては、「この馬鹿野郎、貴様も同じ穴のムジナだ！」

と、馬鹿野郎よばわりでくっつかかる。はては「水野をここへ連れて来い、あのハゲ頭を地面にすりつけて謝れ（注27）！」

というものも出てくる。責任は移民会社だというのだ。

だが、農場側では、七家族追放の意志をひるがえきない。どうしても出ていかなければ警察隊の力をかりても追放するというのである。実際リベイロン・プレットからは五人の州警兵が来ていたし、それに多くのカツパンガたちが用意されていた。そこで罷業三日目の晩（？）、とうとう総支配人、三浦、上塚、水野、鈴木らは、州警兵およびカツパンガを背後にして移民たちの集まっている家に取りこむことになった。交渉には三浦一人が移民たちのところへ出かけていった。すると、「断じて退去しない」とがんばっていた連中も、いよいよ実力行使のど

たん場に立たされたと感じくや、一も二もなく退去を承認したのであった。そして、彼が出るなら自分も出るというものがあり、「合計十二家族、人数にして四十二、三人（注²⁸）」が、翌日サン・マルチーニョ農場を退去することになり、事件落着きということになったのである。彼らのなかのあるものはサンパウロ市へ、他のものは遠くアルゼンチンへ向かったと伝えられる。（注²⁹）

通訳鈴木はこの事件についてのちに書いている、「サン・マルチーニョ耕地の同盟罷業は、全く無知と誤解からデッチあげられた猿芝居のようなものであった」と。

無知とは、移民たちがフアゼンダの事情や自分たちの立場を理解しないことから無理な要求を出したこと、誤解とは、日本人に対するブラジル人たちのデマのことであろう。

鈴木通訳はこの農場に六か月つとめたのち、サンパウロ市へもどった。彼の意見によると、「移民の選定よろしさをえたならば、紛擾はあったにせよ、成功の可能性のあるサン・マルチーニョ、グアタパラーの二大コーヒー園のあったこと」は忘れてはならないし、また、そこでは「耕主と支配人の特別な配慮と好意があり、コーヒー樹齡が結実多い年代にあったこと」も指摘して、移民史研究者の注意をうながしている。

ちなみに、『かさと丸』（126ページ）には、サン・マ

ル

チーニヨ農場にはいった第一回移民で、ここで十年間も働きつづけたのち、プロミツソン駅に土地を購入して植民者となったものもあるので、農業者にとって希望のもてないところではなかったことがうかがえると思う。

グアタパラ―農場の場合

パウリスタ線グアタパラ―駅グアタパラ―農場は、通訳平野運平が鹿児島県人十八家族六十七名、高知県人二家族十二名、新潟県人三家族九名、計二十三家族八十八名をひきつれてはいったところだ。農場所有地は一万五千町歩、コーヒー樹二百十一万本の大農場で、多くの外国移民コロノがいた。

九月初旬のサン・マルチーニヨの争議が一段落つくともなく、まるで連鎖反応のようにグアタパラ―へ移ってきた。

ここの契約は一か年で、貸金をみると、コーヒー樹手入れ賃は年額一千本一〇〇ミル・レイス、コーヒー採取賃は一袋五〇リットルで五〇〇レイス、臨時労働（カマラーダ）は二ミル五〇〇レイスであった。

さきのサン・マルチーニヨ農場でストライキの首謀者たちが追放になったという話は、むしろ早く自由の身に

なったという羨望となって反応し、二、三の策動者を生むにいたったものだといわれる。このとき通訳平野は、彼らの機先を制して無通告、即時退去の処分に出た。追放処分をうけたもののなかには、アルゼンチンへ向かった者もあるという。しかし、これで「退耕者」がなくなつたわけではなかつた。翌年の九月下旬の調査によると、残留者三十四名となっている。だが、このときは、すでに契約が満期になるときであつたから、よく辛抱したものだといつていいかもしれない。

ここで契約のことにちよつとふれておくが、もし一農年という契約が、十月初日から翌年の九月末日まで、という通念に従うとすれば、前年のコーヒー採取期の三か月ははぶかれることになる。しかし契約をただ二か年」とすれば、満期は翌年の六月末ということになる。だが、六月末はいちばん忙しい収穫期であるから、おそらくこの月を契約満期の月とすることはなかつたのではないかと思う。とにかく、この一農年か、一か年かで問題をおこしたものである。そこで、契約は一農年とはつきり規定されるのが普通であつた。

さて、策動者を追放したグアタパラーの平野は、その後、ただ手をこまねいていたのではなかつた。彼は通訳ではあつたが、たんに農場側と移民たちのあいだに立つ

通弁者ではなく、移民たちの利益を考えて行動した。

その代表的なものは、アルマゼン（売店）での掛買いを排して、コロノを助けたことである。

「移民は金銭の代用として農場から出す手形（バーレ）をもつて農場付属の商店から物品を購入する習慣であったが、その価額の高いことはおどろくほどであつて、移民がもしそのバーレをもつてグアタパラ（町）その他の市場にいつて購入しようとするれば、その商店では、これを受け取らない。そのうえ、市場への距離が大きいとなれば、いきおい農場の商店から買わなければならぬことになる。平野氏はこの商店が、不当の利益をおさめるのをこころよしとせず、支配人と協議して数十年来の因襲に対して万障を排し、移民に現金を交付することにあらため、平野氏自ら移民を代表し、グアタパラその他の市場にいたり、多額の必需品を購入し、農場の荷物用列車につみこみ、農場にもちかえり、移民に分配したところ、その価額は農場内商店の半ばに相当した」（移民調査報告書第九「日本人発展史」より、原文は文語体）

というように因襲を排撃するにも勇敢であつた。「一人の平野運平をえなかつた他の農場で、移民たちが、このからくり（アルマゼン）によって搾取されたところのもの

は、おそらく甚大なものであったろう」と、「発展史」は記している。

日本移民五十周年記念出版である『かさと丸』によると、このときの残存者であつて、五か年、七か年とグアタパラー農場にとどまって働いていた第一回移民がいたところをみると、平野運平の足跡が偉大であつたことを示しているといえよう。

ソブラード農場の場合

最後に、第一回移民の記録から、いつも除外されがちなソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅ソブラード農場について、わかっているだけのことを記してみる。

ソブラードには仁平嵩が、山口県人九家族二十八名、愛媛県人六家族二十一名、計十五家族四十九名をひきつれて入った。人数も少なかった。賃金はコーヒー樹手入れ賃年額一〇〇ミル、コーヒー採取賃一袋（五〇リットル）五〇〇レイス、臨時労働（カマラーダ）二ミルであつて、契約は一か年であつた。

ここでも「入耕」初期に「流行」のように逃亡者がでたころ、「ソブラード耕地からも数家族の退耕者をだした（注30）」といわれているから、この農場も無事だったとはいえない。また、翌年の九月下旬野田通訳が見まわっ

たときには、五十二名であつたというが、これにはズモーン農場から移つてきた人間も相当いたはずであるから、かなり減少していたものと思われる。

移民五十周年の生存者の一人で、十五歳で渡航したものの申告によると、ソブラード農場に二か年就働というのがあつたし、十六歳の少年は重労働に耐えられず、一少年と計り夜逃げ、汽車賃も払わずにサンパウロ市まででたというのもあつた。

筆者の耳にしたところによると、その後も自発的にソブラードへはいった移民もあり、またズモーン農場から「転耕」したもので十二年がんばつたものもいるという（『かさと丸』）。評判は悪くなかった。ただし、第一回移民がはいった年は一般に不作であつたから、例外的にコロノが落ち着かなかつたようにも思われる。

ここでは他とはまったく別なことが起こつた。「十五家族四十九人の移民には通訳の要なし」（注③）という理由で「入耕」まもなく仁平嵩通訳が解雇になつてしまつたことであつた。コロノのさわざがほとんどなかつたかわり、今度は通訳無用ということになつたわけである。

さて、これで日本移民が最初にはいつた六農場における彼らの動静は、ほぼ記述を終えたことになるが、残るところは、ズモーン農場から他の農場に「転耕」した人たちはその後どうしたか、ということである。ソブラー

ド農場については、すでにふれた。他はソロカバナ線アグードス駅から四〇キロ奥のベアード農場、もう一つはノロエステ線チビリサー駅サン・ジョアキン農場である。サンパウロ市にでたものや、鉄道工夫になったもののはととは後述する。

サン・ジョアキンには、翌一九〇九年九月下旬、野田通訳官の視察のときは二十三名在留していたとある。またベアードには三十三名いた。これは十二家族の人たちであつたが、その支配人について彼らの収入を調べてみたところ、最高一か年四四〇ミル・レイス、これは夫婦および弟一人の三人の働き手であつた。最低は夫婦だけ（すでに家族のものはいない）のもので一〇ミルという数字であつたという。最高の四四〇ミルは日本金二百七十円足らずにあたるもので、これでは旅費でもない。夫婦一〇ミルのほうは、まあ欠損といえる。だから、とてももう一年辛抱してはどうかと説諭するのに忍びなかった、といっている。

『ブラジルに於ける日本人発展史』（上巻）には、カンポス・ネット二十八人とあるが、ソブラード農場やイタチーバ農場のことはでていない。

ちなみに「発展史」の数字をここに転載すれば、ふたびビーヒー農場へはいったものは、ベアード耕地三十二人、カンポス・ネット二十八人、サン・ジョアキン二

十人、合計八十人であって、一九〇八年十二月十五日から翌年一月七日にわたり、各農場を祝察した甘利通訳官は、そのとき、以上の人数の移民たちの在住をみとめたのであった。

注

(一) ここではコーヒー農場の家族労働者住居区域、あるいは住居群をさす。コロニアは元来、植民地ということであるが、日本人は自作農集団地をコロニア何々とよび、今日では日系社会―コロニア・ジャポネーザーを略してコロニアといっている。

(二) もし農場に製材所がなければ、山へ行って木を切ってきて、それで棚式寝台をつくる。

(三) 『移民四十年史』五一ページ上段。

(四) ズモーン農場は四日から。

(五) 『コロニア五十年の歩み』三五ページ。

(六) 児玉正一著『ブラジル移民の父・上塚周平』(以後、“上塚周平”と略)一二七ページ。

(七) 『コロニア五十年の歩み』三四ページ。

(八) 同上。

(九) 『上塚周平』一四四ページ。

(一〇) 『日本人発展史』一八一ページ。

(11)『上塚周平』一四三ページ。

(12)同上、一四四ページ。

(13)『コロニア五十年の歩み』三九ページ。

(14)『廿五周年記念鑑』や『移民四十年史』には、「三日目の夕方」とでているが、『五十年の歩み』四〇ページを見ると十日以上たっている。

(15)『五十年の歩み』四〇ページ。

(16)『移民四十年史』五一ページ。

(17)『かさと丸』二五ページ。

(18)同上、二九ページ。

(19)『農業のブラジル』第三卷第八号。ここでは『日本人発展史』から引用。

(20)この話は、加藤順之助の書きのこしたもの(『五十年の歩み』三九ページ)によると、「同盟罷業をくわだてた移民たちが自らせっかく芽生えたばかりの豆を根元より切り捨て、耕主が好意よりして生活を助けるとて炭をやかせてでき上った二百俵の炭に火を放ち、一夜のうちに灰と化さしめた」ものだ、とある。

(21)『移民四十年史』五五ページ。

(22)『日本人発展史』二八二ページ。

この規定は前記『日本人発展史』二七六ページによる。ただし、コーヒー一二〇リットルというのは『日伯毎日新聞』一九六七年八月三十一日の鈴木南樹(貞次郎)の

記事（「五十九年前の回顧―五人の通訳」）によった。

三か月払いというのは、当時多くの農場がとっていた制度で、むろん場所によつては一か月払いというところもあった。

『移民四十年史』五五ページ。

(26) 『日伯毎日新聞』一九六七年八月二十五日第五ページ。

(27) 『五十年の歩み』四二ページ、および『日伯毎日新聞』

一九六七年八月二十九日第五ページ

(28) 『日伯毎日新聞』一九六七年八月二十九日第五ページ。

(29) 同上、八月三十日第五ページ。

(30) 伯刺西爾時報社編『伯利西爾年鑑』（一九三三年）の後 編六ページ。

(31) 『五十年の歩み』三十九ページ

6 第一回移民の経験

―いわゆる「失敗」の原因について

第一回かさと丸移民についての記録は、一般にはコーヒ―農場にはいった日本移民の失敗の歴史であつたとみ

られている。当時の公使館側（甘利通訳官）の調査によると、全「配耕者」七百七十二名中、六か月後にいたって原契約農場を去っていたものは四百三十名であって、ズモーン農場の例を特別扱いにしても、三百六十名ということになっている。

さらに「入耕」十三か月後の調査によると、ズモーン農場から他の農場へ「転耕」したのもいれた農場在住者は、やっと百九十一名だったという。これを農場別に見てみると、カナアーン二十三、サン・マルチーニヨ二十七、グアタパラー三十四、ソブラード五十二（ズモーンからの転耕者も含む）および、ズモーンから移ったベアド農場が三十二、サン・ジョアキンが二十三名となっている。

ここで、「配耕」十三か月後の調査というのは、おそらく、どれだけの人数が「一農年」の契約を完了したかということではないかと思う。調査にあたった九月下旬というのは、ちょうど農年のかわり目だからである。

ここでヨーロッパ移民との比較研究をしている余裕がないことは残念であるが、だいたいどこの国の移民でも最初から好成績がえられたためしはないことである。

最初にリオ港についた一八二四年ころのドイツ移民の苦労はいわずもがな、一八五〇年代になってサンパウロのコーヒー農場へはいったドイツ移民も、農場側の待遇

に不満を感じて、そうとうさわいだために、ドイツ政府はついにサンパウロ州のコーヒー農場へドイツ移民を送ることを禁止したほどであった。もし時代がちがうからというならば、第一次大戦後ブラジルに移住したスラブ系移民などは、日本移民の目から見てもさえ、どうしてもそんなに不満なのかと思われるほど反抗的であった。彼らはコーヒー農場や植民地を飛びだして放浪し、ついには街頭に物を乞うまでにいたっている。

「移民の草分け」五五ページには、筆者が目撃した年よりも十数年前のことが、同じような事実として記されている。

これらの移民たちは、ブラジル側からみれば、政府や農場主たちの意にかなわない移民であったし、移民政策のうえからみれば、たしかに失敗でもあった。これを日本移民の前例としてハワイの第一回官約移民（一八八五年）をみると、これもそうとう騒いでいる。こういう点から考えて、風土、習慣、言語、社会状態の差がはげしいほど、移民たちにとって異国である移住地における労働者としての生活は不満であり、不安であったように思われる。

ことに、わが第一回移民の場合などは、これをひきつれて「入耕」した通訳さえ、東も西もわからない新米であったが、とにかく、十三か月後、なお百九十一名が原契約農場にとどまっていたということは、いろいろな事情

（これは後述する）を考慮に入れてみると、当時の公使館、会社側、移民史記述者たちが感じていたほど悲観的なものではなかったように思われる。

ただしコーヒ―農場は、日本移民の「出稼ぎの好適地」としては、最後まで好評はえられなかったから、この点からは失敗であったと断定できるのであるが、このコーヒ―農場を足場として、サンパウロ州の日系人が発展したことを思えば、第一回移民の定着率は決して絶望的なものではなかった。あの苦しい経験によって、コーヒ―農場の実状もかなり明らかになり、構成家族の問題もだんだん解決されていくのであった。

むしろ、この最初の日本移民が、農場主たちの期待にそうものでなかったことは事実である。好景気時代にはいつて、多くの経験を積んでいたイタリア移民などの比較ではなかったろう。それにもかかわらず、一部からは「純農者であったものはよく働いた（注二）」という賛辞さえもでているのである。

ここでは、「失敗」の原因について検討し、第一回移民の特殊性、農場の事情、はじめて異国の生活様式をとり入れてまごついてしまったことなどを明らかにしたいと思う。ただし、第一回移民のファゼンダ（農場）生活についてのことされている記録は、ほとんど経済面だけに集中されているものなので、その他の生活面があまり重視

されていない事実は残念である。

コーヒー農場における第一回移民の「失敗」の原因には、「純農者が少なかったこと」（甘利通訳官報告）、「家族構成がよくなかったこと」、および「耕地労働者の収入よりも、退耕者の収入に、より多くのものがあつたこと」

（野田通訳官報告）などがあげられている。「しかしながら、耕地労働者の賃金は、右の如き退耕者の得たる賃銀に劣るばかりでなく、事実その賃金をもつてしては、生活を維持するさえ容易ではなかつたのである」（「発展史」、上巻、二八七ページ）

さらに、「第一回移民離散の原因」を「耕地の現実と耕主の態度」の記述のなかで、「発展史」は「要するに耕地生活の貧困にあつた」といい、その貧困の原因の説明を、農場のふるい搾取機構（アルマゼン）や、コーヒー樹間の「間作」などでやっと生活の不足をおぎなうような低賃金制度などであるとし、さらに、女子供を家にとどめないで一家総出の労働をした日本移民が、食料のための鶏なども飼えなかったというような、生活態度の差からくる出稼ぎ移民の不利な点などをあげている。

耕主の態度は、第二回移民のときのジャタイー農場事件を例にひいているが、とにかく、奴隷解放後わずか二十年の歴史しかない大農場で例外はあつたにしても、一般には労働者に対してそれほど理解があつたとは思えな

いのである。しかも、一度凶作にみまわれたが最後、労働者は食っていけないような農場の組織（奴隷制時代からつづいている単一作）によっても、コロノが、どのようなものとして農場主たちに考えられていたかがわかるであろう。

香山六郎の「四十年史」が「ズモーン耕地の紛擾原因」で述べているところを見ると、収入の面と同時に、その他の生活上の不安が数えあげられている。

一、コーヒー結実が少なかった。採取労働に慣れで収入高が予想の四分の一にも達せぬ生活費の不安。

一日一日と負債がかさむ、このままでは日本における渡航支度金の高利も払えないという苦悩。

二、疲労と料理法の無知から栄養失調、気候不慣れ、軽症患者続出、家長の焦燥感は家族を神経衰弱へ（朝と昼はブラジル米を日本飯にたいて、バカリヤオ―干鰯―の一片を火にあぶって茶漬けですました。夕飯は麦粉だんごの塩汁に、豚の脂を一さじとかしこんだ副食物。野菜不足、肉類不足、炎天下全身発汗のコーヒー採取労働で、体は衰弱するばかりだった）。

三、生活環境不慣れのうえ、言語不通、それに通訳自身も言語不自由の役たたずであった。

これはかならずしも移民総退出となったズモーン農場だけの問題ではないと思う。

彼らがハワイ行きなどの伝統をひいていた出稼ぎ移民であつて、甘利報告にもあるように、農村から直接出てきたものばかりではなかったという点もあるが、いわゆるむりな擬製家族をつくつてきたことが離散の原因であることもあげられよう。

また、その年が凶作であつて、母国送金を義務づけられていた出稼ぎものには、まったく問題にならない低収入であつたことも大きな原因だつたとみられる。しかも、ファゼンダの機構そのものが、給料以外にコーヒー園内の間作その他の場所で自家用食糧生産を行なわなければやっていけないものだったので（これもものちにくわしく述べる）労働賃金だけを目あてにしてきた出稼ぎ移民にとつて、ファゼンダ生活がたえられなかったことは当然であつた。彼らの頭では、これだけ費用をかけてブラジル三界まで乗りだしてきて、こんな収入でどうして農場に辛抱できるか、ということであつた。彼らは移民会社の宣伝にだまされて連れてこられたのだと考えた（注²）。

さらにそのあせりを強める原因の一つには、まったく新しい環境における生活が、肉体的消耗を強め、移民たちを一種の異常精神者としたことは「四十年史」が指摘して

いるとおりのである。そこには、むしろ食物の問題もあったが、朝の四時にたたきおこされ、現場においては、日の出から日の入りまで、監視つきで「囚人のごとく」働かされたこと（コーヒー採取期はどこでもそうであった）、文句をいたくも言語不通でもどかしく思っているところへ、通訳もたよるにたらず、最後の手段として、移民会社や公使館に、うったえなければならなかったことなど、肉体的消耗のうえに精神的焦燥感を強めたのは当然であった。

このようにいろいろな原因を、移民の側からみた場合と会社の側に立ってみた場合との二つにわけて要約してみる。

◇移民の側からみた失敗の原因

一、短期の出稼ぎを目的としてでてきたこと。そのため、旅費の不足を高利で借りてくるようなむりもあえてした。コーヒー農場は働きだしたその日から、賃金をためるというわけにはいかなかった。

一、家族構成がでたらめであったこと。これも賃金を目あてにしてきた出稼ぎ移民の特長である。多くの志を異にした人間がより集まって、とにかく目的地

へ着くまでのしんほうと、形式的に家族を構成してきた。それがファゼンダの現実に直面すると、多くの構成員が、てんでんばらばらの方向へ向かうようになった。責任者のない家族集団だったのである。彼らの多くは夜逃げした。

一、純農でないもの、あるいは農業に適しない家族が加わっていたこと。彼らはブラジルの労働にたえられなかった。ことに監督づきで奴隷のように働かされることにたえられなかった。

◇会社側にたつてみた失敗の原因

一、コーヒー農場について、その内部事情（組織、制度、労働者の生活状態など）がさっぱりわかっていなかった（移民送りだしに先だって、社長水野龍は、「移民の草わけ」鈴木貞次郎をともなつて各農場を視察してまわったが、その誠意はみとめるとしても、これによつて農場の実状を理解することはできなかった）。まして、初年目はもうからないというような認識もなく、ただ、ブラジルを出稼ぎ地として誤認していたから、むりな家族構成も気にかけずに送りだしたわけである。

一、はじめての家族移民募集であったため、予定の人員をまとめるのにてまどつて、コーヒー採取期半ばになってから移民を農場へおくりこんだこと。ファゼンダは、コーヒーがたくさんなっているところから収穫をはじめると、また収穫期半ばをすぎると、コーヒーは黒く乾燥して量もぐんと減ってしまう。コーヒー収穫量が少なければ、メザーダ（コーヒー樹手入れ賃の月わり支払い）なしのコロノでは食べていける道理がなかった。

一、ブラジルを知らない募集人が、各地で誇大な宣伝をしたこと。これが移民に幻滅を感じさせる大きな原因の一つとなった。

一、移民というものに対する理解の浅さ。

移民、あるいは移民事業には、元来「むり」はつきものである。どんなにブラジル事情をよくしらせても、はじめ

の二、三年は、金もうけどころか、土地の生活に慣れるためにさえ相当苦勞しなければならぬものである。だから、もし移民というものが、移民会社を考えていたように人口問題の対策とか、送金による外貨獲得とか、そういうような目的で国内の過剰人口を海外へ送りださなければならぬとしたら、な

おさら現地の事情をよく研究したうえで、いろいろ打つ手を考えておくべきであった。これはのちになつてかなり理解された点であつた。

また移民は、その受け入れ国にとっては労力の補給だったのであるから、農場側では、南欧移民を受け入れた程度の準備はしていたつもりであろうが、生活様式のまったく違った日本移民のために、どうしたらいいかという特別な配慮はなかつたのである。こうした点に関して移民会社はまったくの素人であつた。これもあとで気がついて、あらかじめ準備をととのえるようになるのである。

◇考えられたその後の対策

のちに日本外務省が移民会社に対する移民募集条件として、左のような提案をしたことは移民生活の実状からでたものとして注目されていたと思うが、実際には、なかなか実行されなかったことは移民たちの経験しているところである（『移民四十年史』八三ページ）。

一、移民は農業に慣れたものにかぎる。

二、家族構成に注意し、着伯後、家族の離散をふせぐべし。

三、取扱い上の厳正を期すること。すなわち、規定以外の金銭を収受、または宣伝の誇張をせぬこと。

四、移民到着後、配耕上充分の準備をなし、移民の利益増進に遺憾なきよう、これがためには、在伯業務代理人は、日本移民をうけいれる新主とあらかじめ充分の協定をとげ、その内容は大小、在伯官憲に報告して、その了解をえること。

そして、在伯日本官憲はその内容なるものをつぎのよう
に指摘している。

イ、耕地コロニアに便所なきところは新設させること。

ロ、移民の寝台、卓、椅子等に要する板は充分に供給させること。

ハ、コロニアに飲料水、水道の設備をさせること。

ニ、病患者に対して医師の診察を容易ならしめること。

ホ、沖縄、鹿児島両移民の募集は、なるべく避けること。

へ、着伯の遅きは、コーヒー採取におもしろからざる結果を生じるので、遅くても採取の始まる五月までには移民をサントス港へ到着せしめること。

以上の注意は、日本政府が移民会社をとおして移民たちを契約農場に落ち着かせるた物の施策であるが（これ

がどれだけ実行されたかは別として（注③）、金もうけ、送金、帰国を願ってでてくる移民たちが、低賃金制度と慣れない生活様式や農場の制度と自然条件のもとで、はたして辛抱できるかどうかは、まだまだ保証されないものであった。ただ沖縄移民を実際に制限したことは、あとで問題になった。むしろ、家族構成の点に注意すれば足りたのであった。とにかく、出稼ぎという目的には変わりなくとも、「送金」をやめて、長期計画（これを永住と称した時代もあった）に移ったとき、ファゼンダ生活も「ブラジル生活の初等科」として多くの移民たちに受け入れられるようになるのであった。

ここでは、ファゼンダ生活の細かい記述を後まわしにして、つぎに第二回移民についてふれてみたい。

注

- （一）『伯刺西爾年鑑』後編、「移植民史」八ページ。
- （二）『日伯毎日新聞』一九六七年六月二十三日第五ページ「五十九年前の回顧」、筆者は鈴木南樹（貞次郎）。
- （三）八重野松男著『今日のブラジル』（一九二九年）六〇六～六〇八ページを見ると、領事館や移民会社の無責任ぶりを非難している。

第二回移民は竹村殖民商館の名によつて、一九一〇（明治四十三）年五月四日神戸を出航し、同年六月二十八日サントスに入港した。人員は九百六名（ほかに自由渡航者三名）、二百四十七家族であつた。

第二回移民の輸送は、第一回移民の不成績のためにサンパウロ州政府からつぎのような条件をおしつけられていた。

一、誘入すべき総人員は第一回契約第一条に規定してある三千人のなかから、すでに輸送された七百八十一人を差し引いたもので、一回六百五十人を限度とすること。

二、十二歳以上の移民にはこれまで船賃英貨一〇ポンドを支給したが、今後は八ポンドとすること（注一）

皇国殖民会社の水野社長は、やむをえず右の条件を受諾し、帰国して移民輸送の準備をすすめていたのであるが、ついに資金欠乏のため日本外務省から移民輸送の許可を得ることができず、高知県の富豪、竹村与右衛門に

権利義務いっさいをゆずりわたし、ただ移民事業の実際だけを受けもつことになったのである。

第二回移民のブラジル到着まで、第一回のかさと丸から丸二か年がすぎていた。その間むろん皇国殖民会社はブラジル代理人に対して給料など支払っている余裕はなかったので、上塚はおもちゃ製造の手仕事をやりながら地方からサンパウロの移民事務所へたよってくる移民たちと居をともにし、首を長くして第二回移民の到着を待っていたのであった。

一九一〇年五月六日、サンパウロ市サン・ベント街の藤崎商会気付で上塚代理人へ電報がはいった。

「九百九名の移民をのせ、旅順丸五月四日神戸を発つ。その地にて準備せよ」というのである。

移民はもう神戸を発ってるぞ！

移民船旅順丸がくるぞ！

このニュースは、その日のうちにサンパウロ市の日本人の口から口へ伝えられた。各耕地の日本人へも上塚代理人からただちに通報された。「耕地からの返信は、いずれも『蘇生のおもい』で一致していた」と「四十年史」は感動的に第二回移民神戸出発の報を伝えている。

一万二千里のブラジルへ送られた最初の日本移民が、丸二か年も後続部隊なしに暮らし、島流しにでもあったように心細い気持ちになっていたことは、今日の我々には

想像もつかないことであつたろう。

「第一回移民到着後、満二か年たつていたそのころは、移民の誰彼も片言混じりに伯語をおぼえ、話もできた。生活環境にもなれていた第一回移民より新通訳も得られた」（「四十年史」）ことは、移民史上における一つの進歩といえるだろう。

旅順丸の移民たちは、日本出発前に、竹村殖民商館とのあいだで契約をむすんだが、その契約書第十七条には「契約期限は実地就業の日より満二か年とす。但し、この期間中本契約第五条の義務償却を終わらざるときは、その義務終了の日をもつて期限とす」と規定している。逃亡、早期退出で義務不履行がおこらないように、丸二年はどんなことがあつても辛抱するんだぞ、といいきかせたわけである。

ところで、この第五条の義務とは、同契約第四条掲記の移民渡航費補助金額（十二歳以上八ポンド、七歳から十二歳までのもの四ポンド、二歳から七歳までのもの二ポンド）に対するその一部償却の義務であつて、

「前条渡航費補助金中、一二歳以上のもの一五円、七歳から一二歳までのもの七円五〇銭、二歳以上七歳までのもの二円七五銭の割で移民を収受したる雇主（農場主）の方で州政府へ納入させるようになっていたので、移民はその給料の中から雇主に対してこれを償却する

義務あるものとする。その残額は、償却する義務がない。本条にある金額支払いの責任は、各家族全員にわたるもので、家族全員は家長の負債に対して連帯責任をおうものである（注②）」
とあるのがそれである。

契約書はさらに、ストライキやこれに類する行為をかく禁じ、仕事のうえで苦情のあった場合は、かならず移民取扱人派遣の役員を経て雇主に交渉すべしとある。移民就働後のいざこざにそなえたものであることもろんである。しかもこの契約書には、おのおの二人の保証人が記名されていた。

だが、これだけ移民を契約によってガンジガラメにしても、はたして彼らが送りこまれた農場に辛抱できるかどうかはまだ保証されていない。ジャタイー農場の場合にみられるように、移民会社代理人上塚周平自身、「こんな非人道きわまる農場に日本移民を入れておくことはできない」とさけんで、会社みずから移民の負債をひきうけて彼らを退去させた事件もおこっているのである。

それはさておき、第二回移民は、十七の農場に送られたが、第一回移民と異なる点は、通訳もすでに経験者となり、また、コロノあがりの一回移民もこれに加わり、

通訳のいないところでもすでに先輩移民の経験者がいるなど、だいぶ事情がちがってきていることである。そのうえ、コーヒーも豊作であった。むろんそれでも、いざこざがおこらなかったわけではなかった。ジャタイー、サント・マリアなどは、かなり深刻なものがあつたという。

しかし、第一回移民にくらべて、その落ち着き方は格段の差であつた。有名なジャタイー騒動は例外として、「配耕」後九か月を経た一九一一（明治四十四）年三月の調査によると、当時まだ原契約農場に踏みとどまっていたものは、九百六名中の六百八十一名であつて、差引きの二百二十五名が退去したにとどまっていた。第一回移民の場合、農場へはいつてから半年のち、すでに四百人以上の退去者を出したのにくらべると数段の落ち着きぶりである。

ここに一九二一年三月の調査を「日本人発展史」からとつてみる（カッコ内の数字は『移民四十年史』にでているものである）。

農 場 名	入場人員	現存数
グアタパラー（再入）	226（同上）	225（全員在住）
サン・マルチーニョ（再入）	106（108）	55
ソロカバナ線アグードス駅		
ベアード（再入）	44（同上）	37

ノロエステ線サン・ジョアキン駅（ピーザ）

サン・ジョアキン 70 (65) 61

パウリスタ線コルデイロ駅

ボア・ビスタ（新入） 38 (39) 38（全員在住）

ドウラデンセ線ノーバ・エウロッパ駅

セールラ（新入） 19（同上） 17

パウリスタ線ヴィスコンデ・ド・ピニヤール駅

サンタ・カンディダ（新入） 48 (52) 34

線・駅名不明

*パウリスタ線パンタレオン駅コツケイロ農場

パライーゾ（新入） 11 (21) 11（全員在住）

モジアナ線ジャタイー支線ジャタイー駅

ジャタイー（新入） 83 (84) 3

ソブラード（再入） 67 (68) 51

線・駅名不明

アラクワ・ミリン（新入） 45（同上） 31

ソロカバナ線ロドリゲス・アルベス駅*サンタ・マリ

アンナとある

サンタ・マリア（新入） 46 (45) 47（全員在住）

線・駅名不明*サンタ・マリーナとある

サンタンナ（新入） 22（同上） 13

パウリスタ線カンポス・サーレス駅

サン・フランシスコ（新入） 23（同上） 11

パウリスタ線ジョアキン・エジーディオ駅

グアリローバ（新入） 14（同上） 14（全員在住）

リベイロン・プレット近辺（?）

サン・ペードロ （新入）21（10）14

ソロカバナ線ロドリゲス・アルベス駅

ジョアキン・リベイロ（新入）23（24）19

合計 906

（パライーズ、サンタ・マリア、サンタンナは『移民四十年史』にはなく、そのかわりコツケイロ（コツクエイラともある）、サンタ・マリアンナ、サンタ・マリーナがでていて、それぞれどれかにあたると思うが、数字の模様で、適当なところにあてはめてみた）

これによって見ると、グアタパラーをはじめとして、全員在住の農場が五か所あることになる。そして（大工一家族だけがのこって）全員退去にひとしいジャタイー農場を省けば、半数以下はサン・フランシスコだけである。サン・マルチーニョとサンタンナが半数に近い。むろん罰金を支払って退出したものもあるだろうし、逃亡者もあつたにちがいない。会社との契約も実際にはなかなか履行されないのである。前回よりも好成績とはいふものの、まだまだ試験移民の域を出ていない。

ジャタイー農場

では、ジャタイー農場について語ろう。

モジアナ線ジャタイー支線ジャタイー駅ジャタイー農場には二十三家族八十三名がはいった。通訳は大野基尚であつた。

ジャタイー農場の老主人は馬車ひきから身をおこして中年以後は、この地方で有数なコーヒー農場主となつたもので、当時の農務長官の次男を娘婿にするほどの成功者であつた。農場は突こつとしてそびえる山のふもとから頂上にかけて展開する悪地形であつたが、黒いマサペー地質のところもあつて米もよくできたという。

コーヒーはなつていた。しかし、すごい山坂の、慣れない仕事に移民たちのコーヒー採取量は少なかった。それにイタリア人の総監督というのが、イタリア移民にはなりのいい畑をわたし、日本移民にはなりの少ないところをわたしという不平が日本移民のあいだにおこつた。これは通訳もみとめるところとなつて、日本人と総監督のあいだに感情のもつれができた。これを利用して総監督追放を策謀したのは、ジャタイー農場の売店主であつ

た。売店（ベンダ、あるいはアルマゼン）は農場主の縁者にあたるものが経営していたのであるが、農場側の資金によるものであって、いわば農場側のコロノに対する間接的な搾取機関のようなものであった。

ことのはじまりは、日本移民たちがなんでも高く売りつける農場の売店よりも、隣接農場の売店のほうがずっと安いので、現金のあるものは農場の売店でものを買わないようになったことであつた。移民たちは収入が少ないうえに農場の売店で高い品物を買っていると、結局は農場に対して借金がふえていくことにあわてだしたからである。隣接農場の売店はイタリア人総監督の縁者にあたるものが経営していた。日本移民が他の農場へ買物に行くのを快く思わなかった売店主は、総監督追放によって日本移民がふたたび自分の店へ買物にくるように計画したのであつた。そこで、売店主はいかにも日本人の肩をもつような態度をとって総監督の欠点をあばきたて、日本人と総監督のあいだの不和をあおりたてた。これは農場主の感情を害するものとなり、「監督不行届き」のことで総監督は免職になってしまった。ところが、こうなつては日本人コロノたちは、おめおめと隣の農場へ買物にでかけるわけにいかなくなつてしまった。ばかをみたのは日本移民たちであつた。

さきにも記したように、ジャタイー農場は非常に地形

の悪いところであつた。だからコロノたちのうけもちコーヒー樹がほかの農場より少なかったのである。

たとえば、一家族三人の日本移民コロノに対して三千本から四千本くらいの割合でコーヒー樹の手入れを請負わせた。これ以上請負わせれば山坂の石ころだらけの畑では仕事がおくれるばかりだからであつた。仕事の分量が少なれば収入も少なくなるわけだ。請負い賃は一千本につき年九〇ミル・レイスで、一年間の賃金はコーヒー採取賃以外、二七〇から三六〇ミルということになる。

これを月割り払い（月給）にすると三千本のものは二二ミル・レイスを受け取るのであつた。おそろしい低賃金である。

移民たちは六か月目には九〇ミル（多いものは三〇〇ミル）以上の借金ができてしまったのである。しかも借金がふえていくわけは、農場の売店で高い掛買いをしているからでもあつた。

収入が少なく、負債がふえていく移民たちにとって、たった一つの希望がのこっていた。それは外作（余作ともいう）地からとれる食糧品であつた。これさえとれれば、もうアルマゼンから高い掛買いをしなくてもすむ、という予想であつた。

外作にあてられたコーヒー園外の低地は土地もよく作

物もみごとに成長した。これは日曜、祭日など、ブラジル人やイタリア移民たちから変な目で見られながらも汗水ながして育てあげたものであった。すでに収穫の予想もできるほど作物は成長していた。もみは各家族に十俵（袋）ずつくらいとれるにちがいない。その米作地が一夜のうちに農場の牛にすっかり食いあらされてしまったのである。移民たちはこの惨状を見て、通訳をとおして予想量の半分くらいは農場のほうで弁償してもらいたいと申し込んだのであった。ところがこんなことをすなおに聞き入れる農場主ではなかった。

「日本移民各家族につき白米半俵ずつ供給する。それ以外の交渉はいっさいうけつけない」というのである。各自もみ十俵の予想が白米半俵だけになってしまったのである。移民たちは、ただ泣き寝入りであった。

こうして、ついに、どんなに働いてもものこるものは借金と決まった時、移民のなかには罰金を支払っても退出するものがでてきた。大野通訳も、これでは世話のしがいもなし、と農場にみきりをつけて辞職し、退去してしまったのである。そのあとに、通訳兼監督として乗りこんだのが香山六郎であった。

このころ移民たちの気持ちは非常に動揺していた。すでに「退耕」者の出たあとである。ぜひともわれわれもほかの農場へ移してもらうように運動しようではないかと

いいだす者があって、これに共鳴するものも多かった。むろんなんとかなるだろうという現状維持を主張するものもいた。要するに移民たちは二派にわかれてしまったのである。とにかく丸くおさめる使命をおびていた香山は、農場主と相談のうえ、扇動者と見られていた三家族を追放することによって動揺は一時静まったのであった。

日本移民に負債ができて、現金がもてなくなれば、今度は農場の売店で買うようになる。それは農場の利益ということにもなる。そこで農場側では売店と組んでもつと徹底したコロノ搾取を考えついた。

一月末の賃金支払い日、農場の売店では、その月の賃金全部を移民負債の一部として売店に渡さなければ、これから品物を供給しないと移民たちに通告してきたのである。通訳はこれを移民一同に告げ、その承諾をえて賃金の全部を農場主から直接売店のほうへ支払わせることにした。ところがその翌日、売店のほうでは「今後日本移民に対しては、現金でなければ物を売らない」とことわってきたのであった。これでは食わずに働けというのに等しい。現金をとりあげてしまって、現金でなければ売らないとは、なんという非人道的な仕打ちであろう。ここにいたって、移民たちは一刻も早く農場を脱出するより生きる道がなくなったのである（注③）。

もう一つアルマゼン主がコロノをだました話がある

(注々)。

コロノたちの新フェイジョンがとれたとき、売店は一俵二八ミルで買い取ることを日本移民に約束した。ところがいざ豆をとどけて現金を受け取ろうとすると、「あれは借金のかたである」とやられてしまった。これには日本人コロノ全部がひっかった。このことがあってから、コロノたちは隣の農場の売店へ豆を売るようになった。隣の農場では、さきに当農場を追放された総監督が先頭に立って「こちらでは三二ミルの現金買いだ」とふれてきたのであった。

ジャタイー農場の豆は隣の農場へ運ばれ、日本人コロノたちには現金がはいってきた。こうなると日本人は現金をもったから逃亡するにちがいないという噂がたちはじめた。

ちようどこのころ、グアタパラー農場の平野総監督が友人香山を訪問したことがあった。農場側では、「そうらみたことか、移民引きだしだ!」ときめてしまった。

カツパンガたちの夜回りが始まった。

移民たちには不愉快きわまる日々がつづいた。それは暑い二月の末の夕暮れのことだったという。移民の一人が半裸の姿でわが家の前に涼んでいたおり、道路修繕に出た帰りのカマラーダ(人夫)の一组二十人ほどが通りかかった。彼らはエンシャーダ(鋏)、フォイセ(長い柄の鉋

鎌）、鉄砲などをかついでいた。彼らは半裸の日本人を見て、おどけてフオイセをふりあげ、切りかかる真似をした。くだんの日本人は、これをざれごととは解せず、びっくり仰天「キヤーツ」と悲鳴をあげたという（こんなところに、ブラジル人労働者の気心を解しない日本移民の悲しさがあつた）。小心なこの男は、怒気心頭に発し、「殺すなら、殺せ！」と家の軒下にあつた梶棒をとりあげて対抗の氣勢を示した。カマラーダの一行には笑いが消え青くなって、それぞれ手にした道具をふりかざして身がまえた。事情を知らずに悲鳴をきいてかけつけた近隣の日本人は、カマラーダたちに向かって大声でどなりだした。おそらく日本語で罵倒したことであつたろう。

この騒然たる光景を、遠くはなれた農場主邸宅からながめていた老主人は、これまた大声をはりあげて近所の人々をよび集め、二、三十人が一団となり、両手に短銃をもった農場主を先頭に現場へおしかけた。香山通訳は大手をひろげてその前にたちはだかり、「くだらないことですよ（コイザ・アトーア）、みんなおひきとりなさい！」

と叫んだ。ピストルを香山通訳に擬した農場主は、くると背を向けると、

「コイザ・アトーア」

とカマラーダたちにさけんで、全員退去を命じた。

香山の言葉で日本人たちもみんな家にひっこんだ。

（この話は二通りあって、ある一人が夜中に用便に起きたところを武装した黒人夜警につかまったのがもとである、と「発展史」は『移民調査報告書第九』をもとにして書いているが、私はこのとき現地にあった香山の「四十年史」をもとにして書いた）

短い喜劇的一幕は終わった。しかし、すでにこの農場に嫌気のさしていた日本人は、これを機会に、もう一日も働かない、とつむじをまげてしまったのである。こうなると農場側は

「日本人のろくでなし（デズゲラッサード）めが！」ということになり、すっかり誇りを傷つけられてしまった。雨はふる、草はのびる。コーヒー樹の葉が黄ばみ出すのがわかるようだ。

「もし働かなければ、サン・シモン市からソルダード（州警兵）をよび、圧制的に服務させる。それでも働かないというなら監獄へたたきこむばかりだ」と農場主はいきりたったという。

香山はこの情勢悪化により、移民会社の上塚代理人を電報で招き寄せ、善後案を講じたが効き目がなかった。そこで、リオの公使館へ応援を求めたのであるが、電文を読み違えて、上塚をよべ、という返事だった。

かくて上塚と香山は、農場主・アルマゼン主と協議のうえ、移民の負債は全部移民会社が責任をもつて後日清算することにきめ、ジャタイー農場からの移民総引揚げが決定したのであった。

このとき上塚は「こうした非人道的な農場に日本移民を入れることはできない」と語ったという。移民たちは、それぞれ自費でサンパウロ市にもどった。一九一一年三月二日のことであつた。

この事件は日本政府へも伝えられ、一時は移民輸送が中絶したほどであつた。

ここにも、気候、食物、生活様式、ブラジル人の気心などに慣れない移民の苦心と失敗がみられるが、この時代の農場側では、労働者がどうしたら安心して働けるかということとは考えず、ただ安く働かせ、彼らからしぼり取ることばかりを考えていたらしく、この点は、やはり奴隷使用時代からの対労働者観が、これらの農場に強く残っていたことを証明するものだろう。のちに「賃金奴隷」という言葉が生まれたが、まったく、ただ賃金を支払ったというだけにすぎない奴隷だったのである。

つぎに記述するサンタ・マリアおよびサンタンナ両農場の「紛擾」は当時の代理公使藤田敏郎がサンパウロ州の日本移民在住の各農場を巡回したときの報告であつて、両農場ともに、前大統領ロドリゲス・アルベスの所有

であつた。

サンタ・マリア農場

「この農場にはいった日本移民のコロニア（住居区域）はラゴア村といって、イタリア移民といっしよで、イタリア人監督（人夫頭）の指揮下にあつた。

この監督はイタリア人に肩をもつ傾向が強く、日本移民に対しては、しばしば公平を欠くところがあつた。本年一月末、ついにある事件を惹起し、農場の支配人および移民たちから公使館に出張を申し出るようになったのである。

日本移民側のいうところによると――、除草、大掃除および日雇賃金支払いに関する誤算や不明瞭な点が少なくなかったので、ある日、各家長十一名がつれだつて監督の家をたずね、垣根ごしに談話し、明確な答弁を得ようと迫つたものであつた。

ところが、そのとき突然蝶雨がきたので、監督は屋内へ走りこんだ。日本移民はベランダのほうにあがって、なお、本日確答がえられるかどうかをたずねたところ、監督は屋内から急調子のラツパ（ブジーナ）をふきだした。

まえもつて相談ができていたものかどうか、このとき、

イタリア人数十人が、手に手に梶棒やフォイセやピストル、小銃などをもってかけつけてきた。そして、もし日本移民が監督に対して暴力的反抗にでるようなことがあったら、ただちに攻撃しようとする態勢を示したのである。(略)

監督のいうところをきくと――

日本移民は不従順で、そのうえ、自分に対して暴行を加えようとする兆候があったので、自己防衛のために部下を召集して日本移民の攻撃に備えただけであった、というのである。(略)

この監督は、もとイタリア移民であって、多年農場に労働し、コーヒー栽培の経験はもっていたが、無学文盲であって、言語・風俗を同じくする同国人には有利な田畑(コロノの食糧生産地)を貸し与え、そのうえらくな仕事にまわし、また多数のコーヒー樹をうけもたせ、請負い賃なども多額な支払いをなし、コロノの物品運搬などは自国人を先にし、少数の日太人のものはあとまわしにするなど、不公平なしわざがおおかった。

これは下等社会にまぬがれない通弊であつたろうが、日本人はこうしたことにはすこぶる鋭敏な感覚をもっているのです、一時は万事だという考えから、疑いの目をもってすべてを観察するふうがあつた。また、多数結合して自己の意思を遂行しようとする癖もあつた。

この農場の支配人は、同監督のえこひいきのあるコロノの扱い方に気がついてはいたが、監督にまかせてあるささいなことに、いちいち干渉するわけにもいかず、いままで見すごしてきたようであった」

以上が藤田代理公使の報告内容である。

この事件をどう処理したか、筆者が引用した本のなかには記してないが、当時のファゼンダ事情からおして、いかにもありそうな事件であった。言葉ができて監督にへつらうことの上手なコロノと、風俗・習慣がちがい、言葉の通じない日本移民とが雑居した場合、よほど監督の人物がしっかりしていないかぎり、おこりがらなことであつたろう。しかも、武器をもった人夫をラツパをふいて召集するなど、たとえそれが自衛のためとはいえ、日本人の感覚からすれば、想像を絶した暴挙であつたが、当時のファゼンダでは、とくにとりあげて問題にすべきものではなかったようである。こうした点は、初期移民たちに、ブラジル生活に対して強い幻滅感を与えるものであつた。

サントナ農場

「この農場に働いていた日本移民は愛媛県人三家族の十三人であつて、一九一〇年の七月に到着した第二回移民

の人たちである。

はじめは六家族であったが、そのなかの広島県人三家族は、ここでは収支がそぐわないという口実で、ついにサンパウロ市方面へ一逃亡してしまった。

残った三家族は、勤勉・温順で、農場支配人や監督にもかわいがられていたので、その方面では安心していられたと報告書には記してあるが、生活は苦しかった。

「ところで、農場側が彼らに貸与している外作地の面積は、一家族に対して五反歩なので、とうもろこしの収穫はわずかに七、八俵にすぎず、その売価は七、八〇ミルである。またコーヒー園間作には、一家族につきコーヒー二千本を許すだけであったが（むろんできばえはよくなかったであろう）、一家族の食料にも不十分であった。だから移民の収入はコーヒー採取とコーヒー樹の手入れ賃、および除草請負い賃にかぎられていた。（略）

こういう事情だったので、私（小官）は総支配人に対して、外作地の面積を増加してやることはできないものか、と相談したところ、同支配人のいうには「本農場には、これ以上貸与する面積がない……（略）」云々といい、「この地方は一带に健康地で病気は少なく、日本人中では九歳の小児が腎臓炎で死亡しただけであった」とむしろ自慢げにつけ加えるのであった。

ところが（移民たちの語るところによると）、病人が発病すると医師は一回の診察料一〇ミルを請求したので、移民たちはその高値にびっくりしてしまった。そして、もし自分たちが他日病気になったら、莫大な費用がかかるにらがないという不安におそわれたのであった（注5）」

ブラジルでは医師の往診料の高いことは驚くほどで、たいがい一レグア（五キロメートルないし七キロメートル）の距離であれば二五ミル、二レグアあれば六〇ミル、三レグアあれば一〇〇ミルという風である。ということは、もし町まで農場から一五〜二〇キロメートルもあるとしたら、コロノ一家族の月給の三倍、すなわち、三か月分の給料を支払わねばならないことになるのである。移民たちは重患におちいたり、病気が長引く場合は非常な困難にみまわれるのである。

一面順調にいつているかに見えたファゼンダにも、こうした不安が移民たちの心を動揺させていたのである。

ここでは「発展史」が移民紛擾の地として、このサンタナ農場をあげていることの直接原因についてはなにも記していないが、「みな耕主の冷酷なる圧制に基く」とあるところからみると、すでに三家族の逃亡者をみたあとの移民たちも、もし同農場で、より有利な待遇がえられないならば「転耕」の道を講じてくれるよう公使館に

訴えていたものと想像される。

第二回移民の成績とその後の移民輸送

すでに記したように、第二回移民の成績は第一回移民に比して「数段の落ち着きぶり」ではあったが、まだまだ「試験移民の域を出ていない」状態であることが確認された。しかし、ジャタイー農場のような場合は、移民の定着性だけを云々してすませるものではなかった。

サンパウロ州への日本移民の導入は、もともとコーヒ―農場主たちの意志によるものであったし、彼らはサンパウロ州の政治を左右する有力者であったから、彼らの要求を除外して移民を入れることはできなかった。だから、ジャタイー農場やサンタ・マリア、サンタンナ両農場などを例外としてかたづけ、こうした農場には、ふたたび日本移民は入れないという方針をとることはむずかしかった。領事館や移民会社は、移民を入れる農場をもっと選択すべきだと在留民たちから抗議されたこともあったが、「移民は入りたいが、いい農場だけに入れるわけにもいかない」と弁解せざるをえない苦しい立場にたたされていたのである。

しかし家族構成の問題などは、かなり改善されて、移民導入に対して前回よりは明るい見通しがつくように

なったのは事実であった。

このとき、竹村殖民商館以外の移民会社も進出してくるのである。

竹村の名による第一回（ブラジル日本移民としては第二回）移民輸送後、新たに東洋移民会社が、政府と契約をむすんで、移民事業にたずさわるのである。東洋は、かつてプリード・ジョルドン商会と移民輸送を契約しながら、途中で中止になった過去をもつ会社であった。

こうして、日本移民は農場労働者として定着性がないという理由で、第一回の補助金が打ち切られる一九一四（大正三）年まで、輸送回数十回、一万四千八百八十六名の移民を両会社はブラジルへ送りこんだのである。

（ちなみに、これ以後の移民輸送については次章「移民とはどういうものか」を参照されたい）

注

- (1)『伯刺西爾年鑑』後編、「移植民史」八ページによる。
- (2)『日本人発展史』上巻、三〇五ページ。原文は文語体。
- (3)同上、二九三ページによる。
- (4)『移民四十年史』七八ページにでている話である。
- (5) 藤田代理公使の報告文は田中誠之助著『邦人活躍のブラジル』一七一―一七二ページから引用したもので

あるが、読みやすくするために現代文に書き替えた。

8. 移民とはどういうものか

―日本の近代化の下積みとなった農民たち

「金のなる木をさがして旅立つ亡者ども（注一）」と評された初期の出稼ぎ移民たちが、はるばる地球の裏側まで出かけてきたのは、郷里ではまともに食べていける見込みのない貧農たち、あるいは、すでに郷里を出て、都会にほそぼそと暮らしていた農村出の貧民たちの、更生への希望によるものであった（注二）。

しかし、こうした農村や都市の貧民たちの移住が、ついには国家の事業としておしすすめられるようになるのは、日本国内に移住振興を必要とした社会的・経済的理由があつたからである。

アンドウ・ゼンパチは「移民とは何か」ということについて、世界史的な立場から「近代移民の社会的性格（注三）」を明らかにしている。出てくる移民（注四）の個人的理由や希望はさまざまであるが、移民ということが世界的な現象としてあらわれるのは、そこに時代の社会的・客観的条件がそなわっていたからであると説明する。

封建制度から資本主義へ移る過程では、それまで古い

型にはまっていた農民の社会へ、商品・貨幣経済が波及して、いろいろな影響を及ぼす。あるものは土地を失い、あるものは仕事にあふれ、それまでの社会構造がくずれだすと、出稼ぎにでるものや、都市に新しい職をもとめて郷里をはなれるものがふえてくる。しかも、一国の工業の発展が不充分で、農村出の労働者を吸収しきれないときは、農村に家族を残したまま出稼ぎにいかねければなくなる。こういうものが外国にできれば、当然、出稼ぎ型の移民になる。

さらに、都会にでて小商売や手工業的な職人になっても、産業革命後の技術による資本家的生産がすすんでくると、いい品物が安く販売されるようになって、人手だよりの小生産者は経営難に陥るし、もし生産過剰などによる恐慌（パニック）にみまわれると、ひとたまりもなく潰れてしまう。

こういうふうに都市の工場生産が進歩するにしたがって、せつかく農村から都市へ出て新しい生活をはじめたものも希望を失う。そこで彼らもまた新天地へ移住して、一儲けしたいと考えるようになるのである。

こういうわけで、移民が多数海外に出かけるようになるには、近代社会の発展過程で、いろいろな無理がおこり、失業者を生み出すからである。しかも、一万「新世界」では、広大な新開地を擁する農業企業家たちが、奴

隷制度を失ってから、どうしても賃金労働者を国外から迎え入れなければ、生産が成り立たない時代になっていたのである。しかも砂糖、綿、コーヒーなどは、新世界の産物として、旧世界の工業と生活にどんどん需要先を見いだし、その産業を発展させる力ともなるのであった。両者は相まって近代資本主義経済を発展させた。日本は民衆生活の安定を図るために海外に移民を出さねばならない。新世界では、移民を受け入れることによって事業の発展を求めた。こういうような世界の大勢であつたればこそ、多数の移民は新大陸へ移住したのだという意味のことをアンドウは述べている。

ここでは、ブラジルに渡った日本移民は、日本のどんな時代に出てきたか、また、どういう理由で増減したのかということ述べなければならない。

むろん、ブラジルのような遠いところへ出稼ぎにくるためには、ブラジル政府か日本政府の渡航補助がなければならぬが、補助すべき必要がなければ、補助はしなかつたろう。また、多量の移民を送るには、これを世話する移民会社や、その支持者となる政治家たちもいなければならない。

私はアンドウの理論的な移民史のあとを受けて、それをブラジル移民に関して具体的に叙述するはずであつたが、「生活の歴史」の全体からみて、この部分が、あまり

に冗漫になることを避け、ここではごく簡単に述べることにする。日本の近代史、とくに農業における資本主義については、省略せざるをえない。

日本の近代化は、先進国から開港をせまられて以来、支配層によって「早急に」「人為的に」おしすすめられた事情もあって、それまで主として国庫をささえていた農民の負担は大きかった。

一八八五（明治十八）年、ハワイ政府と日本政府のあいだに結ばれた契約によって「官約移民」とよばれる出稼ぎ移民がハワイへ出かけたころは、明治政府が財政窮迫を救うために発行した不換紙幣の整理（一八八二―一八八五年）の時代で、デフレのために米価暴落、租税をおきめきれずに所有地の強制処分にあう農民が多数あらわれている。

また、皇国殖民会社によってブラジル移民が実現した一九〇八（明治四十一）年は、日露戦後二年目におそった経済恐慌のため失業者続出で労働問題があらわれている。

また戦時課税で苦しんだ農村では、小中地主の没落と大地主への土地の集中がみられ、困窮した農民たちのあいだに小作争議がもちあがって「戦前に見ざる農民運動が萌芽しはじめた」時だったのである。

この間の事情は、皇国殖民会社社長水野龍の『南米渡航案内』からもいくらかうかがい知ることができる。すなわち、

「昨年日露戦争がたけなわになったとき、凱旋軍人の中には、一時多数の失業者がでるであろうことを予想し、

これを南米移民の先鋒として、日本移民導入の手がかりとすることは時機を得たものであるにちがいないと信じ、一驚の意見書をしたため、政府や民間の先輩の意見をもとめたところ、これに賛成しないものはなかった（注5）」

とあるのがそれである。

しかも、当時出稼ぎ地であったハワイは、一八九八年北米に合併されてからのち、移民は禁止され、北米も一九〇七年十二月の日米紳士協約によって、ほとんど禁止同様な制限をうけていたのであった。

だから、ブラジルへの日本移民導入契約の成立は、「わが八方塞がりの農村と海外発展に千万石の清風を吹き送ったもので、わが海外発展史中、画期的事件の一つである」と『発展史』の筆者は特記したのであった。

ところがそのブラジルでは、イタリア移民が本国政府によって一九〇二年から禁止になっていたときであったために、「試験的に」日本移民を導入することになったの

であつた。だが日本移民にとって、ブラジルの事情は出稼ぎ地としての予想を裏切るものであつた。彼らは契約を無視して移動した。かくて、ブラジル側からは、定着性のない移民として非難の声があがり、一九一四（大正三）年には、補助金打切りの宣言を受けた。移民輸送十回、一万四千八百八十六人を導入したときのことであつた。ちなみに、第一回の移民輸送で資金の欠乏に陥り移民輸送の能力を失つた皇国殖民会社は、竹村殖民商館に身売りし、第二回からは竹村の名で送られた。さらにこれに東洋移民会社が加わつて、両会社が移民輸送にあつたのであつた。

当時日本の社会情勢は、一九二二（明治四十五）年七月三十日に明治から大正に改元されたが、これは別に歴史の方向が変わつたことを意味しない。ひきつづいて政府は戦時公債や軍事費の整理にいそがしく、国民が負わされた戦時課税は恒久税となつて続き、経済界の不況は慢性化して民衆の生活難が深まり、ストライキも続出する有様であつた。

さらに一九一四（大正三）年に第一次大戦がはじまると、ヨーロッパ向けの輸出産業が中絶状態に陥る。ここに繭の値段がさがつたことは農村の生活をいっそう苦しくした。

一方ブラジルでは、戦争がはじまるとヨーロッパ移民

はまた来なくなつた。そこで日本の移民会社は、ふたたび移民導入運動を開始した。今度は、当時サンパウロ州政府から毎年移民一万人の誘入特権を与えられていたアンツーネス・ドス・サントス会社に交渉して、日本移民を入れてもらうことにしたのである。同会社に与えられた特権「国籍の如何を問わず」というのが幸いしたのであつた。

補助金は以前は十二歳以上一〇ポンドだったのが、今度は九ポンドになっていた。そして、そのなかから一ポンドをアンツーネス・ドス・サントス会社へ支払うことになった。期限は四か年で、毎年四千以上五千人までを輸送することであつた。補助の金額に対しては、ヨーロッパから移民がはいらなかつたことを幸いとして、輸送後期には、アンツーネス・ドス・サントス会社や州政府に頼んで、一二ポンドに増やしてもらい、さらに一七ポンドまで出してもらうようになった。

だが、ヨーロッパに平和がきて、イタリア、ポルトガル、スペインから移民がはいるようになると、一九二一（大正十）年、また補助金打切りを申し渡されてしまったのである。理由は、定着性のない移民に補助金を出しては費用がかさむばかりだから、定着性のある南欧移民を補助するはうがいいというのである。いろいろ交渉の結果、その後一九二二（大正十一）年度に六百人ほどの

渡航費補助はえたが、日本移民に対する州政府の補助はこれで打ち切られることになってしまった。

かくて、一九二三年から関東大震災催災者救済の意味で、日本政府が一人二百円あての渡航補助を出したのがきっかけとなり、一九二四年からは全額支給が一般化され、やがて「国策移民」なるものが出現するのであった。この期間における日本の事情は、ヨーロッパ大戦への参加で、「中立国の経済的利益と参戦国の政治的利益とを合わせ有することができた」といわれたほど、日本資本主義は東洋市場に独占的威力をふるうまでになった。

戦後ブームで都会の一部は成金連中でにぎわった。

だが、資本主義経済の発展にともなって、農産物の消費人口が増えたわりに、農業生産はこれに並行して発展しなかった。資金は都市へ流れていた。

また、戦争のために外米の輸入が減ったうえに、一九一五（大正四）年からは内地米が輸出されだして米価沸騰がはじまる。そうすると、米穀商人の投機的な買占めなども手伝って、米価はうなぎのぼりに上がりだす。有名な米騒動は、一九一八（大正七）年七月二十二日、富山県下の一漁村の女房たちの井戸端会議からはじまった。「このままでは餓死する、米を安くしてくれ」とさけんで暴動をおこしたのが始まりで、十日あまりで暴動はほとんど全国に波及した。ちょうどこのとき、シベリア

出兵がはじまったが、民衆は、為政者のいう国家の一大事よりも、このままでは「自分たちはどうなるのか？」とさけんで立ちあがったのであった。

このとき検挙されたもの二万五千、起訴されたもの七百余、第一審で懲役十年以上の刑を宣告されたもの七十一名に達し、最後の判決で死刑を宣告されたものが二人も出たといわれている。

この事件は、組織だった革命運動でも暴動でもなかった。食えなくなった民衆が突然騒ぎだしたものであった。こうした社会状態のもとで、

「わが農村および都市労働者乃至サラリーマン階級中には、進んで新しき運命を海外にひらかんとする者が相ついで現れ、一九一七、一八、一九、の三年間は、ブラジル移民といわず、北米、ハワイ、カナダ方面に進出するものが、毎年六万人以上をかぞえ、わが海外発展史上稀有の黄金時代を現出した」

と「発展史」は述べている。

二回目のサンパウロ州政府の補助金打切りののち、今度日本政府の出費によって移民が送られることになるのであるが、一九二三年以後の日本の社会情勢は、すでに戦争景気は一朝の夢と化して外国貿易は衰退して恐慌におそわれた。「ほうはいたる失業者の続出と生活問題の深刻とは、国内的救助万策のみをもっては容易に解決

しうるところではなかった（注の）」そこで、移民事業は、政府の積極的奨励助長の方針に助けられ、一九二三年からいろいろな名目で政府の補助が与えられるようになる。また一九二三年の関東大震災は当時の不況をさらに深めた。

この時代の社会的・政治的事情を端的に物語るものは、一九二五（大正十四）年三月二十九日の第五十議会において普選法が成立する十日前に、民衆の急激な動きをおさえるために「治安維持法」を可決していることである。

さらに、一九二七（昭和二）年には、またもや恐慌にみまわれたが、この恐慌をとおして、日本の産業はほとんど大資本の傘下に統一されていった。そして、民衆の力がまだ政府を動かすまでにいたらなかった当時は、八時間労働制が守られていなかったばかりか、婦人労働者の夜業も行なわれた。

このころ中国では民族革命がさかんになり、その闘争の過程では、中国に侵略的地歩を築いていた帝国主義的勢力に矛先を向けられ、日本商品のボイコットや在留民に対する圧迫などがあらわれた。

この運動は日本の勢力圏にあった満洲にも波及した。このとき日本のとった「実力外交」の政策は、山東省への出兵によって、蒋介石のひきいる北伐軍と衝突し、済南事件を生むことになる。この事件後、日本政府が協議決

定した「対支政策綱領」

には、早くも日本の満洲支配を意図するものが隠されていた。

かくて、日本の大陸進出の一步手前までできていたのである。

やがて一九二九年十月二十四日、ニューヨークの株式暴落にはじまる大恐慌が全世界的なものとなり、日本の経済界も混乱状態におちいる。生糸の輸出不振、農村の豊作飢饉、都市失業者の帰農による農村生活の窮迫など、恐慌の影響は悲惨をきわめた。

こうして、一九二七年の恐慌から三〇年まで年間一万余の移民をブラジルに送り、三一年度は、前年のジェツーリオ革命と、この年の満洲事変が影響して半減するが、三三―三四年には二万をこえた空前絶後の盛況をみるに至ったのである。

しかし、一九三三（昭和八）年十一月のブラジル憲法制定議会では、いわゆる二分制限案がとおって、過去五十年間に入国した外国移民の二分だけに一年間の入国がゆるされることになり、日本人に対するわりあては、二千八百四十九人であった。

この新憲法規定は「現地における邦人はもとより、移民関係官民をして非常に落胆せしめたものであるが」、日本で「大陸進出が国民の最大関心事たるに至ったこと

は、ブラジル政府の移民制限と相まって、ブラジル移住熱を根底より冷却せしめ、一般国民はほとんどブラジル移民の必要を忘却せるかの如き状態を呈するに至った」と「発展史」は記している。

それでも一九三五年にはすでに二分制限が実施されていたにもかかわらず、前年許可された分が残っていたとの理由で制限数を上まわり、一九三六年度も、また支那（日華）事変のおこった一九三七年度も制限数をこえているが、だんだん減少し

て一九三八年には制限数以下となってしまうた。そして、一九三九（昭和十四）年には入国許可数の半数以下となり、四〇年にはやや盛り返し気味であったが、四一年にはふたたび減少し、ついにとだえてしまったのであった。

このとき、ブラジルの農業の生産状態は、すでに大量の移民を必要としなくなっていたし、日本では軍部指導のもとに、アジア大陸へ開拓民を送るようになっていた。

ここでもし、筆者が日本を中心とする移民史をあむ立場にあつたら、当然、筆をアジア大陸へ向けたかもしれない。

だが「日の丸」を先頭にした移民は、すでに近代移民の性格をはずれるものといえる。第二次世界大戦の終結とともに日本資本主義の夢みたアジア共栄圏はついに成らず、そのために利用された移民も、また、惨憺たる結果

にみまわれたのであった（注ㄱ）。

注

（一）『バウル―管内の邦人』後編、三十四ページ。

（二）だが極貧のものは、国策移民時代の後期まで、ブラジル 移民になれなかった。初期移民は、一人に約百五十円しかかったが、当時の沖縄移民の語るところによると、小学校の代用教員の月給は、四〇五円であった。第一次大戦ころは一人三百円くらいかかった。小学校教師の月給が十五〇二十円時代である。

（三）サンパウロ人文科学研究所発行“レポート”（一九六六年）。

（四）ブラジル在住の移民の立場から述べているので「出てくる移民」となる。

（五）読みやすいように現代文に書きなおした。

（六）『日本人発展史』上巻、五五ページ。

（七）角田房子著『墓標なき八万の死者』

（その他の参考書）『毎日新聞社』『世界の歴史―日本―一九四九年。大内力著『ファシズムへの道』中央公論社、一九六七年。今井清一著『大正デモクラシー』中央公論社、一九六七年）

9 ファゼンダ生活の一農年

（一九一二〜一九二二年）

これから叙述しようとするファゼンダ生活なるものは、一九一二年から一九二二年ころまでの約十年間のコロノの生活を総合したものである。一九二〇年代になると、すでにコーヒー農場で金をためて帰国しようとする考えは、コロノたちの頭から消えかかっていた。そして彼らの将来には、三つの方向が示されるようになっていた。

第一次大戦前は植民地といっても、まだイグアツペ（一九一三年「桂」に初入植）は評判にのぼっていなかったから、むしろ、三角ミナスからリオ・グランデ沿岸の米作が、移民たちにとって「金のなる木」の見える方向となった。間もなくイグアツペ植民地が噂にのぼる。そして一九一五年以後は「セルトン・デ・ノロエステ」とイグアツペが比較されるようになる。しかし、セルトン（奥地）という言葉は、まだまだ暗黒の蛮地を想像させた。

コロノたちは、ファゼンダの不自由な生活のなかで、ファゼンダ生活が続けようか米作へいこうか、それとも荒山へ飛びこもうかといろいろ迷っていた時代であった。

ここでは、当時彼らが営んでいたファゼンダの生活とはどんなものか、コロノたちのファゼンダにおける一農

年の生活をえがいてみよう。

農年の切れ目 ―出るもの、入るもの

九月の末から十一月のはじめにかけて、コーヒー園家族労働者（コロノ）の移動がある。農年の切れ目であり、サンパウロ州は春である。コロニア（コロノ住居区域）には、出ていくもの、はいつてくるものの馬車（カローツサ）や牛車（カーロ・デ・ボーイ）が姿を見せはじめる。ムダンサ（移転）の光景が見られるのである。

車には寝台、テーブル、バンコ（腰かけ）、箱詰めの鍋・釜・食器類、日本移民なら柳行李に信玄袋など。もし汽車の旅でなかったら、豚や鶏、場合によっては、山羊もつれてくる。豚は木の格子のついた檻に入れ、鶏は足や羽根をしばって荷物のあいだに載せる。山羊は子供に引かせてやってくる。

馬車や牛車は、まるでがらくたの山が動いているようだ。「オー、ムーラ・セン・ベルゴーニヤ、バーモ！（注「」

とカロセイロ（馬車ひき）がどなる。ピシーツと皮の鞭が鳴る。遠くから、牛車が高らかに軸をきしませながら近づいてくる。

日本人新移民がはいってくるときは、縄や細びきでか

らげた荷物だけであるが、すでにどこかの農場で一農年をつとめたものは、できるだけ物を持ちこもうとする。近いところからの移転者であれば、板でも棒ぐいでも運んでくる。豚小屋、鳥小屋、さてはとうもろこしの貯蔵所（パイオール）などもつくらなければならない。自分で探して自由に契約するのであるから、すべてが計画的だ。また農場のほうでも、いろいろ条件を出して優遇する。外作地も充分もらうことに決めてやってくる。豚や鶏の飼料としてとうもろこしももってくるので、ムダンサ（引越し）は馬車一台ではすまない。

もし評判のいい農場であれば、前年から腰をすえている日本人コロノのいるところへ、新たに新旧の移民たちがはいってくることになる。

コロニアがにぎやかになる。

「わしらはモジアナの石やまで、一年苦労しましたばい」と旧移民が言えば、「西も東もわからん新米でさあ、よろしくおねげえします」と新移民があいさつする。

ファゼンダでは、たいがい日本人を一まとめにして、おたがいが便利なように近いところの家にに入れてくれる。裏のほうに共同で菜園もつくれるだろう。むろん、コロニアの人間が、一斉にかわるのではないから、ブラジル人やヨーロッパ移民と一つ棟に住むこともある。

経験者と一緒に暮らせることは、新移民にとって、あ

らゆる点で便利だ。場合によっては通訳より気がねがないし、こまごましたことも教えてもらえる。旧移民のいる農場へはいる新移民たちは、はじめの二、三日は彼らのところに泊めてもらえるし、食事も世話になれる。日本人のいないところに初めてはいる不便は感じないですむ。

ここでは、新移民を中心に話をすすめよう。

どこのファゼンダへはいつても、コロノはまず、最初の四、五日は、寝台その他の家具づくり、ときには鳥小屋やパイオール、豚小屋（シケイロ）などもつくらなければならぬ。しかし新移民の場合、彼らは家畜をもっていないから、寝台と腰かけを最初につくる。コロニアの家がどんなものであるかは、第一回移民「入耕」のところで述べた。ここは二家族一棟のレンガづくりの家だとしておこう。となりにはブラジル人コロノが住んでいる。

コルシヨン作り

さて、ここで旧移民から学ばねばならないことは、ブラジル式寝台をつくることである。まず必要なものは敷きぶとん（コルシヨン）である。ブラジルでは、夜になって冷えることがあるから、夜具の用意はぜひ必要だ。むろ

ん多くの新移民は、寝台よりも高い板の床をつくって、この上に日本からもってきたござをひろげ、ふとんを敷く。だが皆が皆、ふとんを持ってきていているわけではない。コルションが必要だ。ファゼンダの売店（ベンダ）で既製のものを売っていることもあるが、たいがい家でこしらえる。

まず、前からいるコロノからとうもろこしを馬車一台買いこむ。これはあとで豚や鶏の飼料になる。値段は三〇ミル・レイスクらいだ。もし金がなければファゼンダのパイオールへもらいにいけばいい。とうもろこしをむいて、皮だけもらってくるのだから、むこうは喜んで、自由におもちくださいというところだ。労賃なしでとうもろこしの皮をむいてもらうのだから、都合がいい。帰りには二、三本実のついたものをもらってきても文句を言うものはいない（ピツホーカ（はぜとうもろこし）をつくって子供たちのおやつにする）。皮をむくところを監視するような、けちくさい農場もなかったろう。

皮をもつて帰ったら、これを二センチくらいの幅に細く裂き、皮のつけ根のかたいところはとり去る。コルション一つ作るのに、皮（パーリヤ）二、三俵はある。むろんコルションの大ききにもよるが。

コルションの「がわ」は、そまつな木綿、場合によっては、売店からメリケン粉の空き袋を買ってきてもいい。

とにかく、寝台よりもかなり大き目なふとんの皮をつくって、その真ん中を六、七〇センチほどの穴にしておく。それは、そこだけを縫いつけずにあけておく、といったふうな穴であるが、なかほどはひもで結べるようにしておく。このなかへとうもろこしの皮をぎっしり詰めこんでひもを結ぶ。そして自分で寝てみて具合のいい程度にする。あたたかくて気持ちのいいものだ。だが、すぐペチャンコになるから、さきにあけてある穴へ、できれば毎晩手をさしこんで、なかの皮（パリーヤ）をごそごそかきまわして、ふくらませねばならない。もし寝台が板でなく、細い木をならべたジラウ（棒の棚）式のものであったら、寝るとき体でうまいぐあいに工夫する。こうして寝台のデコボコを感じないようにするのだ。夜になると、となりの部屋からもガサガサとコルシヨンの調子をととのえる音が聞こえてくる。

はじめの食べ物

寝台や敷きぶとん（コルシヨン）を作ると同時に、はやく自分で食物を煮たきしななければならない。はじめは、ブラジル米のアグーリヤで日本式のご飯をたく（かまどの説明も第一回移民のところでした）。水加減がむずかしい。むしろ、たっぷり水を入れる。おかずは干鰯を焼く。ま

だ塩だしをしないから、いやにしよっぱい。干し肉は匂いがきつくて口に合わないと言って、あまり食べたがらない。また、あれこれ食べていたら金がかかるので、なるべく買わないようにするのである。

日本人は干し肉よりも千鰯のほうが工夫がしやすい。旧移民に教えられてブラジル式油飯もたいてみる。脂と塩がはいっているので、おかずがいらない。だが油臭くててすぐ嫌になる。となりのブラジル人のご飯づくりをのぞいてみた。まず米を洗ってよく水を切っておく。

鍋には、豚の脂身（トウシーニヨ）の一切れか、あるいは白くかたまった脂（バーニヤ）を一さじ入れて煮たてる。これにきざんだんにくを入れ、ちよつとこがしてから米を入れていためるのであるが、はじめはどうもにんにくをつかう気がしない。そのあとへブラジル人は湯をつぎこむのだ。なるほど、はじめに油を煮たてて米をいりつければ、いくらか匂いがなくなる。しかしにんにくもその代用品としての玉ねぎもつかわずに、豚の脂の匂いを消すことは無理であった。日本人には、やっぱり白いご飯がいちばんいいというものが断然多かった。

とにかく、ブラジルに米があったということは、なにより力強いことだった。おかずの料理などは、収入とにらみあわせて、徐々に工夫するだろう。

コーヒーをいれる

さて、コーヒーであるが、これはどうする。本場のブラジルへ来るまで、初期移民たちはコーヒーを知らなかった。日本では飲んだことがなかったのである。移民たちがファゼンダには行って、コーヒーが上手にいれられるまでに、半年以上かかったのである。コーヒーというものものの味がわかってくると、そのいれ方も、だんだん難しくなっていく。生（なま）のコーヒーからはじめるからである。ファゼンダでは、たいてい生のコーヒーをコロノたちにくれた。これは、ふぞろいの豆、小さいのや割れてかけらになったもの、黒い皮や小石の粒などのまざった商品にならないやつだ。これをテーブルの上にならべて、まず、ものになるコーヒーと、その他のものをよりわけろ。それからこれを鉄鍋（カッサローラ）で気長に煎（い）るのであるが、一挙に炭のようにこがしてしまっではいけない。表側だけが黒くなってなかが煎れていないこともある。豆を割ってみて、中がかなり赤黒くなったころ、火からおろして大きなふるい（ペネイラ）かなにかにひろげ、すばやくさます。もしそのままにしておいたら、まっ黒な炭になってしまうからだ。そのころ新移民などは、まだ長い鉄棒のなかほどに丸い鉄の容器のついた焙煎機（トラドル）などは持ってい

ない。鉄鍋に手製のヘラか、あるいは木のさじ（コンシヤ・デ・パウ）でかきまぜながら煎るのである。しかし、その鉄鍋さえ持たないものは、日本から持ってきたフライパンを利用した。煎りすぎたり、煎り足りなかったりするものがまざって、とかく煎り方にむらができる。上手に煎れるまでは、やはり年月がかかるのである。

豆が煎りあがり、すっかりさめてから、臼についてふるいにかけて、粉にする。二回、三回についてはふるいにかけて、こまかい粉にする。こうして、カフェー・ド・ピロン（臼づきのコーヒーの粉）ができるわけだ。これを熱湯に入れ、さつとまぜ、コアドールという三角袋で漉（こ）すのであるが、はじめはたいがい、袋に粉を入れ、その上から熱湯をそそぐ。むろん湯と粉との分量は、好みに従ってだんだん変えていく。

最後に砂糖であるが、今日のような精白したものはなかった。コロノが買うのは、黒砂糖である。マスカーボといって、まっ黒な塊のはいつているやつ。

ときにはこぶし大にかたまったものもまざっているから、たたき割って使う。砂糖きびの繊維が残っていることもある。

味はラパズーラ（レンガのようにかためた粗糖）にも似ているが、もっと、じりつと甘い。まったくの粗糖である。酸味のあるものもあった。むろんそのままコーヒー

に入れて飲むわけにはいかないから、はじめ湯とともにとかしておいて、コーヒーの粉といっしょに漉すのである。たいがい甘ったるいコーヒーができあがる。これを、カネーカというエナメル塗りの茶碗で飲む。うすいコーヒーだから何杯飲んでもかまわない。ファゼンダにはいっても、新移民ばかりのところでは、こんなコーヒーも飲めなかったのである。旧移民のいる農場であれば、すぐ女たちが習えたのであるが、ブラジル人のなかだけであれば、言葉がわからないから、彼らのやることを、見よう見まねで、だんだん会得していくのであった。

しかし、楽しみのないファゼンダ生活で、お茶も飲めないのであるから、なんとかしてコーヒーは工夫する。けれども日本人は、朝コーヒーだけで仕事に出ることができない。なにかものを食べる。お茶はないから（マテ茶はまだファゼンダに普及していなかった）、湯漬けをかつこんで出かける。日に三度四度、米の飯の食事をとる。

米では高くつきすぎるといふ経済的理由から、とうもろこしの粉や、マンジョカの粉を利用するようになる。だんごをつくって油であげて、朝のコーヒーのときに食べる。しかしこれも、かならずしも経済的でないと思えば、宵のうちにさつまいもやマンジョカをふかしておいて、

それを食べる（あれを考えると、いまでもゲップが出てきそうだと述懐する旧移民がいる）。あとでは、ファリーニャ・デ・ミリーヨといって、とうもろこしの上等な粉をコーヒーとまぜて食べることもおぼえた。

朝仕事に出るときは、この甘ったるいうすいコーヒーをビンにつめたり、やかんに入れたりして畑へもっていくのである。

ファゼンダの洗濯と薪取り

女たちには洗濯という大切な仕事が残っている。

男たちには薪とりだ。豚小屋や鳥小屋は、いずれ仕事はじまってからの日曜の仕事としよう。

移民は日本式のたらいなどあまり持ってきていないから、洗濯用具としては、バケツと小さな金だらいがあるだけだ。石けんはいくらか日本から持ってきているがブラジルのもののほうがずっと実用的であることにすぐ男がつく。

「ブラジル人はよく洗濯するね」

「真っ白にさらしてしまふんだよ。そのうえ板にたたきつけて洗う。あれでは、さぞ布がいたむでしょう」

「洗濯と食べものづくりで一日過ごすんだから、のんきなものよね。洗濯場ときたら、女たちの楽しいおしゃべ

り場所」

などと批判しながら、男と同じ時間畑の仕事をし、そのうえ炊事や洗濯もする日本移民の女たちは、ブラジル女の洗濯風景をうらやましそうに眺める。水タンクの近くとか、谷間の小川のほとりだ。石油の空缶を火にかけて、洗濯物をシャボン水でたいているから、遠くからでも白い煙が見える。それに、芝生いっぱい布をさらしているので、あたり一面真っ白だ。パタン、パタンと板に洗濯ものをたたきつける音がする。谷間にこだまするような大きな声で歌っているものもある。

日本移民の女たちは、さっさと洗って、ゆすいで干してしまう。だが、ブラジル式洗濯法は、まもなく彼女たちのまねするところとなる。石けんをつけて芝生にさらし、洗うときには洗濯板にたたきつける。案外仕事が早くてきれいになるのだ。

しかし、ブラジル人のように白いものが多くないから、そうなのにもかからず必要がない。

薪取りもだんだん要領がわかってくる。いちいち出かけていかなくとも、仕事の帰りに、丸太一本でも、コーヒー園や藪（カツポエイラ）から拾ってくれはいい。ときには家族のものが毎日少しずついでくる。それをゆつくり処理するのだ。土曜の午後一週間分の薪（レーニャ）をまとめて、かまどの下か横のほうに積んでおくの

もいい考えだ。そうしなくとも、割れやすい木をおぼえて、それを軒下にたてかけておくだけでもいい。少しくらい雨にぬれても、斧で割ったものは、けっこう燃える。となりの黒人はいつもそうしているようだ。

鋤の柄のすげ方、

その他野良仕事に必要なもの

いよいよ月曜から仕事が始まるとすれば、いまはコーヒー採取期ではないから、コーヒー園の草取りからはじめねばならない。新移民たちは、たいがい採取期をめぐってブラジルに着くように日本を出てくるので、最初の日は、コーヒーの摘みとりを習うのが普通であるが、いま、ブラジル一般の習慣に従って農年のはじめにコーヒー農場へはいるとすれば、仕事は除草からということになる。一人一千五百から二千本が一年間の受け持ちコーヒーとしていいところである。もし旧移民だったら、なるべく少なく受け持って、余作地を多くもらおうとするだろう。そのほうが受け持ちのコーヒー園は、いつもきれいになっていて農場側のうけもいいし、月割り支払いのメザーダなどをあてにしていたら、もうからないということを、すでに身にしみて感じているからだ。コーヒーの摘み賃も、ときの運で、はじめからあてにはでき

ない。とにかくブラジルは低賃金の国であるし、ことに農村では賃金だけで金をためようとしても無理である。いや、だれにきいても、どんないい農場にはいつても、最初の一年はもうけのないものとされている。新移民は、はじめから無理をやり、無理で苦しむのである。渡航費を高利で借り、送金をあてにして出稼ぎに来るところではなかったのである。

金もうけの話は、またあとでゆつくりするとして、仕事をはじめするためには、まず道具をそろえなければならぬ。そして一番先に覚えなければならぬのは、エンシャーダ（鋤）の柄のすげ方だ。あまり森林を持たない農場では、柄は売店で買うが、森林の多い農場では、山から適当なものをえらんでくる。握りいい太さのものを選り、生のうちに皮をはいで日かげに干しておくのだ。ときには乾くと縦に割れ目がはいる木もある。

これは仕事するとき手のひらを痛める。だから木の種類を覚えなければならぬ。柄の長さは、だいたい人間の背の丈くらいでいい。仕事場の様子によって、柄のすげ方やその長さも多少変わる。はじめはブラジル人や旧移民から、柄をもらうなり買うなりしてすげる。また経験のないものは、監督か先住移民にすげてもらって、そのやり方をよく見て覚えるのである。

鋤は半円形で背のところに柄をすげる穴が出っぱって

っている。柄の元のほうをこの穴にしっかり上げるのであるが、五十度くらいの角度でおさまらなければならない。仕事場が坂であって、下から上へ草をとっていくような場合は、六十度くらいあってもいい。また草の種類によっては、柄をそんなに長くしないほうが使いやすいのだ。鍬を傾斜させるためには、上げるとき柄の先をちよつと雁首になるように細工する。そして真ん中に割れ目を入れてくさびをさしこむ。くさびははげしくたたいても、割れたり折れたりしない丈夫なものでなければならぬ。さうとう長めにつくって一方を薄く削る。

さて、雁首を鍬の穴につっこんで、これを地上によこたえ、鍬の刃は上向きにする。そして片足で柄をおさえつけ、斧の背で、立ったままの姿勢でくさびを打ちこむのである。この作業には土の上が便利だ。鍬の頭が土にめりこんで、ぐらぐらしないから仕事がしやすい。くさびの打ちこみ方が弱いと鍬は使いものにならない。そして、くさびを打ちこむ際に、とかく鍬の傾斜の具合がくるいがちであるから、一度ぐらぐらしない程度に打ちこんでから、傾斜の程度を試してみなければならぬ。立って両足をふんばりながら、あまり腰をまげずに仕事ができるようにつくる。傾斜の具合で草の切れ方がちがう。あまり深く鍬が土にめりこまないため、また、傾斜しすぎて腰をかがめなければ草の根が切れないようでも

仕事がしんどい。このくらいでよしというところで、うんと打ちこむ。そして、くさびの余ったところをのこぎりで切ってしまう。たいがいくさびは、柄の背中のほうにつきぬけるから、両端を切り取ることになる。

鍬（エンシャーダ）は、除草期で一番たいせつな道具だ。武士なら、さしあたり刀である。だから自分が使うものは自分で整えて大切に使う。使ったあとはすっかり泥をおとし、また洗う。場合によっては鍬の頭を水にひたしてくさびがゆるまないようにしておく。いい柄を上げるのが男たちの自慢になる。いい武器をもった誇りである。

エンシャーダは形もいろいろあり、大きさもちがう。

コーヒー園除草用という型のものが、いま必要なのである。三番、二番半、二番などと、番号によって大きさがきめてある。三番は男用、二番半は女用、二番は、まあ少年用だともいえるが、大きい鍬だからといって仕事はかどるわけでもない。小さくて軽いもの、たとえば二番半あたりが、はじめはかえって使いやすい。ただし、減ってくる小さくなる。英国製のものがよかった。

エンシャーダを使うには、いつもやすりを携帯しなければならぬ。やすりは幅二センチ半くらい、長さは二〇センチほどである。これをいつも腰にさしているのだ。このやすりの使い方にも、やはり熟練がいる。しゃがん

で、膝で上向きの鍬を柄のところでおさえてかける。

右の膝、左の膝ととり替えながら、鍬の刃を右から、あるいは左からやすりにかける。だれにでもくせがあつて、鍬の左方だけを使い減らすもの、右方だけを使うもの、いろいろある。これを左右両方とも平均して減らすものは、鍬の使い方が上手だということになる。

ときによると、もう一つ道具がいる。これは粘土地帯で雨後の仕事するとき、鍬にねぼりついた土をおとす道具であつて、普通古いさじの丸いところを半分切り取つて、へらのように平にたたきあげる。また、さじの柄のところはかぎ型にまげて、帯革にさしこめるようにする。むろん、紐でつっているものもある。ただし、砂地ではこの必要がない。鍬に土がたまつたときは、そこらにある木の株（トツコ）かなにかに、こつんとたたきつけければ、いっぺんにきれいになる。

仕事に出るには、水が必要だ。水入れには、コロツテ（樽）と、ガラフオン（大瓶）がある。コロツテは長さ五〇センチくらいの小さい樽だ。横にしておく。なかほどに小さい口があり、ここから水を入れ、また、ここに口をつけて水を飲む。すぐそのわきに半円のつかみ手がついて、手にさげるなり、鍬の柄におして肩にかつぐなりして持ち運ぶことができる。ガラフオンは五リットル入りのガラス瓶であるが、籐（ビーメ）あみのおお

いがしてある。これも、持ち歩きに便利なようにちゃんと把手がついている。栓はコルクもつかうがよく失うので、とうもろこしの芯（サブーゴ）をもちいる。サブーゴは、ファゼンダでは、樽やガラフオンの栓、水道の栓などすべてコルクの代用品である。コーヒー園へ持つていくと、コロツテやガラフオンはコーヒー樹の下や大木の切株のかげにおく。日にあたって水がなまぬるくならないためだ。

便所のこと

便所のことにもふれておく。第一回移民のところで、豚を放し飼いにするマンゲイロンという囲いのあることを書いた。ここは普通の牧場とあまり変わらない広い場所で、たいがいコロニアから数十メートルはなれている。しかし、かならずしもマンゲイロンがコロノたちの便所になるとはかぎらない。家の裏のうが牧場であったり、ただの藪であったり、あるいは果樹園であったりすれば、そこを利用する。だがどこへいっても、たいがい豚が待ちうけていることに変わりがない。とにかく、人目につかないものかげで、豚の襲撃を避けるのが大変だった。

棒をもって出かけることもあった。

だから用便の習慣は、仕事に出てから、コーヒー園やカッポエイラ（荒地・藪・休耕地）を選ぶようにもなる。鋤をかついでいれば、どんなところでも、あとがきれいさっぱりである。ただ、夜がいちばんやつかいである。日本人は便器をつかうことを知らなかったのである。

ブラジル人は決して人目のつくところで立ち小便をしない。これは便器を使うからそうなのではなく、かならず、なにかのものがけを利用するからである。もしあたりになにもなかった場合は、象徴的なものでもいい、なにかに近づいて、それをかくれ場に仮定する。男がそうである以上、女は絶対にかがむかつこうなど人に発見されるようなことをしない。どうにもならないときは、ちよつと立ちどまるだけである。

仕事はじめ ― 出勤風景

いよいよコーヒー園の仕事ははじめだ。

ファゼンダ生活は、鐘（シーノ）が時計がわりであつて、本部に近い乾燥場か、あるいはコロニアの入口の監督の家の前か、どちらかにある。高い柱の上にぶらさがっている半鐘だ。一番鐘は午前四時になる。これが起床の鐘であるが、どこの農場も一定しているわけではないし、冬（コーヒー採取期）と夏（除草期）では一時間くら

いの差をつけることもある。出勤は夜があけてからで、六時の鐘だ。監督がコロニアの一角に立って角笛（ブジーナ）をならすこともある。いまは除草期だから採取期のように時間をやかましくいわない。請負い仕事になっているからである。しかし、いまでも鐘は、いろいろな合い図にかならず鳴る。昼食（アルモッソ）は、九時または十時だ。コーヒーだけを飲んで仕事に出るコロノには九時の鐘がアルモッソであり、二時の鐘が昼休みのカフェーである。五時か六時ころジャンタールといって食事をすることもある。それから日没に仕事じまいの鐘がなる。畑では監督がブジーナをならす。しかし除草期はやはりゆつくりだ。女たちは早めに家に帰って夕飯の支度をするし、子供のあるものは畑に出なくとも文句は言わない。

朝の六時、出勤の鐘または監督のブジーナがなると、みなぞろぞろ家を出る。エンシャードをかつぎ、コロツテをもった連中が、コロニアの前の道を通って牧場に出る。そして四、五〇〇メートルもいくと、コーヒー園へ出る門（ポルテイラ）へさしかかる。重い木を枠組にした戸をおしあけて通る。遠くからでもこのポルテイラの閉まる音が、バターンとひびきわたるほどだ。むろん、まだファゼンダの運搬は牛馬時代であって、トラックは動いていなかったから、マッタ・ブーロはなかった。こ

れは門のかわりに堀を掘って、その上に鉄道の枕木のようなものをならべて、車や人間は通れるが家畜は通れない、という仕掛けであって、マッタ・ブーロとはラバ殺しという意味である。

牧場の道をポルテイラのほうへ歩いていくコロノたちの姿を見ると、男たちは裸足のものもあるが、深ゴムの労働靴、サパトンをはいているものもある。そして、古いソフトかパーリヤ（椰子の葉）の帽子をかぶっている。上着などは着る必要がない。寒い朝や小雨のふるときは、ジュートの袋を背にかけていく。女たちも裸足でなければ、男と同じ労働靴だ。しかしあの当時は、裸足が断然多かった。すその長いスカートをはいて、頭にはレンソといって風呂敷のような四角な布をかぶっている。赤いレンソを日本人は娘を象徴するものと思っていた。みな鍬（エンシャーダ）をかつぎ、女たちは前後にふり分けにした木綿袋に、弁当やコーヒーの包みを入れて肩にかけていく。九時近くになると主婦が子供を「腰に抱いて」、あずき色のエナメルびきの鍋のまま昼飯を運んでいく姿も見られる。日本移民は、弁当箱かなにかを袋に入れてかついでいく。まだ鍋のままをぶらさけていく習慣をもたないのである。

新移民の姿はすぐわかる。歩き方が違うばかりでなく、男女の洋装は、たいがい遠くからは灰色になって見

える。真っ白もなく赤いものもない。女たちは日本着の布をブラジルのベスチードになおしている。男は鳥打ちなどをかぶっていく。また、腰に手ぬぐいをぶらさげているし、巻きゲートルに地下足袋姿もある。女はレンソのかわりに手ぬぐいをかぶっている。レンソを用いるのは、そのなかにまじった旧移民だ。旧移民の男は、ブラジル式に手ぬぐいかレンソを首に巻いている。地下足袋のかわりにサバトンをはく。だが、体つき、歩き方は相変わらず日本的だ。女の人は弁当を両手にさけ、とかくうつむきかげんに歩く。もし赤ん坊がいるとすれば、どうしても日本式におんぶする。ブラジル人のようには抱けないのである。ブラジル人の子供は、まったくの赤ん坊は別として、歩きだすころになると、母親の腰に横っちよから両足でまたがるようにして抱かれる（おそらくこれはカボクラ式というのだろう）。そのうえ、ものは頭にのつけるので、いつも右手だけはなにか持てる。日本人の女が子供を抱いたら、これができないのである。「みつともないよ、日本人は猿みたいに子供をおんぶすると言って毛唐が笑うから」といわれても、働く婦人はどうしようもないのだった。

日本移民の女性は、あとからゆっくり弁当を運ぶなどということはない。夜のうちに用意し、夜明けに起きて煮たきし、朝は男たちと一緒に畑に出るのだ。男たち

もそれがあたりまえだと思っていた。

除草の仕事を習う

除草の仕事も、ただ口で説明してもらっただけでは、なかなか納得できない。実際の仕事ぶりをみて、それをまねし、また自分がやっている仕事を批評してもらってこそ、だんだん本物になる。旧移民に教えられることもあるが、通訳や監督も指南役をつとめる。

「まず姿勢が大切ですよ。あまり腰を曲げないように、鍬は地面とやや平行に引っぱるようにすべらせる。

サク、サクと二回ほど草をなぎたおし、調子をつけて、ぐっと手前へ引く。すると四〇センチなり五〇センチなりの長さに带状で鍬がすべり、草がとれる。それを順々にくりかえし、片っぱしからきれいにしていく。もし手前に残った草があつたり、または土をかぶって草の根の切り株がかくれてしまうと、一雨ふったらこんなはずはなかったと思うほど、残った草の根から芽が出る。だから一応手前に引いた草は、鍬で軽くはねとばし、草にあまり泥がついていないようにしておく。さあ、ためしてごらん」

というわけだ。そこでコロノが自分でやってみる。それを指南者が横からながめる。

「そんなヘツピリ腰では、すぐ疲れてしもうて。そうそう、そんな格好。そのへんのところを握れば鍬は軽くなる」

そして、また説明する。

「こういう赤土、テーラ・ローシヤはな、雨がふると土がベタついてくるから、仕事の要領は全然ちがってくる。そのときは、鍬をこきざみに動かして、なるべく草の根に土をつけんようにしておく。大きな草の株は、鍬のはしで、ひよいとひっくりかえしておきますんじや」

「それから、ハハア……右から左へ削っていくだけじやいかん。だいたい鍬の左側だけが減ってしもう。左から右へも使いますんじや。まあ、ときどきまわってきますから、また注意します……」

というようなわけで、こんな指南図は半時間も続かない。とにかくやってみることだ。なれない仕事なので、必要以上に体を動かすから、汗が全身を流れだす。冬の収穫期とちがって、日はやけつくように照っている。どんなにつめてやろうとしても、十分とつづかない。鍬を杖にして、汗をふきながら一休みする。休んではやり、また休んでは腰をのばす。とにかく、体を慣らすということが一番大切なのだが、がんばりすぎてやけくそになるというのが新移民の常だ。気長に仕事をやり、自然に無念無想―無感覚状態で、サク、サクと鍬を動かすよう

になるまでは、やはり二、三か月にかかるのである。体が慣れ、仕事がはかどるようになれば、冗談を言ったり、歌をうたったりして、一家がそろって楽に働けるようになる。

しかし、日本から来てファゼンダへはいったばかりには、生活の上でなんの見通しもないのであるから、一休みするたびに、あれやこれやと思ひまどう。

「こんな仕事で体がもつだろうか。いつごろ食糧生産の仕事ができるだろうか。豚や鶏は飼っていいものか。どうして飼育場をつくるか。野菜はどうする?」「そうだ、もっと大切なことを忘れていた。子供の学校のことを、とんと考えておかなかった」

遠いセーデ（あるいはファゼンダともいう）のほうから、かすかに鐘の音がきこえてくる。やがてそれにこたえるように監督のブジーナが鳴り響く。昼めしの時間、午前九時である。となりの畑の人たちも、コーヒーの木影に入ったらしい。

コロノの受け持ちコーヒー樹は一千本、二千本と各所にわかれている。これは仕事のしやすいところ、間作のできるところが、皆に平均してゆきわたるためでもあるし、また、監督にとっては、どこのだれの仕事かはかどっているか、あるいは遅れているか、よくわかるからでもある。

コーヒー園の食事

コーヒー園の食事は、ピクニックの弁当ではない。すでに冷たくなったアグーリヤ米のご飯を、瀬戸びきの深皿に盛り、これにコロツテの水をかけ、焼いた干鰯の一片をかじりながら、大きなスープさじで胃袋へ流しこむのである。日本人だから漬物の一片もほしいと思う。まだそれすらないのだ。たとい形式的な構成家族にしてもブラジル移民には女性がまじっていた。そこで、なんとかならないものかと、野菜の工夫談がはじまる。

「旧移民の詰によると、なんでも、マモン（パイヤ）の青いやつを切りひらいて、一日、日に干して漬物にする」と、けっこう食えるというじゃないか。それからなア、その辺にひとり生えの西瓜があるじやろう。あいつをもつて帰って、トウシーニョ（豚の脂身）で炒めて汁にするとうまいそうだよ」

「やってみるよ。それから、近いうちにこうじをつくつてフェイジョン豆で味噌をたてることになっている。旧移民の話によると、大豆がなくても味噌ができると言っている」

そんなわけで、新移民たちは、いかにしてブラジル料理を習うかというよりも、日本食の代用品をみつけだす

かに苦心するのだ。マモンの漬物、ピツコン（春菊のような味のある菊科の雑草）のおしたし、まだ醤油もかつおぶしもないのだが。

しゃべりながら、男も女も着物についた草の実をとりおける。主にピツコンとカラピーショだ。ピツコンは、あのおしたしにする草の、その実であるが、まつ黒で、無数のトゲがつたつたようになる。すわったりしやがんだりして着物が肌にふれるとチクリチクリと棘がささるように痛い。カラピーショは稲科の草で、小さなコンペイトウのような実であるが、それが着物に着くとなかなかとれにくいのである。女のスカートなどは、もつれたままになってしまう。

ブラジル人は着物に草の実がつくと、これを腰にさした小刀（ファツカ）でこそぎおとす。草の実をとっている、いつのまにか時間がたってしまう。ほぼ一時間。

ブジーナがなってまた仕事である。

コロツテの水を飲み、汗を流しながら、いまはとにかく平穩無事に、一日をコーヒー園で過ごすというのが、なによりの期待になる。一日がいやに長いのである。二時のコーヒー、四時ごろの一休み（このときもなにか食べる）、冷たくなってただの砂糖水のようなコーヒーでも疲れた体にはうまい。まるで水でも飲むようにガブガブ飲む。

たばこ一服

コロノたちは紙巻きなど吸えない。そんなものは、売店で売っていたかどうか。とにかく、だれも吸っていなかったことだけは事実だ。縄たばこかきざみを買って、自分でたばこを巻く。はじめは、なかなか縄たばこは上手くきざめないし強すぎてすえない。自然きざみということになる。小さな紙箱にはいったきざみを紙巻き専用の薄い紙で巻いて吸うのだ。マツチなど使わない。

一箱一〇〇レイスであったが、それも儉約して火打ち石を使う。ブラジル人もヨーロッパ移民も皆そうだったのである。いまのようなライターなどない時代だ。小さな真鍮の筒のなかに綿を入れ、その表面をこがしておく。これに火打ち石をあて、古いやすりのかけらで火花を打ちこむ。筒の中へ飛び込んだ火花から綿へ火がつくと、フーッと息を吹きかけて火をひろげる。これに自製の巻きタバコの一端をさしこんで吸い付けるのである。筒は一方の底のほうで、指でおせば中身の綿をおしあげられるようにできている。そして、それに鎖がついていて蓋につながっている。この蓋をしめて持ち歩くのだ。たいがいこのイスケイロ（ほくち入れ）を持ち歩くために、日本人は小さな袋（きんちやくみtainなもの）をつくり、

これを腰にさげる。むろん、ブラジル人は直接ズボンのポケットにしまう。

乾燥場（トレイロ）に働く日雇人夫（カマラーダ）でも、このたばこをこしらえ、一服するまでは、監督も文句を言わないことになっていた。

彼らは、悠々と縄たばこを

ポケットから出して、これをナイフできざみ、手のひらでもみほぐし、耳にはさんだとうもろこしの殻を適当な長さに切り、なめて塩りをつけ、ナイフでこそぎ、巻きたばこに巻いて火をつける。一度では上手くつくことはないから、火打ち石を二、三回打って、やっと火をつける。そして、やれやれという顔つきで一服うまそうにする。こみ、空に向かって煙をはき、ピツと齒のすき間から赤黒いつばを横っちょにはきとばす。二、三回すえば火が消えるので、吸いかけのタバコはそのまま耳のあいだにはさみ、さて、と、また仕事にかかる。この間十分でも十五分でも、つつ立ったままである。

こうしてブラジルの仕事は、なるべく無理をしないように、のろくさとやる。むろん、だれも見えていなければ、ただ、ぼんやり立っているわけだが、監督という人間が、たえず監視している。日本移民には、なかなかこの要領がわからない。わかって、そんなことはあまり意味がないと言えるかもしれない。コロノたちにとっては、仕

事の分量が直接自分たちの生活に影響するように思われるからだ。しかし、ブラジルの気候や生活様式に慣れないものが、あせって無理をしたら、かならず体にこたえる。

カルマ・ノ・ブラジール（ブラジルではあせってもしうがない）的に、ものの考え方が変わってこないと生活の要額もわからないのである。

ものの考え方、これはブラジル式に言えばメンタリダーデということになる。一刻もはやく金をもうけたい、いや、儲けなければならぬ義務があると思う。この出稼ぎ気分で将来をながめてみると、どうしても駆けだしたくなる。息が続くか続かないかなど考えている暇がない。あたりの人間のやることは、ただ、のろくさく見えてしかたがないのである。

帰宅（プラ・カーザ）

除草期には、女たちは夕方一時間くらいはやく家に帰って夕食の支度をする。帰途は、たきつけにコーヒーの枯枝でも拾ってくる。男たちは日没まで働いて、帰りには丸太の一本もかっいでくる。コーヒー園には、まだどこかに、腐り残った木がころがっていたものである。エンシャーダの柄をつつかえ棒にして丸太をかつぎ、テ

クテクと小走りに家路をたどるコロノの姿が見られた。家にたどりつくくと、皆ガツクリと疲れを感じる。手のひらは、まめだらけだ。指の元のほうは、みな水ぶくれになっている。また、風呂などはないから、ひとまず顔や手を洗って、男は一杯やりたいと思う。だが、一リットル一ミル以内で買えるピング（火酒）も、のどを焼くように強い。どうにかならないものかと考える。とにかく、酒にでも酔わないことには気がおさまらない。そのうち、かならずかかあ文句が出るに決まっているが、いまさら、わかりきったような愚痴が、しらふで聞けるものかと思う。

ピングを水に薄めてみる。あるいは場を入れ、のちには少し砂糖をまぜて、いわゆるケントン式にしてみる（むろんケントンホットなどを作ろうと意識してはいない）。

薄めれば飲めるのである。弁当の残りの干鰯でもかじりながら、二、三杯やるうちに酔いがまわってくる。頭がボーッとしてくると、よけいなことを考えないですむ。夕飯には青い西瓜の塩汁でも、熱いやつを飲めば、なにか、ゆったりした気持ちになる。

夕飯がすむと、カンテラの光にお互いの顔をうつしだしながら、ボソボソとこれからの仕事の計画などを語り合う。土曜の午後から日曜日にかけて、菜園でもつくつ

たり、また、外作地の仕事もはやくはじめないと蒔きつけ時を失う。旧移民や監督さんにいろいろ相談しなければならぬ。

あれこれ考え、話し合っていると、女たちは食事のあとかたづけもする気がしなくなる。夜暗いところを水汲みにいくのは真っ平だ。わずかに残った炊事場の水で、尼だけ洗って寢床に入ろうとする。洗い終わった家族の一人が、「どうも足の指さきがむずかゆくて困る」と言う。すると、「実はおれもそうなんだ」と、他のものも言いだす。卓上のカンテラをバンコ（腰かけ）におろし、そこへ足をもっていく。

ビツシヨ・デ・ペー（砂蚤）

足の指さきのかゆいところを調べてみる。はじめはどこかよくわからない。手の爪さきで押してみると、すぐ痛がゆい一点につきあたる。ここだな、と思ってよくながめてみると、小さなトゲでもささっているように、爪の下がわにポツンと赤黒いものが見える。それが、いやにかゆいのだ。つばをつけてよくながめてみると、皮膚の下は米粒大に真っ白くなっている。なんだ、これがビツシヨなのかとみんなびっくりする。むろんビツシヨ・デ・ペーの話はきいていた。掘ったあとは、カンテラの

石油をつけておけばいいとも教えられていた。しかし、はじめは、なかなかうまく掘れないのである。針で突っついていくうちに、ビッショの袋がやぶれて、白い無数の卵がとびだしてくる。これは一つ一つ爪でつぶしておかなければならないのであるが、なかなかいっぺんには出てこない。しかも皮下に袋が残ると、かゆみはいつまでもつづくし、一回、二回といじりまわすと、ときには化膿する。このビッショ（ここでは虫という意味）は小さな蚤の一種で、爪や指のあいだにはいる。とくに爪の裏側が一番くいこみやすいようだ。食いついたら、なかなかはなれない。頭をぐんぐん皮膚のなかに突っこんで、お尻だけを出している。はいつたばかりのときに針の先でとれば一番いいのであるが、はじめは気がつかないでいる。そのうち蚤はお腹をふくらませ、卵を育てだす。いやにむずがゆくなるのはそのときだ。

ビッショ掘りも経験がいる。要領がわかってくると、まず、あまり先の鋭くない針かナイフの先で、充分大きく穴をあける。そして、米粒大のビッショを、袋のままスポッと引きぬくのである。そのあとを石油で消毒しておけば、一晩で穴はふさがる。はじめは、おっかなびっくり小さい穴をあけて、とんがった針で突つつくから袋が敗れてしまうのである。

古い移民たちは、ときどき負けおしみの苦労話をする。

「ファゼンダへはいつたときの楽しみは、夜、ビッシヨを掘ることだった」と。数年、十数年もたつて、生活が安定してくると、ブラジル生活の苦勞も、なにか誇らしい思い出になるにちがいない。しかし、新移民にとつても、あるいは、まだ一、二年先輩の旧移民にとつても、ビッシヨはやっかいなものの一つである。せつかく今晚はゆつくり休もうと思つても、これだけは明日に延ばすわけにいかない。不精して掘らないでよくと、あとでたいへんだ。その人の体質によつては、かならずといつていいくらい化膿して苦しむのである。靴をはくからいけないのだ、という説もあるが、裸足だからはいらないということもない。犬などは、口でかんでとり出すだけだから、人間のようになんて手当てはできない。ファゼンダには、よくびっこをひいている犬がいる。ビッシヨに足をいためつけられたのである。ビッシヨの予防として、床や土間にクレオリンをとかした水をまく。それでも、なかなか減ってくれない。普通の蚤より始末が悪い。

夜の九時になると鐘がなる。就寝の合い図だ。しかしカンテラの明かりでは、本も読めないし、べつに読む本もないのであるから、はやく床につく。コロニアの夜はシンとして静かだ。たまに犬が二、三匹で突然吠えたてる声がする。人家の近くに牛馬が寄つて来たためである。

コロニアのまわりは、たいがい牧場になっている。

土曜日

ファゼンダでは、土曜日は普通午前中だけの労働であるが、午後二時のカフェー時間から休みになるところもある。

午後は家のまわりの掃除、薪割り、豚小屋の修理、自家消費のための豚殺し、パン焼き、外作地の仕事などである。

前年からひきつづいて働いているコロノたちは、これらの仕事のなにかをする。ここでは日本人新移民のために、マンゲイロンの近くに小さな菜園をつくることを考えてみよう。ただし、沖縄県人は旧移民たちとともに豚小屋づくりのほうをいそいでいる。

菜園も豚小屋も、似たような手がかかる。なぜなら、野菜を日本人のように要求しないブラジル人やヨーロッパ移民は、鶏や豚をコロニアに放し飼いにしているからである。野菜を家の近くにつくろうとすれば、どうしてもそれらの家畜・家禽がはいらないようなものにしなければならぬ。もともとマンゲイロンは豚の飼育場であって、コロノたちは、そのなかに自分の豚小屋（シケイロ）をつくって、えさのとうもろこしをやる時には、

チョーウ、チョーウとどなってそこへ呼び込み、また、エンゴールダといって去勢した豚を特別肥らせる場合にも、このシケイロに入れておいて、充分えさをやるのである。しかし、子豚などは、どこへでも放しっぱなしである。農場によると、マンゲイロンなどは、あってもなきがごとく、また、実際ないところもあつて、豚はコロニアをいい遊び場として横行している。だから日本人は菜園づくりに苦勞する。だいたい、そんなものをつくろうとするのは、日本移民の要求によるもので、ブラジル人コロノたちの習慣にはないものであつた。だから、ブラジル人がどんなふうにつくっているか参考にするものがない。

まず柱を立てて、これに有刺鉄線「(アラメ・ファルパード)」を二段、三段にはりめぐらすことで牛馬はふせげる。しかし豚はそうはいかない。あの鼻を突つこまないように、木の柵でかこわなければならない。近くにカツポエイラ(藪・荒地)があれば、柵にする木くらいはとつてこられるとしても、小さな場所をかこうためにも、一日や二日はたっぷりかかる。こういうわけで、はじめの計画よりも、半分か三分の一の大きさにしてしまふ。できるだけコーヒー園や外作地のほうに、さや豆や大根を植える。家の近くの菜園には、細ねぎや二十日大根とか、とにかく、まめに手入れしなければならないもの、あるい

は、仕事から帰って、女の人たちがすぐ汁の実にできるようなものを植える。

コーヒー園では、ときには草に負けることがあり、外作地は、たいがい前に作物をつくって荒らしたところであるから、菓切り蟻（タウーバ）がいなくてもかぎらない。

せつかくできたものを、一夜のうちに全部蟻にかつがれてしまうかもしれないのだ。

移民たちは、だれでも日本から野菜の種子ものをもってきている。なるべくはやく、それらの種子を土におろしてみたいと思う。だから土曜の午後などは、菜園づくりに努力するのである。しかし、まだブラジルの生活、ことにコロニアの様子がはつきりしないので、この柵はそれほど長持ちしない。たいがい豚か鶏がはいって野菜を食い荒らす。マンゲイロン式のがんじょうな柵を作ることを考えつかないし、その材料を集めるひまも技術もないからである。

とにかく、日本移民はまず野菜をつくり、青物をながめて一安心するのだ。

つぎには、鳥小屋であるが、これは家の近くがいい。むろん最初の土曜日から、すぐに鳥小屋づくりを考える移民もある。しかし、鶏というものの、ここでは農家の副業として養鶏をやるのではない。ただ自家の食料

として鶏を飼うだけでなのである。家のまわりの放し飼いだ。鳥小屋とは、夜、自分のところの鶏が止まったり、卵を生んだりするところである。だが、小屋をつくるためには、長い木を集めたり、屋根をふいたりしなければならぬ。屋根は茅（サツペー）でふくとしても、まだそれをとりにいく場所もわからない。当分ブラジル人式に軒下に止まり木だけをつくる。これは幅広なはしごのようなものをつくり、これを家の壁にそなえつけるのである。ただし、盗まれないともかぎらない。豚はめつたに盗まれないのだが、鶏はよくやられる。まず、地鶏を二羽か三羽買いこんで、四、五日、箱に入れて家のなかにおき、そのうち外に放す。夕方は家のなかに追いこんでつかまえ、止まり木へ泊めてやる。これを二、三回もくりかえすうちに、鶏は自分たちの止まり木をおぼえる。昼はとなり近所の鶏と一緒に遊ぶので、最初はめんどりだけにする。

卵を生ませるためには、止まり木の横に、かご（ジャツカ）を横につるし、なかにとうもろこしの皮でも少し入れておく。かごは卵がころげ落ちないように底のほうを低くしておく。地どりは、一ダースも卵を生むと、もうあたためる。だから、自分のところを買ってきてから、すぐコツコツとやりだすものもある。このほうがひよこをかえすのに都合がいい。卵をかごに入れ、めんどりと

ともに一日くらい蓋をしておく、だまって温めるようになる。ひよこがかえってからは、夕方家のなかへ追いかんでおけばいい。

地鶏は、時によるとどこでも卵を生む。隣の家の鶏が、こちらの巣箱に卵を生むこともあり、逆も同じである。しかし、人間が手をつけるところを嫌って、やぶのなかへ生むこともめずらしくない。とうとう盗まれてしまったかな、とあきらめていると、いつのまにか、七、八羽のひよこをつれて家へもどってくる。一羽か二羽のときもある。これは卵をなにかに食べられてしまったのである。卵の敵は、日本の農家のように蛇で

はなく、ブラジルではトカゲである。五〇センチ以上の、やつがいて、卵やひよこをねらう。また、ねずみにもやられる。よく、とうもろこしの貯蔵小屋（パイオール）に鶏が卵を生むことがあるが、この中でひよこをかえすと、ねずみにねらわれる恐れがある。

コロニア住まいをしていると、ブラジル人が逆毛や首まで羽毛のない鶏を飼っているのに気がつく。またシャモの血のはいった足の長いのもいる。こういうのが食べておいしいのだという。日本人はあまりホロホロ（ガリーニャ・ダンゴラ）を飼わないが、ブラジル人はよく飼っていた。知らないものがその家に近づくと、さかんにホロホロ、ホロホロと鳴きたてる。

土曜の夕方、おのおの自分たちの仕事に励んでいると、日本移民の女たちは、フエイジョン（ヘジョンと発音した）を甘く煮て、汁を多くし、そのなかに麦粉でつくった、だんこを入れ、日本式のおやつをつくる。フエイジョンは少しあくが強いが、一度水を替えて煮ると、けっこう食べられる。ファゼンダ生活における日本のごちそうだ。

斧つかいの名人

家でひと休みしていると、隣家の黒人は、裏のほうでいま盛やかな薪割りだ。日曜のごちそうをつくるために、たっぷり薪を用意しているのだろう。長い丸太を斧（マッシャード）で一メートル以内の長さに切り、これをもう一本の丸太の上において、斧を打ちおろして割る。丸太の横っ腹の真ん中に、斧はスポツと食いこみ、パーンと二つに割れる。しかも、斧はかならず右肩のほうからはすっかいにビューンと打ちおろすのである。見事なものである。日本移民はこのブラジル人の斧の使い方に感心し、だんだんまねていくのである。

ブラジル人は女でも斧使いが上手だ。しかし、その使い方は男とちがっている。なんべん、どこで見ても、決して斧をななめにふらないのである。一度高く頭上にふ

りかざし、それから垂直におろす。斧をななめに使うと大きなおっぱいが腕にひっかって具合が悪いんです、というような格好だ。本当はどういう理由かわからない。

ブラジル入射斧使いが上手なことは、単に薪割りの場合だけではない。山伐りのことは、いずれ原始林開拓のところでも述べるつもりであるが、いろいろな細工ものを斧でやる。鋏の小さなくサビでも斧で削るし、臼なども、斧一丁でこつこつとつくりあげる（むろん臼の内側は柄の短い斧を使うこともあるし、ときには火をたいて底をこがし炭にしてから、またこれをこそぎ取るようにすることもある）。

こうした仕事を見ていると、まるで未開人が石器をあやつるように、急がず、慌てず、刃わたり一〇センチ以上もある大きな斧で、こつこつと小さなものまできざんでいく。

ここで、ちよつと日本の刃物について言うと、ブラジルの木は概して堅いので、日本式の銘（なた）などはすぐ刃がこぼれてしまう。生木を切るにはいいが、枯れたものを切るには適しない。ブラジル人は長い柄のついたフォイセを使う。また鉋のかわりにファツコンというだんびらを使う。これは、よく皮のさやに入れて腰にぶらさけている。コーヒー園で鋏がいたんだときなど、鉋のかわりに使えるし、森林を歩くときには、じゃまにな

る木の枝や蓑（シポー）を切り払うこともできる。これも細工に用いるが、やはり斧を使うときの要領で、長いファツコンの重みを利用して、刃の元のほうでコツコツと細工する。

日本人もあとになると斧使いが上手になったが、細工ものには斧は使わなかった。ファツコンも好みに合わないらしい。だから斧で威勢よく木を切ること、薪を割ることも上手になり、カミソリのように脛の毛までそれるなどと、斧をとぎあげて自慢するようになるのであるが、あのコツコツと重いマツシャード（斧）で気ながに細工物をやることは少なかった。日本人はいろいろな道具を使う。

のみ、かな、のこぎりなど、ブラジル人コロノは、こんな道具を持っていなかった。

土曜の晩

土曜の晩は、新旧移民たちがどこかの家庭に寄り合つて、話し合つた。ほらのふき場、愚痴のこぼし場がどうしても必要だ。日本にいたときのこと、ブラジルの生活のこと。日本の生活については、たいがい自分たちが、どんなに立派な暮らしをしていたかを強調して話すのが普通であつた。これはブラジル生活の不平を述べるのにも

都合がいい。それも「ブラジルへ来てよかった」とはま
だ言わない。しかし、「とにかく、ここはのんきですね」
と言う。これはどういうことだろう。

日本ではいい暮らしをしていた、ブラジルの生活は不自
由（ほしいものがない）で苦しい、しかしのんきだ、と
言うのである。

これを解説すれば、つぎのようなことになるのだと思
う。

日本では、むろん、いい生活も経験したことがあるだ
ろう。親類に多少裕福なものがあれば、一度や二度、ご
ちそうによばれたことがあつたであろう。友人に誘われ
て遊んだこともあつたろう。

どんなに貧乏していても、どこかでなにかいいことが
あつた（その当時はブラジル政府からの旅費の補助は
あつたが、それでも全額補助ではなかったから、一人百
五十円くらいの支度金が必要だった。だがら極度な貧乏
人はとてもブラジルまで出かけてこられなかったのだあ
る）。これらの経験が、いまはみな永続的な生活であつた
かのように錯覚されるのであろう。しかも、ここでは自
分の過去を知るものなど一人もいないのであるから、多
少の嘘はゆるされるし、ほらは吹いてたのしい。だが日
本の生活では、どうにももちがあかなくて、ブラジルな
らなんとか一旗あげられるにちがいないと思

い、移民周旋屋の甘い口車に乗ってやってきたことにはまちがいないのだ。

ところが、ぬれ手で粟をつかむような幸運は、たとえばブラジルだとして、そんじょそこらにころがっているわけはなかった。しかもここは、二十年前まで奴隷を使って生産をしていた国ではなかったか。労働者が人間以下であつた時代の考え方が、たった二十年でなくなるはずはない。メザーダ（月割り支払い）月給（注²）とアルマゼンから買いこんだ物の値段をくらべてみても、すでに二か月分以上の月給を使いこんでいるも同様だ。この分では、当分故郷への送金などは思いも及ばないことである。ここにいる旧移民（一、二年前に渡伯したものをさえ、そうよんだ）などは、送金の義務を身にしみて感じ、負担に思っているものは一人もない。

送金をいそぐものは、とうにサントスのドック働きとか、マツト・グロツソの鉄道工夫とかにいつてしまった。サンパウロへ出て日給取りの大工や左官をしているものだって、はたして賃金でもうけているかどうかかわからない。これからは、できるだけ食料を儉約して、コーヒーの採取期がきたら、うんともうけようとは思っているが、とにかくいまのところは、皆とらぬたぬきの皮算用である。義理にも「よかつた。予想どおり、ここでは金がたまる」とは言えない。

しかし、ここは地球の反対側だ（当時の移民たちが、ブラジルをどんなに遠いところと感じていたか、六十年後のわれわれには想像もつかないことであつた）。借金取りはここまで追つてこない。たとえ金を送れなくとも、どんな言い訳けでもしてやれる。ここでは家賃はいらないし、税金もない。親戚付き合いもなければ、見栄もない日本では村長をしておりました、などとほらをふいてみても、だれもそんなことを疑つてみようとしない。ここへ来てしまった以上、だれもかれも裸一貫である。日本のことには関係がない。実は小作人でした、などと言ひふらす必要はない。しかも、あたりを見まわしてみると、皆のんびりしていて、まるで生活の向上など考えてもいないように見える。ヨーロッパ移民にしても、たいして甲斐性のあるものもなさそうだ。仕事に慣れ、少し言葉をおぼえ知恵を働かせれば、ここでは周囲の人たちをどんどんおいこして先へいける。そのうち土地も買うだろう。自分のコーヒー園だつて持てるようになるにちがいない、と考へてみると、希望がもてるのである。そして現在の苦しみは、試練として受け取ることもできるのだ。ブラジルは大きい。まだ無限に未開地が残っている、とそんなことを考へてみると、「とにかく、のんきですね」と言えるし、また、言わないことには気がおちつかない。「ブラジルはのんきだ」ということは、移民の生活の歴

史のうえで、いろいろな意味をもって変わっていくだろう。

ピンガ酒が出る。気のきいた主婦なら、干鰯の塩出しをして、それを焼いて出したろう。甘ったるいコーヒーが出る。フエイジョンの煮豆もあった。とうもろこしの粉に砂糖をまぜ、だんごにしてふかしたのも、たまにはうまい。これだけ食べもの、飲みものがそろえば、「宴会」ははずむ。

「奥さんは、このごろ、お黒いをつけていなさるのかのう？」とひやかすものも出る。

「あんたの奥さんでなくて幸いでした」とやりかえされる。

「いや、なにも自分の女房を棚にあげて言っているわけじゃない。うちの女房なんて、はじめから南洋美人。いや、美人なんて言えるしろものじゃない。あの分じゃ年の終わりにや梅干しばばあになりそうですたい」と、てれてしまう。

「おい、おい、また愚痴かな？」

「そうそう、これはどうやら愚痴らしい。一杯飲んで元氣をつけなけりやア……」と目をつぶって、強いピンガをぐっとあおる。コーヒーを飲んでフバーだんごをむしやむしややつているものもある。ランパリーニヤ（カンテテラ）の火が、黒い煙を一直線に屋根のほうへ伸ばして

いる。今夜はどうやら、就寝の鐘がおそいらしい（土曜の晩は鐘をつかないところが多い）。

日曜日

日曜になると、ブラジル人やヨーロッパ移民は、真っ白な洗いざらしの着物を着て、コロニアのそここの友人を訪問して歩く。女たちもレンダ（レースのかざり）のはいったブラウスに、赤い線などはいった長いスカートで姿を見せる。しかし相変わらずほとんど裸足だ。髪の毛も編んで巻きつけているもの、背中へたらししたものなどもあるが、今日はレンソもかぶっていない。大きな耳環をつけているものもある。日曜日になっても、あまり身なりをかまわないのは日本移民だけである。彼らは今日こそ余作地（外作地）の仕事をしようとしているからである。

コロニアの前の道では、ブラジル人がマーリヤといって鉄の小さい円盤を投げている。小さな砲弾のような目標をたてておいて、これを倒す遊戯である。イタリア人たちは、裏のほうの空地で、さかんにボーツエ（注^③）をやっている。いまのボーリングに似たものだが、木製の玉をころがすのである。

釣りざおをかついで釣に出かけるものもある。また、鉄砲を肩にして、狩に出かける男もいる。やせこけた小さな犬が、二、三匹、前になり後になってついていく。これらの犬は、兎を見つけたり、イニャンプー（うずらの一種）を追い出すのが上手なのだという。

当時コロノたちの持っていた小銃は裏ごめのもので、火薬や散弾を詰めこむ細い棒が筒の裏側についていた。腰には散弾の袋と火薬入れの角筒をぶらさげていた。短いズボンに裸足であるが、彼らはどんなやぶのなかへでもとびこむのである。犬をつれていないときは、小鳩をうつのである。小鳩はあらかじめ餌へ（とうもろこし）をまいておいて、近くにかくれ場をつくっておく。餌をまくところは、一直線に長い溝のようにしておく。一度に数羽をうちとめることができるからだ。

ときどき生きたオウムをぶらさげて帰ってくる。ちよつと羽根をいためたくらいのもものは、家へもち帰って馴らすのである。

日本人は、日曜日をいかに楽しくすごすかと計画するような、心の余裕をまだ持っていない。なによりも食糧の米を生産しようとする。米の飯さえ腹いっぱい食えば、苦しい生活にもたえられる。

外作地のカッポエイラは、もし灌木のあるところならこれをフォイセで切りたおし、一か月くらいほっておい

て火をつける。もし雑草だけであつたら、エンシャードで革をとり、これをまとめて焼き払う。つぎの日曜日は、もうすっかり畑の整理がつく。もし草がよく枯れていなかったら、うねにして寄せておいてもいい。

きつそくもみを蒔く。カツポエイラ（休耕地・荒地）の多くは、コーヒーの栽培にむかない低地なので稲はよくできる。エンシャードで浅く穴を掘り、そのあとから二十粒ほどのもみを穴におとし足でかるく土をかけ、そつと踏んでおく。十俵もとれば、いいもみなら白米五俵が出る。りっぱな食糧補給である。

当分毎日曜外作曲の仕事がつづく。もしコーヒー園のほうの仕事がよくはかどっていれば、監督のゆるしをえて週間内でも外作地へ出られる。しかし夏は、コーヒー園に草がはえるし、間作のこともあるので、外作地のほうは、取入れの時にだけ、特別の暇をもらうことにしている。

コーヒー園の間作

月曜から、またコーヒー園の仕事がはじまるが、もしあまり草が大きくないところならば、はじめに豆を蒔いてから、あとでゆっくり除草することもできる。食糧をいそぐ場合は、そうするよりしかたがない。フエイジョン

は、やわらかいさやを利用することもできるから、野菜のかわりにもなる。日本人がはいってくるとさや豆を盗む、などという悪い噂をたてられてはこまる。実際野菜が欲しくてたまらない日本移民は、人の畑のフエイジョンの

若いさやを無断で失敬したこともあるそうだ。ある人の回顧談によると、「ブラジルへ来た当時は、人の畑のものをとつても、なんだか盗みをするような気がしなかった。なにもかも大ざっぱで広大なので、人のものも自分のものも区別がつかないほど頭がぼけてしまうのだ」と言う。

フエイジョンは雨を待ってからエンシャードで穴を掘つて蒔く。四か月以内に収穫できるのであるが、春蒔きのものは収穫時がちょうど雨期になるので、豆がくさることがある。だから、あまり欲張つて蒔かないほうがよいと、旧移民に注意されているのである。

十一月ころから雨がだんだん多くなり、作物がのび、コーヒー樹も青々としてくる。コーヒーの花は春の雨を待つて八月の末ごろから十月にかけて三回くらい咲く。むろん、雨がおそければ花もおそい。二回目くらいが一番花が多いのだ。雨もようだからコーヒーのつぼみがふくらむのか、それともコーヒーのつぼみのふくらむころには雨になるのか、とにかく、コーヒーのつぼみがふくらんでくるころは、前年からファゼンダに居残ったコロノたちは、豆やとうもろこしを蒔く用意ができていなか

ればならない。

しかしコロノが外からはいつてくるころは、もう花ざかりもすぎている。

十一月は青い小さい実がいつぱいついているころだ。

三年目くらいまでの新コーヒー樹の畑は、樹間にもうもろこしを植えることができる。とうもろこしをうね蒔いておき、その両わきに豆を蒔く。つまり豆は二うね蒔くことになる。

しかし、秋蒔きのほうに力をそそいで、とうもろこしの花がとまるのを待って、豆を構えてもいい。

自分の作物がのびだすのは、コロノにとって一番うれしいことである。そしてそのころはようやく仕事にも慣れて、新移民もなんとか一農年が落ち着けるという自信が出る。コーヒー採取期にはいった移民たちのように、賃金と生活費とをにらみあわせて、夜逃げの計画に頭をなやますようなことも少ない。

夜逃げのこと

だがどんないい農場へはいつても、新移民たちは迷わずにはいられない。コーヒー農場では、定収だけではまず食べていけないからだ。豚を飼ったり、外作地で米をとったり、また、コーヒー園の間作で豆を当てたりする

ことに保証はない。だから、今年はコーヒーも豊作ではなさそうだということがわかると、もう不安でたまらないのだ。そこへ外部からこのだれさんはどれだけ儲けたとか、どこのコーヒー農場は土地がよくて、いずれ当たって儲かる時がくるにきまつているとか、新コーヒー樹の多いところは、いまがむしろ「入耕」に有利だとか、そういう噂が耳にはいると、少しくらいの自分の作物はほったらかしても逃げだしたいと思う。否、作物ができていれば、農場側も安心して警戒しないだろうから、つかまる恐れはないと考える。また、いよいよ暑さがはげしくなつて、疲労が身にこたえるようになると、百姓がいやになつてくるものもある。しかも雨期とともにマラリアが出るところなどは、いよいよ不安をつのらせる。農場に医者のあるところなど、まず無いと言つていい。また、言葉のわからないものが、即の医者のところへいつても、またよんでもらつても、らちがあかない。通訳さえ役にたたないことが多かった。農場には薬局があつて、たいがい薬剤師とよばれる人間がいいかげんな判断で薬をくれる。しかし多くの場合は、まず下剤を飲ませるのだ。それから、マラリアにはキニーネである。体力のおとろえた新移民は、下剤で衰弱を強めてしまう。もし一人でも重病人が出て、回復ののぞみがないなどという評判がたつと、もうおじ気づいてしまつて、一刻も

はやく、命のあるうちに逃げだしたいと思う。こうした不安は、いつも会って話している連中には、一人の不安が二人の不安となり、逃げるなら、わしらも一緒にということになるのである。

「やつぱりそうだったのか、自分らも最初の『耕地』にはいったときは、逃げた人のあとを追って、よつぽど逃げだそうと思ったんだが、辛抱した。ここへ来てみれば、なんとかもうかる見込みもついたし、こうして豚も鶏もいる。米もまたとれそうだ。今年は楽になろう。新移民には豚もなかつたし、外作地の作物もあんな草のなかだと、たいしてとれる見込みはない。逃げたのも無理はなかつたな」と、旧移民たちは逃げていった新移民たちの噂をするのであった。ふりかえってみると、なにかも仕事を中途でなげだしてしまつたのは、はじめからこの農場にのぞみをもっていなかったのだとも推察されるのであった。

ここでは夜逃げの様子を述べる。

夜逃げははじめから、乗りものを利用するというわけにはいかないから、徒歩でいく覚悟がなければならない。大きな荷物は前もって親しい友人たちにあずけるか、人にやってしまうか、もし金目のものだったら、だれかに買ってもらう。とにかく必需品は、みんなしてかつがなければならぬ。途中野宿もしなければならぬ場合も

あるから、ござ（日本から物を包んでもってきた）や外套は別に持つ。近くの農場へ移るなら別だ（この場合は前もって打ち合わせたところにだれか馬車で迎えに来てい
る）。

そして目的とした農場へはいつてしまえば、もう他の農場からの追跡者はふみこむ権利がない。しかし、遠いところへ行くものは、汽車に乗るために駅まで歩くのであるが、農場と直接連絡のある駅ではまずい。するとつぎの駅か、できれば別の線の駅まで歩かなければならない。二〇キロメートル、三〇キロメートルの道を、人目につかないようにあるく。日中は暑くて具合が惑いから夜道をする。そのためには充分食料も携帯しなければならぬ。店にはいつて買物をするのも危険だと思う。だから人通りの少ない山道を利用する。それでもだれかに追跡されている気持ちを払いのけることができない。もし背後に馬の足音でも聞こえてくると、どうしてもちよつと道ばたのものかげに姿をかくす。ところが馬というやつは、あやしいもののありかをすばやく感づくもので、なにものが道ばたに身をひそめていると思うと、その近くまで来てたちどまってしまうことがある。これにはまったく冷汗をかかされる。人間のほうは、むしろ通っている道であるから、席をはげまして通りすぎようとする。いっぺんたちどまった馬は、今度は一目散に走り

だす。

こんなときに馬上の人間は腰にしたピストルをぬきとって、パン、パンと空中へうちはなすことがある。猛獣でもおどかさつもりだろう。やれやれ追跡者ではなかったと、またぞろ、物かげから出て道を行く。だが、追跡者でなかったという証拠はどこにもない。いつまた引き返してこないともかぎらない。今度は少しわき道にはいる。とうとう夜が明けて、道に迷ってしまったことを知る。こうなったら、もうやぶれかぶれだ。とにかくどこかの家をさがして、なにか物を食べさせてもらわないことには、腹が減って歩くこともできないという場合もある。不眠で荷物を肩に歩いたのであるから、足は棒のようになって自由がきかない。

こうして、もうどうにでもなれという気持ちになるまで、つねに追跡者を背後に感じながら一晩、あるいは二晩と人目をしのんで歩く気持ちは、たとえ成功してうまく目的地に着くことができたあとにも、なにか不安なものとして心の底にわだかまる。追跡者の黒い影が、夜の夢にもあらわれる。こんな夜逃げは、はやく金をもうけて帰国したい一心の新移民にして、はじめてできるものである。

逃亡者の出たあとは、かならずコロニアに夜警がつく。夜警の話は第一回移民のところで書いたので、ここでは

はぶく。

ブラジルの夏

十二月、一月、二月の三か月はブラジルの夏である。ファゼンダの人間は夏という言葉は使わず、雨期をはさんだ半年をテンポ・デ・アーガと言い、その他の六か月をテンポ・デ・セツカと言っていた。

十二月の半ばごろになると、草と作物が競争しだす。土地のいいところなどは、草が人間の背丈になる。こうなると仕事はなかなかはかどらない。どこか空の一角に雨雲があらわれたと思うと、灰色の幕をおしひろげるようにひろがって、ゴロゴロッ、ザーッとやってくる。もう逃げるにも逃げられない。背中から腰のあたりまで雨水がしみこみ、股のほうにも流れこむ。こうなったら完全な濡れねずみ、家へ帰るより仕方がない。コーヒー園には車道の四つ角のところどころに、トタン屋根の雨やどり小屋（ランショ）があるのだが、逃げこむのにまにあうことはごく少ない。

雨が降ってくれば、だまって仕事を休んでも、監督はなにも言わない。骨休めは雨のときだけである。雨があがっても、今日は再出動の角笛がならないとみると、日本人は外作地の巡視に出かける。稲も青々とのびて、遠

くからは、もう地面も見えないほどだ。外作地は見る目もたのしい風景となって展開している。牧場に接近しているようなところは、柵（セルカ）がゆるんでいないかどうかよく調べておかなければならない。柵の棒杭が腐っていたり、鉄線（アラメ）がはずれていたりとすると、いつ牧場の牛馬がふみこまないともしかぎらない。

ふみこまれてしまったては、どんなにわめきたてても、もうおしまいだ。第二回移民は稲をファゼンダの牛馬に食い荒らされたので、ファゼンダに抗議したが、一蹴されたも同様、一族につきもみ十俵あて収穫予想だったのに、たった白米半俵あてを弁償にもらっただけだったという。当時の日本人はファゼンダの非道をうらんだが、地代を取らずにただで作らせる土地を、ファゼンダのほうでは監督する義務はないと言うだろう。柵の問題では、コロノの負けと相場はきまっている。これはコロノ対コロノの場合でも、自分の菜園にとりなり豚がはいってものを食い荒らしても文句はつけられない。コロニアに豚や鶏を放し飼いにしてあるのは、たとえば、いけないこととファゼンダでは規定していても、前々からの習慣であったら、それをふせぐのは、柵をこしらえて野菜を植えることである。

日本移民は外作地に大きな希望をかけるので、日曜日も祭日も働く。ブラジル人はこれを一見で、【ジャポネース

・ノン・レスペイタ・ネン・ディア・サント」と言う。
「エー・ペカード！」日本式に言えば、「祭日に仕事をしたら罰があたるぞ！」というわけだ。

ファゼンダでは、宗教のことはあまりやかましく言わなかった。ここは各国移民のより集まりであり、農場主にとっては、彼らがどんな宗教をもとうと、また、どんな習慣をもっていようと、農場のためによく働くことが第一であって、その他のことには関心を示さなかった。しかし、コロノたちはたいいていカトリック教国のものであったから、ディア・サント（聖者の日間祭日）は日曜日などより、もっと重視していた傾向があった。むろん、日曜日は働かない。しかし自分の仕事をしたからといって、罰があたるとは言わなかった。国の祝日（フェリアード、ナシオナール）などは、あったのかなかったのかだれも記憶していない。

病人、葬式

暑さがいいいよはげしくなったころ、「某は熱を出して寝込んでしまった、彼は床のなかでブルブルふるえている！」という噂がたち、監督がコーヒー園を巡視しても、仕事をしている様子のない家族があると、びっくりして

コロニアへとんでくる。

そのコロノの家は窓が閉まっているが、だれかはいる。逃亡でないことはすぐわかる。

おかみさんがおろおろしているのだ。亭主が四十度も熱を出してうなっているという。監督がフアゼンダの事務所へとんでいく。ファルマッセウチコ（薬剤師）が来て下剤とキニーネを置いていく。一握りもあるサール・アマルゴ（鴻利塩）だ。便所のないフアゼンダで下剤を飲まされる日本人はみじめである。

「フエーブレ！」という噂がひろまる。

あるブラジル人は、「日本人はディア・サントに働いたから罰があたったのだ」と言う。これに対して他の物知りは、「そればかりじゃない、あんな低地に米をつくったのが悪いのだ」と説明する。そこは低地であって、しかも川に近かったのである。

コロニアは病人続出で陰気なものになってしまふ。

「とうとう駄目だったんですなア」

「黄熱病ですか？」

「マラリアだといいます」

「おそろしいものですなア、われわれは心配ないでしょうか」

「さあ？」

一度熱を出したとか、ふるえがきたとかいうものは、

すっかりおびえている。会葬者は日本人家長たちと近所となりのブラジル人コロノ。お棺は荷馬車に載せ、町の墓地近くまで運んでもらう。墓地へは、みんながかついではいるわけだ。会葬者はむろん、みんな徒歩だ。ブラジル人は「コイタード！」を連発する。花輪のない葬列がコロニアを出ていくと、なんだか急にひっそりとした感。

病人がふえ、葬式の出たあと、夜警も中止になる。監督の仕事が急にふえる。はやく病人を回復させて働かせなければならぬ。コーヒー園は草がのび放題だ。

パン焼きと豚殺し

ブラジル人やヨーロッパ移民は、ナタール（クリスマス）が近づくのを喜ぶ。日本移民は、正月が来るのを指折りかぞえてみる。しかし、ここは日本とちがって夏の盛りだ。正月という実感はまったくない。

ファゼンダのマンガ（マンゴーの実）が熟れだして、日本人新移民は、はじめて、あの甘ずっぱい濃厚な熱帯果実の味を知る。マンガにあてられて、吹き出物を出している子供もある。

イタリア人やスペイン人の女がパンを焼く。男たちはごちそうに豚を殺す。日本人もパンの焼き方を教えても

らう。豚肉の一片をもらって、今度は自分たちも殺してお返ししたいと思う。そして殺すときには手伝ってもらいたいと頼み込む。

「ヨー・タンベン・ポルコ・マータ、アジュダ・プラミ―」とやる（注5）。

殺してやってもいいと親切に言ってくれたのは、となりの黒人だった。

「シン、シン、オブリガード、オブリガード」――日本式に前もってオブリガード（ありがとう）をやる。ファス・ファボール（おねがいする）のかわりだ。

パン焼きは土曜の午後だ。女たちの仕事である。イタリア人から旧移民へ、それから新移民へと、つぎつぎ連絡があつて、順々に説明が伝わってくる。パン種子が配られ、それをまぜてパン粉をこねる。それから、これを布にくるんで炉の近くに置く。毛布にくるんで寝台に置いてもいい。

他方、共同のパン釜に火をいれて、どんどん燃す。パン釜は五、六家族に一個くらいずつ、水タンクに近いところにある。レンガづくりで、外部の直径は一メートルほど、腰の高さくらいの台の上に半球体のパン塞がのっかっている。焚口は三〇センチメートル角くらいだ。背後の高いところに、レンガ一個さしこめるくらいの煙お

きの穴ができている。薪はペローバがいいと言うので、あの赤い色の割り木をどんどんくべる。真つ赤な炎が釜のなかに渦巻きだす。ときどき釜の外側に手を

あてて、内部の温度を判断する。釜がよく焼けたことがわかると、すばやく薪を引き出し、おきをかき出す。そして、あらかじめバツソウラ（注⑨）の枝でこしらえたほうきで、なかの灰をはき出す。ほうきがちりちりにやけないように水にひたしては、またつつこんで灰を取る。温度の加減をみるには、とうもろこしの皮一枚入れて、そのよれ具合こげ具合で判断する。よしとみはからってパン（マツサ）を入れ、焚口を四角な板でふさぎ、レンガでその蓋をおさえる。次いで背中の穴にもレンガを突っこむ。こうして時間をみはからっては釜のなかのパンの焼け具合をみるのである。

これはなんといってもヨーロッパ移民が師匠である。フバー（とうもろこしの粉）を入れた香ばしいパンもつくる。これにおいしい豚の肉が加われば、ご馳走は満点だ。イタリア人は、祖国から輸入した「ビーノ」を一、二本ふんばつするだろう。

さて男たちの豚殺しを見よう。

豚殺しを約束したとなりの黒人には、殺してくれたら

頭と内臓をやることに決めてある。それだけくれたら、いっさいを処理してやるというのだ。

コロノの豚小屋（シケイロ）は、棒杭（あるいは割木の棒）を縦にすきまならべてつくつてある。その棒杭は、一か所だけ二、三本引き抜けるようになっていて、ここが入口だ。豚を追いまわす必要もないほど狭いところだし、もう肥えるだけ肥えて、食べては寝、食べては寝しているだけの豚だ。柵のなかへはいりこんで、後肢をつかんで引き出す。むろん、慣れた屠殺者はこのなかでも簡単に仕事ができるのであるが、いまは見習いの人間がより集まっているので柵の外で仕事の順序を示すわけだ。だれかが後肢をつかんでひきたおしたら他のものは耳をつかんであばれないようにおきえつける。屠殺をうけもったブラジル人は、前肢の一万を左手にもちあげ、ひざで豚の腹をおさえ、腰からぬきとったファツコン（大きなナイフ）を、豚の胸へスルスルとさしこむ。まるで砂のなかに刺しこむように造作ないわざである。それでいて的確に心臓を突いているのである。ギャーツ、ギャーツという断末魔のさけびも、たちまち消えて、流れ出る血の量が減るとともに息たえる。血はすべて金だらいか鍋に受け入れる。手伝うものは顔をそむけて、ただ、両手に満身の力をこめてあばれだそうとする動物をおきえつけている。この屠殺術は一度や二度でとても学

べるものではなかった。鶏さえ満足につぶせない連中だった。豚の処理は、できるかぎれ「外人」の手をわずらわすのが、渡伯後数年間のならわしとなっていた。先に、「慣れたものは一人でもやれる」と言ったのは、鉄棒か斧の背で眉間に一撃を加え、気絶したところを、ゆうゆうと心臓にファツコンを刺しこむのである。悲鳴すらあげない。上手な豚盗みは、夜中にシケイロに侵入し、豚を殺してかつぎ出すのだが、もし不意に番犬にでも見つからないかぎり、朝までだれも知らないでいるのである。

余談はさておいて、これからは屠（ほふ）った豚の処理であるが、まず毛をとり去ることで、これには二つの方法がある。湯をわかすに都合のいい場所であつたら、二〇リットルの石油の空缶に湯をわかし、ひしやくかなにかで、一人が熱湯を豚にそそぐと、他のものがファツコンでゴシゴシ毛をこそぎおとす。これを豚が白いまる裸になるまでつづけるのである。もう一つの方法は、とうもろこしの皮（パーリヤ）を豚の上に積み上げ、これを燃やし、エンシャードで草を削るように毛をこそぎおとす。よく毛のとれないところは、また皮を燃やすので、ファツコンでやるより、エンシャードでやるほうがいい。ただ四肢の先や頭のところがうまくいかない場合が多いから、あとで熱湯をかけてこそぎおとす。

これが終わると、板の上か、あるいは、きれいな草の

上にもっていった内臓を取り出す。小腸にはすごい油がからまりついているから、なるほど内臓の価値は大きいことがわかる。頭、内臓、それから四肢の爪のところをもらえば、屠殺者は充分むくいられるわけだ。移民たちはあとで内臓で石けんをつくることを学ぶのであるが、石けんをつくれるようになると、どうしても自分で殺すようにしなければならぬと思う。腸にある脂だけでもすごいものだ。しかし自分で殺して始末するまではなかなか容易ではない。しだいに、脂を二キロやるからとか、金を払うから殺してくれとか、いろいろネゴシオ（交渉）するようになる。ところで、豚はうんと脂がついている。脂をとるために肥やしたので、その脂身がたいせつなのであるから、その保存法も学ぶ。いいところは塩漬け（トウシーニヨ・サルガード）にして保存する。背中の方の脂身は、指三本の厚さとか四本の厚さとか言って、厚いほどりっぱなものとされた（肉屋などでは脂身をはすっかに裂いて、一四、五センチの厚さに見せてぶらさけているのを見るだろう）。

普通の豚だったら指四本の厚さがあつ

たらいいほうだ。脂や肉は一家族では食べきれないから、コロノたちが普通の売り値でわけあう。むろん、自家消費のためには充分とおかなければならない。すっかり内臓をとりのけ、頭をとってしまえば、今度は豚の持

ち主が、脂や肉の保存のための仕事にとりかかる。

ブラジルの田舎料理では、脂身が一番たいせつだ。まだ綿実油などはなかった時代だ。ご飯に、豆に、野菜の煮物に、すべて豚の脂を使う。だから肥やした豚は脂が多いほど優秀ということになる。

脂はバーニャとトウシーニョにわけると。バーニャは精選した白い油であって、脂身だけを鍋に入れて熱を加え、かすをとりのぞき脂肪分だけにしたものである。かすはトレズモといって、いろいろな料理に使えるし、日本人は煮物のだしに使った。トウシーニョは生のままの脂身のことであるが、塩漬けにしたものもトウシーニョという。保存法は、厚い脂身に切りこみを入れ、そのあいだに塩を詰め、しばらく塩をしませてから、かまどの上などにすりさげておく。かまどの煙でくすぶって、だんだん燻製のようなものになるのである。これを端のほうから切りとっては料理に使う。豆の料理にはなくてはならないものである。

ファゼンダの生活は、ヨーロッパ移民の影響が強いので、食事は、かならずしも純ブラジル式とはいえないのであるが、ブラジル式になると、パンよりもむしろマシオカいもの粉とか豆とかが主食である。豆は、はじめ豆だけよく煮ておいて、途中でトウシーニョやにんにくで味をつける。味つけの順序を記せば、トウシーニョ

の一片をフライパンに入れてとかして、そのなかにこまかくきざんだんにくを入れる。にんにくのこげるにおいは、新来移民には刺激が強すぎるが、ブラジル生活をながくしていると、食欲をそそるものとなってくる。にんにくが赤くこげたところをエスクマデイラといって、孔のある杓子で豆の一部をすくいあげてここに入れ、少しのあいだ油でいるようにし、またこねてつぶす。それを今度はもとの豆の鍋に入れて味をみてから、ふたたび煮るのである。イタリア移民の影響と思うが、このなかに小さくきざんだ干マカロンなどを入れてたくこともある。また野菜を入れることもある。なんでも豆のなかに入れるのがフアゼンダのコローノ料理であった。こうして煮あがった豆に、マンジオカ粉をふりかけて食べるのがブラジル式食事であった。

話がわき道へそれたが、肉のほうは塩漬けにしたり、腸詰めにして保存する。

腸詰めには用いる腸は、売店からか沸かしてあるものを買ってきた。新しいものよりも使いよかったからだろう。まず豚肉を肉ひきにかけて細かくきざみ、これに塩、にんにく、胡椒その他の香料薬味を加えてよくまぜてから、腸に詰めこむのであるが、詰めるためにはブリキ製の漏斗（じょうご）形の肉詰め器がある。これを腸の一方に

あてて、ここから徐々に肉を詰める。腸のなかに空気がたまって肉が詰まらないときは、針で穴をあけて空気を出す。この操作をくりかえしながら、ゆっくり腸詰めをこしらえるのである。

豚殺しが終わったあとは、手伝いの人も招いて夕食のごちそうということになるのであるがブラジル生活に慣れないうちは、肉を腹いっぱい食べたいなどという欲求は、もうなくなる。殺すときや肉を処理するときのあれやこれやが強く印象に残るので、げっそりしてしまう。こういうときには、むしろ純日本式のあっさりした料理が食べたいと思う。そこで油気の少ない肉をえらんで野菜と煮る。醤油はないから塩味だ。ブラジル式の料理なら塩味があたりまえであるが、薬味を使わず、油も少ないから、なにかトンチンカンな料理になってしまう。まだテンペロの方法を知らない。ブラジル料理は、はじめ肉に味つけをしておいてから、これを油でいためて煮るのである。この肉を火にかける前の味つけがテンペロなのである。日本移民は、水だきにしてあとで塩で味をつけた。肉といえはすぐ醤油を思い出す日本人には、これはいかにも歯がゆいような料理だ。豚のにおいが鼻につく。だが、白いご飯をたいたので、まあ久しぶりで肉にありつけた喜びを味わうことができる。

日本移民の食生活

ファゼンダにおける日本移民の食物は、一般には、いかにしてブラジルの材料を日本式に料理するか、という工夫によつてできあがる。これは昔もいまも変わらない。主食はやはり米の飯であつて、ブラジル式油飯をつくるにしても、年中これをつづけようとはしない。

普通の白米が高くて、とても収入につりあわないとなれば、くだけ米やカンジーカ（とうもろこしの外皮をとり去つたもの）などをたきこむ。また、マンジオカやさつま芋をきざんで煮る。ときには豆まで入れて豆ご飯にする。

そして、その他のものは「おかず」なのである。その「おかず」なるものが、かならずあとで味つけするから、どんなに油っこくしても、やはり水っぽい日本式だ。ブラジル式なら、先に記したように、まずテンペロをやる。塩、酢や、にんにく、あるいは玉ねぎ、胡椒、それに、細かくきざんだパセリなど、においものを入れしばらく漬けておく。それからこれを油でいためて煮るのだ。

この味つけ法Ⅱテンペロは、なかなか日本人の家庭のなかにはいりこまない。腸詰めのだしで野菜を煮るようになって、この腸詰めは肉を保存するための方便でやむをえずこうしたまでだと考え、これを食べながらも、テンペロの方法を学ぶことはなかった。だから、衣服や

住居がブラジル式になっても、料理法はずっとあとにならないととり入れられない。初期の移民たちは、十年くらいたっても、ほんとうのテンペロは学べなかったのである。

味噌は、すでにファゼンダでつくりはじめていた。醤油は、たいがい市販のものを買い入れるので、日本人がふえて都会生活者も出るころにならないと市場に姿を見せない。はじめは「たまり」といって、味噌桶のすみにたまった汁を利用した。しかも広告の機関がなかったので、一九一五年以後、新聞が発行されてからブラジルにも醤油のあることがわかるのである。

テンペロも醤油もない料理は、材料だけはブラジルのものであるが、どこ式とも言えない珍妙なものであった。ただ、豆の料理だけは、さすがにブラジルの主食だけあって、一番はやくブラジル式に煮ることをおぼえた。しかし日本から来たてには、甘く味つけしておかずにすることもあった。

日本移民が独立農になって、いろいろな材料が生産できるようになる、いままで無理して食べていた、どこ式ともいえないものが、急に日本式に戻るようになる。これがどの程度に日本式であり、また日伯折衷であるかは植民地生活のところで述べる。

ところでファゼンダに入った当時は、まだ一時的な

出稼ぎ気分が抜けていないから、なるべく食物を儉約して、生活費をきりつめようとする。日本で白米も充分食べていなかった農村出の人々にとって、毎日米の飯を食べているのはむしろぜいたくである。しかし油っこいブラジル食だけでは我慢できないから、米と一緒にたきこむカンジーカをこしらえたり、塩汁にメリケン粉のだんごを入れたものを食べる。メリケン粉を儉約するためにはさらにマンジオカの粉をまぜる。前にも言ったように、「おかず」という日本的な観念は長く残るので、豚を殺してもその肉を充分食わずに、みんなでわけあってしまう。

コーヒーはファゼンダでもらうから、たとい味はよくなくとも、充分飲める。それに黒砂糖は安い。おそらくキロ何百レイスかで、なによりも安かった。大きな袋で買う。炊事場の片すみにおくと、よく蜜蜂が集まって来て、とけて流れる糖蜜をなめていた。

コーヒーとメリケン粉にとうもろこしの粉をまぜてつくっただんごを食べる。あるいはブラジル式に、ファリーニャ・デ・ミリーヲ（これはフバーより上等で粉のなかに皮がまざっていない）を、コーヒーとともに茶碗のなかでこねて食べる。これが朝の食事である。むろん日本式に湯漬けを食べるものもあった。

コーヒーの粉をつくるために、どこの家でも、まず臼

を買いこんだ。買えない間は、どこかで借りてくる。ブラジル人でも使っていない時は貸してくれる。臼はブラジル人がつくる。日本人はまだこうしたものをつくる根気もなければ暇もない。中古でも別に困らないから買ったほうが便利だ。この日を利用してカンジーカをつくり、また、のちに外作地からとりいれたもみをついてたべる。

カンジーカはどうするか。とうもろとしの粒を一晩水に漬けておく。それを臼に入れて突くのであるが、きねをあてるとサラサラとしてとびだすから、とうもろこしの皮を細くさいたものを水に漬けて、これをなかに入れて突けばとび出さない。皮がむけ、胚芽がとれてしまうまで突く。これをペネイラ（箕の代わりもするふるい）に入れて、皮をすっかりあおいでのけるのである。女子供の仕事である。

「これはよく煮て（たきぎは無料である）ソッパに入れるとか、あるいはプジンにするとか、食べ方はいくらでもあるが、そんな料理は知らないし、手間のかかるものはてんでこしらえて食べてみたいとも思わないから、はじめ水で煮ておいて、あとから飯にたきこむ。けっこう食べられるし、いい節米になる。」

野菜ができるころは、塩だけでも漬け物が食べられる。サラダはだれも食べていなかったし、ブラジル人は野菜

を生で食べるそうだ、などと評判しあう程度だった。コーヒー園にはときどきからし菜の自然生えがあった。かつては、だれかが種子を蒔いたものであろう。コロニアの裏に菜園をつくったものは、そこから、わずかではあるが野菜がとれる。ここの人間はあまり欲しがらないから、別に盗まれる心配もなかった。コーヒー園にもいくらか種子を蒔く。フェイジョン豆の若いさやも汁の実になる。外作地には大根をつくる。

野菜がなにもなかったとき、コーヒー園からひとり生えのマモン（パパイヤ）の青いのをとってきて漬け物にしたことはすでに述べた。ブラジル人はセラリーア（あざみに似た菜）やタンポポみたいなの「にがな」を食べる。カルルーという草もある。しかし、日本式にはむしろ、ピッコンの若芽（春菊に似ている）などがよかった。木くらげというきのこも木の腐った切り株などに出るので、日本人はこれを食べた。コーヒー園にはきゅうりに似たマレシェというのがはびこっていた。これは小さな鶏卵くらいの大きさで、とげが長い。種子がゴリゴリしているが、ブラジル人は油で煮て食べる。きゅうりを煮て食べるなんて、日本人には向かない嗜好だった。

日本式の野菜ができてからは、こんなものは、むしろものめずらしさで、ときどき味わう程度になってしま

大根などは、すばらしいものができた。しかし、はやく金をもうけたい。否、もっともうかるようなところへ移りたい、という気持ちがあるので、ゆっくり野菜をつくり食生活を豊かにしようなどという考えはなかった。例外として、他から移ってきた旧移民だけは、落ち着いてものを作る心の余裕もあったが、一般の新移民たちには野菜は不足がちで、食生活は栄養のないものばかりであった。暑い気候と過労のために、わずかな病魔にも打ち勝つ力を持たなかった。

新移民とブラジル語

ブラジル人やヨーロッパ移民から豚殺しやパン焼きを習い、彼らとつきあう機会ができてくると、いまさらのように言葉の通じないことに不便を感じだす。

来たばかりは言葉のできないことは普通であったから、通訳もよく気をつけてくれた。ボン・デイヤ（おはよう）、ボア・タールデ（こんにちは）。

船のなかで習った日本式発音のブラジル語でも充分だった。

はじめのころは、こんなものさえまったく習わなかった移民も多かった。

サンパウロ移民収容所へ来て、はじめてブラジル語を耳

にし、またノートしておぼえようとした。

むろんかたかなで書き取るのである。辞書もなかった時代だ。大武さんの最初の葡和辞典は一九一八（大正七）年に出たのである。

通訳さんにたのんで夜学をやってみたこともある。しかし、どうも説明がむずかしくて移民の頭にははいらない。なぜ会話に使っている言葉と文字であらわした言葉とがこんなにちがうのか。しかも、通訳のスペイン語とブラジル語では、かなりちがっている。二、三年前に来て、片言のブラジル語がわかる程度で通訳をしているものなどは、てんで説明ができない。

一九一七（大正六）年になって伯刺西爾時報（週刊）が発刊されて、付録に通訳・嶺昌（みね・あきら）のブラジル語講義録が載りはじめたとき、コロノたちは、こんなブラジル語はファゼンダでは使わないから、役にたかない、と言った。旧移民たちは、動詞の変化を見て、これはたしか、まちがいだと言った。こんな言葉は聞いたことがないとも言った。

「ヨー・テン、ポッセ・テン、エレ・テン」でまにあう。日本語でも、「持ってる」は、自分だって、あんだただって、みな「持ってる」だ。なんのために、「エウ・テーニョ、ツー・テンス」とやるんだろう、と批判しあったものだ。これを納得いくように説明してやるものがない

かったのである。

移民たちは外人になにか話しかけられると、はじめは、なにか聞きとれるかもしれないと思い耳をすませてみるが、なにがなんだかさっぱりわからないことに気がつく
と、「ヨー・ノーコンプレnde」とやる。むこうは手まね
足まねで、なんとか意を通じさせようとする。これは移民にとって、まことに迷惑千万であつた。

「おい、また毛唐がきおる。うるさいから隠れておれ」と言つて、なるべく顔を合わせないようにするものもある。

なまはんか言葉がわかつたりすると、かえつてめんど
うになる。なぜなら、最後までよく聞きとろうと努力することができず（むろん努力しても無駄ではあつたが）、めんどくさくなつて、シン、シンですませておくと、むこうさまは意が通じたものと思つて安心するらしいが、その結果はとんだことになる。

「あの日本人は、豚を売ると言つた」などはまだいいとして、「娘と結婚してもいいと言つた」などになると通訳に泣きついて、「実はなににもわからなかつたし、めんど
うだったので、シン、シンで追っ払つたのだ。なんとかうまく断つてもらいたい」と頼みこむ。場合によっては、言葉がわからなかつたから……と言つて、約束をとり消す役までつとめなければならなかつた通訳も、また、い

い面の皮だったと言える。

「毛唐とは、恥ずかしがらずにしゃべるにかぎる。しゃべらないで、言葉を覚えるなんて、どだい無理だ」と自慢する旧移民もある。そして、彼らは日本語の会話のなかにもやたらにブラジル語をまぜる。

「あの監督はブラーボじゃけん、めったなことは言えん。ノン・ポーデ、フィヤ・ダ・マエ！（注ㄴ）」

新移民にはそうしたわけのわからないブラジル語（？）の陰口さえ、言葉ができる人間の自由さがしのばれてうらやましくなる。だがその反面、なんのためにわれわれの前で、あんなブラジル語を使うんだろう。旧移民面しやがってキザな奴だ、と思う。しかし、その言葉のわかる旧移民のブラジル語たるや、「アマニャン・ジャッボン・グランデ・ジャサント・トラバイヤ・ナーダ（注ㄹ）」であった。ブラジル語の単語を日本式にならべることが、言葉がわかることであった。

「ヨー・ガリンニヤ・コンプラ、オセー・テン？」

これは、「私は鶏を買いたいのだが、あなたは持っているか？」という意味だ。

「ノンテン？」

「ノウ」

「ヨー・コンプラ」

「ノウン、ノン・テーニョ」

ただこれだけでも通じないブラジル語であった。しかし、この言葉のやりとりには少し説明がいる。

「ないか？」とたずね、「ノー」^{ノーン}と答えられると、ある

のかと思う。「ありませんか？」「はい、ありません」と日本語式に答えてくれないのだ「いいえ」では理解できないのであった。

日本移民は、ながいあいだ、「ボルトール」(もどる)と「イール・セ・エンボーラ」(行ってしまう)を混同していて、どうしても区別できなかった。これは、ファゼンダ生活以後になってもわからなかったのである。日本語で「帰る」ということは、もどってくるでもあれば、行ってしまう、でもある。「あの人はもうお帰りになりました」と言って、客がすでに辞去したことをいう場合は、「フオイ・セ・エンボーラ」であって、もし日本式に「ボルトウ」と言えば、どこかへ行ったが、またもどっている、ということにもなる。これはファゼンダ生活でわからなかったこと、さらに後まで間違いやすい言葉の例である。

とにかく言葉がわからないもどかしさがつのって、若い人は別であるが、中年以上で、今さら覚えるのもおつくうだという年齢のものにとっては、外人と顔を合わせたくないという気持ちになってしまう。

子供は早く覚えるので、なるべく応対には子供を

仲介にする。子供は、なんでもオームがえしにしやべつては、まず口調からおぼえていく。外人の子供たちのやることをまねする。そして彼らの言うことをくりかえす。

コロニアの子供たちの遊びで、一番目立つのはカロセイロ（馬車ひき）のまねである。子供たちにとって、カロセイロが四頭、五頭のラバを扱い、皮の鞭をピシーツ、ピシーツとならす光景は、なにか勇ましい、また華やかものであった。

子供たちは小さな手車をつくることもあるが、たいが

いは、皮の鞭（むち、シコツテ）一本である。そして、想像の荷馬車のラバを励ますこともあるし、他の子供になにか引かせて馬車に仕立てることもある。たまには山羊に革の小さいのを引かせて喜ぶこともある。しかしなによりも、鞭をこしらえて、これをピシーツと空中でならすことが一番面白く、また得意なのである。

「バーモ・デズゲラッサード・オーウ・センベルゴーニャ！」

このときどなりたてる言葉は、すべて罵言罵倒に使う、いわゆる卑語猥語のたぐいである。犬や豚をおいはらうときにも使う言葉だ。だから、いわゆるシンガ（悪口）から覚える、ということになる。

これはやがて大人もおぼえる。ファゼンダ生活で覚え

たブラジル語（ときにはイタリア語だったりするが）を思い出してみれば、いかにシンガの言葉の多かったかを知るのであらう。

子供たちがこんな言葉を覚え、また親たちもその言葉の意味を解するようになる、「こうして子供の教育をほったらかしていてもいいものだろうか？」と考えるようになる。ファゼンダでもブラジル語の小学校のあったところもある。しかし、子供たちは親たちのわからないブラジル語を暗記してくるだけであつて、「先生はどんなことを教えるのか」ときいても、子供たちは「知らん、日本語では言えん」と答えるだけだった。しかも学校のある農場などは、めつたになかった。子供はただ野放しで育つた。「こうした子供を連れて、自分はやがて日本へ帰ろうとしている。金がたまつたとしても、無学文盲、野育ちの子供を連れて、日本へ帰ったらどうなるか？」

考えてみると夜もろくに眠れないということになる。金もうけが先か、子供の教育が先か、どこかに日本語を教える学校はないものかと思う。

子供のたのしみ

子供たちは自由に野山をとびまわって遊ぶ。子供たちにとっては、白人も黒人もない。みな平等で相棒だ。ト

ニーコ、マネーコ、ジュゼー、バスチヨーン。野原（牧場）を歩きまわって、ピタンガやガビローバの実をとって食べる。カベーサ・デ・ネーグロ（黒人の頭という意味だが、香りのいい大きな木の実）のあるところを知る。やがて森林にはいつてジャトバー（注⑥）やジャボチカーバ（注⑦）の木がどこにあるかを覚える。

アルサポンというわなで小鳥をとることも習う。また、パチンコはゴムが手にはいらなから作れない。そのかわり、ポドツケという、むかし土人が用いた石弓をつくる。小石のないところでは、泥をこねておいて日に乾かし、玉にする。

蜜蜂の巣を見つけると斧の使える十二、三歳の子供をさそって蜜を採りに出かける。蜜蜂には「あぶのような蜂で刺さないものが数種類もある。多くは蜜を小さな袋にためるやつだ。ジャタイー（注⑧）といって、ごく小さい

赤っぽい蜂の蜜は、味がいいので評判である。蜜の袋は片手で持てるくらいしかないものもあるが、とてもおいしい。近よると頭髪のなかや女ならスカートの中に飛び込んで、プウプウやってうるさいのもいる。これは蜜も多いが、薄くて、ときには酸味があったりする。

親たちに見つかってうるさいと思えば、薪をとりに行くのだと言えがいい。蜂の巣はたいてい太い木の切り株

か、倒れた横木にあるから、ついでにそれを割ってかっ
いで帰る。横木の横の腹に斧をたたきこむと、うすく割
れてはがれる木がいくらもある。ペローバなどはそのた
ぐいだ。

やぶのなかで鶏の卵を見つけだすのも面白いし、コー
ヒー園へ他人の西瓜やパイナップルを盗みに行くのもス
リルがあつていい。親が心配しているあいだに、子供た
ちは、またたくまにブラジルの生活に根をおろしてい
くのであつた。

ファゼンタの正月

日本移民にとってクリスマスはなんでもなかった。日
本の農村などでは全然祝ったことがなかったし、まだブ
ラジル人の生活も知らないから、まったくの無関心だっ
た。

しかし、正月はちがう。暮れは暮れらしくしないと気
がすまない。女の人は家のなかをかたづけたり、鶏をつ
ぶしてお正月の支度をする。ただ、餅つきがないだけだ。
むろん、こんぶや数の子などあろうはずがない。

元旦はおとそを飲んでお雑煮を食べる。おとそとはピンガ
を水に薄めたものであり、お雑煮は鶏のだしにメリケン
粉のだんごだ。器用なおかみさんたちは、フエイジョン

（いんげん豆の一種）であんをとり、メリケン粉をこねて、いわゆるソーダまんじゅうをこしらえる。これが正しいっぽいのは正月のごちそうだ。正月だから、とにかく日本をしのぶものでなければならぬ。

ところによると、家長の主唱で新年宴会というのを催す（十一月三日の天長節は、フアゼンダにはいったばかりでなにもできなかったから、せめて新年でも寄り合つて華々しくやろうじゃないか、というのだ）。

これは新・旧移民一同が寄り合つて飲むことであり、これで年始まわりは省くことができる。大晦日にはみんなを持ち寄つた鶏を男たちがつぶす。鶏のないものは鶏一羽分（一ミルないし一ミル五〇〇）を、じゃがいもでもいい、玉ねぎでもかまわない、とにかく、みんなが平等に持ち寄つてごちそうをつくる。ピングはガラフォン（五リットル）で買い、ビーニョ（ぶどう酒）も女たちのために一本くらい買う。もしぶどう酒も飲めないものには、砂糖水をつくつて、これにぶどう酒でちよつと味をつける。ガラナーなどはなかった。といってガゾーザ（ソーダ水）もアルマゼンから買いこむほど、みんなの懐（ふところ）は豊かではなかった。

料理は、鶏のぶつ切りをじゃがいもや玉ねぎで煮たもの。これは船中のごちそうを思い出させる。大根があったらおなますくらいは作る。

会場は、コロコアの家と家とのあいだの空地へパンノ（コーヒー採取用の敷布）を敷いて、その上にあぐらをかく。

暑いから日除けも作らなければならない。どこかの家の一間でも間にあうときは、そこでもいい。しかし、コロノの家のサーラはたいがい狭いから、外を選ぶほうが多い。

食べ物は、大きなバシーア（金だらい）に入れて出す。これはブラジル式だ。お互いに、さじですくって直接口に入れてもいいが、皿に盛って食べる。また、すしなどはないから、にぎり飯でもいいが、ファゼンダのアグーリヤ米ではポロポロしてよく握れない。しかたがないから、これもバシーアに入れて出す。

ピンガは、コーヒーを飲む瀬戸びきのカネキンエヤでやる。なにしろ強い酒であるから、酔いがまわるのめはやい。皮切りに誰かが歌いだせば、もう「おつぎ！」もなにもない。日本で聞いた歌。船中でおぼえた歌。浪曲まがいの明治調のはやり歌から最新流行のカチューシヤまで出る。うさ晴らしは各自の創作文句だ。

『ブラジルよいとこと、だれが言うた

移民会社にだまされて

地球の裏側へ来てみれば

きいた極楽、見て地獄

こりや、こりや』

これはずっとくだってチントウ節だ。まさか前もって作っておいたものでもあるまいが、コーヒー園労働の苦しきから、かかあの愚痴に至るまで、次々と創作される。そして、

『錦飾って帰る日は

これじゃまったく夢の夢

すえは蕃地で野たれ死に

オンサ（注一）に食われりや

せわがない』

てなことにもなる。

しかし、歌って踊れば気がはれる。日がかんかん照ってきて汗だくになっても、「よか正月じゃ」と言う。

「みんなガンバリましょうや、なに、精神一到、すえは百万本の大耕主……」などと吹きまくるものも出る。

酔っぱらって、そのまま土間に寝てしまうもの、よろけながら、コロニアをフラフラと家路をたどるもの、元旦の午後はこうして過ぎてゆくのであった。

あと片付けには、おかみさんたちが一緒になって、日本の思い出話やブラジル生活の苦しさがしめっぽく語られるのであった。

臨時収入と不慮の欠損

一月、二月は雨が多くコーヒー園には草がのびる。一月には間作の一番豆がとれ、二月には二番豆を蒔く。二月半ばころから外作地の稲が出穂をむかえ、コロノにとつては忙しい時期となる。しかも、病気でもして仕事が遅れると、農場側から臨時に日雇人（カマラーダ）を入れて除草するから、その費用を支弁しなければならぬ。

仕事がかどつていれば、ファゼンダが招集する臨時労働（日給仕事）に応じて日給二ミルないし三ミル五〇を取得することができる。

農場には、コロノ受け持ち以外のコーヒー園があつて、ここではないつも、純粹の賃金労働者が働いていた。

この連中はカマラーダとよばれ、ほとんど独身者で、収穫期には主として乾燥場の仕事をしていた。

コロノのなかから招集される男たちは、この臨時の日給労働に出ることを、「カマラーダに出る」と言っていたが、彼らは純粹のカマラーダたちとともに、仕事の遅れたコロノたちの畑で除草の仕事をすることもあった。臨時労働は、連続的には二日か三日続けるくらいであったが、これが数回にわたると、なかなかいい収入にな

る。一日二ミルとしても五日で一〇ミル、二ミル五〇〇なら一二ミル五〇〇である（むろん、この臨時労働にはいろいろな仕事があつて、とうもろこしの収穫とか、牧場の雑草刈りとかで、かならずしもコーヒー園の除草ばかりではなかった）。

ところが、仕事が遅れ、カマラーダを入れられるほうになると、これは大欠損になる。その費用を全部支弁しなければならぬからである。その金額は、カマラーダが一日コーヒー樹何本分を除草するかによつていろいろであるが、とにかく、草がのびて農場側で放つておけない場合にこのカマラーダを入れるのであるから、一日に二百本も除草できるような畑ではないわけだ（乾燥した砂地などでは、新移民でさえ一人で一日に二百本は草をけずれるという。しかし、雨期の赤土はそうはいかない）。かりに一日の仕事の分量をコーヒー樹百本とすれば、一千本は十人分だから、一日二ミルとして二〇ミル、二ミル五〇〇とすれば、二五ミルということになる（一千本二〇〇二五ミルというのは、普通のこととて、コーヒー園の除草が年四回とすれば、その除草賃は一千本につき一〇〇ミル

の場合、その四分の一は二五ミルというわけである。だからカマラーダを入れれば一千本につきいくら賃金を差し引くという規定も出てくる。むしろこのほうが勘定には樂であ

る)。

二千本入れられたら四〇〇五〇ミルになる。もし草がうんと伸びていて百本以下だとすれば、もっと高くつく。これでは、働き手三人家族の一个月分のメザードを超してしまう。なぜなら、千本一〇〇ミル(注13)として六千本を受け持っているものの月割り支払いは五〇ミルだからであり、これはほぼ一か月の食料代でもあったのである。

むろんカマラーダ賃の支弁は、年末の総勘定にまわるのであるが、これでは、コーヒー五十袋(五〇リットル)桧で数えれば百袋)分をさしひかれることになる。もしその年が不作だったら、それこそ借金が残ってしまう。

病気をして、そのうえ医者代、薬代などを支払うとすれば、悲惨このうえもない。医者はまずフアゼンダにいないのが普通で、その往診は距離によって違っていた。月きめで金を積み立てている場合は、月額二ミルくらいでよかったが、積み立て金がないときは、町から馬でやってくるので、一〇キロメートル以内は一〇ミル、これをこせば一五ミル、あるいは二〇ミルということになった。一〇ミルでも労働者五日分の日給であり、コロノにとっては六日分の生活費であった。

雨期に病気が多いのは、雨にぬれて体を冷やしたり、悪い水にあてられたりすることが多いからであって、マ

ラリアばかりではなかった。ぐしよぬれで家に帰ると、ピンガを一杯ひっかけ、ベッドにはいつてあたたまるというのがブラジル式健康法であつたが、日本人コロノたちは、ぬれたまま働くこともあつて、無理がたたつた。また、粗食で過労なところへアミーバ赤痢などにかかる、と、当分仕事ができなくなる。仕事ができず医者代、薬代がかかるところへ、畑へはカマラーダを入れられるとなると、もう気分の上ですつかりまいってしまう。

コロノたちは、一方ではカマラーダ賃を稼ぎ、自分の作物の収穫予想を楽しんだりしているものがあるかと思えば、他方では病氣をして体を壊し、金を使い、そのうえ畑にカマラーダを入れられてがっかりしているものもあり、悲喜こもごもである。

作物の取り入れ

コロノたちは、コーヒー収穫のはじまる四、五月ころまでには、四番草をすませ、山たて（のちに説明する）をしなければならぬ。できるなら、なるべくその前に間作や外作地の作物の収穫を終わらせていることが必要であつた。先に熟れたコーヒーが、そろそろ地上に落ちるようなときには、間作の収穫などを後回しにして、山たてを命じられることがある。むろんそうしたコーヒ

―園は株間に一うねの豆くらいであるから、コロノにとっても影響はないのである。

自分の作物のとり入れ日には、前もって監督の許可をえて、終日自分の仕事をする。

豆は、まず九分どおりまでさやが黄色くなったころ引き抜き、雨期のものではあれば、なるべく木の切り株や倒れた横木の上に並べる。さもなければ、四、五株一塊りにして、これをさかさにして（すなわち根のほうを上向きにして）、地上に置いていく。こうしておけば、乾くのも早いから、四、五日してよく乾いたら、これを一か所に集め、布の上か、あるいは道路のようなところへ持ち出し、広げて棒でたたく。

日本人は「くるり棒」を作って日本式に打つこともあるが、むしろ細長いよくしなる棒でビュンビュン叩いたほうが、能率があがる。くるり棒は女向き、長い棒は男向きとも言える。あとは豆だけを集めてペネイラ（実のかわりをするふるい）であおぐ。あおぐことを日本人コロノたちは「サビル」と言った。

雨期の豆は、乾かない前に雨にうたれて腐ったり、途中で芽を出したりするので、食糧のため少量つくるものは、殻のまま、わざわざ家までかついで帰って、雨天には屋内にかかるく重ねておき、日が照ってくれば、コロエアの庭に干し、ここで豆をたたきおとしてサビルので

ある。

五月ころうれる乾燥期の豆を、日本人はセツカ・フェイジョン（フェイジョン・ダ・セツカ）と言っていたが、これは雨期のように腐る心配が少ないし、また量も多いので、たいがいコーヒー園や外作地で始末をする。

稲はどうするか。

これはまったくブラジル式収穫法に従う。稲を刈りするには日本鎌がいい。ブラジル鎌でもむろん差し支えないが、日本人には日本式稲刈鎌のほうが使い慣れているし、能率もあがる。この鎌はのちに植民地でも使うことになる。わらは全然使用しないから、そんなに下のほうから刈らなくてもいい。場所によると、稲がうんと高くのびるので、途中から刈ってもいい。ただ穂を乾かすために稲の刈り株の上に載せておくので、そうするに具合のいい程度の高さに刈る。もし近くに横木でも倒れていたら、その上に並べておく。

稲こきはない。

細い木の棒で、テーブルよりも少し低い棚をつくる。

この棚に稲の束の穂先をたたきつけるのである。棚のかわりに太い横木でもあれば、それを利用してもいい。カッポエイラには、まだときどき森林伐採時代から残っている太い横木がところどころにあった。だが普通は棚をつくる。棚のまわりには柱を立てて布をはりめぐらすか、

稲の束あるいはわらの束を竿に通し、二段、三段にかけて、もみが飛ばないようにコの字形の囲いを作る。むろん棚の下には布を敷く。

ブラジルの稲はよく乾くともみが簡単に落ちる。

稲の束を大きくふりあげて、二、三度棚にたたきつけるとすっかりもみは穂先をはなれてしまう。棚を長日にこしらえて二人でたたけば、運ぶほうがせわしいくらいだ。稲こきという言葉はなくなって、稲たたきという言葉ができる。

もみをあおぐには唐箕は使わず、高い木の切り株（トッコ）の上に乗って、上からペネイラでサラサラと下の在の上に落として、風にしいなやわらくずを飛ばしてもいいし、大きな布があれば、皿ですくっては空中へ投げ上げる。

こうして風を利用すれば、仕事は簡単にはかどるのである。

どおせ多くて十俵（一〇〇リットル一袋として）くらいのもみである。収穫は一家族総動員（三、四人）で、前後四日もかからない。もみの袋が家の一間にどかりと重なると、コロノの心も豊かになる。

とうもろこしは実をもちで、殻をたおしておく。もつとも、新コーヒー園で、セツカ・フエジョンをとうもろこしの両わきにうえこんだものは、あまり日かげをつく

らないように、とうもろこしのなっているところから上のほうは、すでに下方へ折り曲げてある。実だけの茎がヒヨン、ヒヨンと立っているだけだ。この実をもういで、さらに茎をたおしておく。もぎとったものは、ところどころにつみあげ、ジャツカという大きなかごで、コーヒー園なら道端の一か所へ、また外作地ならどこか一角へ運び、ファゼンダから荷馬車なり牛車なりを雇って家へ運ぶ。

とうもろこし小屋（パイオール）のないものは、どこか部屋の一隅に積み重ねる。もし土間だったら、下に丸太をならべて湿気がこないようにする。

豚にやるときは皮つきのままでも皮をむいてやっても同じこと、豚は上手に皮をむいて食べる。

粒にして使用するものは、夜なべに皮をむき、手でもぎおとす。これがめんどうなら、ジュートの袋に入れ、上から棒でたたけばいい。芯（サブーコ）は、フェイジョンを煮るとき薪にもなるし、コルクの代用品として使われることはすでに説明した。ブラジル人は用便のときに使用する。

とうもろこしの粒は、鶏にやったりカンジーカをつくったり、また、ファゼンダへもって行ってフバー粉と替えてもらったりする。一リットルの粒と一リットルの粉とを替えてくれる。

とうもろこしの皮は、六〇七寸の長さだが、丈夫な
で縄にすることもできるし、ぞうりも作れる。サパトン
を買う代わりに、ぞうりを履く者もあつて、これは夜な
べに作った。暑いとき足がむれないでいいし靴よりも
ビッシュが入らないというので、日本移民の
なかにはぞうりを愛用する者もあつた。

ごくやわらかい皮は、縄たばこを巻くために使う。こ
のころは、みんな縄たばこを吸うようになっていた。

牛車の季節

四月はブラジル（サンパウロ州のことをいうのである
が）でいちばんいい気候だと言われている。日本なら九
月の末ごろの感だといえるかもしれない。

聖週間から復活祭が過ぎるころは天候もおさまつて、
空が急に青々としてくる。新コーヒー園や雑作地には、
とうもろこしの黄色い葉が風にゆれて、パッサロ・プ
レット（小鳩大の真っ黒い鳥）が群をなしてとうもろこ
し畑を飛び立つ。森林のほとりであれば、オウムもとう
もろこしを荒らしに来る。

ペリキットという小型のオウムが一番うるさい。

とうもろこしのとり入れからコーヒーの収穫期にかけ
て、ファゼンダ名物の牛車が活躍する。道路がまだ新し

く、道のなかに大木の根が残っている新コーヒー区域や雑作地には、この牛車が一番いい。これは車輪が厚い板をつなぎあわせたもので、心棒に固定し、いわゆる軸受けで回転するようになっていて、少ないときで六頭、多いときには十二頭くらいの牛がこれを引く。

牛は角の長い去勢牡牛で、角の先には小さい金属の輪がついていて、ひもで対の牛の角につなぐことができるようになっていて。

牡牛は大きな軛（カンガ）をつけて、車にいちばん接近した最初の二頭は、車体からでている中心の轆（ながえ）をはさんで両側から車の重心をとる。

それより先の牛は鎖だけで引っぱる。車夫は、先の方に錫杖のような金具のついた長い棒をもって、どなりたてながら、なまける牛の尻を突つつく。軸受けの車に重い荷をつけ、わだちが土にめりこむ道路を引っぱるのであるから、車は自然とギーギーきしむ。ここに油をそそいで特別いい音が出るように工夫して喜ぶのである。

晴れ渡った秋空のもとに、ギー、ギーとのんびりした音を響かせて、遠くすぎて行く牛車の歌は、いつまでも記憶に残る風物詩である。ファゼンダ生活の苦労話のなかにも、移民たちは後になって、この牛車の音だけは懐かしく回想する。

農場主や支配人はこの音が得意で、遠くからでも、

「ああ、わしのところの牛車はよく歌う」と自慢したものであった。



四月には、まだパイネイラ（パンヤ綿）の花が咲いている。二月ごろから咲き出して、四月いっぱい咲き続ける。この大木がコロニアの近くか、牧場の真ん中にでも咲いていれば、日本人は故郷の桜を思い出すのであるが、ここでは秋の花である。しかし、あの赤ん坊のお腹のようにふくれた幹をもった大木の、無邪気に成長した姿は、なにかブラジルらしい愛情のあり方を暗示するようで微笑ましいものである。

山たて（コロアソン）

コーヒーの収穫がはじまる前に、山たての仕事があると言ったのは、コーヒーが熟れだすと地上に落ちることがあるので、これを見事にしたり、収穫に不便な土の上に置きっぱなしにして害虫の繁殖を促したりしないために、コーヒー樹の下にあるやわらかい土を一か所に寄せ集めておく仕事である。これは、よく草のとれている畑なら、仕事ははい。また、豆の収穫など終わらないうちに、山たてを命じられることもある。ファゼンダにとってはコーヒーが大切だからである。それは日本人が米粒を大切にするようなものだ、と言った人がある。

コーヒー園は、樹齢六年くらいまでは新コーヒーと言って、間作も豆なら二列、三列とコーヒーの樹齢に従って植えさせる。若木であるほど地面に余裕があるから間作を多くさせる。樹齢が六年以上になると、コーヒーの枝もしげって、土地のいいところでせいぜい豆一列くらいしか植えられない。ファゼンダによっては間作を許さないようになる。

山たての仕事は、コーヒー樹が小さいところでは、まわりを円型に掃除する。これはコロアソンである。樹間

に、一本のうね（アルアメント）を寄せていく。もし大きいところなら、四本のコーヒー樹の真ん中に、ポツンと小山のように土を寄せる。これこそ山たてにふさわしい仕事である。土を寄せ集めるには、ロードという幅四〇センチメートルくらいの鍬を使う。むろん場所によっては、普通の鍬（エンシャーダ）のほうが能率があがる場合は、ロードは使わない。すでに雨量がぐんと減って、このころはあまり草もないから、除草よりも仕事ははかどる。一週間くらいで受け持ちのコーヒー園が片付く。すでにコーヒーは紅をさしたように熟れかかったものがある。樹下はきれいに掃き清められたようだ。採取期前の整然とした眺めである。

パトロンの農場入り

四月の末から五月にかけてコーヒーの収穫が始まる。収穫期はファゼンダにとって一番大切な時であり、支配人以下、監督、通訳みな緊張する。

「パトロン・ベン・デ・サンパウロ！」（主人がサンパウロから来る！という知らせが、コロノの間にも伝わる。殿様のおでましのようなものだ。本部（セーデ）の邸宅は、黒人の女中たちによって磨きあげられ、どの部屋もきれいな夜具に飾られる。主婦や息子、娘たちが一緒に

来ることもあるし、客もあるかもしれない。当日は支配人が正装して、馬で駅へ迎えに出る。たい

がいカーキの上下そろいの服でピンと糊がきいている。つば広の帽子をかぶり、皮のゲートルはピカピカに磨いてある。手には皮の鞭（これは一本の棒のように生皮をあんだもの。握るところには金属の輪がついていて、これに細い皮の紐が通してある。手首にかけられるようにしてあるもの）だ。監督も一緒に出迎える場合もあり、ファゼンダで待っていることもあるが、やはり同じような服装だ。ただ支配人ほど物が上等ではないから、あれほどりゆうとしていないだけである。

パトロンのためにはトロリー馬車が出かける。駅者は制服というほどのものは着ないが、それでも洗いざらした真っ白な服を着ている。手に持つものは、棒の先に長い皮のおびのついた鞭である。

汽革が駅に着くと、駅長も出迎える。一応のあいさつがすむと、トロリーに乗りこんでファゼンダへ向かうのであるが、主人も今日はカーキ色の服に皮のゲートルといういでたちである。いかにも主人らしいところといえば、その悠然たる態度である。支配人が十の言葉であいさつするところを一言二言でこたえる。パトローア（主婦）が同伴であるときは、その飾りの多い着物の長いスカートが目につく。色彩は白が基調になっているが、桃

色や背の飾りが単調をやぶり、ことに、頭にかぶったボンネットは、はつきりと貴婦人の装いであることを示す。田舎にはまばゆいほどの服装である。駅では多くの人々が集まって、この貴人たちの姿を眺める。

赤土のほこりをたてながら馬車が進むと、支配人その他が馬でこれに続く。駅者のうちふる鞭が緊張した音をたてる。

コーヒー園を通り、ポルティラをすぎて遠くコロニアをながめ、パトロンの一行はファゼンダの本部へはいつて行く。コロノたちは、パトロンご来駕の光景をはるか遠くから眺める。もし道で出会うものがあれば、帽子をとって見送る程度である。パトロンのほうでは、むろん見向きもしない。パトロン夫妻がセーデに着くと、数人の事務員が出迎えに並ぶ。ここへはコロノやカマラーダは近づかない。主人夫妻はちよつとあいさつする程度で、邸宅の階段をのぼり、ベランダに立つ。ここから一目で見える乾燥場、コロニアなどをながめて、支配人の説明に耳をかたむけ、やがて邸宅内に姿を消す。

ファゼンダは、パトロン（主人）、支配人、監督、コロノ、その他の労働者とのあいだの階級、身分の差は厳しい。

支配人だけはパトロンの従って邸宅にもはいるが、監督などは、もうベランダに上ることもめずらしい。

その他のものは近づこうとしない。支配人と監督、監督と通訳、監督とコロノ、みな身分の差がはっきりしている。コロノが監督の家を訪問する場合でさえ、遠くから呼びかけてものを言う。コロノが支配人に直接交渉するようなことはまずない。ましてコロノとパトロンの間柄になったら、ものを言うこともできないほどである。殿様と百姓の差とも言えよう。コーヒー農場の経営者であるパトロンは、この間の事情をつねに頭において、なによりも威厳を保つことにつとめる。そのためにはいかなる場合でも態度をくずさず、言葉数をできるだけ少なくする。

フアゼンダにおける日本移民のいざこざは、こうしたしきたりにたいして認識を持たなかったところから起こったものが多かった。

コーヒー採取（アパンニヤ）

コーヒー採取期になると、コロノたちは起床の鐘（四時から五時）に起き、六時の出動準備の鐘までに、朝のコーヒーをすませる。夜が明けて監督のブジーナ（角ラッパ）がコロニアに鳴り渡ると、みな家を出てコーヒー園へ向かう。フアゼンダにおいていちばん時間厳守の時期である。

五月ころはまだいいが、六月にかかると、朝はかなり寒い。みんなコーヒー袋を上着のかわりに肩にかけ、ラステーラ（くまで）、ペネイラ（ふるい）、コロツテ（水樽）をかついで仕事場へ急ぐ。ブラジル人、イタリア人、みな多少服装に違いはあるが、日本人コロノのように目立たない。新移民の女たちの日本着をブラジル式に縫い替えたような服装が目立つ。かすりや縞の暗い色調と、ほぼ白一色のかぶりもの（ネツカチーフや手ぬぐい）はイタリア女たちの赤いものと強い対照を呈する。日本人の男たちが巻きゲートルに地下足袋や烏打帽ででかけることは、「入耕」当時の「仕事はじめ」に書いたとおりである。

採取（アパンニヤ）期には、ブラジル人やヨーロッパ移民の女たちも、みな男たちと一緒に弁当をぶらさげて畑へ出る。ただしコーヒーが不作の年は、コロノたちもあまり仕事に気乗りがせず、女たちはなるべく仕事に出ないようにする。これに反して豊作のときは、女も子供もみな喜び勇んで出かける。監督も出勤時間後、コロノの家を見まわる必要がない。

監督または通訳に率いられてコーヒー園へ出ると、日本人もブラジル人もイタリナ人もみな同じ畑（タリヨン）という。三千本とか五千本とかのコーヒー園が車道で

区切られている一枚の畑、一定していない）で仕事を
する。家族数に従って、二畝とか三畝とかを受け持ち、ず
らっとならんで働くので、なかなか威勢がいい。

そして、たいがい仕事の終わった順序で、またつぎの畝
へかわる。

これが公平にいかない場合は、「監督が不公平だ」と言っ
てコロノたちが不平を言う。ずっと前の草で書いたように、
イタリア人コロノあがりの監督が、イタリア人だけにと
くになりがいいコーヒー樹の畝を渡したというのが、
日本移民の不平のはじまりであつた。気のきく監督は、
むしろ、いい仕事をする家族にこそ、いいコーヒー樹が
あたるように仕向ける。今度はなりのいいところだか
ら、はやくここを切りあげて先へ移ろうと思って、粗雑
な仕事をする、「ケ・セルビソ・エー・イースト！」
（これはなんという仕事だ！）と怒鳴られ、呼び返され
る。

虫のいどころがわるいと、次から次へと仕事のミス
を指摘される。それは枝に摘み残しのあつた場合、コー
ヒーが地上にこぼれている場合、いろいろあるが、監督
ににらまされると、二粒、三粒でも拾わされる。それが遠
いところへ呼び戻されるときには、せつかく先へ行こ
うと思つていても、いいところはどんどん人にとられ
てしまう。

仕事の要領については第一回移民のところで書いた。日本人だから日本人だけがかたまつて働くということはない。前日からの順序を追うか、朝仕事場に着いた順番に従う。みなそれぞれ手順を決めて、高いところは誰がはしごととる、低いところは誰の仕事、ペネイラは誰、あとの掃き集めは誰というようにして仕事を進める。やがてのど自慢で歌いだすものがある。

『アア……、ラララ……』

ペネラになりたや

とり入れどきの……。

おなごの腰にぶらさがり

いつもいっしょに

あるきたい（注一⁴）。

すぐとなりの畝のものと近づくと、どつちからか話しかける。「ジミゼー・ボセー・サーベ？」（ジミゼーさんよ、お前知ってるかね、こんなこと？）

「エエ？……ウンウン」

ワッハッハと笑いこける。なんだなんだと、隣りから隣りへ笑い話が伝わる。だが日本移民にはこのアネドツタ（笑い話）も毛唐の寝言のチンプンカン、まあ、景気を出すために日本の流行歌でも歌う。

「ムイト・ベーン！」（プラボーとはやしたてる者があ

る。

「おい、コーヒーをかつぎ出すのは俺の仕事だ。枴で計るにはナ、米とおんなじで、うまく入れないと、よけいに詰めこけことになるぞ！」と言うものもある。枴の代わりに袋の横線でリットル量を決めるところでは、これは入れ方によってかなり違う。ここでも監督によって意地悪く分量を監視するし、枴は決してコロノに使わせないところもある。むかしは五〇リットルの「アルケール枴」が一定していなくて、五〇リットル以上入る枴を使うファゼンダもあり、このことでコロノとの間にいざこざがおこった(注15)。ファゼンダのほうでも枴目をごまかしたのである。

しかし、また人気とりをもくろむ監督は、コロノの細かいズルは見て見ぬふりをする。

「あの監督は、なかなか腹が太い」と好感をもたれる。監督にしてみれば、コーヒーはファゼンダのもの、しかもコロノがごまかす量など知れたものとたかをくくって、とにかく収穫をはかどらせることに意をそそぐ。そしてそのほうが結局は支配人にも喜ばれ、農場主にも、いつか目をつけられるということになるのである。

ペネイラの仕事をやるものは、たちまちほこりで顔は赤黒くなり、目だけが光りだす。しかもこのペネイラ使いは娘たちが上手なので、彼女たちがまっ先にほこりを

あびる。遠くからコーヒー園をながめると、赤いほこりが空中に舞い上がっているので、どこで採取があり、ペネイラが使われているかがわかる。

パンノ（またはレンソールⅡ敷き布）を使わずに地上に直接もぎおとすところがある。砂地のところなどが多い。そうしたところでは、まず五十本なり百本なりの畝を、二畝なら二畝全体をこぎ落とし、そのあとからいつせいにこき集め、コーヒーをふるいわける。袋に詰め、車道（カレアドール）までかつぎ出す。

地上にこぎおとしたものをラステーラ（くまでの一種）でかき集め、ペネイラであおぐときは、まったく泥まみれになる。目だけを白黒させた顔の愛嬌のあることは、コーヒーを採取したことのあるものなら、思い出したら吹き出さずにはいられないだろう。

ペネイラ使いのことも前に書いたが、長いサイア（スカート）に赤いレンソの娘たちが敏捷に体を動かす手ぎわのいい作業ぶりは、胸がすくようだ。ペネイラ使いをペネイラメント、あおぐことをアバナールと言う。日本人はバナ・カフェーとなまり、ふつうはサビルという。

コーヒーのなりが悪く、みんなが仕事に熱がなく、ブツブツ言いながら、先をいそぐ気配すら見せないときは、おそらく、これを監督する人間でもため息が出るほどつらいものだろう。

第一回移民のコーヒー採取がたしかにそうであつた。平均して一人で一日四、五袋摘めることは、かならずしも移民会社の宣伝ばかりではなかつた。平均であるからそれより多いことも少ないこともあるが、一般の標準のようになつてゐるものであつた（注一〇）。それが一族三人して一袋も摘めなかつたところもあつたのである。しかも当時はまだメザードももらつてゐなかつたのであつた。

仕事は監督のブジーナではじまり、ブジーナの合い図でアルモツソ（昼飯）をやり、二時のカフェーをやる。アルモツソには一時間くらい休み、カフェーには三十分くらい休む。むろん、沢山なつてゐるときには、食事もそこそこで仕事にとりかかるが、なつてゐないときはなるべくブジーナがなつてから、ゆつくり立ちあがる。

コロノたちが採取したコーヒーは、道（カレアドール）端にかつぎ出し、監督の目の前で枴で計り、袋に詰めておく。ファゼンダの馬車が来ると、監督が袋に記された番号を帳面に記入し、車に載せる。乾燥場からもどつた空袋をコロノたちに返す。コーヒーの袋を積んだ馬車は、馬車引きのどなりたてる声とともにコーヒー園を抜け、ファゼンダの乾燥場へ向かう。乾燥場や精選所の仕事はコロノのうけもちではないから、このファゼンダ生活からはぶく。

仕事は日没とともに終わる。監督のブジーナが鳴りひびくとコロノたちはいつせいに仕事をやめ、はしごなどはコーヒー園へおいたまま、あとの道具はみな家へ持ち帰る。泥まみれになった人間の帰宅は朝とはまるで違った光景だ。娘たちがいちばん先に走って家にもどる。

家へもどって手を洗うときは、腕がひりひりして、はじめは皆びっくりする。コーヒーの枝でひっかいたところの水にしみて痛むのである。石けんを使うと飛びあがるほどもしみる。しかし仕事を続けているうちに、こんなことも、やがて無感覚になってしまふ。当時は女でも手甲などはめるものはなかった。

コーヒーちぎりも六月から七月になると、多少仕事のやりにくいことも出てくる。第一朝が寒い。ことに川に近いコーヒー園は深い朝もや（セラッソン）につつまれてしまふ。そうするといつまでもコーヒーの葉がぬれていて、仕事をしていると胸から腹にかけてびしょ濡れになる。これがとても冷たい。ときどき道に焚火をしておいて、あたりながら乾かす。

もう一つは、コーヒーが熟しきって黒くなると、摘みとった量がうんと減る。柘目が少なくなるわけだ。そのうえ枯れ枝が多くなると、ここへ手をさしこんでこぎ落とすとき、腕をざらざらにひっかかれる。みんながこれを嫌がって、棒でたたいてたたき落とすようになる。

ファゼンダではこれをととても嫌う。むろん上手にやればなんでもないことであるが、下手すると次年度に結実する枝を傷めてしまう。コーヒーは一度なった枝のその部分にはもうならず、葉のついてる部分に翌年なるのである。これをいためたら、翌年の収穫が減少する。この葉のついてるところだけを傷めずに実だけをたたき落とすなどという芸当は、採取量によって賃金のたかが決まるコロノには無理な注文。棒でたたくことは厳禁するにしくはないということになって、どこの農場でもこれはご法度なのである。ところが、監督が見てさえいなければみないっせいにパタパタたたき出す。監督があとでまわって来てみれば、やはり青い葉がたくさん落ちているからすぐわかる。わかってても現場をみないのだから、言いのがれはいくらでもある。へんなかんぐりで物を言ったらコロノたちにうらまれる。こうした禁制を守る点では、日本人が一番だというファゼンデイロ (A. Ramos, 五五七ページ) もいる。

日本人は金もうけを急ぐために、ファゼンダに落ち着かない、という点で、コロノ失格だったのであるが、仕事が早くてコーヒー樹を傷めず、他のコロノたちのように監督を厳しくしなくてもいい、という信用は得たのであった。

収穫期には、支配人もコーヒー採取の現場にあらわれ

て、仕事の進み具合を見る。農場主も馬をとばして、そのさっそうたる姿をコロノの前にあらわすことがある。ときには言葉もかける。収穫期以外にはめったにないことだ。つばびろの帽子をかぶり、皮のゲートルをつけ、腰にはピストルをぶら下げている。栗毛のつやつやとした毛なみの馬で乗りこんでくる姿は、戦場を巡視する南北戦争当時のアメリカの将軍そっくりである。

コロノの暮らしぶり

一九〇〇年ころまでの好景気時代には、コーヒー採取目当ての出稼ぎ移民のなかには、収穫が終わると支払いを受け、これを金貨にかえ、揚々と帰国するイタリア移民があつた。一九〇六年の豊作の年にも花火をあげて帰国祝いをするにぎやかな光景が見られたという。

しかし、日本移民がくるころは不景気のどん底で、もうそんな景気のいい話は聞けなくなってしまった。一九〇二年には、イタリア政府はブラジル行き移民を禁止している。これは、ファゼンダにおけるコロノの扱い方が非人道的であるということが、イタリアの議会で問題になったからでもあるが、すでに不景気の風が吹き始めて、農場の支払いも停滞がちで、コロノの生活が苦しくなったからでもあつた。しかし、一九〇六年、コーヒーの価

格調節が実施されてのち、一九〇七、八、九年のどん底から、だんだん景気も回復に向かい、一九一一年ころからは、コーヒーの値段もよくなり、コロノの生活もかなり安定していくのであった。

ここでは、線香花火のような好景気のあと不景気のどん底におちいり、多くの大農場がいままでの行き方に大きな反省を強いられた後、やっと落ち着きだしたころ、コロノたちの暮らしぶりはどんなであつたろうかということ調べてみたい。

第一回移民の一九〇八年当時、一千本のコーヒー樹手入れ賃は年に八〇から一〇〇ミルであつたのが、一九二二年には一五〇から二〇〇ミルになっている。コーヒー採取賃は、五〇リットル一袋が五〇〇レイスであつたのが、六〇〇く八〇〇になり、臨時労働の日給は、二ミルから二・五だつたのが、三ミルから三・五になっていた。この日給は、だいたい当時の農村労働賃金の標準となるもの（コーヒー農場以外のサンパウロ近郊などの労働者は、この半額もとつていなかった）であるが、コロノはコーヒー採取賃があるので、月割り支払いになっているメザードでは、これだけの率の賃金はもらっていないかった。コロノたちが、自家消費の穀物を得てはじめて生計がなりたつことは、あとでくわしく書く。だがこの点では、一九〇八年ころも一九二二年も変わりがない。

一九一〇―一二年ころ、一時好景気はあったが、一九一四年ヨーロッパの第一次大戦となり、輸出減少と為替下落で、ふたたび不景気がおとずれ、一九一八年の大霜のあとではコロノの移動が目立ち、一九二〇年ころは新地帯（ノロエステ方面）へ向かうコロノが多かったと言われている。

大戦と大霜にはさまれたこの時代は、たいした賃金の変化もなく、日本移民たちはいいいコーヒ―農場に四、五年落ち着いて土地を買い、小独立農に向かうか、コーヒ―農場生活は二、三年で切り上げて、歩合作なり、コーヒ―仕立ての四年ないし六年の請負仕事をやってから、自分の土地へはいることを考えるようになっていた。コーヒ―農場に落ち着いて働いているもので、賃金労働で金をため、帰国しようとする者はもうこの時代にはなくなっていたと言っている。

前にも書いたファゼンデイロの言によると、当時（一九二二年ごろ）土地を買って独立しようとするものは、日本人コロノが第一で、多くは米作を行なったと言っている。

ここでは、各国のコロノたちの生活ぶりを前記のファゼンデイロの説によつてながめてみよう。この本（注一）は、独立百年祭（一九二二年）の記念出版として、一九二五年にたものであるが、資料は一九二一―二二年ころ

のそれであって、しかもとくに日本移民の弁護のために書いたものでない点は注目されていると思う。

日本人コロノは仕事が早くて、丁寧であるという評は前にも書いた。

「彼らは儉約家で、家具を買いこむ金も惜しみ、どここの国のコロノよりも一番はやく金をためる。しかし金がつたまると農場を出て、同国人が集まって土地を買いあか借りるかしてマラリア地帯もいとわず米作をやる」
（土地の事情をよく知らない当時の日本人は、一時米作にあこがれて川べりの底地を開拓したので、ブラジル人にはさう見えたのであろう。マラリアには、後でかかって、みんな苦しんだのである。知っていて意に介さなかったわけではなかった）

「ヨーロッパ移民も、一般に金を貯める。だが家にしまっておくか、利子稼ぎに利用する。

しかし、不幸にして皆が皆そうではない。もうけては飲むという悪習にそまる者が多い。」

（そのかわり、農場を出ると近くの四つ辻でベンダー・食料・雑貨・飲み物店――を開き、知りあいのコロノ相手の商売をはじめめる者、あるいは農場で経験をつみ、支配人からやがて大農場主にのしあがる者があつたことは、日本人の生き方と大分ちがっていた。しかも同じ農場主の語るところによると、イタリア人が一番家のなかをきれ

いにしていて、とくに寝台などは、とうもろこしの皮を十分
つめ、真っ白なシーツをかけて、いかにも終日の仕事の
疲れを休めるのに具合のいいものをこしらえていたので
ある。日本人の何もかも儉約ずくめとはずいぶん違って
いた。日本人はほとんど例外なく、現在を犠牲にして先
を急いだ。しかも生活様式が変わってしまったので、家
具を整えるにても、どのように整えるのかわか

らなかつたし、イタリア移民などがやるように、人目につ
くところへ、麗々しくりっぱな寝台を飾るようなことは
どうも趣味に合わなかつた。畳の上で生活してきた日本
人は、「とこをあげる」という習慣がどこかにしみついて
いて、敷きぶとんはどうしようもないとしても、かぶり
ものはみなたたんでおくのであつた。食物などはどうし
ても米食をはなれることができなかったから、ファゼン
ダにはいつて食糧生産ができないあいだの新移民は、い
かにして米の分量を少なくするかを工夫し、さつまいも
やマンジョカをきざんで卸飯に炊きこんだり、とうもろ
こしができると、あのやわらかい実をけずりこんだりし
て節米に苦心した。日本の貧しい農村の生活を再現する
のであつて、気候風土のちがつたところで、栄養失調に
苦しむのではないか、などということは考えもしなかつ
た。そして、みんなが健康なあいだは、おかみさんたち
はむしろ、ほがらかに節米の苦心を吹聴しさえした）

「ブラジル人コロノは、一般に野心がなく、生活の改善を考えない。そして年末になると主人に借金を残す。

これはなぜかわしいことである。労働によくたえて、経験もあるのだから、他の国のコロノたちにくらべてより短い年月のあいだに土地を購入し、独立農にはいることもできるわけである。もちろん例外はある。しかし私のながい農業者（農場主としての経験によると、数年仕事にうちこんで、飲酒の悪習にもそまらず、最後までがんばって金をため、小土地所有者として独立していったものは、決して多くはなかった。』

（ブラジル人といってもいろいろある。このファゼンデイロも他のところで言っているように、一九一四年ころ、ある大農場では九二%の児童が文盲であったのが、一九二二年では八〇%に減少したと言っている。教育程度も低く、文盲が だんせん多かった時代である。そして、そのころ家庭をも っていたブラジル人コロノのなかには、奴隷の子供も多かったはずである。教育のない彼らのファゼンダ生活は、むしろ体を適当に動かしていさえすれば生活は保証されていたので、借金など気にしなかったし、計画して生活をたてなおすことなど考えも及ばなかったことと思う。筆者の経験のなかにも、こうしたブラジル人があった。あるとき、

農場をかわろうとして、そのことを監督につげると、「お前

には、これこれの借金があるではないか、それを支払って出られるのか？」と言われたら、「ああ、そうだったか」と言つてまた腰をすえてしまった。彼は子だくさん、たしか六人くらいあつたが、一番上がまだ十一か十二、受け持ちコーヒ十樹も少なく、間作はほとんどなく、むしろ臨時労働のほうで稼いでいたであつた)

日本人コロノの家

日本人コロノの暮らしぶりをみるためには、彼らの住まいの内部がどんなふうなものであつたかを描写する必要があるになってくる。

日本人コロノの家は、新移民と旧移民（と言っても二三年前に着伯したものであるが）とにわけてみるべきであらう。

まず新移民の家からはじめよう。

当時の日本の農村には、洋式生活というものは全然はいつていなかったから、彼ら移民たちは、ブラジルへ来ても、日本での生活を基本にして家のなかをととのえることしか考えられなかった。むろん、ここはブラジルであるから、こんなにしたらいいだろう、というような意識的くふうはなされた。

コロニアの家は、たいがい表側が入口で、ここがサー

ラ（客間兼食堂）になり、裏側は炊事場になっていて裏庭につづく。そしてそのあいだが寝室というようにつくられていた。

レンガづくりあるいは坂家で、屋根はかわらであり、床はたいがいレンガづくりなりレンガ敷き、木造の場合には多く土間、家は木の芹だけでガラスはなかった。コロニア全体の有様はすでに記述した。

ブラジル人やヨーロッパ移民なら、表側からはいったところには、かならずテーブルがおいてあって、たいがいこれに白い布、あるいは、模様づきのテーブルクロスが掛けてあり、その上に小さな素焼の水入れ（モリंगा）がコップないしカネーカをそえておいてある。テーブルの前後には、バンコがある。気のきいたコロノなら、蒲の穂であんだ椅子の二、三脚はあるだろう。このサーラの壁には、色刷になった聖者の像が額縁に入れてかけられていた。

ところが新移民の家のサーラには、これらのものはな一つなかった。入口のサーラは、ガラーンとして、テーブルはもちろん、バンコや椅子もおかれていない場合が多かった。ここは、いわば物置きなのである。仕事から帰ると、ここの一隅にエンシャードをたてかけ、あるいはひさしの隙間からぶらさけておく。壁の釘にペネイラをかける。収穫後なら、米や豆の袋を積みかさねる。

土間の場合は、穀物の袋を直接おけば、土にあたったところが湿るので、丸太を二本ないし三本横にならべ、その上に袋を縦にならべて積みあげる。穀物の袋のかわりに柳行李が積まれてある場合もあった。ここにテーブルをおいて、客間や食堂に使用するものもなかったわけではないが、それはむしろ例外に属する。新移民にはまだ、家庭生活をたのしむ余裕がない。日曜も祭日も働くのであるから、サーラは必要がなかったのである。客があつて話しこむようなときは、むしろ寢室のほうを利用した。ここは広い板の床ができていて、ござが敷いてあるから、ここに坐ったり、あぐらをかいたりして、コーヒ―やピンガを飲む。戸棚や棚は、ベنداから買ってきた空箱を使う。移民の荷物には、色彩のあるはなやかなものはなかったから、ここはまったく日本の山小屋のなかだ。夜だったら、片すみにカンテラがともされていて、人の顔は照らす、四囲の壁は、ただうすぼんやりと見えるだけだ。壁の釘にはよごれた仕事着などがかけてあるが、そんなものはよく見えない。新移民たちが、一番多く利用するのは、裏側にひさしをおろして建ててある炊事場（コジーニャ）である。夜も日曜もたいがいここで過ごす。コロニアのコジーニャは案外みな広い。出口のほうのわきにレンガまたは土で築いた大きなフオゴン（かまど）がある。そのかたわらに、たきぎ、水などをお

く場所がある。コジーニヤの中央か、あるいは窓ぎわに、テーブルをおいて、これを囲んで食事をする。むろん、おやじさんは一番奥にがんばる。主婦はすぐ立ってサービスできるように、フォゴンに近いところに座をしめる。子供や兄弟は、その中間、ただ妹とかいとかの女性がいる場合は、主婦の座に近いところに坐る。主婦の代理をすることもあるからである。

食器はブラジル式になっている。当時は、ほうろびきの深い白い皿で、へりが青い緑で塗られていた。さじは、アルミではなくて鉄製でジंकがかけてあった。ナーフなどは使わない。食べ物、鍋のまま、テーブルの上に出した。テーブルクロスは使わないから、汚れる心配はない。まっ黒にすすけた鍋をみつめながら食事をするのである。鍋、釜は日本から持ってきたが、どうも使いにくいので、底のたいらな鉄の深い鍋、カルデイロンを買った。ブラジルのフォゴンにはこれがかけやすい。また少し浅くて手のついたカッサローラ（むろん新移民はこんな名前をまだ知らない）もある。これは豆を煮るのに都合がいいからだ。たきぎは十分あるから、朝仕事に出るとき、豆に水をたっぷり入れ、フォゴンのなかには大きな丸太でもつつこんでおけば、夕方帰ってきたときは、よく煮えている。こげつくことはあっても鋳物鍋だから心配はない。むろん、わざわざ日本式のかまど

をきずいて日本の鍋、釜を使っていた人もないことはなかった。湯わかしは、日本のやかんを使っていた。お茶がなかったので湯を飲んだ。まだ食事時に水を飲む習慣はない。食物についてはもう何回も書いたから、ここにくりかえさないが、一か年ないし一か年半の農場生活で、いくら油ものをよけい食べるようになっていることは事実である。食事のあとの食器を石けんで洗うこともおぼえてくる。

新移民たちの心理は、一日もはやく契約期間を無事に過ぎすことであつた。コロノ生活をブラジル生活の初等科と考えるのは、あとで振り返つてのことであつて、もし契約ということがなかったら、なれないコーヒー園労働に一年も一年半も辛抱しなかっただろう。コーヒー農場が儲からないことがわかれば、ただちにどこかへ移動することを考えたに違いなかった。だから逃亡ということも新移民に断然多かつたのである。その生活はまったく腰かけのであつて、儉約ということも、どうせ一年の辛抱だ。引越しのことを考えると家具もいらない。よけいな鍋、釜もじやまになる。日本人の好きな風呂さえもキント（大将）をすえてわかすものは少ない。たまらなくなるとどこかへもらいにいく。つねに身軽で飛び出せるようにしていたのであつた。

旧移民の気持ちは違つていた。ここで二、三年働い

たら、土地が買えるかもしれない。

そこまで行けないとしても、つぎの仕事にうつるいくらかの資金はできるだろう。

豆があたったら、米があたったら、といろいろ予想している。希望をもって元気で働くことだ。

見聞も広くなっているから、むりをしないで、生活を楽しみながらやることだと考える。

まず、テーブルや椅子をそなえて、サーラをかたづけろ。土曜、日曜には、ファゼンダの製材所から板を買ってきて、テーブルやハンコをこしらえる。椅子も何脚か買う。腰をかけるところが、蒲の葉であんだものは丈夫だし安い。当時は四ミルくらいだった。鋏や穀物は別の間（ま）にかたづけて、客があったらテーブルのあるサーラのほうへ通す。モリング（水入れ）は、日本人はまだ必要としない。聖者の像の額は飾らないが、フオリーニヤを壁にかける。当時はすべて日めくりであつた。

カーザ・サン・ジッサーと台紙の上方に屋号が印刷してあり、その下に、アルマゼン・デ・セッコス・エ・モリヤードスと書いてある。場所もでている。町の店である。現金を持っていたから町で買物をした時にもらってきたものだ。きれいに着飾ったイタリア美人の絵もついている。フオリーニヤ一つでもサーラはいきいきとしてくる。テーブルは日本式にきれいにふきこむ。新移民のときは

磨きあげる対象が一つもなかったが、旧移民になると、テーブルを磨く。つやのあるものが家庭にあらわれて、落ち着いた気持ちをそえる。ただ、テーブルクロスを使わない点、まだ日本式だ。

夜はカンテラのかわりに、ランプをとす。ランプは竹筒のように長いホヤで、背後に丸いブリキの反射鏡がついて、壁にかけられるように太い針金も通してある。テーブルの上におくこともできる。夜のだんらんには、明るい光が大切だ。

寝台の壁にぶらさがっている着物も、だいぶんブラジルで買いこんだ布でつくったものが目立ってくる。第一、女の人の服装がちがってきた。ブラジルで買ったサイヤ地には色彩がはいっている。日本人だから、なるべく目だたない地味なものを選ぼうとしても、どこかに赤っぽいものがはいっている。

寝台には、たつぷりとうもろこしの皮をつめた厚い敷きぶとん（コルション）をそなえる。

男もカーキ色のズボンを好む。サパトン（労働靴）を履き、首にレンソを巻く。ときには腰にファツコン（刀）をぶらさげる。

炊事場のほうは別に変わらないが、片すみに行水をつかうに便利のような工夫をする。また、キント（大樽）の風呂桶をすえる。下から火を焚く工夫もするが、た

いていは石油の空缶で別にたっぷり湯をわかして入れる。戸棚のかげにカーテンを引いてもいい。カーテンといつても、細い棒にジュートの袋をぶらさげる程度だが、とにかく風呂場をつくる。日本人にとって風呂はなにより生活を落ち着かせるものである。

コーヒーのいれ方が上手になる。コーヒーのいれ方が上手か下手かで、ブラジルの生活にどれだけ根をはったかが判断されそうだ。フォゴンの上には、いつもトウシーニョがぶらさがっている。食料品がととのっている証拠である。男は薪割りが上手になったから、いつもかまどのわきには一週間分くらい積まれている。

裏のマンゲイロンには豚が四、五匹いる。これは牝隊から生まれたものだ。シケイロにも肥し豚が二匹はいる。

夕方仕事から帰って、とうもろこしをやるときは、チョウー、チョウーとどなる。主人の声を覚えていて、どんな遠くにいても、プウプウやりながらとんでくる。マンゲイロンの柵を越えてなかにはいると、豚どもは主人に体をすりつけてくる。靴で腹をこすってやると、ごろつと寝転んで、いかにも気持ちよさそうに、グツ、グツとやる。いいかげんにして家へ帰ろうとすると、「もつと遊んでくれ！」というように、ダウダウ騒ぎたてる。

柵の穴からとびだした子豚などは家までついてくる。

「こいつらを年末に売っ払うと、一匹一〇〇ミルとしても六〇〇ミルか。それに豆が二十俵とれるとして、一俵一〇ミルで二コントだ。それにコーヒーは何俵かな？　ファゼンダだって、やりようじゃ、まんざら捨てたものでもないさ……」と主人はほくそえむ。

こうして、いいファゼンダに落ち着いたものは、ここで資金を稼いで独立農にはいることもできるのである。ただ旧移民といっても、ブラジル生活に古いほうで四、五年だ。まだあせる気持ちが無くなったとは言えない。十年以上たったとき、みんなが考えることは、なぜあんなに焦ったのだろう、ということだ。あるとき、あそこにもう少し辛抱したら、いまはもっと楽だったかもしれないと考える。しかし、ブラジル生活の五年目くらいまでは、一年一年が大きな重力となつて、「どうしたんだ、なにが残ったんだ！」と心にのしかかってくる。五年たったら一万円もうけて帰るはずではなかったのか。故郷（くに）を出るときの大言壮語はどうした。親・兄弟はなんと考えているだろう。ついに送金もしなかったではないか。こうした心の悩みは、むしろ旧移民のほうに深かったかもしれない。

ファゼンタの人間的環境

最後に、コロナにおける人間的な環境、すなわち、隣近所にどんな日本人以外のコロノが住んでいて、どんな感をもったかということについて書く。

八重野松男の『今日のブラジル』からヒントを得て書く。これは調査者のアンケートのなかにははいつていなかったらしく、特別な意見や感想はないが、フアゼンダ生活において

「なにが苦痛であったか」の項目のなかでただ一人、それを告白しているものがいたからである。よほど身にしみていたとみえて、近所どなりに最低の生活をしている家族がいて、新米の日本移民の生活に大きなショックを与えたことである。ブラジル三界まできて、こうした人間といっしょに生活しなければならいかと思うと、それがいちばん苦痛であったと述べている。

もし、長くブラジルに生活している者ならば、これはどこかで経験することであろう。ここでは筆者の経験に基づいて、具体的な例で述べてみよう。

時代はこの調査から十年前にさかのぼる。一九一七年のことであって、奴隷解放後二十九年目の年であった。それは子供のたくさんいる働き手の少ない家族であって、いつも借金つづきのままでフアゼンダ生活をしていた。

家のなかにはテーブルもなく椅子もない。小さな腰かけと丸太を短く切ったものをハンコの代わりにしていた。家長は大男のお人好し、おかみさんにどなりつけられながら働いても働いても暮らしは楽にならない。

子供たちは、小さいもの（四、五歳まで）はいつも丸裸、大きい男の子はおんぼろのズボンにシャツなしで、いつもおへそ丸出し、女の子は簡っぽのような着物を着ているがズロースもはいていない。むろん皆裸足である。おかみさんは大きなお腹をして、いつもガミガミ子供たちをどなりつけている。家のなかには豚もはいたり、鶏もとびこむ。やせ犬がよたよたしていた。家のまわりにはとどき子供のうちこが転がっていた。

日本人コロノが家で食事をする折など、その子供たちはいつも戸口にきて何か欲しそうにしてながめている。一度やったら必ずつぎの日もあらわれる。

やがておかみさんが、カネーカ（せとびきの碗）かブリキの空缶をもって、砂糖を貸してくれ、米を貸してくれ、とやってくる（彼らはとうもろこしの粉と豆だけを食べているのである）。むろん、隣のものが食料を借りにくる場合、日本人は必ず貸してやる。しかし彼らにとって、貸してくれということとは、「くれ」ということと同じである。ブラジル人なら、うるさくなれば、「ない」といってはっきり断るだろう。さきに貸したものは「くれてやつ

た」ものとして忘れる。日本人は貸したものを返さないとはけしからんと思う。たまに催促すると、必ず「今日はないから明日買って返す」という。永久に明日であつて、むろん返さない。

たべものなどはいいい、「のこぎりを貸してくれ」、「かなづちを貸してくれ」といって道具をもっていく。これも返さない。むろん仕事の終わつたところを見計らつて、催促に行けば、「どうも、ありがとう」で返してくれる。ところが、三日たち一週間たつと、いつのまにか彼らのものになつてしまふ。あとになつて「それはわしのものだ、いつか貸したではないか」というと、「いやそうじゃない、これは自分が買ってきたものだ」とがんばる。もう話にならない。

鶏を盗んで食うくらい平気である。これはけしからんと思つて抗議すると、どなりたてて弁明し、罵言雑言で応酬する。彼らにしてみれば、自分のものか他人のものか区別がつかなくなつたのかもしれない。コロナには、いつも鶏が放し飼いにしてあるからである。そう解釈しなければ、彼らの心理は理解できない。悪い人間かと思えば情けにもろいところがあつて、病気でもして寝ているとさかんに「コイタード」（かわいそうに）を連発する。さも気の毒そうな表情をする。ときには、えたいのしれない薬草などをもつてきて、これを煎じて（ファゼール・

シャー）飲めばかならず治る、という。

こうした人間には付き合い万があるのであるが、日本移民はただ当惑するだけで、とんと見当がつかない。監督などは、頭から命令調でとなりつけていた。

こうしたことから、ブラジル人に対するまちがった先入観を植えつけられることは不幸である。奴隷時代からしいたげられた境遇に生きてきた彼ら黒人に対する認識はないし、また、どのような態度でつきあったらいいか、全然わからなかったのである。日本におけるデリケートすぎるような近所どなりに対する気の配り万など、ここでは全然問題にされなかったのである。

もし、こうした黒人のみじめなファゼンダ生活と、農場主側の圧制的な態度を対照するならば、そこにあらわれるファゼンダ像なるものは、奴隷制時代以来の暗黒面だけになってしまいう危険がある。たとえば、ここに、『今日のブラジル』の他の場所にでている記事を示すならば、

「余の渡伯せし大正二年（一九一三）頃は、当線（モジアナ）における普通のコーヒー園は移民を賃金奴隷のごとくとりあつかい、或る耕地（ファゼンダ）の如きは、移民の知人が訪ねて来ても、門前払いをして面会させぬことすらあった。これは移民を盗みだしてきたのではないかとの耕主の心配からでもあるが、訪問者は実に不愉快である。中には暴行を加えられて、

追い払われた者すらあるときいている。又手紙なども、監督の悪い奴は開封してその内容を調べ、渡してさしつかえないものだけを移民に渡し、渡して悪いものはみな没収したという。甲耕地の甲が、乙耕地の乙に『おれの耕地は大へん良いから移ってこい』と手紙を何度出すが、どうしても届かない。ついに、乙耕地の監督が没収していることがわかり、甲は日本の丙を介して乙に手紙を送り、かろうじて届いたということさえある。信書の秘密もあつたものではない」

だがこうした傾向は一九二七年ころはすでに過去のものとなっていたようで、同書の筆者も「時節はかわり現存はかかる振舞もその跡を絶ち、耕主から移民に頭を下げて機嫌を伺うようになってきたのは、時代の変遷の甚しきに驚くとともに、また嬉しくおもうところである」といつている（注18）。

ファゼンダの組織とコロノ制度

コーヒー農場がコーヒーの単一作を目的として、牧畜などは農場内にコーヒー栽培に向かない土地が多く、したがって牧場が広い場合は例外となるが、普通は使役のための牛馬・ラバ、食料の肉、肥料のための堆肥、その他養豚にしても、食料生産としての補助的な役割をもた

せているだけであることは、説明するまでもないことであろう。

ここにグアタパラ農場の例をあげるならば、一九二二年ころの記録によると、面積は六、三〇〇アルケール、コーヒー樹は百八十万本、この年の収穫量は、十九万袋であつて、採取期には、千五百人の労働者が働いていた。そして、除草期には、二百家族、八百人のコロノがいたのである（注19）。

ここで大切なことは、除草期における二百家族約八百人のコロノが生産労働の主体となっていて、収穫期の千五百人中にはこのコロノをはぶき、他は日給取りの純賃金労働者であり、そのなかには、いわゆるツルマ・ヴォランチ *Turma Volante* と称する

「わたりもの」の一時的な労働者（独身ものであるため、独身組 *Turma de Solteiro* ともいわれる）がいたことである。

これに対して、コロニアの住民となっている家族労働者は、農場に住んで生活しているもので、ファゼンダの経営は、農場主―支配人―コロノという関係が主となつて、コーヒーの生産が行なわれるのである。監督は、いろいろな技術を心得ている者であつても、主として、支配人の命令をうけて、これをコロノに伝え、またコロノの仕事を監督する役目をもつだけで、直接経営には参画

しないのが普通である。

その他ファゼンダには、加工を受け持つ精選工場の技術者、牧畜をうけもつカンペイロその他、レンガ工、左官、鍛冶業の職人もおり、さらに会計（エスクリボン＝書記）や薬剤師もいるが、これは農場経営の本筋からみれば、わき役にあたるもので、ここには省かれる。

何といっても、生産の直接にない手はコロノであつて、この労働力をいかに永続的なものとするかが農場経営にあたって苦心するところである。そして、このコロノ制度は、資本主義的大農経営のなかで、純然たる賃金労働者としてあらわれたものでなく、奴隷解放後、外国移民を受け入れるようになったとき、それまで、ある農場中に、前近代的な小作制度が残っていたものから考へ出されたもので、家族単位の労働者に対する半賃金制度であつて、「コーヒー農場―風習（注20）」の筆者も言っているように、過渡的な制度であつた。

「ファゼンダの組織はよくできているが、われわれは完全なものだとは思わない。コロノたちのでたりはいつったり、罰しようもない彼らのわがまま、場合によると不当なほどの要求、義務回避における多くの口実等、それらのすべては、労働に対するファゼンダの組織とこういうものが、過渡期のものであることを思わせる」この苦情は、多くのファゼンデイロの口からもれるも

のだったらしく、山田揚之助の『ブラジルを直視して』の二二〇ページにもつぎのように書かれている。

「……今全州にわたりて行われつつあるコーヒーの

収穫は、耕主の命ずるが如くおこなわれずして、反対に、コロノの思うがままに運ばれている。耕主はなんらの小言をいうことなく、細枝を混じたる果実を受けとらざるべからず、樹枝は乱暴に折られ、コロノの仕事は一つも気力なし……」

このように、農場経営者の立場にたつてコロノ制度をながめてみても、いかに不合理なものであるかがわかるのである。それなら、コロノの立場からはどうかとみれば、同筆者もいつているように、まず一年目には純益なし、というのがファゼンダ生活の常識であつて、女房・子供の手を借りながら、間作や養豚の副業をやり、三年目くらいに、まあうまくいけば小さな土地を買う「手付金」くらいはたまる、というのが運のいい者の場合であつて、ブラジル人コロノの例のように、いつも借金のために、次年度も同じ農場に居つづけるということにもなりかねないのである。

コロノ制度は、すでに述べたように過渡期のものであるが、ここまでするには、すでにいろいろ変わってきていた。

サンパウロ州の古いコーヒー地帯、すなわち今日のセ

ントラル鉄道のある地帯では、『オ・カフェー』の著者も書いているように、一九二〇年ころでさえも、古い形態の小作（分益農）が残っていた。普通は収穫物の折半となっているが、コロノ（注²）は精選工場をもたないの、その費用を農場主に支払わなければならないために、収穫が終わると、自分のとりまえの半分を農場主へ売り渡すということになってしまう。精選工場をもたないところにコロノの弱みがある。この費用を差しひかれたり、あるいは、ファゼンダの精選工場へ運び、精選コーヒーにしてから分けるとなると、はたして、どれだけコロノの分かわからなくなる可能性も生じる。こんな面倒を避けるために、コロノたちは、収穫と同時に農場主のい値で、自分の分け前を農場側へ渡し、現金を受けとるようになる。そうすると折半という条件もコロノにとっては、それほどありがたいものではなくなる。

だから、このセントラル鉄道方面に落ち着いているものは、奴隸制時代からいるブラジル人の子孫が多く、たいして野心もないので、彼らはここを自分たちの故郷として、落ち着いていたのであった。しかし、この地方へはいった外国移民は、どんどんカンピーナス以北のモジアナ、パウリスタ方面へ移動したといわれる。

この古い型のコロノ制は、一八五〇年ころ（まだ奴隸使用時代）サンパウロ州でも、外国移民（ドイツ系）に

適用したのであるが、全然失敗に終わった。彼らは旅費を借金してでてきた移民だったので、現金支払いをうけることのできない分益では生活の見通しがつかなかった。しかも当時は一方に奴隷も使用されていた時代だったから、ファゼンダの干渉がひどく、コロノたちは「自分らは白色奴隷だ」とまで叫ぶにいたったのである。

コロノ制度がこれからのち、どう変わっていったかについてはこちらに触れないことにするが、モジアナ、パウリスタ地方の大農場では、ノロエステ地方の、より新しい農場のように、コロノに対する外作地（余作地、雑作地）のことはあまり問題にならなかった。だから、はやく徹底した賃金制度へいく道が開かれていたともいえる。

フェスタ（祭り）の多い六月

六月はコーヒー収穫がいよいよ本格化して忙しい時期ではあるが（コーヒー栽培地以外は農閑期であり）、また、ディア・サント（聖者の日）の多い月でもある。朝晩は少し寒いが、ひよりつづきのいい季節である。ファゼンダでは在来種（カイピーラ）のみかんが実り、飼料もどっさりあって豚の肥えるときである。

十三日はサント・アントニオの日、いまでは忘れられたような祭日であるが、この聖者は縁結びで名高く、若

い男女に人気があつた。コーヒー採取斯なので、よく二つづきのフェリツペという実がある。これをみつけたものに幸運がめぐつてくるともいい、またこれを人から贈られることも開運のしるしであつて、若い男女がやりとりした。もらつたものはお返しになにかプレゼントをやる習慣があつた。六月とコーヒー採取とフェリツペとサント・アントニオとはたのしい連想になる。

二十四日はサン・ジョアン祭（聖ヨハネの日）である。都会では、さかんにバロン（火をともした紙風船）をあげる。しかし、田舎では、焚火をたいてこれを囲み、男女がアコーデオン（サンフォーナ）やギター（ビオロン）の音に合わせて踊りまわる。

祭りは前夜（ベスペラ）からはじまる。たきぎを山ほどこ集め（ファゼンダでは牛車で運搬のサービスをした）、これを井桁に積みあげる。たきぎといっても、三、四メートルの長さの丸太で、小さい小屋くらい重なる。場所はコロニアのいちばん人の集まりやすい広場、たいがい入口の監督の家の前あたりが選ばれる。もしカペーラ

（礼拝堂）でもあれば、その前の広場でもいい。そしてたきぎの山の近くには、高いマストをたで、その上には、毛皮のころもに縄の帯、キリストを抱いた聖母マリアの膝にもたれた幼いヨハネの像がかかけられる。大きさは五〇センチ角くらい。マストは高さ七、八メートルく

らいはある。これに牛の脂をつるつるぬってすべりやすくする。とくにパウ・デ・セーボといって特別の柱をたてることもある。マストの先のほう、すなわちヨハネ像のすぐ下になにか賞品（プレнда）をぶらさけ、ここにのぼってとったものの所有となる。

マストがたち、そのまわりで踊りだすと、やがて焚火にも火が点じられる。マストまたはパウ・デ・セーボには、皆が登ろうとするが、はやしたてられ笑わされると、もう一息というところで、するすると落ちてしまう。柱がぐらぐらと動きだすと、さらに始末が悪い。これを面白がって揺すぶるものも出てくる。ついに一人のムレツケ（がき）がプレндаをつかむ。これはきれいな紙につつんだ、なにがしかのお金のおひねりだった。大喝采、たきぎがどんどん燃え上がる、ビーバ・サンジョーン！みんなが歓呼する。

サンフォーナがブカブカ鳴り出す。みんなにケントン（しょうが、ユツケ、砂糖などを入れた甘い火酒場）がまわされる。ほうろう引きの茶碗（カネキンニャ）でみんなが熱いのを一杯ずつよばれる。これは世話人（フェステイロ）が寄付をつのってこしらえることもあるし、ある篤志家がお金を出すこともある。やぐらのように積みあげられたたきぎは、夜どおし燃えても燃えきらないほどだ。がきどもはマンジオカやさつまいを焼く。また、

この火を囲んでうらない遊びなどをやる。火は魔よけ、災厄払いでもある。

ここに集まって踊りあかす男女は、洗いざらしの晴着は着ているが、裸足のものが多い。ビオロンをひきながら歌っているものもある。踊るほうは、ただ黙々と体を動かす。サン・ジョアン祭は夜明けまでつづく。

二十九日はサン・ペードロ、これは今日でもローマ教会の大きな祭日として公休日になっている。サン・ジョアン祭と同じように祝うこともあるが、あの旗のついたマストはたてない。ただ、ところによると「生命の木」をたてて祝うとも言われているが、筆者はまだお目にかかっていない。

こうしたフェスタ（お祭り）に、日本移民はまだ、あまり熱狂しない。ブラジル人やヨーロッパ移民の喜び騒ぐ有様をみたり、ケントンをご馳走になったりする程度だ。しかし冬の夜に焚火を囲んでみんなでわいわいさわぐことは、いつのまにかよく印象にきざまれ、ブラジルの生活に根がはえてくると、日本人部落でも、冬の夜のお祭りとしてサン・ジョアンやサン・ペードロを祝うようになる。

いっしょに騒がなかった理由は、当時はまだファゼンダにダンスのできる若いものがいなかったからだといえる。むしろ例外はあった。とびこんでいって騒いで

いるうちに、なんとかステップが合って、踊れたの踊れなかったのと噂しあった。旧移民になって、三年、四年とファゼンダ生活を続けるようになる、若い人たちは、ダンスを本式に習いだす。ブラジル人やヨーロッパ移民の娘たちに誘われて、土曜の晩などはいそいそと出かけて行くようになる（こうして、ブラジル生活になじんだ青年が、のちに植民地へはいると、そこではちよつと毛色のかわったものとして扱われるようになることはのちに述べる）。

「バーモ・ダンサー・コンノスコ」（わたしたちと踊りましたよ！）なら、娘たちにも平気でいえる。おきやんな娘なら「ケー・ナモラー？」くらい冗談に言う。このナモーロくらい日本語に訳しにくい言葉はない。男女が無邪気に遊ぶことだとも言える。遊戯的恋愛だとも言えるだろうか？

山崩し

七、八月はコロノにとって一年の勝負どき、しかも次年度の計画を胸にひめて、一袋でもよけいコーヒーを摘みとろうとする。

九月に入ればたいがい収穫が終わって、山崩しである。ブラジル語ではエスパリヤメント・デ・シスコ、すなわ

ち「ごみちらし」である。山だてで根元からひき出したゴミや上土を、もう一度コーヒー園一面に散らす仕事である。このごみを散らすことを、エスパラーマ・シスコと俗にいう。

この山崩しも、みな勢いよくやるので、受けもらのコーヒー園など二週間くらいで片づけてしまう。ただし次年度まで残るものは、丁寧にやったほうが畑がきれいになる。すぐ一番豆が蒔けるからである。また、あまりぞんざいな仕事をやれば、監督に文句をつけられる。なぜなら、こうして一農年の仕事を片づけ、出て行くものは、これをファゼンダに渡し、義務が終わるからである。日本人は、「あとをにごす」ことをきらって、案外きれいな仕事をした。

総勘定

山崩しが終わって、総勘定（パガメント・ジュラール）ができる、コロノたちの一か年における経済の総決算もわかってくる。コロノ手帳（カデルネッタ）には最後の収支決算がなされ、サルド（差引残高）をうけとり署名する。

ここでは、農場主の立場からつくられた決算表を参考にあげてみる（注22）。

あまり誇張した点が見られないので気持ちがいい。

第一の例は、十人家族の外国移民としてある。働き手六人と家事をやる主婦と子供三人である。大家族といえるものである。賃金についてちょっと断っておけば、コーヒー樹一千本についての一年間の手入れ賃は一五〇ミルであり、コーヒー採取賃は五〇リットルで六〇〇レイス、臨時労働の日給は、一日三ミルとみたらいいと思う（一九二二年ころの賃金は、コーヒー一千本の除草賃が一五〇から二〇〇ミル・レイス、コーヒー採取賃が六〇〇から八〇〇レイス、臨時労働の日給が三ミルから三ミル五〇〇レイスであったと注釈してある）。

さて、この家族の一か年の生活費は医者、医薬を含め、自家栽培の穀物を消費して、二、三五〇ミル・レイスである。

る。この家族の一か年の収入というのは、

コーヒー樹一六、〇〇〇本 二、四〇〇、〇〇〇

コーヒー採取賃（四〇〇袋） 四八〇、〇〇〇

臨時労働（二〇〇日分） 六〇〇、〇〇〇

計 三、四八〇、〇〇〇

（四百袋とは一袋一、二〇〇レイスとして数えたもの、二百日分とは一日三ミルとして二百日分とみたものである。六人の働き手であるから、一人では年に三十三日強を働いたことになる。日給仕事が多すぎるようにも思え

るが、外作地の収入がない点を考慮に入れば、不思議ではなくなる)

これから、一か年の生活費二コント三五〇ミル・レイスを差し引くと純益一コント一三〇ミル・レイスということになる。ここで考えていいことは、自家生産の食糧をもつて年間二コント三五〇ミルの生活費は、べつに意識的に食べもの、着物を儉約するというような金儲けにがむしやらない生活態度ではない。まあ、落ち着いた平和な家族だったといえよう。自家生産の食糧をもっている点で、ファゼンダ生活は初年目でないことがわかる。

第二の例は、働き手二人に家事をやる主婦と子供二人の五人家族である。これも前者と同様、自家生産の穀物を消費しながら、一か年の生活費は、一コント一三〇ミル・レイスである。この家族の年間収入は、

コーヒー樹七〇〇〇本 一、〇五〇、〇〇〇

コーヒー採取賃(二〇〇袋) 二四〇、〇〇〇

臨時労働 四六〇、〇〇〇

計一、七五〇、〇〇〇

すなわち前記の生活費一、一三〇ミル・レイスを差し引くと六二〇ミル・レイスが儲けということになる(大人三人―主婦も入れて―の純益とあれば、一人あたり二

〇〇ミル余となる）。

これは日雇労働者の賃金を三ミルとみるとき、一か月（二十五日）で七五ミル・レイスであるから、二か月と三分の二の賃金を稼ぎ出したことになる。

第三の例は、これは夫婦ものに子供二人という家族であるが、一か年の生活費は七八〇ミル・レイスである。

コーヒー樹三、〇〇〇本 四五〇、〇〇〇

コーヒー採取賃（五八袋余） 七〇、〇〇〇

臨時労働 一二〇、〇〇〇

計 六四〇、〇〇〇

この程度の収入では、生活費でもないから、右の決算でもわかるように、一四〇、ミル・レイスの欠損である。すなわち、二か月余の生活費をくいこんだことになる。

働き手一人と主婦に子供二人の場合は、家事のあいまに女子供もなにか手伝うとしても、いかに無理かがわかる。働き手二人以上で、しかも自家消費の穀物を生産している二年目からでなければ、儲けはでてこないことは、たとえ農場主側の計算によってもあきらかである。

この計算では、コーヒーを五十八袋も摘んでいるのであるから、第一回移民が食糧もメザードもなくして計がな

りたたなかったことはよくわかる。

この収支決算があつてから六年後の一九二八（昭和三）年に調査した八重野松男の『今日のブラジル』によると、おそらくノロエステ方面の日本人コロノを標準にとつたものと思われるが、その収支決算は外作地やコーヒー園間作の収入があつて、コーヒーの手入れ賃も三五〇ミルに計算してみるが、しかも差引き残額は二コント二八〇ミル・レイスであつて、その但し書には、

「普通コロノ生活の純益は一コント五百ミルから、三コントス位で、中には昨年（一九二七）の如く珈琲の豊作に遭遇して而も労働力があれば、一家族三人でも三コントス五、六百ミル位は挙げ得るが之は例外である。又前記のごとく（その例が三ページ前にでている）悪い耕地に入り珈琲の凶作にでも当たると収益はおろか、借金をも負担せねばならぬ事になる」（同書一四四ページ）といっている。

エンボーラ

エンボーラとは、イール・セ・エンボーラ、すなわち「去る」「行ってしまう」という言葉を日本人がちぢめて、ムダンサ（移転）という意味に使つたのである。「エンボーラする」という動詞をつくり、「エンボーラ支度」とか「エンボーラ着」とかの複合名詞をつくつた。エン

ボーラ、それは希望にみちた言葉であり、解放感にあふれた響きをもっていた。

「いよいよエンボーラですなア」という。「畑も渡したし、総勘定も終わってみると、なにかこう急に身軽になったような……」

「まったく、これが自由というものかと、しみじみ感じますア。いままでは、なにか、コロノという身分の鉄鎖にしばりつけられていたような気がしてましたわい」

「わたしはこれで合計三か所のファゼンダ生活ですが、やっぱりエンボーラはうれしい。こんどはわが土地にはいるんだと思うとね。しかし、最初の契約が終わったときは、なにか実にホッと思いましたなア。あんたの自由という気持ちもわかりますよ。ムエーさん（奥さん）もよく辛抱しなされた」

「エンボーラ支度もすっかりすんだし、もうなにかも片づきました。お互いこれからがんばりましょうや」

間もなくコロニアには「出耕」する連中の荷物を運ぶ馬車が動きだす。

バーモ・エンボーラ！

さあこれでおいとまです。

神様のご加護がありますように、また逢う日まで……。近所隣の居残るものが戸口に出て手をふっている。

注

(1)「この、ずうずうしいラバ奴、しつかりしろ！」の意。
発音は田舎なまり。

(2)三か月払いの農場も多かった。

(3)ボーツエ (Beccie)

(4)外作地(余作地・雑作地)は請負コーヒー一万本につき一アルケールの割合だったという農場もある(ブラジルを直視して』 三二五ページ)。

(5)日本式にいったポルトガル語。「わたし・も・ブタを・殺す。手伝って・下さい」となる。

(6)ほうきにつかう牧場の灌木。バツソウラとは、ほうきのことであるが、ここではその灌木の名。

(7)「あの監督は気が荒らいから、めったなことはいえん。だめだ。あの野郎ときたら！」の意。

(8)「あしたは・日本の・大きな祭日・仕事は・しない」
(9) Jatoba = Jatai. ジャトバーはジャタイとも
いって、豆科の喬木。Hymenaea Courbaril Lin.

(10)桃金嬢科(ミルタセア)。いろいろな種類があるが、
Myrciaria Cauliflora Berg がいちばんジャボチ
カーバの名にふさわしいとポルトガル語ブラジル小辞典
にある。実も味もぶどうに似ている。

(11)ここでは蜜蜂の名。

(12)南米豹。

(13)一千本五〇ミルという勘定もあつた。『移民の草分け』三三四ページ。

(14)Basilio de Magalhães : O Cafe pg. 197

“ E eu queria se penera

Na coieta do cafe

Pra anda pindurado

Nas cadera das muie “

(15)一九一一年ころ五〇リットル樽が正規のアルケール
枰となる。

(16)この平均量を疑うものもある。なぜなら一日はこぎ
おとし、つぎの一日がふるい分けであるから、平均して
二、三俵がいいところだというものもある。コーヒーの
なり方によつてずいぶん違ってくる。

(17) Artur Ramos : 『O Cafe』 .

(18)八重野松男著『今日のブラジル』六〇七―六〇八
ページ。(19)高岡熊雄著『ブラシル移民の研究』二二六
ページ。

(20)アルツール・ラーモスの『オ・カフェー』のなか
にある一章で、筆者はDr. Guido Maistello.

(21)コロノという名称の代わりにアグレガードともいわれ
ていたことは、砂糖きび農場で無資本の白人、あるいは

白黒混血児たちが農場主の庇護のもとに小作を営んでいたときの名称、アグレガードを思わせるもので、この小作制度が古くから存在していたことがわかる。

(22)前掲『オ・カフェー』の五五八ページ。筆者はやはりグイード・マイステーロ。

10 一九二七年の調査にあらわれた

移民の生活

コーヒー農場の生活がどのようなものであるかは、だいたい今まで述べてきたところで明らかになったことと思うが、それでは全体的にながめてファゼンダ生活はどうであつたろうか。生活は楽なものではないことはわかつているとしても、苦痛たえがたいものであつたかどうか。日本の農家の仕事にくらべて、労働のうえでどんな差があつたろうか、希望はもてたか、もてなかったか、なにが苦痛で、なにが楽しみであつたか等について、少し書いてみる。

一九二七年前後の調査で、一九二八年の出版になる八重野松男の『今日のブラジル』は、サンパウロ州からマツト・グロッソおよびパラナの諸州にかけて、当時の日本移民集団地を実地踏査して、多くの人の経験談を書

きとめた本として珍しいものであるが、そのファゼンダ生活の方面に関して、筆者が精読して理解した点をここに記述してみる。

まず第一に、ブラジルの現実が日本の移民勧誘人の話とかなり違っているのに驚いたというものが相当ある。ブラジルを知らずに勧誘しているものの話では、おそらく初年は儲からないものだとは言わなかったことだろう。荷物を制限されたので、ファゼンダへ来てから不自由を感じていると訴えている者もいた。

純農のもの（当時の新移民は全体の一割余といっている（注二）が、ほとんど例外なしに、コーヒー農場の労働は苦痛ではない、といっているのは、日本の農家の仕事にくらべて、ブラジルの農業労働がとくに重労働であるということにはならないようである。

しかし、仕事そのものよりも、規則づくめに働かされたことには多くの者がとまどった。ことに、言葉が通じないところで、外人の監督にガミガミいわれながら働かなければならなかった人たちは、かなり精神的にこたえたようである。

純農以外のもの（当時は八割以上）も最初の二、三か月が過ぎると、労働そのものには苦痛を感じなくなる。軍隊生活を思えば、コーヒー農場の規則づくめの労働などは、ものの数ではない、とうそぶいている者もあった。

ブラジル渡航当時の初年目は、食べるのだけが精一杯で、病気をしたものは、ほとんど全部借金を残した。

しかし、当時はすでに相当順調にいつている先輩移民もあつたので、多くのものが希望をもって生活していた。もう少し様子をみて、だめだったら帰国したいといっている者もいたが、それはごく少数であつた。このころの新移民は、もう、何万円もうけたら帰国するなど（本心はわからないが）口外しているものは少なかった。

永住のつもりで出てきたという者も幾人かあつた。

いい農場で、そのうえ日本人の通訳、あるいは監督のいるところは、みな愉快にやっている。ただし日本人通訳が皆いい人間ばかりでなかったことはもちろんで、悪い通訳の場合はブラジル人以上に精神的にこたえたようである（外人監督の場合は、言葉がわからないという点で、ガミガミ言われてもそれほど感じないという一面もあつたのである）。通訳にたて突いたため、国外追放になつて、家長一人アルゼンチンへ連れていかれた者（かの地の同胞の醸金（きよきん）でブラジルへもどることができた）や、なんの調べもなく町のカデイヤ（留置所）へたたきこまれた者もあつた。

悪い農場にはいったものは、想像以上の苦しみを味わつた。

一例をあげれば――

ここは女子供など、とても登れない石山であった。あるとき上のほうで働いているものが鍬で石をひっぱったところ、それが下へころげおちて、そこで働いていたものの頭を打ち、死にいたらしめた事件（むろん日本移民ではないが）もあったひどいコーヒー園であった。ここへ入れられた日本移民たちは、いったいこんなところで長続きするものかどうか、他の農場へ移してもらえないものかどうかと、相談ばかりしていて仕事がかどらなかつた。ファゼンダのほうでは、コロノの仕事が進まないというので食料を充分供給しなかつた。食べずには働けないというので、とうとうストライキになってしまった（後日聞くとところによると、この農場の日本人コロノは総退去となったそうである）。

こうしたところへ移民を入れたことについては問題になつたらしいが、移民会社のほうでは、農場主がサンパウロ農会の有力者であつたため、入れなければならない義理があつたのだということであつた（注²）。これは移民政策の犠牲になつた移民の例であつた。日本政府の方針によると、あらかじめ調査した後、移民を入れることになつていたのであるが、右の例をみると、これは必ずしも実行されたとはいえない。

コロノの落ち着かない悪い農場ほど規則がやかましく、また、コロノ引き出しを恐れて訪問者を門前ばらいにし

たものであった。だが、さすがに一九二七年ころは、もうそうした非人道的なことはなくなっていたようである。

新移民たちは、金はもうからなかったが、体が労働に慣れると、先輩移民たちの生活をみて希望をもつことができた。ただし、十四、五歳で大人といっしょに仕事に出ていた少年たちは、後になっても、例外なく仕事の辛かったことを告白している。婦人たちの話はでていなかったが、女の人が苦勞したことは、おそらく想像も及ばないことであつたにらがない。新移民の苦勞は、病氣にかかつて一家枕をならべたときや、子供や父母を失つたときにその極に達した。おそらく、信頼できる医者にかかることもできず、病人のために必要な食養生もさせられなかったことを思えば、それこそ断腸の思いであつたにちがいない。新移民の収入では、いよいよの場合でないかぎり医者は呼べなかつたろうし、仕事が遅れるために、充分な看護もできなかったことと思う。当時は各所にマラリアもあつたのである。

賃金奴隷を云々しているのは、初期の移民に多い。監督の鞭に追いまくられて働いたといっているものもあるが、鞭で叩かれなくても、そう感じたのは事実であろう。皮のゲートルをはめ腰にピストルをぶらさげ、手に鞭、あるいはステッキのような棒の先に、小さい鎌（フオイセ）のついたポドンをもった大男の監督が、ニユーツと

後ろに立ったときの気持ちは、深い印象として心にきざみこまれるにちがいない。

しかし、このころはファゼンダ生活もかなり変わりつつあったことが想像される。しかし、監督の命令に従わなかったといって、町の留置所にたたきこまれたものもあることを思えば、当時は、まだまだ農場主の権力がどんなに強かったかがわかるだろう。

多くのものが口をそろえてこぼしているのは、言葉がわからないで不自由だったことである。日本人通訳のいないところでは、監督の命令が聞き分けられなかったり、聞き違えて問題をおこしたり、また、ブラジル人とかけあうことができずに歯ぎしりすることは再三であったにちがいない。「言語不通は精神的苦痛である」（松本高信）といっていたのは当然であった。

もう一つは、食事が口にあわないことであった。ブラジル式でもなく、日本式でもないあの新移民のつくる食物、これが不満のたねであった。作るほうの身になってもつらことだったにちがいない。労働そのもののつらさはそれほどではなかったが、言葉の不通とブラジルの食物とは、皆不満に思っていた。これに子供の教育のことを考えると、どうしても独立して植民地へはいりたい、そこでは日本語で生活し、日本食を工夫し、子供の文盲化を防げるから、もっと落ち着いて金もうけに

精進できるということであつた。

みんなが、楽しみのないことをいつているが、これはどうにもならないこととして、あきらめていたようである。夜、家へ帰って、ピング酒を飲むのが唯一の楽しみだといっている者もかなりあつた。本や雑誌がよめないことを口にした者もあつた。

構成家族は、離散と不和のもととして禁止すべきだとの意見をもった者が多かったことを考えると、せっかく働き手の多い家族も離れ去るものが多くて、仕事思うようにいかなかったことを嘆いていたことがわかる。

注

(一)「精細に調査をしたならば、渡伯者中純患者は幾人居るであろうか。余は前に言うた通り、一航海に一割居れば好成績の方だと思うのである」。一九二七年ころの推測。『今日のブラジル』四八八ページ。

しかし、移民五十年祭の記念事業である実態調査の結果によると、一九二一年ころまでは六割から七割が農業者であつて、その後 非農業者もいくらか増えてくるが、総体的には五二・九%が農業者となっている。この数のひらきは、おそらく農業者として移民になったほうが都

合がよかったから、という理由もあって、農村出のものは、すでに農業をはなれているものでも、農業者にとらえられていたのかもしれない。

(2) 『今日のブラジル』六一四―六一五ページ。

第二部

初期移民の都会生活

ここでは、第一回かさと丸移民の時代から、サンパウロ市に住んだ初期の人々の生活について書く。

農業移民として渡来しながら、農業を放棄してサンパウロ市に出てくるものは、一般農業者からは、まるで異端者のように見られていた。一九二四年のイジドウロ革命のころでさえ、サンパウロへ出てくるもの、とくに独身青年は、バガプンドの汚名をきせられた。ある意味では、サンパウロ市は、ブラジルの農村生活に幻滅を感じたものの集まるところであつたにちがいない。

せつかくサンパウロ市の生活をのぞんで、わざわざ日本から来た人で、ここの日本人社会の汚さに失望して、一步ふみこむや、きびすをかえして帰国した者があるといふ噂も耳にした。

しかし、都市への脱出、あるいは発展は、その初期の生活がいかにみじめなものであつたろうと、移

民の運命として、みのがすことのできないものだろう。私は公平な立場から、サンパウロ市の日本人の生活を、その初期の状態から見ていきたいと思う。

11・サンパウロ市における初期の日本人

第一回かさと丸移民で、収容所からすぐサンパウロ市の住民となったものは「四十年史」によると十人あった。（「四十年史」の三七ページには十人で、そのうち夫婦者一組とあり、五十周年記念出版の『かさと丸』四六ページでは十八人で、そのうち夫婦者三組とあるが、「四十年史」には職業上の説明や、就職のことがでているので、いまはこのほうの記述に従うことにする）

そのうちの五人、すなわち、独身の男三人と夫婦者一組は、職人としての自由移民であり、大工、鍛冶屋、洋裁師等であった。このほかに植民（「四十年史」）とよばれた渡航者のなかで、すぐサンパウロ市内で野菜づくりをはじめた男一人、これに協力した自由移民の青年一人、やはり自由移民で、移民会社代理店の雇となった青年一人、および、家庭労働者となった熊本移民中の姉弟（夫婦の名義で渡航したもの）二人であった。

このほかに船大工の脱船者一人、密航者一人もサンパウロ市にとどまったから、二人を加えると十二人となる。

このとき移民と同行した皇国殖民会社ブラジル代理人上塚周平もサンパウロ市に落ち着いた。最初に旅装をといたのはポルト・ジェラール坂（旧オ・エスタード・デ・サンパウロ印刷工場となり）の家の一室であつたが、ここはひどい坂道だったので、もっと便利でだれにでもわかりやすいロドリゴ・シルバ街（注一）の、五〇番三階の一室を借りうけ、ここを事務所としてサンパウロ市住民の一人となつた。当時上塚は月給五〇〇ミルで、この事務所を維持していたのであるが、半年と続かなかつた。水野社長が翌年二月ごろ帰国するともう送金はなかつた。

当時のロドリゴ・シルバ街は、今日のジョン・メンデス広場の一部も加わり、リアシュエーロ街の角からアッセンブレア街の角までつづいていた。そしてここからリベルダーデ街までをカルロス・ゴメス広場と称していた。むろんどナ・パウリーナ陸橋へぬける通りは家でふさがっていたし、反対側には、ジョン・メンデス広場に向かつて州議事堂があり、つぎはいまでものこつているサン・ゴンサロ寺院であつた。

しかし、サンパウロ市の日本人社会は、かさと丸以前の渡航者からはじまっている。一九〇六（明治三十九）年以後、サンパウロ市にきていた人たちが、日本移民の手びきとして大きな役割を果たしたことは見逃すことが

できない。それは藤崎商会の主任や店員、玩具の行商人職工長その他、ホテルの下働きなどをしていた人たちであつた。ことに、藤崎商会の後藤武夫、帽子製造工場の職人頭明德梅吉、移民の草分けとして移民以前にコーヒ―農場の労働を体験し、のち移民収容所の日本人書記をした鈴木貞次郎など、その後の移民社会で大きな働きをしている。このほかにいろいろな人がいた。『四十年史』の著者香山六郎は第一回移民の一人であるから、ここにはふくまれないが、移民が来たときには、すでにリオ州に移転していた隈部三郎一家などもサンパウロ市の初期日本社会の人間として先駆者的辛酸をなめている（注²）。

第一回かさど丸移民が着いて、さらに第二回の旅順丸の着く間の二か年間、サンパウロ市在住の日本人もかなり増えていったが、これを『四十年史』によつて調べてみると、その進出ぶりは職業別にして、大工職が筆頭であることは、すでに職人移民のなかに大工がいたことと考えあわせて興味ぶかい。「なに大工ならわけはないよ」というわけで、二、三の本職を省いたほかは、みな、にわか大工になりましたのである。本職もあわせてその数四十三人である。これに、ピントール（ペンキ・漆喰ぬり）のにわか職人十一人を入れると、サンパウロ市の日本人大工・ペンキ屋は五十四人になって、日本移

民のサンパウロ市における第一期の職業的進出の方向の一つが決定されたようにみえる。

そのつぎに重要な地位を占めるのは、家庭労働者の男女三十八人（男二十人、女十八人）である。家庭労働の特典は、主人の家に住みこんで家賃や食事の心配なしに働けることであつた。そして、ブラジル人の氣心を知り、食事になれ、言葉を覚えるのにいい機会であつた。ただし、ここに職をえた十八人の女性中十七人までは戸籍上人妻であつたことは注目すべきだろう。夫婦共稼ぎもあつたろうし、家庭を解散して都会へ出て来たものもあつたのではなからうか。

その他、製紙工場にはいつた男女三人、薬局に男一人、歯科診療所に少年一人、ばくちうち一人、ペンソン（下宿）をはじめた男が一人であつて、その後の日本人社会に、それぞれ職業的進出の道をひらいていることは面白い。

これらの人たちは合計九十九人であるが、夫婦者で妻の職業だけがわかつていて夫の職業がわからないもの、またその反対もあり、もし夫婦のどちらかが就職しているのは、両者ともサンパウロに出ているものと推測すれば、みんなで百三十人近い計算になる（注³）。当時公使館より外務省への報告によると、サンパウロ在住者は二百六十八人となっている（注⁴）。

むろん、これらの人々は、職業上で草分けはしたものの、決してそこに落ち着いたものではなく、あらたにファゼンダから出てくるもの、さらに地方へもどるものがあった、新旧の入れ替わりはつねに激しかった。

では、これらの人々は、どこで、どんな生活をしていたのであろうか。いま、それをくわしくしらべることが、ほとんど不可能であるが、ここでは、ただおおまかな記述によって、サンパウロ市における日本移民の初期住居区域として名高いコンデ・デ・サルゼーダス街が最初からのものでなかったことを証明する程度にとどまる（ただし、コンデ・デ・サルゼーダス街を中心とするあのあたりを、もしコンデ界限とすれば、日本人はやはり、あの近くにはじめから陣どっていたということになる）。

ジョン・メンデス広場に近いロドリーゴ・シルバ街に移民会社の事務所があったことはすでに記した。また、同じこの通りの四六番には、ホテル・ロチセリーに働く人々が住んでいたことも「四十年史」にでている。ここはシダーデ区域である。いまここを起点として、やや東南にあたるリベルダーデ区内のサンパウロ街二〇番（シンブー街の角）には、藤崎商会の人々が、日本人としてはじめて家を一軒借りて、移民の夫婦ものに「日本飯」をたかせて住んだことがあるが、家賃は一二〇ミルであった。藤崎商会が日本から輸入した品物のなかには、

店員たちの食料として味噌、醤油があつたので「日本飯」も可能だったわけである。ここでは、あてもなく農場からとびだしてサンパウロへたどりついた連中が、久しぶりでなつかしい日本飯にありついてよろこんだ。藤崎商会の人々が、アグア・ブランカ方面へ越していくと、この炊事をうけもっていた夫婦ものがあとを引き受けて農場からの引揚げ者たちの合宿所にしたという。この同じ通りの一二番には、大工の鮫島直哉が一軒を借り、また同じく一五番も日本移民が家を借りたが、ともに鹿児島県人の合宿所の感があつたという。さらに、この街と並行したエスツダントス街四一番には福島県人の合宿所ができ、この合宿所はのちに、コンセリエイロ・フルタード街の五七番の三階にうつったが、独身の責任者は、家賃九〇ミル、パン代九〇ミルの不払いでアルゼンチンへ逐電したといわれる。宿賃は一泊板敷の床にごろねして二〇〇レイス、食費は二食で五〇〇レイスであつた。いかに物価の安い時代とはいえ、一日七〇〇レイスではなりたつていかなかったろう。しかし当時としては、客（？）もそれ以上は払えなかったのかもしれない。ある下宿人は月ぎめで一八ミル、洗濯までしてもらったという。

それから仕事の都合上、モオツカ、ブラス区方面に住んだものもあつた。

長つづきはしなかったが、野菜づくりにはいったもので旧競馬場入口前のイポードロモ街に月二〇ミルで二、三反の畑を借り受けたものがあつた。畑には小屋があつて彼らは収容所からここへ柳行李をかつぎこんだ。それから後藤武夫の世話で、ジユッセン・ビスケツト工場に働くことになり、工場のあるモオツカ街に住んだ一団の青年たちがいた。サン・ベント街の藤崎商会のすぐ近くにジユッセンの店があり、その主人と後藤が知りあいだったことが縁となつたのである。同じ通りのある袋小路には、日本人夫婦者が住みこんだ。また、ファッシーナ方面（注⑤）の鉄道工事にでかけていた連中が、ブレッセル街近くに一軒を借りて合宿した。しかし、二か月くらいしかつづかなかつたという。モオツカ、ブラス方面の人たちは、皆、ながくて数か月で移動してしまつたようである。

このほか、くわしく調べたら、当時日本人が住んだところが、もっと各方面にわたつて捜しだされるにちがいないが、どこにもながくは落ち着かなかつたようである。一九〇九年の三月ころになると、ロドリーゴ・シルバ街に住んでいた連中が、一団となってブラッス区よりさらに北方のオリエンテ区、シルバ・テーレス街にうつるこゝになった。それは、上塚代理人と他に同志四人で「四十年史」を書いた香山六郎もいっしょだった。ここはも

うまったくの場合だった。一九〇九（明治四十二）年二月ころ水野が日本へ帰ったあと自活の道を考えて、ここでおもちゃ製造とその販売を考えたのであった。販売の方面は、行商の元祖といわれる第一回移民前の渡航者松下正彦が受けもった。つくるものは、竹トンボ、紙風船、板返しなどであった。

しかし、資本のない仕事である。「玩具板返しの締釘は、モオツカの町はずれのゴミ捨場からブリキ板をひろってきて間にあわせた。竹トンボの竹も、郊外の屋敷の竹藪から夕暮に失敬し」てくる有様、「バナナとフバー（とうもろこしの粉）のだんこの生活であった」という。男だけの自炊、たまにはピンガくらい買って飲んだことだろう。

当時の貧乏ぶりをしのぶものとして、一九〇九年四月二十四日付で、上塚が日本の友人烏飼安一に送った書簡の一部をここに転載してみよう。

「貧乏町の片隅、兄等がみたら鼻をつまんで逃げだす様なむさ苦しき貧乏人の一家（八畳くらい）に六人の生活、その家で所謂日本「玩具」を製造しつつあるのである。一時は三食を減じて二食となし、やがてはそれもかなわずなり、粥（かゆ）をすすり、かゆもすすれなくなつてバナナに代え、バナナ尽きて三日も食べぬことしばしばであつたが、神は末だ僕を必要としているのだろう。幸に

餓死せしめぬのである……」云々。

こうした窮状にもかかわらず、ここを宿賃いらすの合宿所としてたよってくるものすらあった。このころ、リオ・デ・ジャネイロの内田定槌（うちだ・さだづち）公使から金二〇〇ミル・レイス也の援助送金があつて、上塚を感泣させた。この合宿工場は、一か年くらい続いたようである。移民会社代理人の生活も移民のそれと少しも変わるところがなかった。

さて、コンデ・デ・サルゼーダス街に日本人が住みはじめたのは、一九一二年、第一回移民で藤崎商会の人たちが他へ移ったのちのサンパウロ街二〇番にひきつづいて残ったもの三人と、他に二家族がここに移つて来たのであった。コンデ・デ・サルゼーダス街（略してコンデ街）は坂道で、上からながめると右手のほうはまだ二、三軒しか家がなく、左手のほうにだけ、ぎっしり家たちがならんで、サンパウロ市の中心ピラチニングの丘をささえている石垣のようにみえた。坂の下は藪のある広いブレジョン（湿地）で小川がながれていた。

最初の日本人は、どうして職にありついたのでだろう。大庄や鍛冶屋は、收容所内の職業斡旋所の世話で働きたした（注こ）。日給は五ミル・レイス（当時一ミル・レイスは六十三銭）。当時、ファゼンダの日給が、二ミル・レイスくらいであつたから、たとい家賃はいるとしても、

かなり働きがいがあったと思う。

洋裁師の日給は四ミル五〇〇レイスであった。家庭労働のほうは女が月給一五ミル、少年が一〇ミルだった。これらは収容所内の個人の世話で就職した。家庭労働の二人は姉弟で、弟の少年は収容所長ドウトール・フラガ宅に雇われたという。

ズモーン農場からの移民引揚げのちは、サンパウロにとどまるものも多く、ここで移民の世話をしたのが、最初から大工としてサンパウロ市に地歩をかためていた鮫島直哉（なおや）、それから、上塚代理人の後見役みたいな立場にいた藤崎商会の後藤武夫であった。手紙のうわがき、日本への送金、借家の保証人、家庭労働の周旋、迷子移民の世話等々、そのほかに上塚の通訳として農務局や移民収容所へよくでかけた。彼は「四十年史」がいうように、全く、初期の在伯同胞の社会でなくてはならない人だったのである（注[∞]）。

こうして、サンパウロ市には日本人の顔役もでき、就職の世話をする人もあり、素人下宿のようなものもできてきたものの、農場からでてくるものが、すべてこうしたよりどころをえたものばかりではなかった。逃げだしてきたもののなかには、かくれるようにして生活していたものもあった。言葉はわからず市内の事情をたずねるに人なく、途方にくれ、「乞食の如く立ん坊の如き流浪生

活をした」(「四十年史」)ものがいた。夜は墓地を宿にして
過ごしたのもあった。朝おきても食べるものがなく、
上流階級の住んでいる住宅区域まででかけて行って、門
口に出してあるごみ箱のふたをあけて、食べものを探し
て食べた話ものこっている。仕事を探しあてるまでの数
日ではあったが、食物のあるごみ箱はたいがいわかつて
いたので、毎朝、必ずその家の門前へ直行した。ある朝、
いつものようにその家のごみ入れのふたをあけると、
きれいな紙に包んだ食物がいちばん上におかれて
いるのを発見した、はっと胸を打たれたという。どこか
らか家内のものがみっていて、すべてを察したうえ、わざ
わざそなえておいてくれたものにちがいなかった。彼は
その包みをうけとると、家のほうをむいてふしおがんだ。

当時は、朝早くシダーデのカフェー店に行くと、つぎ
からつぎと貧乏人がパンをもらいにきたものであった。
彼らは必ずしも終日街頭に立って物を乞う人たちではな
かった。カフェー店では、前日のパンを一人一個ずつ渡
す習慣であった。一個で足りないものは数軒まわればい
いのである。レストランでも裏口で食物を与えた。新聞
紙をもって列をつくり順番をまち、わけてくれるものを
新聞紙にうけとるのである。しかし、日本人はそうした
習慣を知らなかったし、また知っても「乞食」すること
を、体面上きらったにちがいない。

サンパウロで仕事が見つからず、地方へもどったもの、郊外へ行って農業労働者になり、やがてそこで地盤をきずいたものもあった。

就職のあてもなく、サンパウロへとびだしてくるものには、独身者が多かったが、夫婦者ででて来て、夫は他の職につき、妻は家庭労働についたものもいた。当時は「構成家族」の独身者がかなりいたので、彼らは、無味乾燥な農場生活と、儲かるあてもない規則づくめの労働をきらって、都会へ出るものがいた。ここでも要領のいいのは下宿代をあとまわしにして、まず仕事口をさがす。しかし、それもできないで街頭をうろつくものもあった。

そこで腹がへれば何か食べなければならぬ。

一〇〇レイス以下のビンテン（二〇レイス）でも通用したというから、一〇〇レイス（六錢三厘）もあればバナナが一ダースは買えたわけだ。一〇〇レイスのパンもかなり大きかった。一膳飯（ソルチード）は、パンつきで五〇〇レイス。油飯にはフェイジョン（豆）、うすいビーフもついていた。ときには二切れほどのじゃがいものフライもついてくる。もし、パンをとらずにマンジョカの粉をふりかけてたべるとすればこれは無料だから、どんな大食いでも四〇〇レイスの食事で足りる。ブラジル人の労働者は、みなそうしたのである。仕事さえみつければ、二

ミルの日給でも食べるにはこまらなかつた。しかしブラジル語（注〇）がわからなければ、新聞の求人欄もよめない。なかなか仕事口がみつからなかつたのである。しかし、まもなく、ディアリオ・ポプラールの求人欄のブラジル語くらいよめる時代がくる。プレシーザ・セ（求む）の欄をのぞく。コッペイロ（給仕人）とでている。さつそくとんでいく。でも言葉が通じないで追いかえされることもめずらしくない。しかし、人柄をみて、ためしにやとつてくれるところもある。むろんはじめから長つづきはしないが、要領がわかる。いくらか金をもらつて、こんどは下宿へもどつて待機する。

コッペイロは家庭労働の代表みたいになつていたが、その他に下男（クリアード）、下女（クリアーダ）、ジャルジネイロ（庭師）、さらに、おかかえの自動車運転手などいろいろある。

日本人はサンパウロ生活をはじめても、夫婦者でさえ家庭らしいものを持てなかつたことは、いままで書いてきたところをみてもわかるだろう。もし夫婦者が家を一軒かりると、独身者のために宿と食事を提供した。そして、いつのまにか合宿所となつてしまふのである。そうしなければ家賃が払えなかつた。だから、家をかりるといっても、たいがい家族で部屋借りすることになる。しかも、便利で安いところをさがすとなれば、結局ポロン

（地下室）ということに落ち着く。日本移民が坂になったコンデ街に集まったのは、ここが市の中心に近く、いいポロンがあつたからだつた。ポロンは各部屋に戸がないのが普通だから、数家族にわけて貸すわけにいかない。だから一家族が借りて、知人、友人を住みこませることになる。いいポロンが手に入れば、たちまち数人が住みつくことになる。

ポロンは地下室とはいつても、はじめから人間が住むように設計されたものではなくて、いわば、「縁の下」的構造になつていて、その一部には使用人などの部屋をつくることもあるが、物置きに使用されることが多い。おそらく奴隸使用時代には、ここが奴隸たちの寝起きするところであつたろう。たいがい裏には洗濯場があり、キンタール（裏庭）につづいている。そして、上の主人のすまいとは、すっかり生活を区別できるようにできている。

当時の家屋構造は、ポロンを土台として、その上に天井の高い住居を築き、もし二階があれば、ソブラードと呼んだ（注一〇）。ポロンは土台になる部分であるから天井は低く、

上部の建築からすれば、それが床板である。それでも二メートル以上の高さはあつて、床板の桁（けた）にも頭をぶつけない程度にはできていた。分厚い壁の仕切りがあつて、これがポロンの部屋をつくり出しているが、戸は

なく、下はセメントのたたきである。だから寒い季節には足がひえる。入口は上部建築のあがり段の横にあつて、たいてい二段くらいさがる。小さい窓には鉄格子がついていて、ガラス戸のないところが多い。ここから街路をみると、通る人の膝から下だけがみえる。コンデ街は坂なので、このポロンの天井が割合に高くできていた。いわゆるポロン・アビターベル（住める地下室）が多いし、借料も上部の本建築の半分以下であつた。

一度ここに居をかまえると、電車賃なしで中心街（シダーデ）へでられるのがなにより魅力であつた。はじめは、理髪店も、うどんやも雑貨食料店も、みなこのポロンだつたのである。ずっと後になつて、「旅館」（ペンソンとよばれる下宿屋だつた）ができるのと、やっと一軒全部を借りうけ、上のほうを食堂、および、長期間の泊まり客のために、部屋には、つまるだけの寝台をつめた。

そして、ポロンには下宿人、あるいは特別安く泊めてもらう常客が泊まつた。

さて、このポロン住まいの人たちの生活はどうであつたかといえ、むろんその様式は、ファゼンダからもちこんだ新移民の疑似ブラジル式生活であつた。衣類は、むろん都会生活のこととてサンパウロ式であるが、ブラジルの労働者以下の場合も多かった。ここでは、はじめから板の寝床はないから、どんなものでも寝台に寝た。

寝台は中古がいくらでも手に入った。コルション（枯葉をつめた敷きぶとん）は新しいのを買う。四、五ミルだった。

シーツも白いのを使う。ところが枕やかけものは日本から持ってきたものだ。だから昼はたたんでおく。椅子は食卓のところにおいてあるが、部屋にはあまりおかないからいつも寝台にこしかける。窓にはカーテンがないので、ときどき街路のがきどもがのぞきこんで、「ジャツポーン……」とどなっていく。はじめて訪問するものも、ちよつとのぞいてみれば中の様子で日本人の住まいかどうかすぐわかる。日本人は住居が落ち着くとすぐ味噌を工夫するから、プーンと味噌汁のにおいがする。

食物は、米の御飯はたく。ブラジル式フェイジョンとか味噌汁だ。肉をだしにつかう。しかし、はじめは味噌がうまくできなかつたし、日本人の店もない時なので多くの場合は御飯とフェイジョンと漬物ということになった（注一）。肉は安いものがいくらでもあったのであるが、料理法を知らない日本人は、いい肉を求めた。だから毎日食べるわけにいかなかった。ときどきいわしの塩物が焼かれて、ポロン中が塩いわしの匂いでいっぱいになった。

さしみなどは食べたくも醤油がなかったのである。ある人が子供の祝いに藤崎商会の店員住宅でもっていた醤油

を、無理いつてわけでもらってきて客にさしみをふるまったら、「みんな、いきりあがって喜んだ」という話がある（注12）。

食器は皿とフォーク、味噌汁は深皿のサジ、のちにはブラジル式どんぶり（チジェーラ）となった。だんだん電灯が普及しだしてくる。物の煮たきは炭火であった。こうして日本人が住みついたコンデ街の坂は、一種独特な日本の臭気に支配されることになる。ブラジル人には何かえたいの知れない匂いであつたろうが、地方からサンパウロ市に出てくる日本人には、なつかしい味噌の匂いがして郷愁をいやすものがあつた。

注

（1）一九六七年六月二三日の『日伯毎日新聞』五ページ「九十九年前の回顧」（9）に、筆者鈴木南樹（貞次郎）は、カルロス・ゴメス街としている。同街とロドリーゴ・シルバ街は同じ通りで、広場になっているこの部分は、今日カルロス・ゴメス広場とよばれている。

（2）『移民の草分け』、『拓人の足跡』参照。

（3）『かさと丸』移民名簿による

（4）山田揚之助著『ブラジルを直視して』一三五二ページ。

(5) 今日のイタペーバ。ソロカバナ線でサンパウロ市から二九九キロメートル。

(6) 『上塚周平』一九九ページ。

(7) 直接奔走したのは書記の鈴木貞次郎だという。鈴木南樹「九十九年前の回顧」(「日伯毎日」)一九六七年六月二十二日。

(8) 一九六八年現在満八十一歳で健在。

(9) ポルトガル語というところを日系人はブラジル語という。ポルトガル語というよりも親しみがある。

(10) コンデ街の二階(ポロン―地下室―でないところをこう呼んだ)で当時部屋代一三ミルを支払っているというので評判になったものがあつたほどである。

(11) 米ぬかが手に入りにくいので、とうもろこしの粉フバーを長いことぬかの替わりに使った。

(12) サンパウロ日本文化協会機関紙『コロニア』四四号四ページ。

12. 当時のサンパウロ市

しばらく日本移民の話を中断して、当時のサンパウロ市の模様を述べる。

一九〇八年ころ、人口は三十万と称していたが実際は二十八万人くらいだろうということであつた（注一）。市長はアントニオ・ダ・シルバー・プラード（ちなみに州統領はアルブケルキ・リンスであつた）。

このころサンパウロ市は、すばらしい人口の増加率を示していた。一八九〇年から一九〇〇年の十年間に、約七万から二十四万へ飛躍していたのであつた（注二）。

この時代（一八九〇～一九〇〇）は、サンパウロ州におけるコーヒー生産過剰のために不景氣が年々深まり、そのために地方の農場にみきりをつけてサンパウロ市に集まるヨーロッパ移民が多かつた。プラス区方面はイタリア移民であふれた（注三）。そしてこのころ、移民のもつてきた技術と労力によつて、工業方面が發展したことは、地方農場の停滞とは別な現象であつた。一般食料、家庭用品はもちろん、綿織物、衣類、家具、化粧・薬品、陶器類、皮革製品、さらに冶金もすすんでコーヒー精選機などもつくられはじめた。いわばブラジルにおける工業の萌芽期だつたわけである。しかもこのころい工業生産を促進した大きな力は、一九〇〇年にライト社（注四）の水力発電所が活動しはじめたことであつた。

こうしてサンパウロ市は、これまでのグラン・フィーノ（農場主たちの上流階級）にポルトガル商人、黒人奴隷というような構成によつてできていた奴隷解放（一八八

八年）前の社会状態からぬけだして、白人工場労働者、職人、手工業者、小商人などの階級が多くの人口を擁する時代へはいりかけていたのである。

しかしコーヒー価格下落による不景気は、長くつづいていた。一九〇六年のタウバターのコーヒー会議後、地方の景気もしだいに回復して、一九一一年から一九一二年にかけて好景気を迎え、サンパウロ市にもそれが影響し、どんどん家もたち、大工、ピントール（塗工）の仕事もふえてくるのであるが、一九〇八年には、コーヒーの大不作もあり、一九〇九年は、どん底を切りぬけていたとはいえ、まだ好景気の一步手前にあつたのである。

ここでは、諸先輩の著書、その他個人の談話をもととして、当時のサンパウロ市のスケッチをこころみる。

市街の建物は四階建てが最高で、それらはほとんどキンゼ・デ・ノベンブロ、ジレイタ、サン・ベント街等のトリアングロ（三角区）といわれる方面にかぎられていた。テアトロ・ムニシパール（市立劇場）は工事中（注⑤）、

現在マタラーツゾ・ビルのあるところには、のちにホテル・ロチセリー・スポルトマンが建てられるのであるが、その建物はまだ落成していなかった。当時はまだ、リベロ・バダローと、トラベツサ・グランデ・ホテルの角にあつた。当時建設中であつたロチセリー型の建物は三つ

あつて、もう一つは陸橋の反対側にできたパラセツテ・プラテスで、のちに階下がファルマツシア・イピランガとなったもの、もう一つはそのさきに、やはり同じ型の建物ができて、のちにここは市役所となったが、この建物は一九六七年度の現在もまだのこっている。パリーの古い様式をまねたもので、日本移民と同じ年齢をかさねている。

ビアズツト・デ・シャー（お茶の陸橋）は一八九二年にできたものであつて、鉄の骨組に木製のタツコ（レンガ形の木）が敷いてあつた。一九三四年にこの橋と並行して今日の陸橋の工事がはじめられ、一九三六年に完成したのであつた。

プラツサ・パトリアルカは、かなり後になってできた広場である。サン・フランシスコ広場の法科大学はまだ古い建物で（改築されたのは一九三四年）、ジレイタ、サン・ベントなどの通りは電車が動いていた。キンゼ・デ・ノベンブロにはサンパウロ市を横断する電車が通っていた。これが断たれた（ママ）のはずっと後のことである。

電車といえば、一九六一年ころからぼつぼつ少なくなつて、一九六六年には、サント・アマーロ線（注の）をはぶいた他は、市内から姿を消してしまつたのであるが、当時はまだできたてで文明開化の花形であつた。

ライト社が、それまでサンパウロ市内を走っていたボンデ・デ・ブーロ（いわば鉄道馬車）を買いとり、これを電化しはじめたのが一九〇〇年だったのである。日本人移民がくる一年前までは、サンタナ方面では、まだブーロ（ラバ）の鉄道馬車が走っていた。ボンデ・デ・ブーロの車体は、のちに改装され、後ろにつなぐレボツケとなり、カーラ・ズーラ（厚顔）とよばれた。料金が半額の一〇〇レイスだったから厚顔、千枚張りのあだ名がついたわけだ。このレボツケは朝夕労働者や巡回自由市場に出る野菜売りの商人―フェイランテーなどが利用した。

ライト社は電車を始めてから半世紀間、料金はいつも二〇〇レイスだった。当時の電車は皆わきの踏台（エストリーボ）から乗る開放式のものであって、五人席の腰掛けが横にならんでいて、もどりの時は、これをみんなひっくりかえすようになっていた。

プラッサ・ダ・セーはラルゴ・ダ・セーであって、現在の五分の一にも足りない広場で、中央にあった教会もどろ壁に白ぬりの小寺でむかつて左側にだけ鐘楼がたっていた。その位置はカイシャ・エコノミカ銀行に近くずっとあと（一九三〇年ころ？）時計台のあったあたりである。この寺院の背後からジョン・メンデス広場まで

つづく広大な地域が今日のプラツサ・ダ・セーであるが、この場所をつくるためには両側にあつた二つの通りがつぶされ、またその間にあつた三つのクワルテイロン（区画）がとりのけられたのであつた。

今は、キンチーノ・ボカユーバ街と並行したほうにはマレシヤール・デオドーロ街があり、サンタ・エレーナ劇場のある通りはカピトン・サロモン街といった。日本移民が来た当時は、これらの通りは、まだとり払われていなかった。旧セー本寺の解体は一九一一年にはじまつたのである。『拓人の足跡』によると、現在建築中のカテドラルのあるところはパウ・ア・ピッケ（壁の骨組が棒杭）の明穂梅吉が職工長をしていた麦わら帽子製造工場があつたのである。

まもなく、ジョン・メンデス広場よりの一角に板塀がめぐらされ、ここが本寺建立の敷地となるのであるが、起工式が行なわれたのは、一九一二年七月六日のことであつた（注こ）。

あのころとりこわされた家は棒杭の間に泥をつめこみ上ぬりをほどこし、白、青、黄等の石灰をぬったものでほとんど二階建ての、いわゆるソブラードであつた。

街灯は一九一六年にはトリアングロ区域が電灯になつたが、その他の場所は、ガス灯であつて、民家は一九〇八年ころでも上等なところはガス灯で、ポロンなどはみ

なランプであつた。自動車は五十台もあつたかなかつたか。タクシーはまだ動いていなかった。第二回移民が着いたころはたしかに動いていたし、日本から来た視察者を後藤武夫が自動車で市内を案内してよろこばれた記憶があるといっていた。この時代はタクシーの替わりに馬車があつて、一頭馬車（チルブリー）と黒ぬりの二頭馬車（カーロ・カーロ・イングレース？）の二種類で、ほろも黒くぬってあり、駅者も黒い制服に山高帽子をかぶっていた。

すばらしい体躯偉大な馬が多かつた。ルース駅からコンデ近辺へ乗りこんだ移民たちは三ミルから四ミル・レイスを支払つた。ボンデ（電車）が二〇〇レイスの時代だったから、これはぜいたくな乗り物であつた。

婦人たちは長いスカートをひきずるようにして歩いていた。聖州新報社発行の『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』（一九三三年）にはその二七ページに、めずらしい写真がていいるが、おそらく当時（日本からのものかもしれないが）の服装を示すものだろう。

男たちは、堅い、いわゆるハイ・カラーをつけ、チョッキは欠かさない。婦人たちは、花かぎりのついたボンネットを、かるく束髪の上にのせ、つめえり・そで長のブラウスをつけ、裾の広がったスカートをはいっている。これは限部三郎一家を中心とした移民以前のインテリ渡

航者たちの写真であつた。

通貨はもちろんミル・レイスで、紙幣は、一、五、一〇、二〇、五〇、一〇〇、二〇〇、五〇〇ミル・レイスで、一ミル・レイスは六十三銭ということであつた。

硬貨には大きな一ミル、二ミル・レイスの銀貨があつたし、帝政時代から流通していた一〇〇レイス、二〇〇レイスのニッケルは持ち歩きに困るような大きさだつた。銅貨のビンテン（二〇レイス）も通用していて、バナナが二本買えたという。そうするとバナナは一ダース一〇〇レイスくらいで買えたわけだ。カフェーは一〇〇レイス、電車は二〇〇レイス、新聞は普通一〇〇レイスで、オ・エスタードが二〇〇レイスだつた。「拓人の

足跡」二一四ページによると『メルカード（市場）に行つて一〇〇レイスで一山葱を買う。その他年内一キロが三〇〇レイス、米が一リットル三、四〇〇レイス』とあるが、肉は普通五〇〇〜八〇〇レイスくらいだつたという人もいた。とにかく当時物価が安かつたことがわかる。上塚周平の月給（送金はなかつたが）五〇〇ミル、通訳たちは二〇〇ミルだつた。物価は半世紀余で一千倍にとび上がっている。

ソルチード（膳飯）がパンつきで五〇〇レイス、日本人下宿では二食で五〇〇レイスであつた。普通食堂の定食が一ミル・レイス内外であつた。メニューは一膳飯のも

のと変わらないし両者ともサラダはなかった。ただ定食にはあとで一杯のコーヒーがつく。

シネーマはまだ普及せず、民衆の娯楽はテアトロ（劇場）のオペレッタであつた。

サンパウロ市の日本人社会に、階層的な区別が生まれたのは、ここに総領事館や移民組合の事務所ができてからのことであつて、総領事館は一九一四年の九月、ブラジル移民組合は一九一六（大正五）年に成立してサンパウロに事務所をおくことになったのである。

『四十年史』によると、「このころ聖市（サンパウロ市）におけるいわゆる上町インテリによつて日本倶楽部が組織され、奥地日本人のインテリ級に入会をよびかけていた」とあるが、後藤武夫談によると、松村総領事のきも入りで、フレイ・カネーカ街の後藤宅で、一九一四年十二月二十五日のクリスマスの夜、日本倶楽部は創立開会されたという。そして、同じ「四十年史」によると、このとき下町の移民たちは除外されたのであつた。しかし、クラブが社交場として充実してくるのは、移民組合ができ、また、組合による第一回移民船が大正六（一九一七）年六月に一千三百の移民を乗せてサントスに入港し、移民組合教育機関としての新聞『伯刺西爾時報』などが発刊されるようになったころであつた。

サンパウロ市にうつる前の日本船領事館はリオの公使館内にあり、はじめは公使が総領事を兼任していたのであるが、一九二二年から主席書記官がこれを兼任した。このころ、後藤武夫その他移民会社関係の有志が集まって、「サンパウロ州はすでに在留同胞一万をこえたから、ぜひここに領事館設置の必要がある」旨協議し、これを日本外務省に請願したところ、いれられて、翌一九一四年九月一日主席書記官兼総領事松村貞雄の赴任となったのであった。松村総領事は、そのとき、サンパウロ出張所長として着任したのであった。

出張所時代の総領事館は、アウダスタ街二七九番（今から考えるとシダーデからパウリスタ大通りへの中ほどの地点）の二階建ての家で、下が事務所、二階が住居ということになった。家具は後藤武夫がレイロン（競売）で買いこんできた。

やがて、一九一五年七月正式にリオ・デ・ジャネイロにあった総領事館がサンパウロ市にうつされて、ここが全ブラジルを管轄する帝国総領事館となったのであった。かくて、総領事館はラルゴ・ダ・セーにうつることになる。今日なら、セー本寺の真正面にあたるところで、この三階？であった。この建物だけが新築であつたせいか、普通の家並みから少し入りこんでいたのであるが、広場に面した表側には旗ざおとともに、「菊

の御紋」がかかけられることになった。次いで、館邸もアウグスタからアベーニード・パウリスタのサンタ・カタリーナ病院の隣へうつり、家具もリセウ・デ・アルテ・エ・オフィーシオ（サンパウロ最古の職業学校）へ特別注文して新調したのであった（注8）。

さて、一九一七年は移民組合の機関紙『伯刺西爾時報』が、「南米唯一のふりがなづき邦字新聞」というふれこみで、週一回、金曜日発行であらわれた年であつて、それまであつた「日伯新聞」と、対立的立場に立つた。いわば、片や「官」、片や「民」を代表するような姿勢となるのである。筆者は、この時代のサンパウロ市の日本人社会を、これからこまかく描く必要にせまられてくる。

注

(1) 一九〇七年の人口は二十八万六千人であつた。

(2) 一八九〇年は六万九千九百三十四人で、一九〇〇年に二十三万九千八百二十人となっている。これを州の人口比率によると、五%から十%へ飛躍しているのである。

Luis Amaral..Aspecto Fundamental do

Vida

Rural Braspileira (1936) p. 127

(3) 一八八八年の奴隷解放後、一八九五年まで六十一万二

千人のイタリア移民がサンパウロ州にはいった。

Jorge Mello: A terra de Cafe

p. 206.

(4) テアトロ・ムニシパール(市立劇場)。Brazilian
Traction Light & Power Co., Ltd.
(Tronto, Canada)

(5) 一九〇八年に起工され一九一一年に落成した。

(6) これも一九六八年にはとりのぞかれた。

(7) Azevedo Marques .. Apontamentos
Geograficos,

Biograficos, Estatisticos noticiosos da
Provincia de SAO Paulo, Tomo I p. 241, お
よび Tomo II. a7

Afonso de E. Taunay .. Velho Sao Paulo Vol. 1
(Ed. Melhoramentos 1954) p. 345

(8) 日本総領事館開設の部分については、ほとんど後藤武
夫氏の談話をもとにして書きあげた。

13. コンデ街の生活

よく働く日本人は朝早起きする。もう大工さんたちは
道具箱をかついでポロンの出口をくぐり、坂をのぼりは

じめる。物をかついで坂をのぼるのは、息切れするほどだ。しかもこのころの大工さんは、ちゃんと上着（パレト―）を着て、ときにはネクタイもかけている。はしごをかついで、てくてくやってくる日本人ピントール（塗工・漆喰ぬり）に出会う。さすがにこの人は上着をきていない。「おはようございま―あス」とあいさつする。ピントールはずっと下の路地裏に住んでいるのだ。

「今日は仕事場が変わりますけに」といって、さっさと登っていく。

向こうがわには、帆かけ船みたいな屋台車おしてソルベツテ売りに行くものがある。よくみると日本人だ。要領のいい男で、こんな手おし車を工夫したのである。

おかみさんがタマンコ（つつかけ）をはいて、ポロンから姿をあらわす。近くの肉屋へでかけるところだ。はじめはブラジル式の煮方がわからないので、なるべくやわらかな肉だけを少し買っていた。ブラジル人は、どんなところでもたくさん買っていく。だんだん様子をきいてみると、長くたきさえすれば、どんな肉でも、けっこうおいしく食べられることがわかった。はじめはソッパをとる。それからやわらかくなったものを、さらに油や胡椒でよく味つけすると、また別な味になる。今日は安い肉をたくさん買って、まず味噌汁のだしをとり、のこりは晩に野菜と煮つけようということにしたのである。

ポルトガル人の野菜屋が、一輪車の手車をおしてやってくるが、コウベ（注二）の葉三枚、細ねぎ三本、それにパセリの葉二、三本を束ねたやつだ。ひと束一〇〇レイス。

これはみな肉のソッパにきざみこむやつで、これが当時の下町庶民の野菜の全部であつた。シュシュー（はやとり）やじやがいも、にんじんもたまにはもつてくるがめずらしいほうだ（今日はにんじんはある）。トマトなどはほとんどなかった。シコーリヤ（きくぢさ）はもつてくるが、これは日本人むきではなく、お隣のイタリア人が買う。手車をかこんだ二、三人の日本人のおかみさんが朝のあいさつをすませると、「なにか、いい夢をみましたかえ」と一人が口をきる。「どうやら蝶々らしいんですがのう」との答え。「ボルボレッタ（蝶々）かいなあ」「わしはきのう、それに賭けたんじやが、四〇〇レイス（一キロ）の肉代を捨ててしもうた、ハッハッハ……」と他のものが笑う。

これはビッショという一種の富くじの話で、番号がそれぞれ虫・鳥・けだものの名であらわされているもので、それらを総称した言葉であるビッショという名でよばれるのである（後詳説）。

タマンコ（つつかけ）の音が消えて、女たちはまたポロン（地下室）へ消える。

ブラジル人が二階（とはいってもポロンの上で実は地階）の窓から野菜屋に話しかける。野菜屋はにんじん二、三本、皿秤ではかったものをざるに入れて家の入口まで運ぶ。

朝刊売りの少年がコレイオ・パウリスターノ（注②）、オ・スタード！とどなつてとおる。日本人が必要なのは、午後でるディアリオ・ポプラール（注③）だけである。これには「求人」「求職」の広告がたくさんでる。

子供たちが、どやどやと走つてとおる。日本人、黒、白のブラジル人、イタリア人、みないっしよだ。ブラジル語の勉強にかよう連中である。日本人の子供たちは、午後宮崎信造先生に日本語をならう。

坂の上をみあげると、サルゼーダス伯邸のお城のような赤い建物が、朝日にてりかえっている。

コンデ街に日本人の「旅館」ができ、雑貨店ができたのは、一九一四年ころからだといわれるが、はつきりしない。まず上地旅館が四九番（オリベ이라・モンテイロの角）にあらわれ、これはのちボニータ（トマース・デ・リーマ）街十一番へ越して、そのあとに瀬木商店がくるがこれはずっとあとの話。はじめはもつと坂の途中から坂下に集まっていた。旅館と名のつくものは、さきにも

ちよつとふれたように、みな家を一軒借りた。むろん、普通の民家である。しかし、雑貨店はポロンだった。とうふ屋もポロンにできた。旅館も雑貨店も表には看板を出していない。入口の戸板に「小川旅館」とか、「末広旅館」とかはり紙がしてあるだけだ。雑貨店も同じである。何々商店、何々商店が、今日では想像もつかないポロンの一室、その他いろいろできたらしいが、店はおかみさんにまかせてときおり地方へ行商にでるものもあった。

地方からでてきたものは、宿屋からおしえられて日本人雑貨店を訪問し、ここで話しこむ。せまい地下室の入口の部屋には日本品がならんでいて、仁丹、ライオン歯みがき粉、実母散はもちろんのこと、「のり」や数の子もある。移民の荷物とともにとりよせたものもあつた。一握りはどの品物だ。ボタン、糸、針、レースあみのかぎり、なかには日本品もあるが、ブラジル人の卸屋から仕入れたものも多い。

移民には、正式な貿易などできなかった時代だったろう。こんな話も残っている。再渡航の際、彼は船中で同行者を集めてポルトガル語の講義をした。なかなかおもしろい先生で、多くの家族と親しくなった。さて、サントス港に着いて上陸ということになったとき、彼には荷物が多かった。しかしみな手荷物の信玄袋である。ねえ、

君すまんが、これを一つずつ持ってくれないか。手のすいたものには、お安い御用だ。こんなサッコーラ（袋）は税関はいらない。でもポルトガル語の先生には貴重な品物がどっさりはいっていたのであった。密輸入というには、あまりに無邪気なやり方だったかもしれない。これは後日ポロンの商品棚になったのであった。

日本人雑貨店を訪問したものがよろこんだのは、もうここに醤油がでていることだった。醤油があるからとうふ屋ができ、うどん屋があらわれ、日本食の旅館もまたなりたったのである。

移民たちは地方へもどるとき、醤油を一リットル買って帰る。ファゼンダを出て米作地へはいった人たちは、そこで魚がとれることはうれしいが、さしみにするためには、醤油がなかったのである。「いなかでも、さしみが食えるぞ！」日本人にとって、こんなすばらしいごちそうはなかった。

第一回移民の神田栄太郎が、サントスで醤油づくりをはじめたのは、一九一三年か一四年頃からだという。「当時はめずらしかったので、門前市をなす盛況を呈した」と八重野松男の『今日のブラジル』六〇二ページにみえている。

ブラジルにおける日本人の食生活に、醤油があらわれ

たことは、大きな出来事だったにちがいない。米の飯に味噌汁、肉のソッパ、フエイジョン、漬物という、とんちんかんな組合わせのなかに、醤油があれば、野菜と肉の煮物、スキヤキ、煮魚、さしみ、それにおしたしなどがふえて、急に食べ物が豊富になってくる。

しかし、下町の移民生活は、たとい醤油があらわれて、スキヤキやさしみが食べられるようにはなっても、純日本式の食事にもどるようなことはなかった。隣の旅館では、日本式の食器で、日本食をだしていても、こちらでは、フエイジョンやブラジル式のソッパが煮たきされていた。むろん食器は皿、さじ、フォーク、それにブラジル製チジェーラ（どんぶり）である。

ただおもしろいことは、朝は旅館でもコーヒーとパンであった。牛乳は出すところもあったが、ださないところのほうが多かった。バターなしのパンである。

旅館は地方から出てくる人の便利でもあるが、サンパウロで職さがしをするもののいい足場であった。コッペイロ連中などは、二、三か月働くと旅館へもどって一休みし、またでかけるものも多かった。日本人の顔を見、日本語を話し、日本食を食べるたのしみでもあった。ゆつくり朝寝して、起きるとビツショを賭け、ロテリア（国営富くじ）を買い、晩はフロントン（ペロッタ投球―後述）をのぞき、シネーマを見、紅灯のちまたをさまよ

い帰ってねる。これが当時の独身青年のたのしみであった。そして宿賃やこづかいがなくなる時分には、また家庭労働の口をてがけるのであった。これは地方にあつて汗水ながして働いているものにとっては、鼻もちならぬ墮落ぶりであつた。地方の人たちは、彼らをバガブンドという名称で毛嫌いした。青年が都会へでると、「あれも、とうとうバガブンドになったか」となげき、さげすむのであつた（注⑤）。

移民にとりつきやすい家庭労働

コンデ街を根拠として、外へ働きにでている家庭労働者、その筆頭としてのコッペイロをもう少し書く。コッペイロといえども、皆が皆墮落している人間ばかりではなかつた。世の悪評をかつたのは、宿屋に戻ると同宿した新移民をだまして金をまきあげたとか、ばくちが本職になつてしまったとか、そういう噂がおおげさに伝わつていったからにちがいない。そうではなくて、家庭労働者となり、ブラジル人の氣心を知り、習慣を身につけ、言葉を覚え、のちにブラジル人の社会へ進出する身支度をととのえたものもあつた。

当時はグラン・フィーノとよばれる上流階級は、殿様たちであり、いわばブラジルの貴族階級でもあつたので、

上下の区別はきびしかった。口ごたえなどゆるさなかった。パトロア（奥様）ばかりでなく、子供たちまで、使用人を命令的にあつかった。ほとんど奴隸的なあつかい方だったという。いくじのないものは卑屈になり、氣概のあるものは反抗的になる。決してなまやさしいものではなかった。言葉もよくわからず、習慣もしらない日本移民は、そこで数々の失敗を記録した。

コツペイロとは、コツパ（食料・食器おき場）をつかさどる人間という意味もあるが、普通は給仕人ということである。

料理には関係しないが、食卓をととのえ、食事のときは、家風にしたがって、主人、主婦、長男という順序でサービスする。そして食事と食事の間の時間は、床板をみがき、家具をきれいにしておく。夜は料理人とともに皿洗いもする。電話のとりつぎという苦手な仕事もある。

氣むずかしい主婦になると、ちよつとのことでもプリプリ怒る。どなりたてられたら、なにをいうのかわからなくなる、言葉がよくわからないから別に氣にもならない。またブラジル人はいうだけいってしまふとケロツとしている。あとをひかないのがなによりだ。

椅子の位置がちがっていたとおこられ、物をこわしたといってどなられる。知らずにおかした失敗で、おいだされることもある。便器を洗面道具とまちがえて鏡台の

上にかざっておいた話、鶏の羽根を切っておけといわれ
て首を切ってしまった話（「四十年史」）、こんなことをさが
したら、おそらく数かぎりないだろう。

筆者の友人でコッペイロをやった者の話によると、あ
るところでは洗濯までさせた。これはあまり上等な家で
はなかったようだ。なんでも成り上がり者だったという。
主婦は洗濯物を二階の窓から下の洗濯場のほうへなげて
よこす。しらべてみるとそのなかに女のズロースがまざ
っていた。「人をばかにするのほどもがある。たとい下
男といえども、こちらは男だ。男にズロースを洗わせる
とは何事だ」と怒り心頭に発したが、まてよ、ここでけ
んかをしたらまずい、よし、からかってやれ、とおもい、
そのズロースを両手にかかげ、ひらひらとうちふりなが
ら「奥様、奥様！」とどなった。二階から主婦の顔がみ
えるや「これですかア！」とさけんだという。

話の結果はきかなかったが、おそらく、この家をとび
だしたことだろう。

日本人家庭労働者は、雇主側から一般に非常に信用
されだした。よく働いて、清潔で、物を決して盗まない、
との評判が、いつか定評となり、需要もました。はじめ
は一〇ミルから多いところで三〇ミルくらいの賃金だっ
たのが、四〇ミル、五〇ミル台になり、一年後には最高
七、八〇ミルまでとる者がでてきた。それでもブラジル

人労働者より格安だった。そこに雇主がわのつけ目もあった。新聞の広告欄には特に日本人を求めるというのがふえてきた。

これらの家庭労働は「在北米、日本移民初期の人々が、われわれ日本移民より先に、体験済みだった。日本の官憲やブルジョア階級からは、日本移民の海外発展は、”いくじなしの家庭奉公発展じゃ”と蔑視されていた。”これだから、朝鮮にも満洲にも、台湾にさえも日本移民はやれぬ”と慨嘆された」（「四十年史」）そうであるが、しかし同史が弁解しているように、日本移民の都会進出者にとつては、初期のこの家庭奉公こそ、食って生きるための労働であり、ブラジル文化への同化の第一歩であり、異国語の習練所でもあったのである。

しかし、この傾向は、ブラジル、ことにサンパウロ市の工業化以前においては、日本移民ばかりのものではなかった。第二次大戦後、工業化が急速にすすんで、農村人口をどんどん吸収するようになると、今度は家庭労働者払底が問題とされるようになる。同時に、日本移民も都会でいろいろ事業をおこすようになる、もう有為な青年が、家庭労働にくすぶる必要もなくなるのである。

しかし、あの当時は、相当のインテリでさえも、大工になれないものは家庭労働者になったのである。たまたま通訳などになってコーヒー農場へはいりこんでも、

コロノの要求とフアゼンダ側の規則との枚ばさみとなり、やりきれないで都会へでてきてコッペイロをやり、ビツシヨを賭けて十数年をすごし、帰国したものさえあった。いくじなしの家庭奉公として慨嘆するものにも一理あったわけである。

大工、塗工と家具商

つぎには都会における初期移民の職業的進出に重要な地位をしめる大工やピントールたちについて書く。

大工、塗工は、鮫島棟梁を中心として建築請負業に発展したものと、家具商を中心に集まるものにわかれていった。一九一八年ころからの現象であった。

「カーザ・ジャッポーン」、「カーザ・ミカード」、「カーザ・トウキョー」などは、エナメル塗りの家具を製造し販売する日本人家具店の名であった。いかにもちやちな店ではあったが、日本移民がはじめて街路にむかつて店を張り、商売をはじめ、しかも長続きした点で特筆すべきである。

自動車運転手

最後に、家庭労働者から発展した自動車（ハイヤー）運

転手たちのことを記さなければならない。彼らははじめ、ブラジル人家庭のおかかえ運転手であつたが、独立して街頭に進出したのであつた。ブラジル人も仲間に加わつた。十人くらいが組んで、ポント（待機所）をもうけ、電話をひいて「ガラージェ」ととなえた。「ガラージェ・ミカド」はサン・ジョン大通りに、「ガラージェ・コングレッソ」は、ジョン・メデス広場のコングレッソ（議事堂）のわきにできたものである。

これら運転手たちは、地方から出てくる病人を医者へつれて行つたり、サンタ・カーザ（慈善病院）へはこんだり、またコンデ街の宿屋から客を駅へのせて行つたり、ずいぶん便利なものだった。かくれた功績も多いことだろう。

（以上コンデ街を中心としていわゆる「下町」在留同胞の生活を記述したが、コンデを中心とするこの界隈は、坂の下グリセリオ街、坂のくだり口から右へのびたボニータ（現トマス・デ・リーマ）街、それからこの通りを横切つてコンデと並行したエスツダンテス街へと、日本人住居区域はひろがっていたが、その生活は大同小異であつた）

在留同胞のオアシス、コンデ街

コンデ街は、いわばサンパウロ市における日本人植民地みたいなもので、日本人会ができ―同志会という名に変わったこともあるが―小学校もでき、その後援会も組織され、顔役もあらわれ、寄付金も集められた。また結婚式などには寄りあつて、ああ、こりや、こりやとやる。野菜屋ができ、とうふ屋もでき、まんじゅう屋もできるとなれば、甘党、辛党に不足はない。地方から買ひ物にでてきたものには日本食の宿屋もあるし、病人には医者があり、親切な運転手もいて、地理不案内なところを、どこへでも案内してくれる。コンデ街はサンパウロ在住日本人の中心であるばかりでなく、地方からでて来たもののたまり場でもあり、オアシスでもあつた。

古い顔役には鮫島棟梁がいた。コンデには住んでいなかったが、大工・ピントールの頭（かしら）として、日本人会でも学校の後援会でも、イの一番に寄付金をだした。

コンデの村長さんとよばれた大工の木村清八は、親切なおっちゃん、上塚周平の同郷人で、ポリチコ（策士）だった。評するものもあるが、太っ腹だとほめる者のはうが多い（注の）。

また、もぐり医者だなんて上町のお医者さんからはよくいわれなかったが、ブラジル人の医者とくんで田舎か

らでてきた病人を親切に世話する山田隆次がいた。むろん、いつもパイパイのコンデ住民であつたが、地方のドクトールの高い診察料といいかげんな診断におそれをなしてサンパウロに出てくる病人は、わざわざ「コンデの山田さん」をたずねた。医者では、「米国医学士」を名乗つたものもいた。山田医師は評判がよかつた。もぐり医者のほうが相談しやすかつた。「金がないけに」といえば「いいわ、いいわ、あとでもつてきんさい」で世話になれた。ブラジル人医者 of 通訳みたいになかつた。山田隆次はサンタ・カーザ（慈善病院）へ患者を入院させた。コンデの近くのジョン・メデスにはコンデ住まいの運転手がいつも待機していたので、一走りすればすぐ呼んでこられた。安心して病院へとどけてもらえた。日本人運転手も便利な存在であつた。山田隆次は三二年革命のときプラッサ・ダ・セーで流れ弾にあたつて死んだが、コンデ総出のりっぱな葬式だったという。隆次の弟正忠も兄亡きあと、コンデの住民として、最後まで移民の世話ですごした。猥談の名人山田の忠さんは『物故先駆者列伝』によると「街の義人忠さん」になっている。この人の世話になって「救われたもの数千の多きに達するであろう」（一四〇ページ）とある。

コンデの住人でその名を逸することのできない人に大正小学校の先生、宮崎信造がいる。大正小学校は一九一

四（大正三）年ころできたが、むろん学校というほどのものではなかった。最初の生徒は三人で月謝四ミルだったそうだ。正式には一九一五（大正四）年十月の創立ということになっている。そこ、ここと部屋がかわって、一九一六（大正五）年コンデ街四八番にうつった。二階建て（ソプラード）の地階であつた。坂をおりきったところの右手であつた。一九一九（大正八）年一月私立学校としての認可をえ、同年十二月ドナ・アントニア・サントスという女の先生を迎えてポルトガル語の教授もはじめた。後援会ができたのはこの年の十一月だったという（「物故先駆者列伝」八一ページ）。

宮崎は一九二四（大正十三）年六月死ぬまで独身、ずっとぐりして丈夫そうな体格、武士は食わねど高楊子式に、いつも着ふるした黒っぽい洋服に、油じみた中折れをきちんとかぶっていた。筆者には明治時代の漢学の先生みtainな風格として印象に残っている。

「本当に子供が好きで」死ぬまで在職九年―実は十年―変わることもなく、長い歲月一日のごとく教鞭をとっていた。

日本語学校とともにわすれられないのは、時代はずっとくだるが、パードレ・ギード・デル・トーロ (Pa. Guido del Torro) がジョン・メンデスのサン・ゴンサロ教会を中心として一九二六年から、コンデの日本人たちに

カトリック教の布教をはじめたことである。のちの救済会の中心人物、ドナ・マルガリーダ・渡辺は、会計士渡辺儀平の妻であったが、そのころからカトリックに入信し、夫亡きあとは日本移民の老、病人の救助に努力しつつ今日に至っている。

このように、まだコンデ街に日本雑貨商も宿屋もあった時代、すでに二、三百の日本人が住み、ある合宿所みたいなところには、日曜などは五十人くらいも各所から集まった連中が、宿泊料金一ミルを支払ってざこ寝をしたところもあったが、風紀がみだれて、それが社会問題となったことをきかない。ビッショに熱中したとか、おやじがばくちを打って家族のものが苦労したなどの話はきいた。しかし、ブラジル移民は、もともと家族ものが主体となっていたせいかな、女が少なかったわりに風紀の点では割合問題がなかった。

ビッショ賭けの話やフロントン（ペロッタ競技）のことは、すぐつづけて書く。赤線区域の話もしよう。

娯楽としては撞球につづいて、一九一六年ころから、ベースボールがはじめられたことは、風紀上にも大きなコントロールになったことと思う。コンデの坂下には、いわゆる「スダンのカンポ」とよばれた空地があった。スダン・タバコ会社の所有地であったのか、それともその会社の隣接地であったためにそうよばれたのか、それ

はわからないが、とにかくコンデのすぐ近くに、ベースボールをやる場所があったのは幸いだった。多分、ボニータ街の土地旅館に下宿していた慶応出の笹原憲次という青年が先頭に立ってコンデ青年の野球クラブ「ミカド」をつくった。ミカド・クラブはその後、発展してサンパウロ・ベースボールの基礎を築いたのであった。

コンデ街とエスツダントス街の間の空地にテニス・コートができたのは昭和にはいつてからであった。日本倶楽部が主になっていたが、上町連中も、そのころはまだいくらかコンヂ街と接触をたもっていたのであった。

時代は少し逆もどりしてコンデ街の初期になるが、サンパウロにおける移民たちの生活をよく象徴するものとして当時のカザメント（結婚式）を記すことにする。『コロニア』誌四四号の座談会“苦難時代のコンデ街”に梅田久吉の話がでている。

はじめて人に嫁さんを世話したときだが、ある独りものに、

「どうだ、お前結婚したくないか？」

というと、

「したいがなア、金がないんでなア」

というんだ。女の子の年ごろもいいし、どっちもちらちら見て好きらしいし、ヨシ、ヨシ、じゃやれ、というわけだ。それで男に、「いったいお前いくらもっている

か」ときくと、「おれ五ミルもつとる」ちゅうんだ（五ミルは当時労働者の日給二日分くらい、いい職人なら一日分の給料だ）。

「五ミルあったらたくさんだ。カザメント（結婚式）の御馳走して、カーザ（結婚）するか」ってきくと、どっちも、「いいなア」だ。

そこで五ミルもってこい、といって、メルカード（市場）でモルタンデーラ（Mortadella イタリア式大腸詰め）を一キロ四〇〇レイス、ラランジャ・バイアーナ（ネーブル・オレンジ）半ダース。それからピングア（火酒）一本二〇〇レイスで二本買った。他に何やら買って三ミル何百かだった。それから十人くらい集まり、セキタン・グワン（石油の空缶）たたいて、アア、コリヤ、コリヤというわけだ。

それから、もつとる着物でたくさんだ、それで新婚旅行に行け、といった。

そのころ、ルア・サンパウロ（コンセリエイロ・フルタードの角、旧テアトロ・サンパウロ？）にシネーマ館があつて、下のカデイラ（椅子席）が五〇〇レイス、ガリニエイロ（とり小屋のことだがガレリアをもじったもの――一般席三階）が三〇レイスだった。それを見に行つたのが新婚旅行というわけで結婚がすんで三、四〇〇レイス残ってしまった。それが、どんどんりっぱな家庭に

なって、子供が八人もできて、金持ちになった。

「今まで、これがいちばんおもしろい結婚式だ」とむすんでいるが、これと似たり、よつたりの結婚式をあげたものは数えきれないだろう。お互いに裸一貫できた移民たち、しかもときには父母、親戚も近くにいない連中は知友グループの承認をえることが即ち結婚式なのであった。これは、のちに社会は地位や金ができてくると、だんだん形式を重んじ、また披露の盛大を誇るようになる。当時は、コンデ街だけがそうした傾向をとったのではなかった。それにしても、モルタンデーラとピンガは彼らコンデ住民の生活を表わしていてもしろい。

一九三〇年ころまでのサンパウロ市における初期日本人社会には、コンデを中心とする下町の同志会あり、またいわゆるインテリと称されたものたちの日本倶楽部があったが、すでに一千人近くの日本移民が集まっていたにもかかわらず、一般のものが一ところに会合するようなことは、天長節をほかにしてはなかった。総領事さまのおひざもとになった一九一四年から、ぼつぼつ天長節の祝賀会が考えられたようである。

いつからはじまったか明らかではないが、はじめは総領事館主催で、アグア・ブランカのアンタルチカ公園で催された。いまはもうなくなっているが、アベニード・アグア・ブランカのどんづまり、マタラッゾ工場の

向かいがわにあった。それからあとは、在留民、すなわち、コンデの連中が中心になって、アクリマソン公園で催すようになった。むろん、まず総領事館へ行って寄付をあおぎ、足りないところを、在留民のおもだったものから集めるというやり方であった。

アクリマソン公園は、池を中心に、まわりにユーカリ林があつて、わずかに動物の檻が手前のほうの池のほとりにならんでいた程度で、門をはいつて左側には草原もあつたから、ここにテントを張り、赤白の幕をめぐらしたスタンドをこしらえ、総領事館の人々、移民会社の代理人たち、新聞社の社長という面々がのぼつた。司会者のあいさつで総領事か誰かが教育勅語を「奉読」し、祝辞を述べ、おえらい人たちの美辞麗句たっぷりの演説があり、ブラジル国歌と君が代が奏された。バンドは草原にビール会社のサービスでならべられた折畳み式の椅子にかけて十人ほどがひとかたまりになっていた。州警兵隊のものであつたかどうかおぼえていない。ただ、当時はまだ誰もブラジル国歌はうたえなかつたので君が代だけ斉唱して、天皇陛下万歳をとなえた。それから、みんな、ガソーザ（ソーダ水）かビールを一本ずつと、お菓子やみかんをもらつて運動会にうつつた。型どおり、二人三脚、障害物、パン食いに、つな引きなど、女子供もはいつてわいわいさわぎ、賞品をもらう。最後は池のま

わりを何回かまわるマラソン競走。楽隊も場所をかえてトラックの近くにより、走者は、ブカブカ、ドンドンにあわせて三回四回とまわる。一等、二等、三等、五等までの旗がわたされて大団円。花火があがって一年一回の日本人のグランデ・フェスタ（大会）が終わりになるのであった。

注

(1) コウベはキャベツに似ているが、玉にならない菜である。葉をかいでたべる。ブラジル人はきざんでスープに入れたり油でいためたりしてたべる。昔から細ねぎ、パセリ等とともにブラジル料理によくつかわれた。

(2) *Correio Paulistano*. 現存しないが、かつてはサンパウロ共和党機関紙として有力な新聞であった。一八五一年創刊。

(3) *O Estado de S. Paulo*. サンパウロ州一流の新聞、一八六四年創刊、現存。

(4) *Diário Popular*. 一八八一年創刊、現存。

(5) バガブンドという言葉は、元来、バゲアールⅡただよう、さまようⅡなどを意味する動詞に関連する放浪者、風来坊のことであるが、ブラジルの田舎では「なまけもの」のことを、バガブンドとよぶ。

(6)『物故先駆者列伝し五二ページ。

14. ビツシヨ賭けの話

ここでは、彼らの日常のたのしみであり、希望であり、小さな生き甲斐でもあったが、ときには生活の破綻ともなったビツシヨ賭けについて書く。

ビツシヨとは、虫、鳥、けだもの（魚類をはぶく）等をひつくるめた動物を意味するポルトガル語であって、これを利用した賭けごとをジョーゴ・デ・ビツシヨといった。

いまはきつく御法度であるが、もともと公認のものではなく、戦前までは、禁止されていたとはいえ、まあ「黙認」のかたちでながくつづいてきたもので、「ブラジルのロテリア（富くじ）」の称もあるが、必ずしもブラジル独特のものとはいえないようである。

起原は、一八九三年ころ、リオの動物園で経費をおぎなうために、入場券一ミルに対して二〇ミルの賞金が抽選で与えられたことにはじまるといわれている。

それがどうして動物の名にかかわる賭けごとになったかというと、動物園の一部には、二十五種の動物の大きな絵が（おそらく番号つきで）箱におきめてかかげられていたが、公衆には見えないように蓋がしてあった。こ

れが午後三時になると、それらの箱の一つの蓋があいて、中の動物の絵があらわれ、その日の当たり札が、その絵によって一目瞭然入場者一般に知れるようになっていたのである。

はじめは、入場者だけがこの札をえられるようになっていたのであるが、まもなく、市内のあらゆるところで「札売り人 (Book-Makers)」から購入できるようになった。こうしたばくちの流布にあわてた警察では、動物園に動物の絵をかかげてこれをばくちに利用することを禁じるようになったのであるが、数字を動物の表象とする賭けごとは富くじの当たり番号とむすばれて、どんな普及していったのであった。

二十五の動物は、それぞれ番号によってあらわされ、一つの動物は四つの数字（これをグループポという）を代表した。それらの数字の一つあるいはグループポ（一組）になにがしかの金を賭け、その日の官営富くじの当たり札の番号を待つ。富くじの番号は四ケタ以上のものであるから、もし二万一千五百六十七という当たり札があったとすれば、五百六十七がビツショの当たりとなるのであり、かけ方によっては三ケタ、四ケタまであるから、三ケタは五百六十七で、四ケタにかけたものは一千五百六十七が当たり番号ということになる。まず、二十五のビツショを示し、それらが代表する数字について説

明しよう。ビツショはABC順になっている。

- 一、アベスツルース（駝鳥）
- 二、アーギア（鷺）
- 三、ブーロ（驢馬）
- 四、ボルボレッタ（蝶）
- 五、カシヨーロ（犬）
- 六、カーブラ（山羊）
- 七、カルネイロ（緬羊）
- 八、カメーロ（駱駝）
- 九、コーブラ（蛇）
- 一〇、コエーリヨ（兎）
- 一一、カヴァーロ（馬）
- 一二、エレフアンテ（象）
- 一三、ガーロ（雄鶏）
- 一四、ガット（猫）
- 一五、ジャカレー（鰐）
- 一六、レオーン（ライオン）
- 一七、マカーコ（猿）
- 一八、ポルコ（豚）
- 一九、パヴォーン（孔雀）
- 二〇、ペルー（七面鳥）
- 二一、トウロ（雄牛）
- 二二、チーグレ（虎）

二三、ウールソ（熊）

二四、ヴェアード（鹿）

二五、ヴァーカ（雌牛）

しかし、この番号は、何番はそれぞれ動物を代表してはいるが、番号そのものが賭けの対象となるものではない。初期には、もちろん、この番号そのものが、直ちにビッショを代表して賭けの対象となっていたようであるが、だんだん複雑になって賭けの対象の数字がふえていって、もとの順番の数字は単にビッショの代名詞になっってしまったものである。ちなみに、州によつては動物の名も土地にふさわしいものがいろいろあつたが、いつのまにか統一されていったのである。

これらの二十五のビッショには、それぞれ四つの数字が一组（グルーッポ）となつてあてはめられている。

たとえば、第一番のアベスツルース、すなわち駝鳥は、一から四までの数字を代表する。だから、そのなかの一でも二でも三でも、また四でもみな駝鳥である。そのなかのどの数字に賭けてもいいし、一组全部に賭けてもいい。一ケタの数字だけではほとんど儲けがないから、二ケタ（デゼーナ）にしようと思えば〇一、〇二、〇三、〇四、というようなする。今日は駝鳥が出そうだと思えば、四つの数字（グルーッポ）に賭ける。

もう一つ例を示せば、最後の二十五番は雌牛である。

が、これは九十七から百までの数字を代表する。これをグループで賭ければ、そのなかの一つでも当たれば賞金がえられる。ただし、賭金は実際の四分の一だから、賞金も四分の一の賭金に相当するものしかもらえない。

二十五のビッショは、それぞれ四つの数字を代表するから、総計画どおりの数字ができあがるわけである。一ケタの数字はユニダーデ、二ケタはデゼーナというようにぶ。さらに複雑な組合わせ方があって三ケタ、四ケタの数字も出すことができるが、ここでははぶく。三ケタはセンチナ、四ケタはミリヤールである。

当たってうけとる金は、時代によってその率はちがっていたが、たとえば、一ケタの数字に一〇〇レイス（10センチボ）を賭けるとして、もし当たったら八倍、二ケタは八〇倍、三ケタは八〇〇倍というようにふえていくが、それだけ当たる割合も少なくなっていくのである。一方に官営の富くじがあるにもかかわらず、どうしてもこうしたビッショが盛んになったかといえ、一つには官営富くじが一枚で一ミルとか二ミルとかしていたときに、ビッショでは、その十分の一から賭けられたこと、もう一つは、自分で好きな数字を考えて、それに賭けるというおもしろみがあったことである。ロテリアはなかなか好きな番号がみつからなかった。いわば、おしつけ

られた数字のなかからやや気に入ったものをえらびだすということになる。この点、ビッショは空想や、好みや、夢によって、動物の名さえいえば、ビッショ売り人（カンビスタ）はこれを、直ちに数字にかきかえてくれる。場合によっては、どんなむずかしい組合わせも出してくれる。こうしていろいろ因縁づきの数字ができあがると、いかにもはじめから当たることが約束されているような予感があつたことであろう。

ビッショは黙認されていたとはいえ、もともと合法的なものではなかったから、警察署長がかわるごとに、刑事の搜索（バチーダ）があつたりして、多くのものが検挙された。たとい富くじ屋で賭けても、その店の個人との賭けであつて、多くの場合は個人が売つてあるいた。むろん背後には、バンケイロと称するおおとじめの幾人かがいて、賞金を出すのであつて、売りあるく人間は、売上げをおさめて口銭をもらつていたのである。ビッショを売り歩く人間をビッシェイロといったが、あまり上品な名ではないので、彼らは自らをカンビスタと称した。

個別訪問もしたし、バーなど大のより集まるところで賭けを集めるものもあつた。小さな紙きれ（タロン）に注文の数字を書きこんで現金とひきかえに渡す。自分のほうにもひかえをとつておく。午後の四時ころになるとロテ

リア（富くじ）の当たり番号が発表される。その数字はつぎからつぎと伝わっていく。むろん、ビッシェイロも商売だから、だれが当たったかすぐわかる。サービスですぐ支払いにおもむくこともあるが、小さな金額なら、つぎの日の注文とりのときに支払う。背後に大きなバンケイロをもたないもぐりのビッシェイロなどは、当たりが大きいときは払いきれずに逐電したという話もある。

とにかく、賭ける金が小さいのだから、子供のこづかい銭程度でたのしめる。毎日やっていれば、数字と動物の関係くらいすぐのみこめる。はじめてやるものは、よくもそんなにたくさん数字を頭に入れられるものだとおどろくのであるが、よるときわると、犬だ、山羊だと話し合っているのであるから、すぐおぼえてしまう。また動物だけに関心をもつて数字などはビッショ屋にかかせる、という手もある。熱心なものは統計さえとつていた。当たる数字がめぐってくるのがわかるともいうし、山羊が出たあとには何がでるとか、いろいろ想像がつくというのだ。だから、これは近いうちに必ず出るという目星をつければ、毎日その番号をおいかける。二日目、三日目とだんだん金額もふやしていく。とうとうだめだと断念したら、そのつぎの日に出たんだ、などとくやしがるものもある。

よくばくち打ちは縁起をかつぐというが、ビッショに

熱中するものは、パルピツテといって、予感、予告、暗示、あるいはおつげ、というものをたいせつにする。どこかに天啓があるように感じるわけである。だれかが口からでまかせになえられる数字でも、なにかの因縁であるかもしれない。

「今日のパルピツテは？」と突然知らない人からきかれることがあった。「二十五！」ととつさに答える。「パカ！」といっても同じである。「ありがとう！」と礼をいって立ち去る。当時は辻うら（レアレージョ）にもロテリア（富くじ）、あるいはビツシヨの番号がついていた。

このパルピツテは、むろん夢の場合もある。いな、この夢こそ、最も尊重されるパルピツテであった。はつきりとその動物の姿をみたようなときはもうしめたものであるが、「白いものが空をとんでいたような感」としたら蝶以外には考えられない。地上を駆けるものであったら兎か犬か馬で、印象によっていろいろ判断する。大きなものであったら馬である。その日は馬を代表する数字四十一から四十四までのグルーッポにかける。もしその日に当たらなかつたら、またつぎの日にかける。「パルピツテは三日有効」といわれていた。

それから偶然目にとまった数字も大きな暗示である。それは自分がうけとった札（さつ）の番号であつても

いい。友人が教えてくれた彼の電話の番号でもいい。もし事故でもあって自動車が衝突した、というようなときは、とんでいってその番号をノートする。三ケタ、四ケタの数字に賭ける。どんな天啓であるかわからない。

こんな話もある。

ある新米が食後にバナナをたべた。そのバナナに米つぶがついていた。米は八十八と分解できる。そこでチーグレ（虎）の八十八番に賭けたら当たって八十倍の金かもどってきた。すなわち二ケタの数字デゼーナを当てたわけである。

人のパルピッテを失敬することも自由だから、しぜんあれこれと話しあう。

「あんたの昨日の夢はあてにならなかったなア、たしか四つ足みたいな気がしたというから兎にかけたら二本足の雄鶏がでた」「あんたは勘がにぶい、兎は一羽、二羽とかぞえて、日本では四つ足の仲間から除外する。雄鶏にもかけておくべきだった」「うまいことをいいおる、では明日こそ兎としておこう」

こうして、けっこうたのしめるのである。しかし、これも欲をだせば、どんどん深入りして、月の半ばには月給袋もすっからかんということになる。ブラジル語でビッシヨはビーシオ（悪習）に通じる。

注

参考書は、Renato Jose Cesta Pacheco :
Antologia do Jogo de Bicho. 1957. また多
くの人から話をきいた。あいまいな点もあるが、徹底し
た研究は他人にゆずる。ここでは、移民のたのしみとし
て「ビッショ賭け」とはどんなものかという輪郭を示す
だけにとどめた。

15. シネーマ

大衆娯楽の筆頭にあげなければならないのは、映画で
ある。サンパウロ市にいつそれが現われたのかはつきり
しないが、一九〇四年ころと推定される。日本移民がは
じめてブラジルの土をふんだ一九〇八年には、多くの民
家では、まだランプをともしていたし、電車もうごきだ
してから数年にしかならないときであつたから、まだそ
れほど普及していたとは思えない。世界ではじめての映
画が公開されたのは、一八九五年の暮れで、ルイ・リュ
ミエール、オーギュスト・リュミエール (Lumiere) と
いう兄弟が、自分たちの発明した映画の映写機 (シネマ
トグラフ) によつて、自分たちの撮影したフィルムを、パ

リーのブルバール・キャピュシーヌのグラン・キャフェーの地下室で上映して、一般観客に見せた。これが現代の最大の芸術である映画の歴史的な誕生であった（注¹）。そして、常設の「小屋」をもって興行されはじめたのは一九〇〇年ころである（注²）という。

日本では一八九七（明治三十）年大阪と東京で最初の「活動写真」が公開されたが、むろん常設館ができたのはずっとあとである。日本ではじめて映画がつくられたのは一九一〇（明治四十三）年である（注³）。

ブラジルではリオがはじめてで、一九〇三年ころヨーロッパから輸入した「活動写真」が上映された。サンパウロはすぐそのあとなので、まあ一九〇四年ころと推定したわけである。一九〇五年には、すでに地方都市のイッソーではじめて巡回シネーマのあったことが記録にのこっている（注⁴）。空地に四角な天幕をはりめぐらし、一方に白い布をスクリーンにはって、その前に腰掛けをならべて観客席としたものだった。「だしもの」は、ダンス、相撲（レスリング）、曲芸、道化芝居などの実際のシーンをそのまま連続的に撮影したもので文字どおり「活動写真」であつた。それでも観客は「しゃべらないだけで、生きているように、とんだりはねたりする絵」だといって、驚いた。サンパウロ市でも、そのころ、そういうものをやっていたところがあるらしいが記録をさがしだす

ことができない。そして、一九〇四～五年ころは、もうすっかりしたテアトロ（芝居小屋）で上映されたそうである。

フィルム配給会社社長セラドール（Serrador）の伝記によると、旧テアトロ・サンタナで上映したのが最初でまもなく常設館ビジュ（Bijou）がひらかれたという。

だが、こうした常設館はごく少なかった。当時はテアトロと称する劇場があつて、外国からフィルムが輸入されるごとにここで上映されたので、まだその必要がなかったのである。一九〇八年当時は、まだオペレッタのようなものが民衆の娯楽だったので、フィルムは毎日上映されていたわけではなかった。

だから、サンパウロ市の日本人大工や左官がその工事に参加したという映画館テアトロ・サンパウロ（場所はプラッサ・アルメイダ・ジュニオール、旧ラルゴ・サンパウロ、一九六八年の暮れにとりこわされた）などは、十数年がかりで常設館のようなものになつていったのであるが、そのつくりは完全な劇場であつたし、またながい間、劇とフィルム上映とをあるいは同時に、あるいは別々にやっていた。

映画が、民衆娯楽の王座を占めるようになるのは第一次大戦ころからのように思われる。大戦を契機として世

界映画の中心がヨーロッパからアメリカへうつりつつあったからである。

サンパウロ市の映画常設館が一九一八年以後になっても多くはテアトロ・何々とよばれていたのは、それ以前にできた劇場が、映画常設館に変わっていったからであつた。シネ・何々と銘打ってあらわれたのは、シネ・コングレッソ（ジョン・メンデスのガラージェ・コングレッソのあと？）およびサン・ベント街のマルチネーリ・ビルの隣にできたシネ・ロザーリオなどであつたと思う。年代は、はつきりしないが三〇年革命前であつたようだ。シネ・コングレッソができたときは、それまでのカデイレの座席が入場料一、〇〇〇か二五〇〇レイスだったのが、二ミルになり、ロザーリオは五ミルであつた。座席数は五百くらいで、ともに入場料均一となつた。

日本移民がコンデ方面からでかけるのにいちばん便利だったのは、州議事堂の裏がわにあつたロドリゴ・シルバ街のパテー・パラシオ、それから例のテアトロ・サンパウロであつた。

当時は、映画館のつくりが劇場のそれであつたから、観客席も、いちばん下のカデイレ（あるいはプラテイヤ）、その周囲の二段に家族ものが買いきるカマロツテ、さらにその上（俗に日本人は三階といっていた）がジェラルまたはガレリアとよぶ一般席になっていた。ガレ

リアをもじったガリニエイロの俗称もあつて、階段になった座席でパター・パラシオもテアトロ・サンパウロも内部は同一構造であつた。

当時は、大工・左官にいたるまで、仕事の行きかえりは上着（パレトー）をつけ、ネクタイをむすんで紳士然として道具箱を肩にかついで歩いた時代である。だからいちばん下のプラテイヤや、それから買い切り（普通四人席）のカマロットはネクタイなしでは入れなかつた。ただジェラールだけは服装のことはなにもいわなかつた。下のプラテイヤが一ミル・レイスなら、ガレリアは三〇〇レイスであつた。ガレリアは普通入口が別で紳士淑女の目にとまらないところにあつた。入口で南京豆を買い、これをポケットにつめこんではいつでもいい。内部でも飴玉やキャラメルを子供の売り子から買うこともできる。

三階のガレリアは、労働者や下級店員でいっぱいになった。まだ学生などという層はあまりなかつた時代である。五〇〇レイスあつたら映画をみながら南京豆をかじって、けっこう一晩たのしめたのである。

第一次大戦ころから、アメリカ西部劇が盛んになる。そして毎過つづきものが上映されてたのしみであつた。クライマックスに達すると三階の民衆は一斉に足ぶみし口笛をならし、テアトロがゆるぎだすような熱狂ぶりを示した。今日のようなエロものは全然なく、みなピスト

ルを腰にぶらさげたカウボーイの活劇で、ブラジル奥地の風俗とあまり変わりがなかった。字幕はよめなくとも善玉、悪玉のはっきりした活劇は、どんな日本人新移民にもわかった。むろん、画面は小さく、白・黒の無声映画で、バンドがついていた。バンドはテアトロの舞台になっ
ていかところの前方の一段ひくいところに陣どつて
映写がはじまるまえにまず音楽を奏でだす。布いっぱい
に何十という赤・青・黒の広告の文字が書いてあるたれ
幕が、するすると上方へまきあげられる。すると、地球
がぐるぐる回転するスクリーンに、ユニバーサル！とい
う文字がうつる。三階の一般席から拍手がおこる。最初
は字幕による説明ということで映画がはじまるのであつ
た。

フォックス、パラマウント、ユニバーサルのフィルム
がさかんに上映された。トン・ミックスや、ウィリアム・
S・ハートの名が子供たちにも知られる。

チャーリー・チャップリン（カルリット）、メリー・ピッ
クホード、ダグラス・フェアバンクス、それからセス
エ・アヤカヴァ（早川雪州の名も有名になる）。むろん、
サンパウロはイタリア人が多いので、イタリアのフィル
ムもはいていた。

ちなみに、一九三二年にサンパウロ市にあった映画館
その他の娯楽機関を『伯刺西爾年鑑』から引用してみる

と、劇場七、シネマ上映館五十、演芸場十一、演芸キャバレー七、バー・シネマー、その他一、計七十七となっており、シネマに関しては、内国フィルムは「まだ初歩の城を脱せず」アメリカものが第一位で、つぎはドイツ、フランス、イギリス、イタリアの順で、アメリカものはパラマウントが第一位、つぎは、メートロ・ゴールドウィン・メイヤー、フォックス、ユナイテッド・アーチスト、ファースト・ナショナル、ユニバーサルの順であるが、その差はごく少なかった。

日本映画は、一九二九年バウルーに創立された「日伯シネーマ社」の巡回上映がはじめてであるが、これは奥地の人たちをなぐさめた点で、大きな役割をはたしている。その後、同社はサンパウロへ本拠をうつし、また、そのほかにも巡回映画業者が数人ふえている。植民地における巡回映画上映の光景は、植民地生活のなかで叙述したい。

注

- (一) 岩崎昶『世界映画史』三三ページによる。
- (二) 同上、二九ページ
- (三) 青柳淳郎編『明治九十九年』による。
- (四) 『ア・シダーヂ・デ・イツー』第三卷（文献表参照）。

イツーは一九〇八年、第一回移民がはいったところ。

16・ フロントン

また一種の競技であり、賭けの対象として、今日の競馬に比すべき興味あるものに、フロントンがあつた。葡和辞典にはペロッタ投球場とでているが説明はない。スペイン系の競技であつて、ラテン系ヨーロッパ、中南米、フィリピン、それからアジアでは中国（ことに上海）で盛んであつた。ある時期には日本へも伝わるはずだったというが、その後どうなったかわからない。

フロントンとは家の破風のことであるが、ここでは壁を意味する。この壁に、ペロッタと称する庭球の球に似たものを、手にさしこんだ長い爪形のざる（ラケットの役をするもの）で、たたきつけるので、いわば壁打ちのテニスといったようなものである。

ペロッタ（球）の大きさは、テニスのボールとほとんど同じ（直径七センチくらい）であるが、観客にはゴルフの球くらいにしかみえない。生ゴムのシンを細い毛糸でしめつけ、さらに羊皮で包んである。重量は一三〇グラムである。バウンドがはげしいので、壁にうちつけてはねかえったときは五キログラムくらいの重さに感じられるという。

これをうけとるざるの骨組はスペインの栗材で、丈夫な藁でからげてある。そして、手をさしこむ部分は獣皮でできている。長さは七五センチ。この細長いざる（セスタ）にうけとめ、さらにフンドウをあやつるように、すばやく球をざるのさきのほうから壁へ打ちこむのであるから、はげしい動作を必要とする。競技者は敏捷で目がよくきくもの（Agilidad de boa vista）でなければならない。

競技場の広さは、ところによっていろいろであるが、ラデイラ・ポルト・ジェラールにあつたボア・ビスタ球場は、長さ五四メートル、幅が二メートルで前方と後方とに壁があり、観客は金網ごしにスタンドからながめて、やんやとはやしたて、やじりたおすのであつた。競技は一人対一人の場合はシンプレスで、前衛をもつた二人対二人の場合はパルチードといつた。まず、攻撃者（サツカドール）と守備者（デフェンソール）にわかれる。サーブするものは後方から前方の壁にざるから球をたたきつけるのであるが、前方の壁にあたつた球が規定の距離内にもどらなければ一点の負けである。壁にうちつけた球がもどつてきた場合は、守備者がこれをうちかえす。空中で受けてかえすのはかまわないがツー・バウンドはいけない。もしワン・バウンドでうしろの壁まではねかえつたものは、これを直ちにうけとめて球を前方へかえ

す。いかにうけにくい球を打つかが競技者の苦心するところで、この点テニスに似ている。

審判者は前後と中央とに三人いて、中央が審判長の役目をする。審判はなかなかきびしく、もし、どこかに不正がみいだされた場合は、三、四日の出場停止をくわされる。だから競技者の側からみれば、八百長はなかったといわれている。

これを賭けのほうからみると、まず入場料を支払う。時代によって変わっていたが、一ミルから二ミル。中へはいってもう一度賭け札を買う。一勝負ごとに札はかわる。今度の勝負は賞金が大きくなれば、札の値段も高い。そして何枚も買いこむ。賞金は個人およびパルチードに賭けられるが、パルチードの場合のほうが大きい。数十コントが賭けられる場合がある。競馬と同じで自分の賭けた組が負ければゼロである。

競技者には等級があつて、一級（プリメイラ・カテゴリーA）、二級、三級とにわかれている。カテゴリーAの低いものでも高いものに勝てば位があがる。位があがると月給もうんとちがうので、競技者も必死になつて位の高いものに勝負をいどむ。ここに結果の予測できない組合わせがあらわれる。

これは、ずつとあとの話であるが、一九二二年ころ、三級が九〇〇ミル、二級が一コント五〇〇、一級となると

二コント、その後になると一級は三コント八〇〇（一九三〇年ころ）、あるいはそれ以上の四コントまでいって、当時としてはまさに大臣級（？）の月給だといわれた。

これはフロントン・ボア・ビスタの話である。当時、（一九二〇年代）サンパウロには各所にフロントンがあつたが、日本人にいちばん親しみ深いのは、このボア・ビスタであつた。毎年、リオ対サンパウロの対抗試合があつて、にぎやかなものだったというが、賭けごとが厳禁になつてすたれてしまった。戦後、のこつたものは、單なるショーにすぎないものだという。

ボア・ビスタには、四十近くの競技者がいたが、一級のものはいつも十人前後であつたといわれる。

競馬狂に好きな馬があるように、フロントンにもひいきができて、そのあざやかな競技にみとれると同時に賭けをたのしむということになれば、せつせと通いだすことになる。競馬もフット・ボールも、今日ほど盛んでなかつた時代には、手に汗をにぎつてたのしむことのできたのは、このフロントンが唯一のものであつた。移民たちの多くがここへ通つたというほどではないが、かなり熱中したものもいた。女、子供がたのしめる雰囲気ではなかつたから、必ずしも一般的ではなかつたが、初期移民の思い出話のなかには、必ずといっていいほどフロントンのことがでるのである。筆者は一、二度のぞいただ

けではっきりした記憶がないので、アントニオ・ビルバオ (Antonio Bilbao) という、かつての一级競技者であった老人をたずね、フロントンの話をきいた。競技のこまかい点には、ききちがいがあるかもしれないが、だいたいのことは伝えることができたかと思う。

17. あそび

「植民地」には娯楽機関がない、たのしみがないといわれた。ここで植民地という言葉のかわりに「移民社会」という言葉をおきかえても同じだろう。移民たちには都会でも、ほとんどたのしみがなかったのである。

ブラジル人にとって、都会生活は充分たのしめるものがあつたろう。家庭的な交際はもとより、いろいろなクラブもあり、フェスタ（お祭り、娯楽的会合）もあつて、社交のたのしみがあつた。観劇に興味をみたすことも音楽をやったりきいたりすることもできた。しかし、言葉、生活様式、あるいは趣味にいたるまでまったく違った異国の人間が、ポツリと文化系統を異にした国に来てたのしめるものはほとんどなかったのだ。こうして繁華のなかで孤独を味わわなければならなかった移民にとって、なんとか気をまぎらわすことができたのは、「飲むこと」と「うつこと」であつた。ブラジルには安くて酔い

やすい酒、ピンガがあつた。「うつ」というほどおおげさではなく、しかもながつづきのする「ピツシヨ」という賭けごとがあつた。

しかし、多くの独身青年にとって、彼らの精神状態にも深い関係のある対異性のたのしみは、ほとんど得られなかった。環境によつて余儀なくされた禁欲生活のゆえに憂鬱症にかかるものがあつた（この現象は、程度の差こそあれ、移民社会では永続的なものとなる）。こうした内攻のくるしみからのがれるために、手近などビツシヨ賭けに熱中して、やはり身をもちくずした青年も多かったのはあるいは、移民社会の悲劇ともいえるかもしれない。

独身女性が少なかった。豊満なラテン系女性を日ごと目撃していても、言語・習慣のちがつた人間にとつては高嶺の花にひとしいものであつた。感覚的な刺激がつかればつよいほど、彼らには、ただ内攻するものがのこるだけであつた。たとい観念的なものであつても、恋愛、結婚というようなコースへの希望がもてなかったからである。

無我夢中なコーヒー農場から、いよいよ独立農へ向かつたとき、独身移民たちがあまりに結婚相手の女性の少ないことに驚いたことは、都会生活でも同じことであつた。どこかの家庭に娘がいるという話をきくと、独

身青年たちは、なんとかしてそこへ近ようとした。娘のいる家庭へ、独身青年たちが、たばこ巻きの仕事の手伝いにおしかけたという話もあるが、これは、植民地において、日曜ごとに、娘のいる家へ青年たちが、薪割りや、水くみの手伝いにでかけたというのと変わりなかるう。

初期の出稼ぎ移民たちは、労働の主力となる男子を中心にして家族を構成してきた。労働力として永続性の少ない独身女性をつれてくることは、のぞむところではなかった。この傾向を最も端的にあらわしていたのは、第一回移民中の男性と女性の割合であつた（第一部契約移民参照）。程度の差こそあれこの傾向は渡航費全額補助までつづいたものであつた。ところが、短期間の金もうけを目あてに構成家族で渡航した青年たちも、家長といつしよに働いていてもらちがあかないことをさすると、それぞれ独立行動をとるものが多くなるのであるが、独身で農業をやってもあまり希望がもてないとなると、一度や二度は都会へ出て、何かいい仕事はないかと思案するようになる。しかし、言葉もできず、世の中の事情もわからないものに、いい仕事が見つかるはずもなく、生活上にはつきりした目標がたたなければたないほど異性的慰安を求める気持ちはつよくなるのも自然であろう。

しかし、移民たちにとっては、いわゆる赤線区域でさ

えも、十分な慰安を与えることはできなかったようである。日本人的観念によれば買う場所は、同時にあそぶ場所でもあった。ブラジルの赤線区域、いわゆるバイロがあそぶ場所ではないといちがい規定することはできないと思う。しかし、移民たちにとっては、あまり精神的慰安のえられない、単なるむきだしな買う場所にすぎなかった。だから移民社会では別にあそぶ場所としての「のみや」あるいは「料理屋」が出現し、移民の郷愁をいやすところとなるのであるが、これは、サンパウロ市の在留民が主として、コッペイロやカルピンテイロによってしめられていた時代には発達せず、奥地の農業者たちが、コーヒー農場の生活をはなれて、独立で仕事をするようになってから、サンパウロ市の移民相手の事業もおいおい盛んになり、また成り金で遊びにくる人間もふえてくるようになってはじめて営業が成り立つのであった。

では、異国人にとって、ただ、やり場のない性欲のはけ口としての買う場所はどこで、どんなふうなものであったろうか。

日本人集団区域の中心をコンデ街にいくとすれば、これにいちばん近い「バイロ」はラルゴ・ダ・セーを中心とする教会をとりかこむ地域であった。日本移民がきたころは、オンゼ・デ・アゴスト街から、リーブレ（今日のアルバレス・マツシャード）街、さらに、キンチーノ・

ボカキューバ辺にわたって教会を三方からかこむようにして存在していたようである。そのうちでも、キンチーノ・ボカキューバを横切ってラルゴ・ダ・セーに通じるセナドル・フェイジョー街などは一九二〇年代にも存在したし、リーブレ街などは三〇年代までのこっていた。

しかし、日本人はこのころでも、バイロとしては、ここよりかなり上等なチンピーラス、イピランガ街方面へ足をのばしたようである。

「ひとまわりしてこようじゃないか」というのが、当時の青年たちが、夜になってバイロへ散歩にでかけるときの友へのさそいの言葉であつた。しかし、その散歩は「拓人の足跡」にも記されているように「あそび」のないところへあそびを求めて行くような、さびしいものであつたようだ。「ただ、ああした街の戸口から洩れる虹のような、赤、桃、黄、紫、青、緑などを点じた灯（あのころは、色街には特殊な色紙のアバジェ（笠）をかけた電灯をともすことが許されていた）にいろどられた夢のような街を「いわゆるブラジル語の「セン・デステーノ」で歩くのが（注一）」せめてものなぐさめであつたのだ。

バイロの娼家は、通りに面した窓に、特殊なベネジアーナ（格子戸）がついていて、ちよつとのぞけば、そのかげにいる女たちの上半身がみえるようになっていた。赤・青のあかりは、そこから洩れて、街路にかすかな光

をなげかけていたのであった。やせてごつごつした女、全身がタイヤのようにふくれ上がった女、金髪、黒髪、実にさまざまな女の標本がならんでいて「そこには、世界のあらゆる言葉でよびかける猥雑な言葉があった。ジャボネースとも、ジャパネースとも、ハポネースとも、あるいはジャポンともよぶ高低さまざまな声のうちに、煽情と媚態をこめた微笑があり、嘲笑があり、罵倒があった（注）。彼女たちは商売がら、一度でも訂本人に接すれば、必ず必要な日本語はおぼえるのだ。「ベンカー、ベンカー・ジャボネース」とよびかければ、そのつぎは日本語なのであった。まっかにそめた大きな唇からもれる言葉は小がらな日本人の上に、すごいボリュームとなつてのしかかってくる。

おしろいと安香水のにおいに空気はにごつていても、それは「妙に人をひきつけるああした界限にのみ特有な臭気」として感じられることもあったが「時としては唾を吐くほどそれを嫌気」しなければならぬような場合もあった。

こうした雰囲気も、二人、三人と勢ぞろいしてでかけ、彼女らのよびかける言葉にも平気でうけこたえでるようになれば、それはそれなりに趣味がないとはいえないが、ピングとフェイジョアード（豆の料理）がまだ生活のなかに重要な位置をしめるにいたらなかった当時の青

年たちにとっては、用事がすめば逃げるようにもどつて
こななければならないところであつた。

注

(一) 『埋れ行く拓人の足跡』二一〇ページ。

(二) 同上。

第3部 独立小農への発展

18 独立小農と近代自作農の出現

ブラジルは、一八八八年の奴隷解放後、一八八九年に
共和制となり、この政体の支持者として政界、経済界の
立て役者となつたのはコーヒー農場主たちであつたが、
彼らの農場経営法は、まだかなり封建的で無計画的なも
のであつた。

奴隷制時代から、サンパウロ州の農場はコーヒーの単

一作でささえられ、食糧としては、とうもろこし、豆、かぼちゃ、マンジオカ等が栽培されていた。そしてその生活は、農場主の個人的なものをのぞけば、半ば自給自足的なものであった。ところが、労働者が、奴隷から賃金取得者になつたときから、農場には、それまで必要としなかつたような商品が、新しい必需品としてながれこむようになり、農場主はたえず現金の必要にせまられるようになってきた。

一八九六年からその兆候があらわれて、一九〇六、七年度のコーヒー大豊作後、恐慌となつた経済界の不況は、コーヒーの単一作の大農場を根底からゆすぶりだした。

奴隸制時代に計画された農場へ賃金取得者コロノを入れたはしたもの、彼らに支払う給料にも不足するようになった。一八八八年から一八九五年までの間に六十万人もはいったイタリア移民は、一九〇二年にはイタリア政府によつて禁止されてしまつたはどコーヒー農場におけるコロノの窮状はひどかつたのである。

こうした農場主の苦境時代に、地力が減退して生産力のおとろえた古いコーヒー地帯が整理され、現金にかえられたのであつた。そこに現われた一つの現象は、土地が分割的に売りだされたことであつた。買いとる者には移民たちが多かつた。パライーバ川沿岸の旧コーヒー地

帯が早く分譲された。

すでに奴隷制廃止と賃金制実施によって消費市場は発展しつつあったし、コーヒー栽培の不景気とともに商業にくらがえした農場主もある時代だったので、農場をみすてて都市の賃金労働者や職人や小商人になる移民たちも多かった。今日、サンパウロ市のブラス区の商工業の発展は、この時代に農村をはなれたイタリア移民に負うところが多いといわれている。

こうして、都市人口の増加は消費市場の発展をまねき、移民たちのなかには、コーヒー以外の食料品生産に小農場を希望するものもでてきた。彼らは賃金支払いを必要としない生産者としての強味をもっていた。

このような傾向は、大農場全盛時代には問題にもされなかった小面積の土地を、高価にどんどん売れるようにした。また土地の商品化によって、さらに新しい土地も売りだされることになるのであった。

現金の不足に加えて労力の不足は、大土地所有者に、新しい方法によるコーヒー樹育成を思いつかせた。それは、四年、五年、あるいは六年間の契約による請負仕事であって、ただ彼ら請負者に、一か年くらい、食料購入に対する保証をしてやればいいので、当座は現金を必要としないことになる。そして、この食料供給をひきうける商人もでてくる。のちには、トルコとよばれるシリア

人がこの仕事に大きな役割をはたす。彼らはやがて小農相手に地方都市発展の推進者となるのである。

さて、彼ら商人は地主たちの保証のもとに最初の収穫まで食料品を請負者たちに貸しつける。収穫物によってこれを回収する。万一、回収できないときのみ地主が弁償するという仕組みである。四年、五年、あるいは六年目になって一本いくらで地代のかわりに安くコーヒー樹を買いとる。請負者にとってはこのとき受けとる金額は、土地購入のための資金となるので、この方法は多くの無資本の農民によってよろこばれた。

また一方では土地を分譲すれば、地主たちは現金もはいるし、請負コーヒー樹の買取金もできるというものの、また土地売りが商売になりだすと、小独立農（シチアンテ）がどんどんふえてくる。すると地方都市も発展する。地方都市の発展はさらに小独立農の増加をうながす。

ブラジルにおける小独立農（自作）の歴史は決して新しいものではない。ただ農村における一般的傾向となり、またそれによってそれまであまり目だたなかった中産階級を多く生み出したのは奴隷解放後の新しい現象であるというにすぎない。

植民地時代（一八世紀の後半）、アソーレス移民は政府の費用でブラジルへわたり、土地をもらい、種子物さえ

支給されて自作農となった。彼ら農民たちは、ポルトガル領アソーレス島において、多くは小作人（フォレイロ）であつたために、社会的地位もひくく、独立で事業をおこす資金もなかったので、植民地政府からセズマリア（広大な譲与地）を受ける資格がなかった。彼ら貧農たちは、ブラジルへ来てもプレベウ・ルラール（農村平民）とよばれたのに反して、セズマリアを受けた地主たちはノブレーザ・ルラール（土地貴族）とよばれた。

しかし、ブラジルへ来た農村平民たちは、時代のいきおいで、大農場主となるか、あるいは、自給自足の貧農におちた。まだ奴隸制はなやかな時代で、都市は発達せず、消費市場もせまかつたので、輸出産物以外、利益になる作物はなかった。当時、輸出産物の砂糖は資力あるものの独占であつた。だから彼らの子孫は、土人や黒人と混血してカボクロにおちたものもかなりいた。

また、アグレガード（従僕）とよばれる大農場の白人労働者がいた。奴隸ではないので、小作みみたいなことをしていた。彼らのなかでも土地を自分のものとして独立するものもあつたが、砂糖製造所（エンジェーニョ）をもたない小農は、生産物を大地主にひきとつてもらつて、いつまでも主従関係をつづけざるをえない状態であつた。

また主従関係こそもないが、一九世紀の初頭から、政府の政策によつて、ヌクレオ・コロニアルという小

農集団地に自作としてはいった外国移民もあったが、その時代は、まだ小農の発展期にはいっていなかった。

とにかく、アソーレス移民も、アグレガードも、あるいは政府の植民地も、奴隷時代の小農であって、まだ社会的地盤をきずくだけの勢力はなかった。社会的には、まだかくれた存在であった。

しかし、シチアンテとよばれる二〇世紀の小独立農は、自分の土地で自由にたがやす人たちで、彼らはコーヒー農場の苦境時代の産物としてあらわれたものであり、独立心の旺盛な移民たちがその中核となったものであった。自ら食糧を生産しながら、さらに商品作物でもうけようとする行き方である。こうした小農は、のちには資本家的農業経営ができないために没落の非運にあうものがでてくるのであるが、封建的単一作的な大農場の行き方に対しては、あきらかに農業労働者の新しい進路を切りひらいたものといえる。

ファゼンダの労働は、一家族全体の労働であって、賃金制とはいふものの賃金外の仕事が加わらなければ、もうけは予想できなかったのである。こうした生活のなかで、コロノたちは、自分たちが独立で農場をいとなむことができる時代を迎えたのであった。自分の仕事であれば工夫も生きてくる、そうすれば早くもうかるだろう。自分の土地、自分の仕事、それは、この時代になってフ

アゼンダ生活が生みだした農業労働者の夢であつた。

しかし、コロノから自作農へうつる道程としては、すでに記したように、請負仕事という有利な道がひらけていた。これは大地主にとつても現金を必要としないコーヒー園仕立ての方法だったからである。多くのコロノは自作農への道程としてこれは着目した。

またコーヒーの単一作に主力をそそいで、米を輸入していた時代のことであるから、日本移民と歩合作の契約を結んで、分益でもうけようとする地主もあらわれていた。米作はコーヒー栽培にむかない低地も利用することができたからである。また、コーヒー園にも牧場にも使われていない低地は、借地料をとつて移民たちに貸すこともあつた。

こうして、分益・小借地農も、自作農への道程として利用された。むろん米作が金もうけの近道だと考えたものは、あくまでここにふみとどまつたし、また機械を購入入して大借地農へうつるものもでてくる。だが、請負・分益・小借地農が、一時は、半独立農とよばれたように、自作農へうつる段階的農業形態とみられたほどであつた。大勢は、自分の土地を自分でたがやすことが、労働移民の夢であつたといえる。

コーヒー農場の契約移民としてブラジルに渡航した日本移民の大部分が、その目的としていた出稼ぎの方針をあらためて、借地・分益・請負農となり、あるいは、コーヒー農場から直接土地を購入して自作農へいくものもあり、やがて申し合わせたように、いわゆる「植民地」の建設に移っていったのは、どういう理由によるものだろうか。

ここでは、ブラジルの社会・経済史的な面とは別に、移民の主体的要求の面から、それをさぐってみたい。はじめに、コーヒー農場の生活から生まれた彼らの不満が、どのようなものであったかを考え、つぎに、それを満たしてくれるものとしての植民地の、いろいろな特長をあげてみたいと思う。

まず、(一)、移民たちにとって、コーヒー農場が、出稼ぎの場所として適当でなかったことは、それを第一の目的としてきた第一回移民によって、すでに証明されたともいえる。だから、あくまで出稼ぎで郷里への送金が必要としたものは、鉄道工夫とか、港のドック人夫とかに向かうか、またはアルゼンチンへ再移住をくわだてたのであった。(二)、しかし、賃金で金がたまらなかったことだけがファゼンダ生活の不満ではなかった。そこには、日本の農業者が、それまで経験したことのない監視

づきの時間労働という、きゅうくつな生活があった。そしてこれはまた一家全体の生活をも束縛するものであった。

なぜなら、ファゼンダの生活は、家族全部の労働を要求するものであって、たとい主婦が家事のために家にのこることはあっても、男だけが賃金労働に出て、女子供は家にのこり、自家用食糧を生産したり、養豚、養鶏にたずさわる自由があるわけではなかった（もし、こういうことがあったとすれば、それはずっとあとになって、ファゼンダが徹底した賃金制度に変わったのちのことであって、日本移民がコーヒー園労働に従事していた時代のことではなかった）。ことにコーヒー採取期などは、監督は、出働家族の家をみまわり、のこっているものがあるかないかをしらべた。家にのこることをゆるされたのは、労働不能な老人や小さな子供だけであった。子供も十二歳以上は一人前の労働者とみなされていたのである。（二）、それから、言葉の通じない不便が日常生活につきまとうことであつた。監督の命令にしろ、隣近所のつきあいにしる、気をいらだたせることが多かった。（四）、また、生活様式の差から、きゅうくつなおもいもしなければならなかった。

晩には風呂にはいって、ゆっくり休むというのが、日本人の生活になくてならないものであつたが、ファゼンダ

ではそれができなかった。隣近所に「外人」がいれば、いろいろな点で気苦労が多かった。食生活のうえでも、家の近くに、なす、きゅうりなどをうえて、朝晩手入れし、日本食をたのしむことができなかった。まわりがほとんど牧場ときているので、草花をうえてたのしむこともできない。日本人は動物よりも植物を愛する。(五)さらに日本移民は、いかに落ち着いて生活するにしても、まだこの土地に骨を埋める気持ちはないので、子供の教育とということが気にかかる。移民たちの頭にある教育は、日本語と日本的道徳が中心でなければならなかった。たまには、ファゼンダにも小学校があつて、子供を通わせもしたが、父母が子供にむかつて、「先生は何を教えるのか」とたずねても「日本語はいえん」というような答えだったので、移民たちには何がなんだかわからなかった。たといブラジル語を教えるにしても、そこに彼らの首肯できる「徳育」的なものがあることが理解できたら、あるいは納得できたかもしれないが、教育といえばただちに「教育勅語」的な道徳を思いだす移民たちにとって、ただ読み書きと算数を主としたファゼンダの教育は彼らの期待にそうものではなかった。そのうえ、コロニアで子供たちのおぼえるブラジル語は、シンガ(悪口)の言葉が多かった。「こうしてそだつ子供たちを、日本へつれて帰ったら、いったいどういふことになるのか」、それが

移民たちの不安であつた。(六)、そこで、こういう状態からぬけ出して、一家全体が自由に働くことができれば、さぞ愉快だろうし、仕事にむだがなくて、金も早くたまらうということであつた。「これがみな自分の仕事であつたらなア」というのが、コロノたちのなげきであつた。

農家にとっては、むろん現金をにぎることもたいせつではあつたが、作物そのものも「生きている金」であつた。自分のものを自分でたがやす。こんなたのしいことがまたとあろうか。コロノたちは独立自営の夢をみないわけにはいかなかった。「監督においつかわれる」きゆうくつきを思えば思うほど、独立自営へのあこがれはつよまつた。そして、ついには土地がもてる！ のちになつて植民者たちが、自らを「地主」とよんだ気持ちのなかには、百姓として自分の土地をもつことの欲求が、いかに深いものであるかを物語るものがある。一方で帰国を夢みながらも、数年、十数年とがんばりつづけ、ついに永住を決心させるにいたつた理由のなかには、土地をもつて、農家としての欲望を充足させることができた点も考慮に入れていいと思う。

植民地の特長Ⅱさて、自分の土地に自分が生きる。しかも、あたり近所（といつても、ブラジルの自営農では、各家庭の生活が、すぐ他人にのぞかれるような狭いところ

るは少ない）に気がねのない生活ができるということとは、大きな解放感だった。りっぱな風呂もつくろう。家のまわりには野菜もうえよう。もう牛馬にふみこまれるようなことはない。

そのうち先生をたのんで、子供たちに日本語を教えることもできる。安心して長期作戦をねるのだ。これこそ成功の早道ではないか。外人に気がねせずに安心して働き、五か年の計画を十年にのばしたら、錦をかざって帰国できるし、子供たちもりっぱな日本人として、ひきつれて郷里の土をふむことができるだろう。こうした希望があつたればこそ、あの植民地の不自由な生活が、回避すべき不自由とはならず、苦難にたえる建設のエネルギーとして発揮されたのであつた。これを第三者的立場からみれば、ファゼンダ生活の苦勞などは、ものの数ではなかつたといつてもいい。

それから、集団地にはリーダーがいた。最初は、植民地の創始者、すなわちそこに事務所をひらいて土地を周旋した世話人であつた。植民者は多くの場合、人間を信用して土地を購入した。もし、むずかしい地権の問題とか、売買契約とか、登記とかを自分の手でしなければならなかつたとしたら、おそらく、あんなに早く植民地は発展しなかつたろう。しかも植民地建設のトップをきつた人たちのなかに、グアタパラーの支配人として移民か

ら信頼されていた平野運平、また、第一回移民の渡来から、苦勞をともにしてきた上塚周平などの人物がいたことも、個人への信頼による土地購入を盛んにした原因の一つだったともいえる。

ブラジルの識者の一部には、こうした植民地集団をキスト（癌）とみて、あたかも少数民族的な地盤がきずかれるかのような不安を感じたものもあった。今でこそ、それは一つの杞憂にすぎなかったと評することもできるが、ブラジル人の立場にたってみれば、決して理由のない不安ではなかったと思う。しかし、あらゆるものを抱擁しつくして同化せずにおかないブラジルの自然と社会は、このキストを生産の永続性のあるよりどころとして、次代への発展を可能にしたのであった。それがいかなる形で変遷していくかは、植民地の生活において、内部から叙述されるだろう。

20 米作をめざした初期の日本人

前章では、ブラジルにおける小独立農の出現について説明し、日本移民の自作農集団地（いわゆる植民地）へのあこがれについて述べた。しかし、まだ出稼ぎ気分の旺盛な初期移民たちにとって、たしかな目標はきまらなかった。「ファゼンダ生活の一農年」の前文のところでも

述べたように一九二〇年前後でさえも、三つの方向を考えてまよっていた。その一つはイグアツペ植民地への入植、つぎは三角ミナスその他の米作地、最後にはノロエステ方面の奥地開拓であつた。しかも、イグアツペもノロエステも、米がとれるというのがその魅力の一つであつた。

ただ米作だけが目あてでなかった点が、三角ミナスやその他の米作地とちがっていただけであつた。

ここでは、コーヒー農場の労働者としての境遇からぬけだして一儲けしようとした初期移民たち、および、自由渡航のインテリたちが、はじめに米作をめざしたことについて書いてみたい。コーヒー栽培は、大農場の仕事として、日本人が独立してすぐ手をだせる仕事とは思つていなかった初期の人たちにとって、いちばんとりつきやすかつたのは「瑞穂の国の民」として自信のある米作をこころみることであつた。

日本移民がはじめてブラジルの土をふんだころは、米はアジア方面から輸入して、国内生産の不足をおぎなっていた。したがって値段も高かつた。日本人が、ブラジルの広大な土地、しかも、コーヒー栽培に適しない低湿地がかえりみられないまま、放置されているのをみて、米作に手を出さないはずはなかつた。しかも、契約移民以外の自由渡航者のインテリたち（多くは独身者）に

よって、いち早く事業的に計画されたことは、ブラジル人の地主を利用すれば、無資本でもやれるというみとおしをたてたからであった。

いま、日本人のはじめた米作地を年代順にあげてみると、いかに早くから米作をはじめたかがわかる。

一九一〇（明治四十三年）、リオ・デ・ジャネイロ州のイグアスー地方に、ブラジル人の資本で、佐久間重吉なるものが米作をはじめている。彼は一九〇六年（第一次移民よりも二年前に）サンパウロ市の藤崎商会の店員として渡伯したものであった。ここの米作指導者としては、第一回移民の熊本県人、橋本重政が協力したが、マラリア地帯であったために、就労者の大半が罹病し、彼もそのために落命するにいたった。

一九一一年には、移民とは別のコースで、事業家として一九〇八年に渡伯した山形勇三郎が、同じリオ州のマカエー郡にカシヨエイラ農場を買いとって、さとうきびや酒精醸造を行なうかたわら、米作もこころみだが成功しなかった。山形はのちに、同州のカーボ・フリオ郡で塩田経営に移った。

移民が独自で米作をはじめたのはジュキア線である。鉄道の敷設工事にたずさわった沖維県人数家族は、一九一三年ころ鉄道工夫の足を洗うと、一九一四―一五年ころから、アンナ・ディアス駅およびイタリリー駅付近で

米作をはじめた（ジュキア線の同胞については章をあらためて書く）。

一九一三年はイグアツペ植民地初入植の年である。ここでは一九一四年すでに米を収穫している。創設者の一人で現地代表の青柳郁太郎が、ここにコンセッソンを求めた理由の一つは、ここが海港に近い河べりであったこと、しかも、米がとれるところだったからだと伝えられる。ここにも「瑞穂の国の民」の考えがあった（イグアツペ植民地についても章をあらためて書く）。

セントラル線ピンダモエヤンガーパ（略してピンダ）は戦前、東山農場米作地のあったところであるが、この地で最初に米作をやったのは、のちの同農場の支配人安田良一であった。

「一九一五年サンパウロ初代総領事松村貞雄がたまたまピンダ地方視察の結果として、サプカイア耕地に安田を推薦して米作を試みさせた（1）」のがこの地における日本人米作のきっかけとなったのであった（ピンダの一つ手前に戦後大米作地として有名になった鐘ヶ江農場ができたのは一九二七年ころであり、また同地では、かつての高知県選出の自由党代議士として政界にあった西原清東（さいばら・せいとう）も請負事業ではあったが米作をやった）。

日本移民が本格的に米作をやったのは、モジアナ線の

奥、三角ミナスの一部から、サンパウロ州がわのイガラパーバ、カニンデー方面であって、ここはリオ・グランデ（グランデ河）の流域で米作に適していた。この地方の初期指導者のなかには、請負米作業をやった独身インテリたちがいたが、グアタパラ農場の平野運平の配下の連中であつたことは、注目に値する。滝沢仁三郎や富岡漸（すすむ）などである。ただし同じ配下の馬場直（ばば・なお）はグアタパラ駅に近いモッーカ駅に同志とともに東京植民地を開いて、やはり米作をやつた。

リオ・グランデ沿岸の米作のはじまりは、第一回移民の広島県人臼井介仁（うすい・かいと）が、コーヒー農場の通訳として、第三回厳島丸移民をひき連れてイガラパーバ駅ウニオン農場へはいつたのが、そもそものきっかけで一九一一年のことであつた。この農場にはいつた福岡県人の八田一藤（やつだ・かずとう）はさとうきび栽培とともに米作もやつた。

さらに、イガラパーバの少し手前のカニンデー駅のジュンケイラ・デ・アルメイダ農場では一九一四年にはいつた福岡県人丸林麟太郎が一九一六年から農場の出資で米作をはじめた。ここで日本人の得意とする米作をやつてブラジル人をおどろかせたという（2）。

ところが、第一次大戦勃発とともに食糧米の値段があり、米作者ももうけたのであるが、戦後の米価下落に

よる不況にみまわれ、米作を放棄するものがでたり、一部のものはリオ・グランデのサンパウロ州がわを西方へ移動するようになったが、米作は、その後も、つづいている。リオ・グランデ流域および、奥モジアナ地方の米作者は、他の地方にみられない特殊ないき方をしたので、日本移民の生活を叙述するうえに興味深いものがあるが、今はあとまわしにする。

日本移民の米作は、ノロエステや奥ソロカバナ、のちにはパウリスタ延長線等のコーヒー地帯における「植民地」形成とは別な発展コースとなるので、ここでは一九四〇年ころまで、在伯同胞発展の中心となった感のある植民地形成と、その発展のほうへ視点をあわせて、この移民史を書きすすめることにする。

注

(1) 『移民四十年史』二四八ページ。安田については『埋れ行く拓人の足跡』一三三―一四一ページにくわしく述べられている。彼の米作はここがはじめてではなかった。

(2) 『移民四十年史』一一〇―一一五ページによる。

ブラジルにおける『日本移民の社会史的研究』のなかでその筆者アンドウ・ゼンパチも指摘しているように、ブラジルにおける日本人植民地には、三つの型がある。その第一の型は、日本政府の息のかかった植民会社――海外協会、拓殖組合――等が建設した植民地であつて、ここへは、主として日本から直接「植民」を導入することを目あてとして開拓した。そして、教育・衛生、その他の施設は会社なり組合なりの資金をもつて行なつたものである。

第二は、移民と生活を共にし苦勞した指導者たちが、移民の将来を考え、自分たちの理想を実現するために植民地を建設したものであつて、入植者は、ほとんどコーヒ―農場の生活を経験した移民たちであつた。

第三の型は、時代のすう勢にしたがつて、土地売りをはじめたものの仕事で、個人の仕事と土地会社の仕事との差はあつても、在伯外国移民を対象とした純然たる営利事業であつた。

むろん、どの植民地にも中心人物があつて理想的な植民地を建設することにとめてはいるが、「植民地の型」として、この三つはもっともその特長をあきらかにした

ものである。

第一の型にはイグアツペ植民地（のちにはレジストロ、セツテ・バーラス、桂などと地区的名称に変わった）、それからアリアンサ移住地、チエテー移住地、バストス移住地、セツテ・バーラス移住地などがあり、第二の型には、平野植民地、上塚植民地などがあり、第二の型には、ノロエステ線のビリグイ植民地、ジュキア線、北パラナの各植民地、その他、無数の何々植民地と名づけられ、のちにはただブラジル名のみ残ったシチアンテ（小土地所有者）の集団がある。おそらくその面積のうえからみてもそこに「入植」した人数のうえからみても、この型の植民地がいちばん多いであろう。

22 原始林の開拓

自作農をめざした日本移民の生活の歴史を書きすすめるにあたって、その実例を、戦前において日系人口の集中度のいちばん多かったノロエステ方面の原始林開拓についてみることにする。ここには、植民地建設の第二第三の型がみられた。

いうまでもなく、日本移民の初期の中心地帯は、リベIRON・プレット市を中軸とする、パウリスタ、モジアナ

鉄道沿線であつた。モジアナ線に属する三角ミナスおよびリオ・グランデ沿岸の米作地帯へ向かつた人たちは、分益や借地農が多く、その移動もはげしかつたので、本格的な発展ぶりは、やはりノロエステやソロカバナ方面にみいだすことができる。モジアナ方面のことは、もう一度あらためて「奥モジアナ方面の米作者」として後述する。

さらに一九一三年に初入植者のあつたイグアツペ植民地について注釈すれば、この植民地の建設が第一の型に属し、またそれゆえに、契約移民の自然的発展コースからは、ややはなれたものであつたし、地理的にもイグアツペ方面への発展は、当時は大きな流れとはみられなかつたので、これも特殊な一地方の発展として別に記述する。

その他、連邦植民地モンソンには一九一一年からすでに数家族の入植者があり、一時は十二家族をかぞえ、さらに第二モンソンも出現したが、いずれも長つづきせず、また大勢を左右するほどの動きもみせなかつたので、ここを開拓の見本とすることはさしひかえた。

また、サンパウロ近郊のジユケリー（現マイリポラン）植民地も一九一三年から一四年にかけてひらけたものであるが、これはサンパウロ市郊外の農業のところでふれる。

なお、第一回移民でズモーン農場を引き揚げた移民たちの一部は、ノロエステ線チビリサー駅、サン・ジョアキン農場にはいつているし、第二回移民もこの農場にはいり、のちノロエステの先駆者となったものもいるが、本書の立場からはあまり細部にはいるのでここでは割愛せざるをえない。

ここでは原始林開拓がどのようなにしてすすめられたかを述べ、初期移民者の一年間の生活を叙述してから、平野、イタコロミー、ビリグイ、ブレジョン等の建設にふれることにする。

みどりの地獄

「みどりの地獄」という言葉がある。これは人跡未踏の原始林地帯を表現する言葉として、まことにふさわしいものである。

鉄道の敷設工事にさきだって、深い森林の中に、まず一条の明るい細道がひらけていく。ラバの一隊が、この道をとって開拓前線の農場づくりに突進する。そして、そのあとを追うように鉄道工事がはじまる。そこ、ここに開拓されつつある農場の近くやそのなかを、文明開化を告げる鉄の道がおる。やがて、すさまじい汽笛をこだまさせ、黒煙をはき上げながら走る汽車をむかえて、

原始林は人間の開拓力の前にさらされるのである。

「樹海」という言葉が生まれる。これは文明化されつつある一点から、まだ斧を入れない森林地帯をながめたときの感懐であって、大海のようにながめられる森林は、もう「みどりの地獄」とはいえない。

23 原始林開拓の先駆者

ノロエステ鉄道は、一九〇五年バウルー市を起点として工事が開始された。

パラグアイ戦争（一八六四～一八七〇年）中、マツト・グロツソ州とサンパウロ市および連邦首府との地上連絡の必要を痛感した連邦政府は、まず、軍事上の立場からノロエステ鉄道の敷設を計画したが、はじめは私設ノロエステ鉄道会社の仕事としてその工事をすすめた。そして、一九〇六年になって、やっとバウルーより二八〇キロ、サンパウロ市から六〇〇キロメートルの地点アラサツীবáまでレールをのばすことができた。そして、鉄道開通は一九〇八年十二月二日であった。

わが第一回移民のなかには、アラサツীবá以北の工事に従事したものがあつたことは他のところでふれたが、このことについては、また別に記述しよう。

鉄道は、まだ原始林の中を、まがりくねって通ってい

る。切りくずしや架橋工事費を節約して、一刻も早く目的地へたどりつくためである。燃料は森林の薪であった。

所どころに小さな駅が生まれる。はじめは貨車一個、あるいはレールに沿って掘立て小屋がただただけである。あたりには、すでに工夫たちの小屋がたちならんでいる。棒杭をならべて屋根は椰子の葉かこ（・）け（・）ら（・）ぶき、まだド口壁も塗ってない。そこここに農場もひらけかけている。

わが移民たちが、植民地開拓をはじめたのは、プレジデンテ・ペンナ（現カフエーランジア）駅の平野植民地が一九一五（大正四）年、アルブケルチ・リンス（現リンス）駅のバルボーザ植民地が一九一六（大正五）年、エイトール・レグルー（現プロミツソン）駅が一九一七（大正六）年、イタコロミー（上塚）植民地の名で開拓がはじめられるのが翌年の一九一八年である。さらにビリグイ駅が一九一五（大正四）年、これにソロカバナ線をふくめれば、アルバレス・マッシャード駅の一九一八（大正七）年等であった。

このころになると各駅はやや形をなし、改札はなかったが、プラットホームらしいものもでき、一日二回上下りの汽車が着くたびに、駅ではカラン、カランと鐘をならしていた。駅は周囲の人家をもふくめて、エスタソンともよばれていたが、リンスなどはすでにビーラ（町）

もでき、オテルと銘うった宿泊所などもできていた。各農場からは、牛車、馬車（ラバびき）が集まり、また道のわるいところからは荷物を背にしたラバ隊もやって来た。

人々はみな馬で町へ出た。つば広の帽子に上着なし、首にはレンソ（ネッカチーフ）をまき、皮のゲートル（ポライナ）をはめ、腰にはピストル（グアルーシャ）をぶちこみ、拳銃の弾丸をさしならべた広い弾帯（バンド）をしめていた。まるで西部劇のカウボーイさながらのいでたちであるが、決して無頼の徒ではなかった。町では多くの知りあいにあいさつし、言葉をかける。護身のために武装はしているが、むろん、だてや酔狂ではなかった。警察などは、あってもなきがごとき時代である。白・黒は実力できめる。だがそれは最後のどたん場だ。だれもそんなことを自ら好むものはない。お互い、人のうらみをかわないようにつとめる。奥地（セルトンと呼ばれた）では、たのみになるのは人である。一人でも味方がいれば、それだけ力づよい、お互い仲よくしているにこしたことはない。一步町を出ると、大自然のまっただ中である。

行き交う人は必ず「ボン・ディア」（おはよう）「ボア・タールデ」（こんちは）とあいさつをかわす。同道のものはすぐ親しくなつて話しながら行く。

測量隊の仕事

開拓事業で最初に原始林へ足をふみこむのは土地測量隊である。はじめのころは必ずしも日本人測量師だけがこの仕事をうけもったわけではない。しかし、この難事を果たした日本人およびブラジル人の測量隊のために、開拓史の第一ページをささげる。

広大なブラジルの土地も、多くの私有地にわかれ、ノロエステ、ソロカバナ両線が商品として売り出されるようになる、これを正確に測量し、小さく地区割りをし、図面にかきこみ、また斧を入れる開拓者のために境界線をきめてやらなければならない。これは数千アルケールの土地を数百家族の小所有地に区画するのであるが、その土地がすぐ目の前に見えているのではない。地主の所有地は、ほぼ見当はついているものの、もしこれが道路から数キロメートル、場合によっては十数キロメートルもはなれた原始林のただ中にあるとすれば、そこへたどりつき、ここがこれから測量すべき土地であると確認するまでがたいへんなのである。たいがい川の合流点とか分水嶺とかが目標になっているが、いよいよ基点をさだめ周囲の測量にかかるまでが難儀だ。隣接地主など、まず、どこに住んでいるのやら、てんで見当もつかないこ

とが多い。また最初に地主から渡された図面が、はたして正確なものかどうかあやしくなる場合もある。せっかく隣の地主をさがしだし、図面をみせてもらうと、きっちり合っているにもかかわらず、実測の結果は、突然そこに所有主のない土地があらわれたりする。そうした細かい問題については深入りせず、ここでは、実地踏査の結果、周囲の境界も明らかになったと仮定して話をすすめよう。

測量の基点となるところは、これから数か月間のキャンプ生活の便宜を考えなければならぬから、水の近くを選ぶことが多い。しかし、もしここが低湿地であれば、マラリアの危険性があるから、さげなければならない。なるべく、水が停滞していないところをえらぶ。

すでにキャンプをいとなむ地点をさがしだすために数日を費やしているのである。近くに人家があれば、そこまで食料や道具、機械類を運んできてあるはずだ。これをキャンプ予定地までうつさなければならぬ。運搬にはいつも四、五頭のラバが待機しているが、ラバさえ通るにむずかしい森林中のピツカード（木の枝や下草を払った細道）は歩きながらフォイセ（鉞鎌）で整理しながら道路へぬけだす。キャンプと道路間の通路が、こうしてできあがるのである。

キャンプといっても、きれいな平地にテントを張りめ

ぐらしてすぐ休息できるようなところは、原始林の中ではみあたらない。人夫の数にしたがつて一つから二つの小屋をたてる。フオイセで雑木を切りはらい、エンシャーダ（鋤）で土地をならし、棒杭を集めて掘立て小屋をつくる。むろん、テントのそなえがあればこの手間ははぶけるが、ない場合には小屋づくりに四、五人の人夫が一両日をついやさねばならない。その間、炊事係は煮たきをはじめめる。地面に細い溝を掘ってそこをかまどにする。

近くには小川の水がある。小屋ができあがれば、人夫たちは各自にベッドをつくる。細い木や、つるを集めて、簡単な棚（ジラウ）をつくる。ものの一時間もかからないだろう。ここにジュートの空袋でもかけてゴロ寝ができる。測量師は折り畳み式のベッドをもっている。もし、それをもたない場合があるとすれば、人夫に命じて、同じような棒の棚をつくらせる。こうして原始林のまっただ中に、最初の一夜を迎えることになる（筆者は、二十年前く森林測量をつとめた古強者と、いまサンパウロ市の一角にある彼の住宅のサロンで語り合っているのである。彼の山あるきにも数回同行している筆者は、彼の語るところがいちいちうなずけるのである）。

人夫たちは北東地方の人間が多い。たいがい黒人の血をまじえている混血人だ。

「給料は、普通農業労働者の倍額を支払うことにしていたんだが、慣れないやつはつづかないね。体が肥えていて、一見がっしりしたやつのはうが、早くまいってしまいう。山の生活では、ふとっているやつはだめだ。汗かいて水を飲んでへたばってしまうんだ。二、三日たつと、とてもつづかないからやめさせてくれ、と申しこんでくる。反対に、こんなやつが、この山中でつとまるだろうかと思われるようなやつばかりのほうがいいんだ。」

とにかく、朝はカフェーのち、まもなく飯をたべてキャンプを出て、夕方まで、ときには水も飲まないで働くんだから、デブじやつとまらない。やつらは水を飲まないんだ。水筒は用意してあるんだが、もつのをいやがるんだな、新米が用心して水をもって出かけると、皆が笑う」

「ところで、食料は何かね」

「豆、米、干し肉、砂糖、これは等分にもってはいる。」

それから、カフェー（粉末）、豚の油、マンジオカ粉、玉ねぎ、にんにくという具合になるな、おもしろいことは時代がさかのぼるにしたがって豆をうんとたべたが、戦後は米をよけいに食べるようになった」

「肉の等分というのは多いなア」

「いや、これは必要なんだ。飯を腹いっぱいにつめこんだら、胃袋がおもたくなつて働けないし、第一のどがかわ

く。肉類を食わせて胃袋を小さくしておくのがコツなんだよ。そのほうがのどのかわきも少ないんだ」という。

フォイセ（鉈鎌）をもち、バリーザ（標識）をかついで、森林中を終日歩きまわる人間は、なるべく胃袋をふくらまさないようにしていなければならない。とにかく、山歩きには身が軽くなければいけない。地上にか（・）ず（・）ら（・）や木の根が張っているから、足を引きずるような歩き方では、二、三キロメートルでへたばってしまふ。鹿のように、ヒョン、ヒョンと歩ける細い軽い足が必要なのだ。

「人夫たちの気分はどうなんだ」

「うん、なれない人間は、一週間、十日とたつうちに、だんだん、いらいらしてくるな。原始林というやつは、なにか人間の頭に、おもおもしろくのしかかってくるらしい。つまらないことでケンカをおっぱじめるよ」

「すると、いきぬきは、どのくらいの期間をおいてやらせるんだ」

「なにツルマ（隊）には、ベテランがいてな、けっこうみんなを統制するんだ。だから三か月くらいはがんばる。むろん、その間も情勢次第で町へつれだし、給料を支払ってあそばせてやる。一週間くらいで、やつらはすってんでんだ。帰りには女郎屋まで迎えに行くこともあるが皆せいせいして、おとなしくなつて帰るよ」

さきに「町」の話をしたが、新開地の町には、なによりさきに、いわゆるバイロ（赤線区域）なるものができる。

だから、人夫たちを、ここへつれてくればいいわけだ。むろん、皆どろ壁の掘立て小屋で、自然とじかにとつくんでいる人間だけが、欲求をみたせるところにすぎない。

測量の仕事は、たいがい雨期がすぎた四月ころからはじまって八月ころまでつづく。まあ五、六か月間だ。ときには、三月ころから十月ころまでもやることがある。測量隊は、一人の測量師が、五人くらい人夫をひきつれてはいる。人夫のうちの一人は、炊事やラバの世話もしなければならぬ。広大な土地には三つ、四つの班が別な基点でキャンプする。

「たとえばだね、一、〇〇〇アルケール（約二千五百町歩）の土地を百家族に細分するとして、一人の測量師に五人の人夫が働くとして、どのくらいの期間を要するのか」「そうだな、いちがいにはいえないが、平均したら四か月くらいかかるよ。一区画一〇アルケールという単位は小さいからなア。これが、一〇〇アルケールくらいになると仕事は早いんだ」

「それで山伐りはいつごろはじめるんだ」

「四月ごろだ」

「すると、そのつぎの年の乾燥期を待ってはじめるという

ことになるんだな」

「まあそうだ」

しかし、山伐りの仕事は、もう測量とは関係ないから項をあらためて書くことにする。

山伐り（森林伐採の仕事）

山伐りも測量と同じように、初期には、その大部分を請負師にわたした。それは、日本人植民地というものの全体的地形、および植民者各自の地区（ロッテ）の形によつて、初年目には一様にきりひらくことが必要でもあり、またそのほうが仕事やりやすい点があつたからである。

だから、いわゆる「入植」は原始林を焼き払つたあとに行ない、掘立て小屋をつくり、あとかたづけをやるころからはじめられるのが普通であつた。

植民地はたいがい、小川とエスピゴン（分水嶺）までの広大な土地が、帯状に小区分されるのである。場合によつては、やや扇形になることもある。とにかく、一族最小一〇アルケール（二十五町歩）であり、多くのものがこの単位からはじめるのが普通だから、その地区の長さは、二キロメートルから四キロメートルにも達する細ながいものであつた。はじめは、とにかく食糧生産が

たいせつであり、同時に低地は早くひらいてマラリア予防のために排水溝をつくる必要などもあり、豚小屋や住居建設のためにも、低地から五〇〇メートルから一キロメートルくらいまでのところをひらくことになる。そして小川から五〇〇メートルくらいのところに植民地を横断する道路ができて、各植民者間の連絡をとり、同時に、これが駅へ出る道路ともなるのである。道路の上か下に（多くの場合は仕事の都合で下のほうに）家がたつ。

山伐りや、山焼きの都合もあって、たいがい一家族に對して二アルケールから四アルケールくらいを最初にひらく。山がよく焼けさえすれば、処女地では雑草に追われる心配がないので五町歩、十町歩の土地が、一家族四〇五人の労働力であつかえたのであった。高いところにはむろんコーヒーを植えるようになるのであるが、初年目はほとんど雑作（コーヒー以外の作物をこうよんだ）なのであるから、コーヒーの植付けはあとまわしにして米、豆、とうもろこしを植える。

だが、平野植民地の例にもあるように、請負師にわたす資金もなく、また、一刻も早く自分の土地に鋤を入れたい気持ちから、むりしても自分たちで森林伐採をはじめたところもあった。

山伐りは男たちの仕事である。だから男たちが四、五

人ずつ組んで、一家族から二家族分の山を伐るときは、先発隊として彼らは山へはいる。そして測量師が水辺のキャンプからはじめるのと同じように、水の近くで男たちだけの自炊生活をはじめなのだ。最初につくる掘立て小屋は、ただ一時しのぎのものにすぎない。ここでも水辺には注意しないとマラリアにやられるばかりか、夜中に「山豚」などに水をあらされて清水がえられなくなることもあるので、なるべくなら流れのあるところをえらぶ。素人の場合は、測量隊や伐採請負人のように、何もかも経験ずみで人夫、運搬用の家畜などをもっていることが少ないので、食料品や道具類を、自分でかついではこびこむことすらあった。駅から一〇キロメートル以上も荷物の運搬についてやす苦労は、すでに異常なものといえる。

山伐りは測量と同じように雨期がすぎてからとりかか。森林にはいつて雨にあつたら実にみじめである。小屋といっても、雨もりのないものなどは、まず、はじめからできっこない。雨の晴れまに仕事をしようとしても、山の中はぐつしよりとぬれている。うっかりはいりこんでぬれたら風邪をひく。大陸の森林は夏でも雨後はひえるのである。夜具などもあまりもちこめないのです、たよりになるのは焚火か火酒だけである。

当然乾燥期に仕事を始める。

山伐りではじめの仕事は樹下の細かい雑木をきり払うことである。これをロッサーダという。日本人は「ロッサする」といった。柄の長い鉈鎌―フォイセを使って、下払いをするのだ。これは大森林であるほど仕事はしやすい。光線の充分とおらない樹下には雑木が少ないからである。土地のやせた、雑木林みたいなところほどひまどるのである。この仕事をそまつにやれば、いよいよ焼き払うときになって、山は生焼けになるおそれがある。だから、かなり太い木まで、ていねいに倒しておく。むろん、フォイセで切れる範囲の木には限度があるから、決してむりはしない。ただ木にからまりついているかずらの類は根元から切っておかないとあとで焼けないばかりでなく、大木をたおすとき、とんだまちがいをおこすことがある。せつかくきめた方向に木がかたむかなくて方向をくるわせるからである。これは危険だ。

この仕事がすむと、いよいよ直径一メートルをこす大木を倒すことになる。大木は決して密生しているものではなく、二〇メートルに一本、五〇メートルに一本というように点々と存在する。そしてその中間には、直径一五センチから二〇センチくらいの中木が、これもまばらにはえている。ロッサしたあとは、すでにガランとした森林である。だから大木を倒すときには、その周囲をめぐって、どの方向へ倒したらいいかをよく見きわめる。

そして、いよいよ倒れたら、その枝先がどのへんまでのびていくかも計っておく。あたりの中木も、いっしよに倒れるようにするのが便利だからである。だから大木を倒す方向がわかったら、あたりの中木もいっしよに倒すように切りこみを入れる。むろん、大木が倒れる方向へいっしよにおし倒すのであるから、前後から切りこんでおく。決して周囲から中心へ向かって鉛筆をけずるようには切りこまない。一方へだけ畳むように倒れなければならない。

使う道具は、大木を切るとき以外、ほとんど斧である。刃わたり一〇センチくらいの幅広な斧で、柄の長さは一米ートルをこす。人間が立ったまま、水平にふれるようであればならない。

大木には二種類ある。ペローバやセードロのように、建築用材になるマデイラ・デ・レイは根元から五メートル、あるいはそれ以上のところまで、そんなに太さが変わらない。この木は地上に立って斧をふるうことができる。これに反して、フィゲイラとかパウ・ダリーヨとかの大木になると、直径が太いばかりか、根元のはうが数メートルの幅にひろがっている。こうした大木を切り倒すためには、一米ートルから一米ートル半の高さに、やぐらを組まなければならない。ちょうど建築の足場をつ

くるような具合にである。たすかるのは木がやわらかい、ということである。

山伐りの季節になると、森林中のそこから、カッチン、カッチンと斧のひびきが聞こえてくる。そして、ときたま、ざあーッと大風のような音がするかと思うと、ずしーんと物すごい地響きが聞こえてくる。大木はあたりの中木をその枝にひっかけてまま、同じ方向へ将棋倒しに倒れていくのである。伐採者たちはこのとき、ワーツと歓声をあげて、いつせいに倒れていく姿に目をする。

あたりが急に明るくなるのだ。

やぐらの上では新しい作業が始まる。まず一方からトランサという二メートル、あるいはそれ以上もある鋸をあて、両端から二人がかりで引いたりおしたりして、水平に切りこみを入れていく。これがある程度にすすむと、斧で上部から切り口をこしらえていく。また、反対側からトランサを入れ、斧で上部を切りおとす。むろん、根元が四方八方へ張っている場合は、まわりのでっぱりを斧で切りくずしてから芯のほうにだけ鋸を入れる。

山伐りの斧づかいには、実にキビキビした作業である。水平に、ときには下からすくい上げるようにして木の幹にうちこまれる斧は、上から下へスパツ、スパツとななめに切りこまれていく。斧は弾丸のように木の幹にくい

こんでいってはポツカリと大きな穴をあけていくのである。

いよいよ、ミリツ、ミリツと倒れかかる気配が感じられると、みな左右に身をかわす。いっぺんにバサツと倒れるのではない。はじめはしだいしだいにかたむく。すでに倒れる方向はきまっているのである。空の一角が明るくなったかと思うと、みるまに天空の広さが増して、巨人のような大木は、髪をふりみだし、無数の手をさしあげた姿で絶望的に倒れていく。数百年の樹齢を誇る大木も、いまや人間の手にかかって大地からその姿を消していくのである。

両伐りは男らしい仕事である。そしてこの仕事にたずさわった青年たちには、一生涯わすれることのできない思い出となつてのこる。だが危険も大きい。万全の注意をおこたらないつもりであつても、いつ木の枝が頭におちかかつてこないともかぎらない。また、必ずたおれる方向をみきわめていたと思つてゐるのに、とんでもない方向へ倒れる場合がないでもない。いちばんおそろしいのは椰子の木である。ちよつときり方が悪かったら、先のほうへ倒れかかったものが、途中でまっ二つにさけて、そのさけ目の突端が手前へもどつてきて、ブススリ胸にささつて、その場で絶命したという話をよくきく。精力を消耗する仕事であるから、つかれていると、さつと身

をかわす気力も失われることがあるのだ。

ブラジル人のように、濃厚な食物を、腹八分目にたべて、というわけにもいかず、炭水化物を腹いっぱいこみ、水をがぶのみする。しかも男だけのなれない自炊生活で、多くの場合、ビタミン不足、栄養失調をおこす。原始林には、椰子の芯（パルミット）があり、動物（鹿、猿、山豚）などもいるが、日本人は鉄砲さえもたずに、山へはいりこむことがある。食料は、あるだけのものをたべ一部のものが不足しても、がまんして残りのもので食事をとる。ことに塩魚の火あぶりで白米食をたべるなど、口あたりはいいが、山伐りの仕事には分量ばかり多くとることになって感心しない。

とにかく、こうして三か月くらいたって、一応伐りおわると、これをまた二、三か月かわかしてから火を入れることになるのである。

山　焼　き

七月から八月のすえにかけて、奥地では太陽がボーッとかすむようになる。まだ雨期にはかなり期間があるが、八月といえど、世はまさに春さきである。若芽がもえだす。どんよりとしたオレンジ色の光が地上にみなぎって、なんとなくものういような季節になる。山焼きが毎日つ

づくからである。

山焼きは火を入れる時期がたいせつだ。あわくつてかわききれないときや、地上がまだひえているときに火を入れたら、焼け方がわるい。なれないときは、春を迎えて切り株に木の芽がさかんにのびだすと、これはたいへんだと思って、早目に火を入れてしまう。むろんすごい火になるので、焼けすぎるかと思われるほど煙はあがるが、焼けたあとをみると、すっかりまだらなのである。

これではあとかたづけがたいへんだ。

火を入れる前には、周囲を整理して「立ち山」へ火がはいらないようにする。そして一週間もいい日和がつづいたころ、地上にたまった落葉の下に手をさしこんでみる。ほかほかと温度がたもたれているようだったら、もうしめたもの。もしひんやりとしていたら、まだあわて火を入れないほうがいい。いよいよもえだせば、切り株にでだした若芽や少々の青葉などなんのおかまいもなく、どんどんもえるからである。

風向きをよくみてから、たいまつをもって火をつけていく。風下のほうに待機しているものにも合図して迎え火を入れさせる。こうして、広い場所を周囲から火とりかこんでいく。それでも一挙にもえ上がり、もえつくすことはないが、条件がそろえば、火はたちまちの間にもえ広がっていく。

遠くからながめていて、その煙が、じわじわと量をまし、つぎからつぎへ空間をみたしていくようだったら、まちがいなくもえているのだ。花火のようにもえ上がっては煙がくずれるのは、まだら焼けにもえている証拠だ。山は、すっかり露気のとれた午後から火を入れるから夜どおしもえる。夕方は、いつ太陽が沈むか気づかずにいることすらある。夜になると、もう木の葉や枯枝はもえつくして、大木にもえうつる。森林中には、すでに寿命のつきた大木もあるが、そんなものはたいがい斧の刃もたたない枯木であるから、ふれないで立木のままにしておく。夜になると、そういう枯木がもえはじめ、火の柱になってメラメラと炎をあげる。

翌日になって、山がまっ黒に焼けだされたのちも、ところどころに、まだぷすぷすもえつつけるところがある。これは二、三日、ときにはもつとつづく。これでほんとうに山が焼けたとなると、一安心できる。ピング酒をあおって、掘立て小屋では酒宴がもよおされる。

残った仕事は、小屋を修繕して家族をむかえるだけだ。本居は、蒔きつけが一応すんでから村総出で、つぎつぎとたてていくこともできるだろう。

(1) 一九一七年連邦政府のものとなる。

24 新開地風景

小川のある谷に沿って、えんえんとつづく焼け野である。焼け野といっても、つい半年前までは、人跡未踏の原始林であつたのが、切り倒され、焼き払われたあとで、まだ黒い炭をかぶった大木が、各所に横たわっているし、切りのこした堅い木や、もえのこりの古い立木がそのままのこっているので、ときによると山火事のあとかとあやしまれるほど木が立っている。だが、これは遠くから新開地を見とおした感じであつて、それらの立木は、近づくにしたがつて、ところどころにしょんぼりと、とりのこされているにすぎない。各所に白い煙がたちのぼっているのは、あとかたづけのために木の枝をつみあげてはもしているのである。

いま六頭びきの牛車が、ギー、ギーツと軸をきしませながら、入植者の荷物を積んで道路をすすんでいく。道路といつても、まだ、木の切株があり、根が張っていて、そういうところに車輪がのし上がり、乗りこえるときには、いまにも車が転覆するのではないかと思うほどかたむく。荷物とともにこれに乗っている女や子供は、必死になつてしがみついている。土はやわらかであるから、

木の根のないところへいくと、車輪は深くめりこむ。牛車の馭者は、先端に金具のついた長い竿のさきで牛の尻つぺたをつつつきながら、オーウ、オーウとさけぶ。さすがは新開地なので馭者も靴をはいている。腰には三〇センチほどの山刀（ファッコン）をぶらさげている。

牛車の音をききつけて、先発隊が道路に出むかえる。どの顔も炭焼き人夫そっくりで、白い目と歯をむきだしで笑っている。

「来たなア、とうとう来たなア」

だきついてくる子供に先発隊が言葉をかける。

「苦労したろう。体はじょうぶだったか」家長がたずねる。

「さっそく御馳走をつくるよ！」と女の人やさけぶ。人間をおろした牛車は、焼け野の中へ、ギューツと引っこまれる。どこをどう通っても、まだ作物のない畑だから心配はない。道路から小屋まで二〇〇メートルくらいある。

荷物とともに食料も着いたことはいうまでもない。米豆、豚の脂、干し肉、干鰯、玉ねぎ、砂糖、コーヒ―、それにピング酒もガラフオノ（四リットルの大壺）でついた。

「ジョゼー・マッタ・ビツシヨ！」（ジョゼーさん、一杯どうかね！）

カレイロ（牛車夫）もカネキンニヤ（瀬戸びきのコー

ヒ―茶碗）でいっぱいのピンガを御馳走になる。彼もここでおそい昼食をとって帰る。途中の居酒屋（ボテキン）で一泊して翌日町へ帰りつくことになるかもしれないのだ。

小屋は建て増しのために、柱が追加され、かこいの木も家の近くに集められている。二、三日は、みんなともに一つ棚の上にねる。ファゼンダで使っていたふとんがきたから、これを敷けば背中が痛くなくていい。女ものがそこらにぶらさがるのも久しぶりだ。鍋釜が荷物からころがりだす。いままでの自炊では鍋もたいがいバーニヤ（豚脂の罐詰）の空缶を利用した。しかも、どれもこれも黒ペンキで塗ったようにすすけている。つやつやとしたほうろびきの鍋、どっしりとしたカルデIRON（鉄鍋）が姿をみせる。皿もまっ白なほうろびきだ。

女のいれたコーヒ―がでる。自分たちが全然手をださないというだけで、男たちにとっては特別うまいように思われる。いや、それだけではない。もう幾日もコーヒ―というものを飲んでいないのである。

女の炊事がはじまる。

よくもこんなところで、ものの煮たきができただけと、あきれながら飯をたく。のき下にひさしをおろしたところに、泥できずいたかまどがあるのだが、くずれかかっていて火がよくまわらない。明日はさっそく、この

かまどづくりをしてもらおうと思いながら薪をくべる。水の置き場もきめなければならない。洗った食器をならべる棚も必要だ。

「お風呂はどうしていたんだね？」と先発の青年にきく。「あすこで、夕方湯をかぶったんだよ」と、少しさきのほうの谷間を指さす。そこには丸太がならべてあつて、近くで石油缶で湯をわかすようになっていた。

御馳走といつても、カレイロがいるから、豆のなかに油とにんにくをよけいに入れただけ。それに日本式の白い御飯だ。干鰯を火にあぶったものが少しある。ブラジル人も豆の汁をたっぷりかけるとおいしいという。豆だけは青年たちが朝から煮て待っていたものだ。

家の中には割り木でつくったテーブルらしいものもあるが、みんな炊事場の内外にかける場所をさがして腰をすえる。カレイロはすこしはなれたところの横木にがんばる。胡椒をもらつて、御飯にふりかけて、これでこそうまい、とよろこんでいる。べつに変わった食べ物ではないが、女手でつくったものは、御飯のたき方、豆の味つけ、なにかもうまいように思う。晩飯には、パルミット（椰子の芯）と干し肉の御馳走があるという。パルミットは一走り、まだ森林にはいくらでもある。干し肉はもう水につけてある。

明日から、屋根なおし、かまどきずき、腰かけづくり、

風呂場も外から目につかないようにする。手わけして野菜の種子をおろす。家長、主婦が加わって急に仕事ができる。

日がくると、いよいよあたりがしんかんとして感じられる。明るい星空である、森の中でふくろうがなく、だれかを呼んでいるような声だ。まっくらな大地から、ときどき赤い火が、ボーツともえ上がる。

カンテラをふきけして寝床へはいっても、しばらくは話し声がつづく。

住居

植民地の生活を叙述するのに、まず住居のことを語るとすれば、一応、落ち着いたシチアンテ（自作農）となるまでに、三回くらい住居をつくりかえる。最初は、山伐りから入植へつづく掘立て小屋で、これは少なくとも一作とるまではうこかせない。仕事の都合で二作くらいまでつづくことがある。

それから、壁土を塗り、土間ではあるが瓦屋根の家をつくるのであるが、ここでまた五、六年生活する。やがて、コーヒーがでだすころになると金まわりもよくなるので、自分たちの思うような生活をしたいと考える。独立農としての見栄もてつだって、レンガ建てで床板もは

り、フランス式の瓦で屋根をふいて、こじんまりとした「文化住宅」にうつるのである。

しかし、これは、ファゼンダ生活を経てきた植民者の行き方であって、コロノの家から監督の家、あるいは農場主の住居を小形に模倣したような方向へうつることである。

これに反して、日本から直接、植民者としてはいるものは二回目あたりから、日本式を加味した家をたて、床板は雑巾でふきこみ、畳はなくとも寢床にはござを敷き座ぶとんをもちいる。夜は、ここに寢床をとってねる、ということになる。だが食堂兼客間だけはテーブルと腰かけになる。こうした和洋折衷の生活は二世たちがほぼ一人前に成長するころまでつづく。途中で新築する場合があっても、どこかに日本式なものがのこる。こうした様式でもっとも特長的なのは、レジストロである。ブラジル式と折衷様式の間にあるのが、アリアンサ（ノロエステ）やチエテー（同上）であるが、これはのちに詳しく述べる。

ここでは、ファゼンダや借地農から入植した人たちの最初の住居を調べてみよう。

これは、ブラジル人のいうパウ・ア・ピッケの様式であって、かこいの壁は、まっすぐな木材をならべるか、椰子の木を二つ割りにしたものを外皮の部分を内側にむけ

てならべるか、とにかくはじめは木を土にさしこむだけで壁土はぬらない場合が多い。木材はいくらでもあるが、泥をこねる暇などない、というわけである。屋根は瓦をつかわないから、椰子の木を二つ割りにして中をくりぬき、これを丸瓦のように、うらおもて、とたがいちがいにならべる。長さは二メートルから二メートル半である。棟瓦には、この椰子の木もつかうが木の皮をかぶせることもある。いかにも合理的だが、長い椰子の木を、曲がらないようにうまく割り中をくりぬく仕事はなかなか思ったようにはうまくいかないもので、夏になって大雨がふると雨水があふれだす。だが、椰子材の多いところは、これがいちばん仕事しやすいのでこの式をえらぶ。もう一つは「こけら」ぶきにする。これは、セードロなどの良材があるところでは、大きなこけらに割ってならべる。こけらとはいっても、斧で割った幅二〇センチ、長さ四〇センチくらいな板である。これをならべて屋根をふくのであるが、とめ針も使う。

じょうぶな木の皮があるときには、これで屋根をふくのも簡単である。海岸地帯では特殊な椰子の葉をもちいる。しかし、奥地の椰子は屋根にむかない。あらやまにはサツペー（茅）がないから茅屋根もない。

戸は、はじめは斧で割った板をつかう。窓の戸は、空箱の板を利用したり、ジュートの袋をぶらさけて一時し

のぎにする。テーブルや腰かけも斧で割った板を使う。土間に杭を打ちこんでつくるのでぐらつくことはない。

寝台は、細い棒をならべた棚にするか、あるいは椰子の木を細く割って芯をとり去ったものをならべてかずらでからげる。ささえの棒はみな土にさしこむ。もし小屋を二度、三度追加するとなればしぜんほそ長いものになるので、ところどころ仕切りをつくる。これも棒をたてて部屋らしくする場合もあるが、ジュートの袋をひろげて幕にしてぶらさげることもある。とうもろこしの収穫があつて、その皮を利用した敷きぶとんがつかれるまでは、棒をならべただけのかたい床の上に、空袋でも敷いてねる。もし日本からもつてきたふとんがあつて、これを敷いたら上の上というわけだ。かぶりものは毛布である。

キャンプ時代の炊事場は、椰子の木をならべた屋根を裏のほうへひさしにおろして、かこいのないふきざらしのことが多い。だが家族のものが来て、人手がふえれば、これにかこいをつける。かまどは木の棚の上にきずく。そして、まわりがこげないように、ここだけに泥をぬる。むろん、日本人の女は、しゃがんで仕事をすることを別に気にしないから、土間にきずくこともある。かまどは細長くして鍋が二つ以上かかるようにしたほうが便利である。だから、鉄の棒をならべるか、もしそんなものの

ない場合は古いヤスリ（リーマ）を利用して鍋をささえるようにする。心がけのいいものは、ブラジル式シャツパ（三つくらい丸い穴のあいた鉄板）をもちこむ。泥のかまどにこれをかぶせ、ときには壁に穴をあけて煙ぬきでもつくれば、りっぱなフオゴン（かまど）である。流しはまな板とバシーア（かなだらい）をのせるだけ。戸棚は空箱をかさねる。ファゼンダの生活と同じである。流しの棚はおもてにもつくる。ここでは食事のあとかたづけをする。

また洗った食器をそのままならべておいてかわかすにも都合がいい。

日本人の生活になくてはならないものは風呂である。だが当時の植民者たちは、ドラム缶さえ得られなかった。桶屋や大工がいるわけではないから湯舟を工夫するのがたいへんだ。大木をくりぬいてカヌーのような浴槽をつくってみる。釜がうまくつかない。釜といっても湯舟に穴をあけて、そこにブリキを張るのである。もし金に余裕があつて、町から大きな酒樽（キント）でも買いこめたらいいのであるが、はじめは、そんなぜいたくはできない。いろいろ考えたすえ、行水でがまんする。水に近いところで石油の空缶で湯をわかし、これを大きなかなだらいに入れて、湯をつかう。あるいは缶詰の空缶でつくったひしゃくで体へかける。湯をつかう場所は、細い

棒を「すのこ」のようにならべたひくい台をこしらえ、これを簡単に棒杭でかこう。かこうといつても、二方か三方だけで、別に小屋にするわけではない。あまり風とおしがよくて湯がきめやすくないためだ。一作とつたら、風呂桶だけはなんとか工夫しようと思っている。

風呂場の近くには穴をほって簡単なかこいをして便所もつくる。だが男たちは、空をみあげながらの用便をこのむ。あらやまには、いたるところに物かけがある。鍬をかついででかければ天下ごめんである。

衣 服

衣服は、ファゼンダのものと変わらない。女の日本着がここではかなりブラジル服になる。メリケン粉の空袋を利用した簡単なシャツをこしらえる。女でも労働靴をはかないと仕事にならない。地下足袋などは、すぐぼろぼろになってしまう。地上には、小さな木の切株が無数にのこっているの、これが足袋にささるからである。あつい牛皮でつくった靴（サパトン）にかぎる。油をぬっておけばかたまらない。ずっとあとになるとモンペを着用する女もでてくるが、これはむしろ、日本から直来の植民地のほうがさきであった。焼け山は、炭や灰がどこにでもあるから、女でもスカートの下にズボンのような

もの、あるいは簡単なきやはんをはきだすのであるが、初期には、日本人も、ブラジル人も、あまりこれを持ちいなかった。

焼け山がかたづいて作物がのびるころになると、ぶゆ（ボラシユード）がでてくるので男も女も、袖の長いシャツなりブラウスなりをもらい筒のようなきやはんを脚へくくりつける。毎日ほこりにまみれるので「土まけ」するものもできる。ぶゆにくわれたあとをひつかくことからも皮膚病のようなものにかかったのかもしれない。曇り日や夕方になると、このぶゆがひどいのである。あらいやまの仕事に風呂が必要なことはこれでもわかるだろう。

食 物

食物は、まだファゼンダのつづきであって、白米のご飯にブラジル式の豆をかけてたべる。たまには干し肉や塩鰯などの御馳走もあるが、まだたのしみをしている味噌ができるまでは何か月かかかる。でももう大豆を蒔いているし、ごまの種子もおろした。あらやまでは、菜や大根が早くのびる。なすもきゅうりもよくできる。まだ病気がでる心配がないのである。豚や鶏はえさがなくから、飼うわけにいかない。もし近くから「とうもろこし」でも買いこむことができれば別だが、一般には、まだ乗用

の馬やラバをもたない。やっと用心のために犬を飼うくらいがせきの山である。

あらやまの仕事

あらやまの仕事は、まず、焼け山のあとかたづけからはじまる。クイバーラ、またはコイバーラといって、焼けのこりの細い木や、じゃまになる大木の枝をおろして、これをひとまとめにしては焼き払う仕事である。たいがいフオイセでやるが、斧もつかう。終日まっ黒になっての力仕事なので疲労が大きい。一日に五度くらい食事時間をとって休息する。日本人は休みながら長時間を働くことにする。朝、コーヒーを飲んで山へ出れば、九時には朝食（アルモツソ）である。十二時ころまたコーヒーを飲み一休みする。もし主婦に暇があれば、メリケン粉に砂糖と重曹を入れて、油であげたソーダだんごをつまむ。午後三時ころ間食をする。メレンダであるが、日本人はジャンタールとよぶこともあった。そして夕飯は家へかえってからゆっくり食べる。実はこれがほんとうのジャンタールである。

コイバーラがすむと、いよいよ蒔きつけだが、もし雨がなかったら、せっかくの種子も焼けてしまうから、雨がくるまで低地に野菜を植えたり、井戸を掘ったりする。

井戸といっても、まだひくいところに住居をかまえていたので、はじめは井桁を組んで柱をたて、はねつるべにする。高いところであればブラジル式のまきあげにする。井戸掘りは、家のものだけでやる場合もあるが、深かったら、近所のものにてつだってもらう。

九月も半ばころになって、久しぶりに雷鳴があり、大雨になると、蒔きつけのこともあるが、家の雨もりなども発見され、いそがしくなる。森林時代とちがって、小川の水が一挙にあふれる。またそれまで、ろくに水もなかったようなところがどんどん流れだす。むろん、ひどい濁水だ。低地にせっかく作った野菜畑が水びたしになったりする。大木が小川をまたいで倒れていたため流れがさえぎられて水があふれだすこともある。森林中の道は、各所に木が倒れたり木の枝が落ちたりして交通がさまたげられ、食料品がとどかなくなることもある。とにかく、人間がはいって、自然をいじりだすと、それまで思いもよらなかったような障害があらわれてくるものである。

雨期で低地の排水がうまくいかなくなって水が停滞してくるとマラリア蚊がわいてくる。井戸掘りがおくれたため、飲用水が悪くなって、アミ―バ赤痢にかかるものもでる。なにもかもトントン拍子にいきそうに思われたのが、とんでもない災難にみまわれるのである。

だがむりしても食糧生産をおくれさすわけにはいかない。まず米蒔きだ。しかし、地面にはまだ木の根が張っているうえに、縦横に大木がころがっているなかを、一人が穴を掘り、他のものがそのあとからもみを蒔いていくなどは手間ばかりかかって仕事がかどらない。だから、ここでは最も原始的な蒔きつけ法がとられた。すなわち、カバデイラといって、棒のさきにひらたい金具のついたもので地面に穴をあけ、そこへもみをなげこむのである。まだ、プランタデイラ（播種機）のない時代であつた。

腰に、腹掛についているどんぶりのような袋をぶらさげるか、あるいはひもにつけた袋を肩からたらし、その中に種子もみを入れる。カバデイラは右手（左手でもいい）にもつ。足を前後にふん張って、わしつかみにもつたこの棒を地面にうちこむ。それをちよつと前万へ倒すようにすると地中に穴があくから、これを左手（逆の場合）は右手）で指先につまんだ二十粒、三十粒のもみをおとしこむ。カバデイラをひきぬいたときに、そのさきのほうで穴をちよいと突いてふさぐのである。

豆、とうもろこし、いっさいこの調子でやる。うねもなにもあつたものではない。蒔けるところまで蒔くのである。それでも、上がかわききらない前に一雨くると、りっぱに発芽するのである。こんな原始的な仕事でも、

五町歩以上になると何週間もかかる。ときには種子ものが入手できないで、とんだ暇をくうこともある。

くる日もくる日も同じように単調な仕事のくりかえしだ。もしこの仕事が早くおわれればコーヒーの植付けもやらなければならぬ。雑作は天候や値段のうえであたりはずれが多い。永年作物を最初から考えておかなければ最後になって収支がつぐなわなくなる。

さて、入植の年に病気にでもならなければ実に幸運であるが、一人でも家族中に病人がでると心配だ。いよいよの場合でなければ、医者にはよべないし、いったい、駅に医者がいるかどうか。たいていの場合は、薬局へ行って薬剤師と相談して薬を買ってくるのがせいじっぱいだ。それでさえ二日ばかりのところもめずらしくなかった。当時は栄養失調と過労で、あっけなく命をうしなうものが多かったのである。

注

(1) 椰子の木の種類については巻末の『用語解説』を参照されたい。

25 初期植民地の一年間

ここでは一九一四年（第一次大戦勃発）ころから、一九二〇年ころまでの、植民地の初期開拓時代の模様を述べることにする。

（イグアツペの初入植が一九一三年、ビリグイが一九一五年、平野も一九一五年、そしてイタコロミーが一九一八年であった）

はじめの無知

ファゼンダから植民地への入植径路は、必ずしも一様ではなかった。いいコーヒー農場なら、四、五年がらばつて、土地購入のための手付金をもうけ、そのうえ、いくらか初年目の生活費くらいもって入植することもできるが、一度契約地（コーヒー樹の仕立て請負いの四年から六年契約）を経て、土地を購入するものもあった。かつて、同胞間の定説となっていたことは、渡伯後平均十年で自作農、シチアンテになった、ということである。ここで、とくにその過程として、多くの人々がおってきたこの請負仕事について書かないのは、その生活において、ほとんど植民地入植者のそれと変わらないからであ

る。しかも、初期入植者たちのなかには、契約地農業を経ないで、コーヒー農場その他から、むりして入植したものが多かった。イグアツペはサンパウロ市内から入植したといい、平野はグアタパラ農場からはいり、イタコロミー（第一上塚植民地）もまた、フアゼンダから直接はいったものがおおかった。

奥地の事情などでんでわからず、ただ、集団地の自由な生活にあこがれ、手付金くらいで、とびこんでいったのである（むろん、こうしたむりは結局正常な進路でないことがわかってくると、いくらかの資金をかせいでから入植するものが多くなるのである）。

コーヒー農場の経験だけでは、だれも土地の良し悪しすらみわけることができなかった。だから、「なるべく立木の小さい山をえらべば、開拓が容易だからというので、ことさらにカポシンギや椰子樹の多いセラドンをえらんだ。低いところは、米ができるからとて、わざわざブレジョン（湿地）を希望した。（略）いまから思うと全く一つ話（２）」として笑えるほど何も知らなかったのである。

一九一九年は綿の害虫クルケレーが発生した年であるが、害虫駆除などということには全くの無知。ただ種子さえおろせば、なんでもできると思っていた植民者たちが、あれよ、あれよ、といっているうちにあの小さな尺

とり虫は、何十町歩の綿を、数日のあいだに食べつくしてしまふのであつた。このときに、ベルデ・パリース（緑素）をかけて助かったとか、これ売りだしてもうけたとかの話はあるが、九〇パーセントの人間は、ただ害虫が作物をくいあらすのを、手をこまねいてみている。こんな話もある。

まだブラジルの経済が、永年作物であるコーヒー生産をめぐつて動いていることを知るものが少なかった。日本人は米さえとればゆたかな気持ちになれる。だからあらかやま（初年目の開拓地）には、さかんに米を植えた。そこで、コーヒー植付けに熱中しだしたある男のおかみさんが、

「あなた、そんなカフェー、カフェーって植えてしまつたら、米をうえる場所がなくなりますよ」

と御亭主に忠言（3）。

あとになって多くの植民者は、なぜ、初年目にコーヒーを植えなかったかを後悔したというが、せつかくコーヒーのできる土地にはいつても、まっさきにコーヒーを植えるなんて、考えも及ばなかったのである。

また、山ぎしにとうもろこしを植えて、やつとみのつたと思ったら、山豚（大軍をなして襲来するイノシシ）にたべられてしまったこともある。せつかくそだった鶏は片っぱしから山猫（ジャグアリチンガ）にぬすまれる。そ

んなことも、はじめは手のくだしようがなかったのであった。

プランタデイラ

入植当時、みんなが、カバデイラ（穴ほり棒）を使って種子蒔きをしたことは別の章で記した。二年目、三年目になって山がだんだんかたづく、蒔き方が悪いとのびがよくないとか、日でりに弱いとかいって、一人が鍬で穴を掘ると、他のものがあとからその穴に種子を入れ、足で土をかけ、その上を軽く踏んでおく、という播種法をとった。

ところが、一九二〇年ころになると、日本人のいうプランタ・マキナ（プランタデイラ）が、まずプロミツソンに現われ、やがて全ノロエステおよびソロカバナにひろがった。当時では、これはブラジル農業における生産用具の小さな革命だったといえる。一人で三日、四日しかった仕事が一日でかたづく。図にかけば、簡単に説明できるのだが、両手でもって、マキナ（機械）の先端を土にさしこみ、カタンとたたきつけるように両側からあわせると種子がでる。また、コットンとひらけば種子の出口が閉じる。同時にマキナをもちあげて、他の場所へさしこむ。カタコン、カタコン、歩きながら種子が蒔ける

のである。

このプランタ・マキナをつくったのは、日本人と一緒に、第二モンソン植民地に入ったニュー・メキシコ州出のアメリカ人、マノエル・マルシアーノであったという。やがて、第二モンソンからエイトール・レグラー（プロミツソン）へ移り住んだ日本人たちによって製造され、ひろめられていったのだと、「四十年史」（二四四ページ）に書いてある。

数年後、多少の資金をもって入植した人たちは、山焼きがすむと、請負師にわたして一千本いくらで、まずコーヒーを植え付けた。そうして、五年目には相当の収穫があることを予想しながら、雑穀（米、豆、とうもろこし）や綿の栽培にとりかかるのであった。初期の人たちは、何はさておき、食糧品の生産をいそいだ。そのために、ときによるとイタコロミ―植民地の例にあるように「三年目からコーヒーに気がつき……」ということになったのである。

コーヒーの植付け

コーヒー植付けは「あらやま」がいいというので、入植当時の低地から、高いほうへ山伐りを進めていった。山伐りは自分でやることもあるが、金があれば人手にわ

たした。エンプレイテイロ（請負師）といって、数十人のカマラーダをひきいて、請負仕事に山伐りをやるものがいたのである。しかし、労働者の少なかった当時は、山伐り賃は、土地代よりも高かった。「土地は一アルケール（二町五反歩）一二〇ミル（約六十円）だったのが山伐賃は一八〇ミルから二〇〇ミル以上していた（4）」のである。

コーヒーの植付けも「一穴」いくらで請負師にわたすか、あるいは、農家自身でやった。これは一九二七年ころの話であるが、穴掘賃は一〇〇〇コーバ（穴）で四〇ミル内外、これに覆いをするレーンニヤ割木が一穴につき六本から八本でいろいろであるが、一、〇〇〇コーバ分で四五ミル内外であった。すると、当時、山伐り代は三五〇ミルから四〇〇ミルであったから、コーヒー一千本植えるのにさらに九〇ミルから一〇〇ミルかかった。一アルケールのコーヒーは二千本以内であるから二〇〇ミルとして、山伐りからコーヒー植付けまで、五、六〇〇、ミルかかったわけである。これは青年の年季奉公一年の給料（衣服、食料主人もち）にあたる金額であった。

さて、ここでコーヒー植付けの仕事について記してみると、まず、当時のロッテ（地区）の形にしたがって基盤目に植え付けた。穴と穴の間隔は一四果〜一八パル

モ、平均一六パルモ、これは三メートル三九センチに一本ということになる。前後左右の間隔がどこもここも三メートル三九センチである。

コーバの間隔がきまれば、穴掘りであるが、これはエシヤドン（穴掘り鋤）を使って、長さ四〇センチ幅二〇センチ半くらいの大きさに深さは二〇センチくらいにする。蒔付けは九月から十一月の間にやる。

種子は赤いコーヒーの実（セレージャ）を陰干しにしたものを、穴の長さに沿って、普通二列に、十二〜二十粒をおろし、種子の粒がやつとかくれる程度にかかるく上をかけておく。

つぎはタンパ（蓋）に割木六〜八本をかぶせる。これは穴掘りと同時に用意しておくものである。この六〜八本というのは穴の大きさにもよるがコーヒー樹が穴から頭を出したころ、井桁に組んで蓋をたかくし、影をつくるためにも必要であつた。

発芽は穴にしめり気があれば一か月あるいは一か月半で行なわれるが、うんとかわくと二か月以上かかることもある。間引きは二回、三回とやって、しまいには、三本だてとか四本だてとかにきめる。よくそだてば、一本だてでも二本だてでもいい。これを一株（ウン・ペー）としてかぞえる。一株は成長したコーヒー樹一穴分である（5）。

家　つ　く　り

一般作物の蒔付けも、九月から十一月にかけて行なわれるが、昔の入植民は九月から十月をえらんだ。むろん、乾燥期がすぎて充分雨が降ってからでなければだめだ。病気をして仕事がおくれた家族などがあれば、隣近所が相談して「加勢」にでかけた。ブラジルでは、これをムチロン、またはムシロンという。おもにとり入れ時の協同作業であるが、加勢はなにか特別の理由で仕事のおくれた家へみんなで出かけて行った。ただ家づくりの壁ぬりなどは、御馳走つきで、隣近所への人にてつだつてもらった。入植初年目の終わりころから二年目にかけて、一応いままでの雨洩りのする掘立て小屋から、まあまあこれで四、五年はしんぼうできる、という家をたてる。あとはコーヒーができてから、各自専門の大工や左官をたのんで「住宅」を建築するのであるが、泥壁時代は、みんなでてつだった。壁塗りは一日仕事（内がわからだけでよかった。

入植第二回目の小屋は、瓦で屋根をふく場合もあるが、「こけら（6）」ぶきにすることもあった。これは、ブラジル人もやっていたもので、北東地方やマット・グロッソではよくみかけるものであるが、日本式の場合はこけ

らの形がうんと小さくなる。材料はセードロをつかった。こまかく割るのに都合がよかったからである。

近所隣のでつだいで仕上げる家はまだ土間である。別にどこ式というスタイルはない。ブラジル式といってもいい。コーヒー農場で住んでいたコロニア的建築がぐりかえされたとみてもいい。そして、初期の小屋とちがうところは、部屋に仕切りができること、入口のところが食堂兼客間となつて独立すること、その他はフオゴン（かまど）が大きくなり、炊事場の仕事がしよくなることである。雨期を考慮して、炊事場に隣接した風呂場もつくる。

仏壇や神棚をそなえる家もあるが、仏壇など、はじめはあき箱を利用して、その中に、たんざく型の紙に仏になつた家族のものの生・没の年月日、名前、行年をかいとおさめ、カンテラをとぼして灯明の代わりにした。仏壇の箱は寢室の一角にぶらさげた（ずっとあとになつて新開地でさえも、りっぱな仏壇や大神宮様の模型みたいなものをかかげるようになったのは、こうした細工ものを特別つくつて売りあるくものがでてきてからのことである）。

寢台は、割り木をならべてつくる、市販のベッドなどを使うものはごく少なかった。

ただし、こうした原始的様式は、一九二四年後、信濃

海外協会のアリアンサ植民地ができたころは、はじめから住居におもきをおき、木造・瓦屋根にした。旧移民たちの経験にかんがみたいちだんの進歩であつた。

衣 服

このころの服装は、女の場合は、まだブラジル人やイタリア移民の服装をまねて、日本着をぬいかえたものな
どが多くもちいられた。袖長でえりのつまつたブラウスに、裾幅がひろく長いスカートをもちい、日本の手拭いやブラジルのレンソ（ネッカチーフ）を頭にかぶつたりしていた。若い女は赤いレンソをこのんだ。そのころは、まだ、あのつば広の椰子の帽子は普及されていなかった。女でも男と同じ労働靴をはき、ぶゆや蚊、あぶなどをよけるために手甲やきやはんをつけることもあつた。

男は町で買ひもとめた格子や碁盤縞のいかにも田舎くさいきれでシャツをつくり、縞か無地の少し厚目のきれでズボンをこしらえてはいていた。帽子は古いソフトをかぶつた。

子供服は「学校」のところで描写したように男の子はズボン吊りのついた半ズボン、女の子は上下つづきのかなり長いベスチードを着ていた。日常は、みなはだしであつた。

ただ男たちは町へ出るとき、つば広の帽子をかぶりポライナ（皮のゲートル）をはめ、靴に拍車をつけ、馬には、すわりのいい大きな鞍を置いてそれに乗り、さっそうとしてとばして行った。ブラジル人はよくラバに乗った。

日本人は馬をこのんだ。遠道でなかったら、馬のはうがあつかいよかったからであろう。帰りには、こまかい買物の袋（食料品は馬車ではこんだ）と、四リットル入りのガラフオン（大壺）にピンガをいれ、馬のうしろにしばらくつけて、得意になつてもどつて来た。当時自慢の酒豪は、大樽のキントを客間兼食堂の一角にすえていばつていたものである。

食 物

味噌は自家製、ときには醤油もそうであつた（ただし、このころはもう市販のものもあつた）。食事は白い米飯と味噌汁と漬物。漬物は米糠のかわりにとうもろこしの粉フバーもつかった。この三つがありさえすれば、他はブラジル式でもどこ式でもよかつた。まだ、必ずフェイジョンをたくという習慣はなかつた。ファゼンダにおけるむりなブラジル式から解放されて、味噌・醤油と米飯を基本とする日本式にかわつたが、その他の副食物は、

かなりブラジル式になっていた。料理に豚の脂をかかさなかったこと、にんにくをつづけてつけたこと、コーヒーを飲むことなど、ファゼンダから植民地へはいつでもそのままつづけられた。

ブラジル人カマラーダのために特別に油飯とフェイジョン（豆）をたく場合があった。子供たちがそれをたべて、ブラジル式食物をこのむようになる。肉料理など、油こそつかったが、テンペロ（味つけ）の方法は、なかなか納得できないものだった。

食器は、深皿にさじ、様式を簡単にするために、汁の多いフェイジョンや味噌汁をそれにかけてたべた。味噌汁にはたくさん野菜の実を入れた。こまかくきざんだマカロンも入れた。だしは干しえびでとることが多かった。漬物は欠かさなかった。マモン（パパイヤ）の漬物は、ブラジルで発見したものだ。サラダがなかったのはおもしろい。ファゼンダでもなかったのである。

一般にコーヒーがとれるようになって、生活がいくらか楽になり、女の子が一人前に成長するころになると、料理も少しずつ複雑になってくる。フェイジョンのたき方にいつそう注意がそそがれ、肉の煮方にいくらかテンペロがこころみられるようになる。テンペロはファゼンダ生活のところで説明したように、煮る前によく味つけをする方法である。しかし、カザメント（結婚）の披露

宴やお正月の料理になると、がぜん日本式となる（詳細はその頃で述べる）。

蒔付けが終わったあとの草取りはゆっくりだ。荒山はあまり草がはえない。二年目でもまだ少ない。木の芽をかいたり、ところどころにはえる草を、大股にあるきながらとる。だから少人数でも、四町歩、五町歩もあつかえるのである。

年末から年始にかけて、植民地は農閑期だ。雨期の豆は正月にはいつてからとり入れる。だから暮れになるとおかみさんたちはお正月料理の準備にいそがしい。まだ日本から輸入した数の子が安かったから、町の日本人商店から買ってきて、水につけておく。もち米をとった家ではもちをつく。臼は日本式でもブラジル式でもかまわないが、きねだけは日本式のものでないともちはつけない。鶏をつぶしてだしをとる。そばはないからうどんかそうめんをたべることにする。また、ぶつ切りにしたものは、醤油で甘からく煮る。まだ鶏の丸焼きなどはだれも知らない。

正月・新年宴会

こうして、元日を迎えたでしょう。元旦だけは、ブラジル式をやめて、朝から家内一同食卓にむかい「おめで

とうございます！」とあいさつし、カフェーのかわりに「とそ」を飲み「ぞう煮」をたべる。

しかし、「とそ」といっても、まだ日本酒はなかったから、輸入品のビーニョ・ド・ポルト。いまならこんなものはなおぜいたくだが、まだ一〇ミル何がして買えた時代、みんなでこれを一口ずつ飲む。杯がないからカネキンニヤ（ほうろうびきの小さい茶碗）で飲む。これはむろんしるしだけ。あとで、おやじさんはピングを飲み、ポト・ワインは女の客があつたり、病人が出たときのためにとつておく。産後に一口ずつ飲むのか血がふえていいという。

おぞう煮の餅がないときは、野菜もののおすましにメリケン粉のだんごを入れたすいとんだ。鶏のだしがあるからけっこうおいしい。とにかく形式だけでも、とそ・ぞう煮がなければ正月気分はでなかった。

たちまち、真夏の日が、かんかんてりつけてくる朝だ。もう稲も膝の上までのび、とうもろこしは背丈になっている。植民地はまっさおだ。日本のように雪がふり、こたつにあたる冬ではなくとも、植民地の正月は希望にみちてたのしいときである。

午後は雨になるかもしれない。

「おめでとうございまあーす」と近所の人がやってくる。「まあ、まあ、ほんとにおめでとうございます。今年もど

うかよろしくおねがいます」

年始まわりの客が、つぎつぎとくる。

サーラ（食堂兼客間）には、御馳走がならべっぱなし。テーブルはこの主人御自慢のセードロで、家に似あわないがっしりしたもの。その上に、白いテーブルクロスはかけてないが、正月の御馳走が、ところせまきまでならべられている。女の客のためには甘いものもある。まず、どこでも鶏の煮つけはある。酢でころしたさしみまである。それに、ごぼうのきんぴら、煮豆、大根なます、味噌のあえものや、マモンの漬物、玉子焼き。甘いものには、ようかんにまんじゅう、きんとんもあれば、赤いゼラチンの菓子もある。とにかく材料がみつかりしい、手間、暇をおしまない料理の山である。こうして元旦がすぎると、二日か、三日には、家長たちが集まって、飲めや歌えの「宴会」もある。家がせまければテントを張る。ファゼンダでコーヒー採取につかったパンノⅡ敷布があつた。これで幕屋ができる。このときの料理など、ごく簡単にすます。飲んで歌うのが眼目だ。おかみさんをつれてくることもある。

全国の民謡がうたわれ、宴たけなわともなれば、きわどい替え歌もとびだす。三味線がもちこまれることもめずらしくない。どじょうすくいから、おかめ、ひよつとこの民謡おどり、とつつあん、ばあさんまで踊りだす。

どんなにどなつてもさわいでむ、そこは植民地のありがたさ、だれも異様に感じるものがない。

今年も豊年満作で

道の小草に米がなる

となりの娘にヤヤでけた

それもこれも、えんぎのいい歌。うめよふやせよの植民地、子供がでけたら嫁にする。

底ぬけのさわぎがあつて、正月の三日間は村一同、全くむじやきな親睦ですぐすのであつた。

一月の半ばころから、アグア・フェジョン——日本人はこういった——のとり入れがはじまり、二月にはいると、そろそろ稲の穂がはらみだす。

二月の十日から、セツカ・フェジョンの蒔付けがはじまる。小学校の生徒は、一日から新学期をむかえていたのである。

まだ、カルナバルは知らずにすごす。そして四月、五月にはいると待望の米のとり入れだ。稲の収穫については、ファゼンダ生活のなかで書いておいたが、これはほとんどブラジル式といっている。ただ、カボクロみたいに、稲の穂だけをナイフでちぎり取るということとはしない。日本式の鎌で刈りとり、集めて「米打ち台」の上でたたくのである。唐箕をつかうこともあるが、風にとばしたほうが早くて能率的だ。

綿 つ み

まだコーヒー採取がないから、五、六月ころは綿つみである。当時の綿は、人間の背よりも高くなる種類のもので、綿畑の中に人間がはいると、すこしはなれると見えなくなるくらいである。しかし、もう葉がほとんど落ちてしまっているから、人が動いたびに、ちらちらと帽子がみえる、女たちの色もののネツカチーフが目につく。大きなジュートの袋を、お腹のところにくくりつけ、真白な綿をつみとってはここに入れる。ジャツカという大きな竹の籠にうつして家の近くの乾燥場へかついで行く。

綿つみには、家のものばかりでなく、賃仕事に、他から人をやとい入れることもある。もし近くにブラジル人の労働者でもいれば、よび集める。臨時の収入があるのでよろこんで女子供までやってくる。そこではコーヒー採取以上のにぎやかな光景がみられる。一年中にきいた噂話が流布される。

「ヨースケよ、おめえも年ごろだからいっておくが、ここじゃ夜ばいにいくなよ、ファゼンダのことだったがな、窓をやつとこじあけたとたん、ズドーンと、一発でやられてしもうた。強盗だということで加害者は無罪さ、娘

はこんな男知らんという。

それから、マモンの木の裁判知つとるか、みつきりそうになったので、窓ぎわのマモンの木に登ったのさ、下からやられるところだったのが、さわぎが大きくなって、大勢人がきたんで命だけはたすかったさ。

裁判になって、なぜ特に夜中になってマモンどろぼうに行ったかということになった。この男だれにいいふくめられたか、徹底的に、あのマモンがほしかったが、昼はこわかったから……といいはった。まあこれはちよつとした罰金で放免だった」

「そりやケトウンとこの話じやろうが」

「だがなア、ブラジルじゃ日本人だって用心せにやいかんぞ。夜なかにオンサ（豹）におそわれんともかぎらんから、鉄砲をもちだすぞ、それに……」

「それについて何だよ」

「娘三コント……」

それから、どこのばあさんは若い男に親切だとか、嫁をもらうには、まず「仕込ん」でおくにかぎるとか。

話といえ、そんな話だ。娘が少なくて、略奪結婚さえおこなわれた時代であつた。正式に申しこめば、なんのかんと言を左右にして、少しでも暮らしむきのいいところへやろうとする。娘三コントとは、当時一人の人間の二年分くらいのカマラーダ賃を意味した。人間一人は

鍬一丁。子供が生まれれば、鍬一丁ふえましたな、という。娘一人をとられることは、現実に鍬一丁とられることになる。当時の百姓にとって、これほど痛いことはなかった。

カザメント（結婚）

綿の収穫がすむと、コーヒーのない農家はみな一息つく、それも値段しだいだが、いいときは綿成金で家の新築などにとりかかるものがある。

結婚式などのあるのも収穫期がすんでからだ。ブラジルにながくいると、八月はアゴーストだ。アゴーストとはノン・ゴースト（嫌い）という意味、えんぎがわるいなんて、六月か七月にする。六月は十三日が縁結びの神、サント・アントニオの日でもあり、ブラジル人は六月の結婚をよろこぶ。しかし、そんなことをしらない植民地の日本人にとって、八月は気候もよし、九月の雨を待つ間、かなり暇である。カザメントにはもってこいだ。

当時は、仲人が親と親との間でとりきめた。娘にはできるだけ男のいいところを話し、男はすでにどこかで見ているし、そのうえ娘の気質などは、他人や親からきかされて万事O・K。都合によっては、娘の家で一年くらい働いてやってもいい。それから男の家のほうへうつる。

式はむろん日本式であるが、必ずしも同郷人同士で結婚するときまっていらないから、郷土的なこまかい風習はぬきにして、とにかく形式的にでも三三九度をやり、誰かに「高砂」をうたってもらう。たいがいどの植民地にも一人や二人うたえるものがいたが、もしいなかったら、遠くの知人をたのんでくる。三三九度はなくとも「うたい」だけはないと、どうもしめくりがつかない。

祝儀は日本人会できめた額をもっていけばいい。

場所は学校はちと気はずかしいから青年会館でもかりようか、否、うちの庭に天幕をはって、そのなかへ臨時に板でテーブルと腰掛けをつくろう。それがいい。三三九度だけは家の中でやる。ということになる。むろん宴会の席上で、三三九度のまねごとをやり、うたいをやり、つづいて披露の宴にうつつてもいい。

そうすると、うたいが終わるとすぐ仲人の新郎新婦の紹介があり、つづいて日本人会長の祝辞ということになる。演説は長いほど御自慢であって、ついに夫婦相和すための奥義にも及び、ひととおりうんちくをかたむけ終わると、「はなはだ簡単ではありますが、これをもって結婚の祝辞にかえる次第であります」ということになる。出席して御馳走を目の前にひかえた連中は、やれやれ、これで飲み食いにうつれるかとほっとすると、まだまだ友人代表のあいさつから、両親の答礼演説まであって、

すっかりしびれを切らす。

それでも、ながいながい演説ののち、いよいよ飲み食いとなると、そんなことはけろつとわすれて、さしつ、さされつ。ピンガの酔いは早いので、たちまちこりやこりやの手拍子でうたいだす。いいかげん御馳走で腹をふくらし、みんなより一足先にと、逃げるように帰宅すると、パツ、パツと手をうつ音が機械的な正しきで聞こえてくる。夜半に目をさます。するとまだパツパツと聞こえている。新婚旅行にも行けない新郎新婦は、自室のほうでいねむり。いじの悪いおじさんに引っぱり出されて、酒をつがされる花嫁はあわれである。

天 長 節

大正年代には、天長節と天長節祝日とがあつた。八月三十一日は天長節、十月三十一日は天長節祝日であつた。なんでも日本どおりにやるのが本式と考えている人間も多かったが、ときには早く飲みたくてたまらない人間もいた。曰く――

「日本の八月三十一日は暑いさかり、長時間にわたる式、および祝賀祭には、病人など出ないともかぎらない。そこを考慮したうえで、気候のいい十月三十一日を祝賀の日にならんだものである。ところが、ブラジルの八月は

やや農閑期、暑くなし寒くなし、十月の猫の手でもかりたいような忙しい蒔付けどきより、どれほどゆっくり祝えるかshれない。われわれは、八月三十一日に祝うべきだ」といつてきかないものがいた。理屈は全くそのとおり。しかし、ブラジルだからといって日本の祝日を、日本の人が祝わない日に祝ったとて興ざめということになり、多くの植民地では、やはり十月三十一日を天長節祝日として祝ったのであった。

まだ、入植祭などは、どこでもやっていなかった。新年はたいがい、純然たるたのしみにあてられていたが天長節だけは、式があり、むろん、飲み食いもあったが、運動会があつて、ときには相撲から芝居までやつた。一年中でいちばんたのしい日だったのである。

天長節の祝賀式は、植民地の小学校で行なわれたが、それは「植民地の自治機関―日本入会」のところで述べる。ここでは運動会の模様について書いてみる。

運動会の下準備は、たいがい青年会員がうけもつ。処女会も分担して、会場に吊りまわす小旗を糸ではりつけたり、造花をつくつたり、いろいろてつだった。十月は菊の花がないので造花にしなければならなかった。

祝賀式は、学校が大きいときは、学校の内部でやるが、せまいときは、校庭に幕を張り、村長（日本人会長）その他村の顔役が祝辞を述べる。テーブルの下のはうは紅

白のたれ幕でかくす。むろん、「君が代」からはじまり、勅語奉読があり、「今日のよき日」を歌い、だれ彼の祝辞があつて、運動会にうつるわけであるが、まず、小學校生徒の競技からはじまる。それから大人たちの二人三脚、障害物競走、玉子はこび、婿さがし、パン食いなど、今も昔も変わらない。賞品は、帳面、鉛筆からタオル、石けん、いろいろあるが、たまにはおじいさん、おばあさんの競走に、赤ちゃんのまえかけや、おしゃぶり（シェッタ）などをうやうやしく贈呈し、みんなの前であけさせ、拍手をあびることもある。

植民地の人たちは、みんなお弁当もちでやってくる。親しい人たちがかたまりあつて、芝生の上で、おたがい御馳走をすすめあう。売店などない時代であつて、たがい同じようなものだが、「おこわ」があり、「おしずし」がある（のりがなかったのり巻きがみえない）。鶏の煮つけは、だれでももってきた。まだ、サンドイッチが見られない。川魚の「つくだに」でもあつたら大評判。甘いものにはまんじゅうがあつた。マンジョカのだんごがあつた。それから「オキナワ・センベイ」といつてマンジョカでつくったセンベイは、子供たちによろこばれた（のちになつて、「マンジオパン」といつて、ブラジル人が売りだしたので、広くブラジル人社会にも普及した）。飲みものは、壺詰めのコーヒー。マテ茶は、まだ

日本人間に知られていなかった。子供たちのためには、カピレー（シロップ）を水にとかしたものをもってきた。むろん、おやじたちのためには、ピングとらつきよう漬は欠かせないものだった。

年後は相撲があり夜は芝居がある。ふんどし一本でルッタ（相撲）をやるなんて光景を、ブラジル人は見たことがなかったから、少数ではあったが、見に来たブラジル人は目をむいていた。「マッタ、マッタ！」というのを殺すのかと思ってびっくりしたという話もある。M a t a ! M a t a ! といえば、殺せ、殺せということになる。芝居では、かつらのちょんまげにおどろいた。ながいベスチードをきているいかめしい顔の男、くもすけが、たんかを切るときの尻まくり。なんでわざわざ尻を見せるんだ？ あれはなア、M O S t r a r c o r a g e m ! へへえ！ ブラジル人は口で言い、手まねですが（7）、日本人は本当にみせるのか？ とそんな話も伝わっているが、本当にどこかであつたことかもしれない。

ばった軍襲来

農繁期のあわただしい天長節がすぎると、農家は作物の手入れだけである。年の暮れにたまに忘年会があるくらいで、それほど行事もなくすぎていく。日一日と暑

さがまし、釣仲間が集まって自慢話をするのもこの頃である。川ばたへ行つてマラリアをつかまえてくるのも、またこのころである。

しかし、これでめでたく一年がめぐり終われば、何事もなかったことになるが、ブラジルでは昔、四つのGを頭文字にした大害があつた。そのなかではジェアーダ（Geada 霜）とガファニョット（Gafanhoto バッタ）は天然のいたずらである。他は人事にかかわるので略す。

霜は冬に来ておもにコーヒーを枯らす。せつかくのびたコーヒーも、一夜でまつ黒け。熱湯をぶちかけたように枯れてしまう。

もう一つは、平野植民地や上塚植民地で、入植二年目、三年目におそわれたばった軍の害である。

空の一角に、ときならぬ黒雲があらわれたかと思うと、たちまちの間に日がかくれてしまう。それが急激にくるのでなんだかにくらくなつたような感。今なら、どこかで原爆の実験でもやったのではないか、あるいは天災がおこる前兆ではないかと不安がるものもでるだろう。

空をあおぐと、黒ごまを一面にちらしたような点々としたものが目に入る。すると、パラリ、パラリと大きな八、九センチもあるばったが頭上に落ちてくるのだ。むらがりとんでいるうちに羽と羽とをぶつつけあい、つか

れはてた落伍者でもあろうか、羽をひろげれば、一五センチはある。だが、これは、今まさに地上におりようとするときにおこる現象のようだ。なぜなら、彼らは何百キロメートルの距離を平気で飛来してくるからである。

黒砂の雨がふってきたような、あるいは巨大な蜂の分離群がおりたつような、このばったの大群は、地上に到着すると、バリバリとすごい物音をたてて作物という作物、いな、あたりの草も木も、全部食いつくしてしまうのである。松明（たいまつ）をふりかざして飛びまわっても、石油缶をガンガン打ちならして追いまわしても、この数の虫どもを追い払うことは不可能である。あれこれ、とっさに思いついた方法で、こんの限りをつくしてみるが、ついに絶望のはて、お手あげとなる。みるみる、眼前の作物は、この小さい悪漢どもにくいつくされていく。

残るものは、地中にあつた芋類くらいなもの。こうして地上からすっかりあおいものがきえ去ると、またいっせいに飛びたつて行ってしまうのである。もし時期が早かったら、とにかくにもかくにも、自家消費の作物を植え、なんとか生活のたしにしようとする。しかし、その収穫はもうごく少量であることはまぬがれない。

こうして、不慮の災難をむかえ、新しい農年の仕事にやっとりかかったころ、もう一度、この小さな悪漢が、

姿をかえて作物をあらしはじめるのである。それは、前年に、あらゆる作物とあたりの草木をくいつくしたばつたどもは、そこをとびたつ前に、地中に卵を生みつけていったのである。

今度は、より小さい虫どもが、地下からぷつぷつとわき出して、溶岩のように畑の中を流れだすのである。それは、浅黄色の液体ともみえるが、日にてらされると、いやらしいきらめき方をする。

「たいへんだ、こんどは地面からわきだした……」

そこで、流れていく方向へ深い溝を掘ってこの中へおとしこんで土をかけるのである。溝が深く、土が重ければおちこんで死んでしまう。だが溝掘りがたいへんだ。が、たいへんだといって、もう一度作物を全滅させるわけにはいかない。こういうときは、人間も真剣である。掘って掘ってばったの幼虫を埋めていく。そうしているうちに、畑の外に逃げだしたばつたどもは森林にはいり、草原にのがれて、やがて成長して羽が丈夫になると、また、どこか遠方へとびたつていくのである。

こうしてばった軍の害は、しばしば二か年にも及ぶ。しかし、一九一八―一九年以後は、あんなにひどいガフアニヨットの害をきかなくなる。政府もこれにはあらゆる手をつくして対策を講じたからという。このばったが線路を横切るときには、その油で汽車は動かなくなる

といわれていた。南方から、ばった軍襲来の報があるや、飛行機から殺虫剤をふりまいて、方向を転換させたという話もきいている。

霜もなく、ばったの襲来もなく、それに降雨も順調であれば、ブラジルの年末は太平で、よき正月を迎えることができるのである。

注

(1) セラドン C e r r a d a o 灌木の密生したやせ地。

(2) 『農業のブラジル』一九二八年九月号、一一四ページ。

(3) 同上、一一五ページ。

(4) 同上。

(5) アウグスト・ラーモス 『オ・カフエー』一九二五年及び、八重野松男『今日のブラジル』等を参考書とした。

(6) 木っ端、タブイーニヤ、カヴァコなどという。

(7) モストラル・コラージュエンとは度胸を示す、という意味。

ブラジル人はこぶしをにぎった左腕をのぼし、右手で関節の内側をポンとたたき、トーマ・ノ・クーとやる。

むりに訳せば、クソでもくらえ！ ということになるだろう。

26 植民地の建設

――入植当時の悲惨な経験

平野植民地の開拓

旧プレジデnte・ペンナ、現カフエーランジア駅から東北へ一三キロメートルの地点、ドウラードス川の対岸からはじまる、一、六二〇余アルケールの初期平野植民地の開拓は、わが植民史上で、最も悲惨な経験をなめたところとして広く知られているものである。

この植民地の創設者平野運平は、サンパウロ初代総領事松村貞雄と意気投合し、日本人の将来を独立自営の集団植民地にありとして、新開地ノロエステ線に、まだあまり自作農集団地のなかった時代、開拓の先頭にたって植民地建設に努力し、そのために自らも犠牲者の一人となって他界した人物である。

彼が第一回移民の通訳五人男の一人としてサンパウロ州でも有数なグアタパラ―農場の通訳となって、移民ともにはいり、七か年にわたる長期をつとめ、その後期には、副支配人となって五百余家族の労働者のうえに、「飛

ぶ鳥もおとす」権力をふるったことは、後世に語りつたえられているところである。

彼がいよいよ植民地建設のことを配下の日本人コロノたちに告げたとき、グアタパラ農場内はもちろんのこゝと近隣農場に就働していた日本人コロノたちのなかにも彼の理想に共鳴するものが多く、賛成者が二百家族をこえたといわれている。いかに彼が多くの同胞から信頼されていたかがわかる。

「体軀小兵ながら精力絶倫でよく活動し、毎日、雨が降ろうと風が吹こうと愛馬に鞭打ち、二百万本に余るコーヒの樹を一回は必ず見回るといふ勤勉は到底普通の人には及ばぬ事だ。この一事をもつてしても、いかに努力家であつたかをうかがい知るに充分と思う」と『平野廿五周年史』は記している。

しかも、このように勤勉で責任感のつよい彼は、のちに平野植民地においてマラリアが猛威をたくましくしたとき、病身を杖に託して病人の見舞に各家族を訪問することをとおたらなかった。医薬不足で瀕死の状態にあつた病人たちも、彼の姿をみると、医者の来訪以上によるこんだといわれる。

平野植民地の開拓は一九一五（大正四）年八月二日、各県人代表の青年先発隊二十余名が、平野運平自身に引率されて旧プレジデンテ・ペンナ駅に下車した翌日から

はじまった。一隊が旧ピカードを清掃しながら森林中に一夜を明かしてドウラードス川沿岸についたのが三日であつた。いまでも八月三日が開拓記念日となっている。

先発隊の一行は、銃をもった者で前後を警戒しながら、先頭のはピカードを細道にきりひらくためにフオイセ（鉈鎌）をふるいながら森林中をつきすすんだ。そして、これにつづくものは、食料・夜具・農具いっさいを、それぞれかついではいたのである。それは全くジャングルを行軍する軍隊そのものであつた。あとになって、開拓の仕事のなかで何がいったい苦しかったかとたずねる人があつたとき先発隊に加わつた男の答えは、「あの重い荷物をかついで森林中を歩いたときほど苦しかったことはない」と答えたという。それほど難行だったのである。彼らはドウラードス川にたどり着いたとき、全員がいっせいに万歳を歓呼したといわれる。むろん引率者平野の目にもよろこびの涙が光つた。

開拓の仕事がはじまる前に、まず樹間に三メートル四方のテントがはられた。当分は土間のごろ寝である。むろんかついできた食料品で食物も煮たきはじめられる。だが、ここまで持ちこめたものは、米に干鰯くらいなものである。いよいよ臨時の橋ができあがつて対岸にでると、ここは平地であるうえに大木のある森林ではなかったから、どんどん流木と雑草をなぎたおし、数町歩を焼

きはらうことができた。まず、彼ら白身の小屋をつくらなければならぬ。それから、後続部隊の兵糧米をうるために米を蒔き付けることが先発隊二十余名の仕事であつた。

先発隊は、グアタパラ農場に残っている各県移民の代表者たちであつたから、それぞれ肥沃な低地を分割して彼ら代表者たちの耕作地として与えられた。

一方、平野はブラジル人請負師をさがしだして、植民地までの道路開設につとめた。稲がみのる前に八十数家族が入植ることになっていたが、荷物運搬のために馬車のおれる道路ができていなければならなかつた。

道路もでき、稲も青々とのびだすころ、つぎからつぎへと家族の入植者が到着し、その年の十二月までに八十二家族に達した。

ところが、翌年（一九一六）一月上旬からえたいのしれない高熱のために床につくものがあらわれてきた。本格的な雨期にはいったときである。ところが、まだだれ一人として、これがこの地の風土病マラリアであることを知るものがない。この間、測量士によつと地区割りが行なわれ、抽選で各家族の入植地がきまると、それぞれ山伐りや自分たちの住居づくりのための仕事にとりかかるのであるが、やつと合宿所から自分の土地にうつつた

ころ、一人たおれ二人たおれ、いまや葬式にあげくくれることになってしまった。

墓地は植民地内につくられた。とても駅まで棺をはこび出すことができなかったからである。いよいよマラリアだとわかっても駅にはまだ薬局もない。八十余家族のものが、つぎつぎに病床に臥すことになってしまった。

「死者ヲ埋葬スル人モナク、死後数日ヲ放置セシモノアリ。或時ハ男手ナク、女数人ニテ死骸ヲ片ヅケ、或ハ一人ニテ棺ヲ送り出シ、肉身ヲ葬ツタモノモアリ。最愛ノ妻ニ死ナレ、愛児ヲ喪ヒ、甚ダシキニ至ツテハ家族全滅ノ悲惨ナルモアリ。斯様ニシテ棺ヲツクルニ板モナク、漬物桶ヤ柳行李ニ入レテ彼ノ世ニ旅立タセルモ可ナリノ数ニ上レリ。其ノ窮状ハ目モ当テラレヌ有様ニテ言語ニツクシ難シ」というふうであつた。

このような有様で葬式にできることもできなかったのである。すでに絶命した母親のつめたい胸にしがみついて泣いている赤子を、となりに臥している父親は、だきあげてあやす力もない。また、枕をならべてねていながら数日前すでに絶命して体にはうじがわいているのもしらずにいたというような話も伝えられている。

筆者は一九六六年、この現地にいき、あたりを見たが、全くマラリアの発生にふさわしい低湿地であることにおどろいた。いかに稲が実っても人間の命は保証されないと

ころであつた。草原にいまなお墓標がたっている。ここは初期の墓地であつて多くの遺骨は、別につくられた共同墓地にうつされてはいるが、私は案内された人に、「このへんですよ、最後はここに死骸をかさねて、われわれ自身が茶毘（だび）に付したものです」と説明されたとき、思わず空を見あげたほどである。むろん一片の煙もただよっているはずはない、しかも快晴の午後であつた。

平野植民地の窮境を知った松村総領事は、医事の心得のある者を派遣して救済につとめたが食料品も不充分で、栄養もとれていない衰弱した病人を救うことは難中の難であつた。

低地の稲はすばらしい出来ばえであつたが、これを取り入れる者もなく、平野はまたブラジル人夫をやとつてきて収穫せねばならなかつた。また州農務局へ申請してキニーネ錠剤の下付をうけたがなお足りず、パウルー市まで薬買いにでかけねばならなかつた。その費用は植民地全体の土地代にも匹敵するものだといわれる。むろん彼も七年間のたくわえをすっかりなげだしてしまった。

かくて、家長を失つたものの、妻にさきだたれたものの、衰弱で労働不能におちいったもの等、つぎつぎと植民地を引き揚げるものがでて、一九一六年の八月ころまでは「約過半数の移転家族を見るの止むなきに至れり」という。ついにこの年は八十名に近い犠牲者をだしてしまつ

たのである。平野はこれ以上の犠牲者をだすにしのびずと残余の一同三十余家族の代表者を招集して、もう一度コーヒー農場にもどり、蓄財のうえ、植民地の再建にくすよう勧告するところがあつたが、集まった人たちは誰一人その勧告をよしとするものがなかったという。彼ら残留者たちは、もし平野が残って戦うなら自分らも死をともしると心にかたくちかつていたのであつた。

ここで平野も意を決し、三十余家族のものも勇気をふるいおこし、マラリアの危険性のない高所の開拓にはげみだしたのであつた。

ところが一九一七（大正六）年になると植民地は全く予期しない敵の襲来をうけることとなつた。照る日も曇る日もばつたの大軍がおしよせたのである。ノロエステの汽車もそのため進行をはばまれたほどだったという。地上の作物いっさいが姿を消すのである。

だが、ばつたがいなくなつて厄払いがすんだのではなかつた。翌一九一八（大正七）年は干魃がつづき、最後は大霜があつて、せつかくのびだしたコーヒーもすつかり枯れてしまったのであつた。こうした災厄がつづいたのち、一九一九（大正八）年二月六日、不退転の指導者平野運平もまたマラリア（注・スペイン風邪？）のためにこの世を去つたのであつた。行年三十四歳。一度平野の計報がつたわると「植民者は一同会葬し、ねんごろに共同

墓地中央に埋葬し、命名して爾後このトレス・バーラスを平野植民地と称す」ことにしたのでといわれる。

むろん、指導者平野を失ったこの植民地はやがて協同組合もうまれ、一九三三年になると三八五アルケールの土地も追加分譲されて組合員も一九四一年には三百七十二名に達したのである。このころになると組合取扱いの生産物はコーヒー（精選六〇キロ）は年間五万袋、精綿一五万アローバ（一アローバは一五キロ）、精米二万五千袋（一袋は六〇キロ）に達する発展ぶりを示すのであるが、こまかいことはここには略する。

平野植民地における初期の失敗は、原始林の開拓というものに対して全く無経験であったことによる。日本人は食糧としての米さえとれば、どんな苦難にもたえられると考え川べりの低地に米作をやったことであつた。そして、そういうところが、ブラジルではマラリアの発生地であることを全然しらなかったのである。しかも、マラリア患者には栄養失調が大敵であるにもかかわらず、蛋白源となる食物もまた野菜すらもあまり食べなかった。こうして、一度病魔におそわれると、ひどい衰弱で死んでいったのである。一年以内に八十名近い死者を出したということは、今日では想像もつかないことである。かかる窮状にあつて平野の胸中はどうなであつたろうか。つねに松村総領事の激励の言葉が彼を鞭打っていたにち

がいないが、植民者の最初の犠牲者をおくったときから、決死の覚悟があったことと思う。ある人は「平野の死は悶死に等しいもの」と評しているが、八十名に近い人命を犠牲にした指導者の苦衷が思いやられる。

『平野廿五周年史』一九四一年一月二十七日、カフェランジア駅平野植民地日本人会発行。この一編は主として、この廿五周年史を参考として書きあげた)

イタコロミー（第一上塚）植民地の創設

旧エイトール・レグルー駅（現プロミツソン）の上塚第一植民地、ブラジル名コロニア・イタコロミーは、創設者上塚周平（1）の年来の理想から生まれたものであった。

上塚周平の海外渡航は、彼の伝記「移民の父、上塚周平」によると一九〇九（明治四十）年、彼が当時の東京帝大法科を卒業したときからの希望であった。親友鳥飼安一（のち棟太と改名）の後援によって、学校は出たものの、当時の日本では、彼が一生を賭して、働いてみたような仕事はみあたらなかった。官吏も商人も彼の性格にあうものとは思えなかった。

「いささか心細き次第に御座候。唯小生に於て幾分の有するものありとすれば、そは唯蛮力の一あるのみに候。菜

根を食って平然たり、ボロを着て恥ぢず、不規則の生活にても、小生に於ては健康に害なし。小生は到底海内の人にあらず、海外放浪、乾坤一擲を試むるに通しはせずやと存じ候」と鳥飼に告白している。こうした彼の気持ちにこたえるために友人らは彼に、皇国殖民会社のブラジル行き移民のことを告げ、輸送監督としてブラジルへおもむくようにあつせんしたのであつた（2）。

彼が第一回八百の移民とともに窮乏のうちに奮闘したことは、すでにこの書のはじめに書いたところであるが、彼の理想は、決してただの移民屋となることではなかつた。彼は日露戦後の日本の空気をながめて、本来の民族の発展は、決して人口過剰な朝鮮や満洲へ無資本の徒を送りだすことではない、と考えた。むしろ、彼のいわゆる「文明の地」、すなわちヨーロッパ文明によつて新しくひらけつつある新世界へ移住させることであつた。そして、そこに日本以外の「新日本」をひらくことであつた。

彼が、第二回移民から竹村殖民商館の代理人となり、一時社命で日本へ帰っていた間「定着性なき日本移民」はサンパウロ州政府の補助金打ち切りとともに第五回目の移民輸送をもつて停止となつてしまった。しかし、彼はどうしても移民事業を断念することができなかった。移民会社代理人としての立場をはなれてから、彼の頭を領した考えは、本来の理想にたちかえつて日本外の「新

日本」をきずくことであった。それは、海外にでた過剰人口としての移民がそこで安心して暮らすことのできる小農集団地をつくることであった。そして、これに対して決定的動機となったのが学友である同志、菊池恵次郎が資本金六万五千円を出す約束をしたことであった（3）。

上塚は一九一七年再びブラジルの土をふむことになったのであるが、彼はこのとき六万五千円の金をにぎった資本家としてのりだしてきたのではなかった。出帆までに金はできなかったが、友人の約束をかたく信じて彼は無一文のまま、サントスについたのであった。迎えにでた人々は「宿まで行く電車賃すらなかった」上塚を見てびつくりした。しかも、コンデ街の歓迎会に出席した彼は、「誠に恥かしいながら、正直なところ今日のたばこ銭にも困っているので、さっそく諸君の御厄介に相成るつもりである。諸君の大なる御期待に対してまことにお恥かしい次第である（4）」と述べた。

ここで、くどくどと上塚周平論をやるつもりはないが、とにかく上塚の腹はきまっていた。彼が第一にたよったのは、松村総領事の女房役としてサンパウロに赴任していた同郷の親友、副領事三隅棄蔵であった。彼はここの居候におさまると、やがて、パラナ、ミナス、ゴヤス方面まで未来の日本村建設の候補地をさがしてまわった。

むろん、それに対する費用は、すべて三隅個人が負担したのであった。

上塚第一植民地といわれるイタコロミは、一九一八（大正七）年に創設された。ここはエイトール・レグルー駅（現プロミツソン）から四キロ余の地点からはじまり、ボン・スセツソ、ゴンザーガ、ビリグイジンニヨ等へひろがる一、四〇〇アルケールの土地である。上塚の事業に協力して働いたのは「参謀」として選んだ友人の鈴木貞次郎、また上塚がかねてから囑望していた「仁侠な」間崎三三一であった。またのちの聖州新報社長、「四十年史」の著者となった香山六郎もかげの力となって働いた。「四十年史」一三四ページによると「コロニアの日本人には上塚が主役をつとめ、対伯外交的には鈴木が主役をやって上塚が女房役であった」とあるから、ブラジル人側に対する鈴木 of 活躍は大きかったことと思う。

鈴木については、すでに数回ふれているが、彼はブラジル語はもちろんのこと、平野運平の友人として先駆植民地の事情にも通じていたので、参謀の第一人者としてなくてはならない人物であった。間崎は第一回移民としてズモーン農場にはいりながら、いち早く農場を逃げだしたとき、サンパウロ市において上塚に「一宿一飯の恩義」をうけ、のち、前農務長官カルロス・ボテーリヨのサン

タ・コンスタンサ農場で足かけ七年間、名監督としてつとめあげた男で、表面的にはでなところはなないが、上塚の協力者として、まことにふさわしい仁侠者であった。

ここで土地購入にまつわるいろいろな話を書くことは略するが、三隅副領事の出費、鈴木 of 知謀、間崎の決断力がものをいい、また一九一九年になって、菊地恵次郎が日本金三万五千円、ブラジル貨にして七五コントを携えて最後の救援にかけつけたことは、この植民地をきずくうえに大きな力となったもので、植民地創設史に逸してはならないことである。

その他、リンス、プロミツソンには上塚を敬愛する多数の先駆者がいて、かげになり、ひなたになって援助につとめたことも忘れられないだろう。

平野植民地がそうであるように、上塚植民地もまた、個人上塚を慕って集まってきた連中が主で、しかも、ろくな資金も持たず入植したものが多かった。

「彼（上塚）がイタコロミを開設して、非常な苦境に立ちいたったのも、要するに当時の日本人は、まだまだ土地を買うだけの資力がなく、わずかに手付金を入れたくらいのものであった結果、その払込みに周平一人が大きな負担を背負ったようなものだったからである（5）」

しかし、ここが、駅に近く、健康地で、地味もよかつたということは、入植四、五年にして、まるでノロエス

テ日本人植民地の中心のような観を呈するにいたったのである。

「平野植民地とビリグイ植民地は、同胞の二大集団地として自他共に許すところであつたが、その距離は共に停車場より一四、五キロを有している。しかるにイタコロミーの入口は、四キロ強にすぎない。そして特にイタコロミーにおいて痛感したことは、他の駅における植民地の多くは外人が前線（駅に近いところ）の好位置を占めているが、ここでは、その反対に日本人が駅に近く、その第一線に陣取るといふことである。第二、地味においてビリグイ植民地におとるが、平野植民地の上である。高度においては、二植民地よりまさるとも劣る点がない。第三、マラリアについてみると、イタコロミーを貫流する用は、いずれもその水源を地域内に有するため、水量多からず、したがって大なるブレジョン（低湿地）を形成していない。特に土人部落をつくっておつたということは、マラリアがない一つの大きなアテスト（証拠）である（6）」と協力者鈴木貞次郎はいつているが、先人の経験をもとにして、周到な調査のもとに土地を選定したところに後日の発展が約されていたのであつた。

そして、この植民地が創設者の献身的努力によつて成つたことは、日本人の先駆的事業として後世に誇るべきものである。

ここに鈴木貞次郎の「大馬鹿者の土地売り（7）」の記事を再録すれば、「私どものイタコロミーは、測量費は当方の負担で、一アルケール三〇ミルの差をとった。

一〇〇〇アルケールを売り上げて三〇コントス也の金がでてくるに過ぎぬ。この三〇コントス也のうち測量費がある。最初の入植者の收容費がある。買主が土地代支払いのために金策に奔走した費用がある。土地が悪いので売れ残る部分ができる。そのうえ、土地ブローカーなどとある新聞に呼ばれては、昔の土地売りほど間尺にあわぬ仕事はない。平野君はなぜピングガ中毒で倒れたか。マレイタ流行のため、責任観からきた懊悩から死んだというならば、あの英雄的な気魄に富んだ君のために、あまりに気の毒である。（中略）上塚君はよく口ぐせのように「おいらの土地売りは死を決してやるんだから」という。ある意味においては、これは真実である。今どき、コンミッションだけでも、アルケール二〇ミル、三〇ミルで土地売りの世話をするものはあるまい。私どものやったことは、もし馬鹿でなかったらば、上塚君のいわゆる、死を決してやったというのが、せめてもの慰めである。（中略）死を決して土地を売るなどと、上塚君、君は馬鹿である。私もおかげで馬鹿になった。いまどきはやらぬ。こんな馬鹿はもうやめにして、政府の補助金でも、たんまりせしめる工面はないか。もう、しかしわが馬鹿もの

上塚周平君も、ピング中毒が大分回っている。こうして死んでいく犠牲者の死を、笑え、笑え。世の中は万歳である」

笑え、笑えといわれて涙の出る悲痛なさけびである。おそらく「土地ブローカー」として冷笑した当時の「ある新聞」に対する抗議であろう。そして、数百家族の植民者を擁した責任者、ピングをくらって外面尾羽打ちからしたおいぼれのような姿で日常をすごしていた上塚と、その一党にむけられた侮蔑に対する応酬であつたろう。一九二八年、上塚植民地が十周年記念祭をもよおしたとき、当時の「農業のブラジル」誌の記念号巻頭言にのつたつぎの言葉をよめば、十年の苦勞が察しられるだろう。

一年目は未曾有の大霜でおどかされ、

二年目はガファニョット（ばった）で度肝をぬかれ、

三年目はようやくコーヒーに気がつき、

四年目からみんなコーヒーに熱中、

五年目でやっとコーヒーがとれだし、

六年目から千俵とりも現われたが、

七年目には干魘と革命で四苦八苦、

八年目で八五低資でやっと息をつき、

九年目にコーヒー大豊作で気炎があがり、

十年目にめでたく十周年祭を挙行した。

はじめの三、四年は全く、未来はどうなるか予断をゆるさない状態であつた。

その間、一九二〇年、上塚は甥の道彦を日本から迎えたが、彼は、プロミツソン青年連盟の結成のために、鈴木貞次郎の弟透造とともにつくしたのち、一九二二年二月二十一歳で夭折してしまつたのであつた。それから上塚はいっそうピンガに親しむ身になつたといわれている。

だが、彼にはまだ仕事かのこつていた。一九二三年から売りだしたリンス駅グアインベーの第二上塚植民地の建設、および、一九二五年における日本政府に対する低利資金八十五万円の請願運動などがそのおもなものであつた。

第一上塚植民地建設の話は、期せずして上塚周平伝みたいになつてしまつたが、とにかくこの植民地が、当時一般の農家が、同じようにみまわれた霜害、ばつた軍の襲来等による災害はあつたとしても「上塚さんがそういった」といえば、「そうだ、そうだ」ですべてが丸くおさまつていたことは、こうした献身的な指導者によつて創設された植民地にふさわしい行き方であつた。

植民者たちは、上塚周平のおかげで独立自作農になつたものはあつても、彼に対して自己の権利を主張するなものも持つていなかったのである。

土地代をおさめきれなかつたある植民者のなかには、

土地値上がりをいいことにして、又売りしたものがあつた。こうした不義理を恥じてわびにいくと、

「もうけたのは、あんたの甲斐性たい」

といってとがめなかった。そこで、いままでとどこおっていた土地代を支払うと、

「そうか、それはありがたい、そしてみな売んなはったのかナ？」

ときく。「いや半分だけだ」というと、

「それはよかった。土地から離れることたア魚が水からあがつたのも同様ばナ、一五アルケールあんなら、充分たい。しっかりやんなはり。きつとよかことが来るけんア」

といった調子である。

土地ブローカーなどといわれる筋合いのものではなかった（８）。

エイトール・レグルーを日本人は口がまわらずテレグル（注・ママ。エレグルか？）といっていた。エイトコ・エグルといったのはしやれだろう。

イタコロミ植民地創設前すでに四、五家族の日本人農家があつて開拓の斧をふるっていた。駅には黒人経営の板小屋の宿屋が一軒と、ポルトガル人のパン屋が一軒、シリア人の食料雑貨店が一軒あり、人家は全部で十四、

五軒であつたという（9）。

それから十六年後には日本人百十一家族四百八十三人（「時報年鑑」によると、一九三三年には百四十二家族）の日本人が住む町になっていた。町の総人口は不明だが、リンスが一万余だったというから五千くらいだったろうか。

全プロミツソンにおける日系人は一千二十九家族の五千八百三十一人である。そのうち土地所有者は三百八人、所有面積は四、一六八アルケールで、一九三二年ころの調査であるが、このころが植民地では発展の頂上近くにあつたのではないかと見られている。植民地の仕事が監理人や使用人の手にゆだねられるようになるのと町の人口がふえていくのである。

町には、日本人経営の旅館が七軒もあるが食事は日伯混同で、日本飯に味噌汁、漬物もあれば、フェイジョン（豆）、ビツフェ（ビフ）その他の料理を出し、食器は皿やフォークであつて、植民地の生活を反映していた。風呂も毎日ではないがたてていた。

これが一九三五年ころから特別な日本的料理屋などができてくると、ホテルのほうはややブラジル式になり、ブラジル人も泊まるようになる。植民地の生活の変遷については「植民地の生活」のなかで別に記述することにする。

ビリグイ植民地

ノロエステ線ビリグイ駅ビリグイ植民地、あのころのビリグイ駅はサンパウロ市から五五〇キロメートル（いまは三二〇キロ）の地点であつて、朝サンパウロをたち、バウルで一泊して翌朝ノロエステの汽車に乗りこみ、ほこりと火の粉をかぶりながら、やつと午後四時ころに着く。マラリアと土人の襲撃に悪戦苦闘しながらここを鉄道が開通したのが一九〇八年で、ビリグイ駅に本部におくサンパウロ土地・木材・植民会社が植民地をひらいたのは一九一三年であつた。日本人がはじめて入植したのは、一九一五年八月十五日で平野植民地とほとんど同時であつた（ただし、ビリグイ駅に着いたのは六月下旬であつて、それまで駅の仮宿舎に入植を待っていたもので、平野植民地より二か月以上早かつたといわれるゆえんである）。まだ、セルトン・ブラーボ（未開の奥地）で、鉄道沿線はすべて原始林におおわれていた。そして、線路のわきに、ちよこなんと一台の貨車が枕木の上のついていたのがビリグイ駅であつた。

植民会社の土地は、ビリグイ駅を中心として、北東はチエテー河から西南はフェイオ河（アグアペイー河の上流、この川はパラナ河にそそぐ）にわたる五万アルケー

ルの広大な地域であつた。日本人がはいったのは、その一部分にすぎない。会社は英国人とブラジル人の株式組織であつたが、一九一五年から佐賀県入宮崎八郎が、書記兼日本人部代理人としてはいり、日本人の入植をたすけた。

彼は一九一三（大正二）年の渡航で、植民地へいったときはまだ二十三歳の白面の青年であつた。関西学院中学部の出身で英語が上手であつた。性格は淡白、支配人ゼームス・メーラー（J・Meiler）の信用あつく、植民者に対しては、日常必需品の買入れ、作物の販売、病人の世話、その他、土地代の支払い延期やら融資の件に至るまで、相談にのつたのであつた。土地会社のかげに、こうした人物がいて植民者に対して万端の世話をやいたことは、この植民地の発展に対して、どれだけ力となつたかしのれない。ビリグイ植民地といえ、すぐ宮崎八郎を思いうかべるほど、彼の名は当時の人々にしられていた。

信用のある会社が売りだした土地であり、地味もよく、時期もよく、そのうえ、ほとんど無資本でもはいれるくらい入植がやさしかったので、数年の間に、日本人に対してだけでも四、二〇〇アルケールを売り、記録やぶりの好評をえたのであつた。

今日、日本人が称してビリグイ植民地というのは、サ

ンパウロ土地・木材・植民会社の売りだした五万アルケールの中の一小部分で、のちには二つの中心地をもつようになつたところである。

一つは、植民の歴史でいちばん古い、今日アラサツバ郡に属しているアグア・リンパを中心とするところであり、もう一つは、かつてはニッポランディアの名でもよばれたこともあるビラツキ（B i l a c）を中心とする地方である。

ただし、これはおおざっぱなわけ方であつて、一時は十数の区と、さらに小区分された多くの集団地によつてブリグイ植民地は形成されていた。そして、一九三二年ころは約一千二百家族、六千に近い日系人口を擁していたのである。ちなみに、会社経営の植民地全入植民は約三千家族であつて、イタリア人がいちばん多く、つぎは日本人、第三番目がスペイン人という順序になっている。ただし購入面積のうえからみると、イタリア人のものは一〇〇アルケール単位のものも相当あつた。

日本人植民者の開拓史にはいるまえに、ここを經營していた土地会社なるものが、どういう性格のものであつたかを一瞥することにしよう。

難中の難といわれる植民地建設において、こうした成績がえられた理由として、『アラサツバ五十年史』のあげているところをみると、「土地の選定がよかったこと、

時期に適応したこと、経験がものをいったこと」などであるが、そうしたものを可能にしたのは、この会社の総支配人、英国人ゼームス・メーラーの経歴と見識とであつた。

「ゼームス・メーラーは英国マンチェスター出身の工学士で、まれにみる大人物であつた。大きな夢をいだいてブラジルに渡つたのが、一八八七年であるが、着伯後、連邦政府に職をえて、地域測量に従事し、あらゆる苦難をなめながら、ゴヤス、ミナス、マツト・グロッソの山野をくまなく跋渉した。このことが将来彼が植民事業に没頭する素因をなしたといえよう」と「アラサツバ五十年史』は書いている。官を辞してからは、リオ・パラíbaの架橋工事やモジアナ鉄道の敷設工事にも尽力した。老練な技術家であると同時に仕事に対しては不屈の精神を発揮し、その高潔な人格は多くの人の敬愛するところとなり、同国の友、および友人、大地主たちの協力をえて、土地・木材・植民会社を設立することができたのであつた。会社は同志七人（10）の株式組織であるが、あるものは土地を、他のものは資金をだし、また、あの地方の地主たちからも買い入れて、チエテー河よりフェイ才河にいたる五万アルケールの広大な土地を会社の所有地として植民事業をはじめたのであつた。組織ができたのは事業をはじめる前年の一九一二年であつた。

メーラーは会社創立とともに総支配人となり、はじめはペンナポリスに居をかまえていたが、まもなく、ビリグイ駅に本部ができあがると、ここにうつり、植民事業に携わるかたわら土人の教化にもつくした。選ばれてペンナポリス、ビリグイの市長も歴任し、地方開発、発展に尽くしたが、一九二〇年病をえてサンパウロ市で急逝したのであった。

彼が植民事業をおこしたのは、単なる土地売りの口銭稼ぎが目的でなかったことは、その規模の大きさ、その仕事のはこび方をみてもわかるとおりで、彼は地方開発によつてさらに第二段、第三段の事業をもくろんでいたようである。ただ彼の急逝によつてそれははたされず、現実の姿となつて世に現われることはついになかったのである。

彼が外国人でありながら（ブラジルの市民権はもっていたが）市長にまでおされたのをみれば、ブラジル人のあいだにも相当信用のあつた人格者であつたことがわかるし、また、決して小さな民族主義者や国粹主義者でなかったことも推察できる。

彼の亡きあととは同志の一人ロベルト・クラツケ（Robert Clark）がグアタンブーの農場からでてきて、総支配人の椅子についたが、彼もまた日本人部代理人の宮崎八郎とともに日本人植民者たちについて尽く

すところ甚大なものがあつた。宮崎は一九三三年、十八年間の代理人生活を辞去した。

ゼームス・メーラーのような人物による植民地の建設は、名称は企業会社ではあつたが小さなけちくさいものではなかつた。たとえば入植者には、バウルーからビリゲイまでの汽車の無料乗車券を出してサービスすることもできたし、一アルケールわずか一〇〇ミルか一二〇ミルの土地代が支払えずに七年、十年にのびても文句をいわなかつたほど、鷹揚なところがあつた。むろん、こうした土地代支払い延期などには代理人宮崎の努力もあずかつて力があつた。宮崎自身の述懐によることであるが、あるとき、会社のものから「君は会社のエンプレガード（雇人）なのか、それとも植民者のエンプレガードなのか」と笑われたことすらあるという。それにしても「どこまでも植民者の立場を考えて、その発展に尽力した幹部達はえらかつたと思う」と『アラサツバ五十年史』も賛辞を呈している。

こうした大会社の土地ではあつたが、ブラジル奥地の常として、地権や境界の争いなどが、全然なかつたとはいえない。しかし、さすがにしっかりした組織をもつていた会社だけに、直接植民者には迷惑をかけなかつた。

植民地内の幹線道路は会社が建設したが、初期入植者の食料買入れ、病人の世話、教育機関の設置などは、み

な宮崎個人が相談をうけて世話した。しかし、植民者たちは、いったん入植すれば自らの責任のもとに、開拓につとめたのであって、克服すべき病魔、天然の災厄、その他、未開地特有のあらゆる不便がまちかまえてはいたが、彼らはこれと戦いながら、原始林をゆたかな生産地にかえていったのである。そこでは、どこの植民地にもつきまとったところの犠牲者もでたし、多くの植民哀話をのこしているのである。

日本人最初の入植者はすでに記したように、一九一五（大正四）年八月十五日であった。全部で六家族二十一人であったが、このうち鹿児島県人と佐賀県人の各二家族はサントスからきたもので、六月の下旬には、すでにビリグイ駅についていた。駅には会社所有の仮小屋があったので彼らはそこで自炊していたのであった。

同日に入植した他の二家族は、アララクアラ線からきた佐賀県人、および、サントスからきた同県人の各一家族であった。

入植したのは駅から一八キロの地点、下アグア・リンパ区で「もちろんただ一人の先着者があったわけではなく、また一坪の土地が伐りひらかれていたわけでもなかった」彼らが森林中に小屋がけし、山伐りの斧の音をひびかせているうちに、同年十月には下アブア・リンパから二キ

ロメートル川下のツピー区へモジアナ方面から福岡県人三家族十九人がまず入植し、そのあとを追って二週間ほどおくれて、ツピー区には、モジアナ線から来た熊本、福岡の両県人各二家族十四人が入植した。

以上の十三家族五十四人がブリグイ植民地の草分けであり、また日本移民が奥地植民地へ自作農としてはいった最初の人たちであつた。購入した土地の面積は、一〇アルケールから一五アルケールであつて、アルケール一〇〇ミル・レイス程度のものであつた。

彼らが、どうしてこのブリグイ植民地にはいるようになったか、それを第一期入植者の一人、宇治野順次談（11）から聞いてみよう。

彼はモジアナ線のあるコーヒー農場に働いていたが、「一日、リベイロン・プレット市へでて付近に野菜でも栽培する土地はないものかとぶらぶらしていると、知りあいの鞍谷伴三郎監督に出会つた。いろいろ話をしてしていると、「君、こんなできあがつた町などで仕事をはじめてもだめだよ、これからは新開地に向かつて大いに奮闘するにこしたことはない」という。そして「ノロエステ線のブリグイに、こういう土地会社があつて、安い土地を売っている。このリベイロンにも代理店があるが、一つそこへ行ってみてはどうか」という耳よりな話。さっそく代理店へ行き一五アルケールを購入することにした。

この事が、サンパウロの葡学新聞に大々的に報道されたとかで、会社は最初の入植者として私どもをたいへん優遇してくれた」というのである。

日本移民が、契約労働者としてはいったモジアナ線の中心地であつたりベイロン・プレット市に、サンパウロ土地・木材・植民会社の代理店があつたこと、また、第三国かさと丸移民でファゼンダの監督をしていた鞍谷伴三郎からその代理店を教えられ、奥地開拓をすすめられたことなどが、ファゼンダの生活をぬけだして自由な発展をのぞんでいた移民たちに、ただちに入植の決意をうながしたものであつた。宇治野順次の植民地入りがきまると、あなたがはいるなら、ぜひ自分もいっしょに行くといつて、たちまち四家族が一時に入植することになったのだという。

しかし、移民たちは、まだセルトン（奥地）の開拓については全然経験がなかった。ただ彼らは監督においまわされて働いていたコーヒー農場から、土地所有者として自由に働けるのだという希望に胸をふくらませて、やみくもに突進してきただけである。だから、「談話」によると「一つの生涯のうちに、あんなこともありうるかと思うと、ふしぎなような氣もする。つまり開拓ということは、苦難苦悩そのものであり、また考えようによつては、どこまでも男性的な、愉快的仕事でもある」という

ことだ。いま、回顧談にしたがって入植当時の模様を記述すると、「最初は女たちをビリグイの町にのこし、男だけが一四キロの道もない密林をふみわけてはいり、やつとこれが自分たちの山だというところへたどりついた。川べりに小屋をたて、はじめは猫の額ほどの土地を伐りひらいて、食糧のもみをまいた。

やがて、このツピー区には後続部隊が四家族ふえ、山伐り、小屋がけとにぎやかな活動がはじまる。

ところが入植早々、すべての家族がマラリアにかかってしまったのであった。あとでわかったことであるが、水汲みに便利だというので川べりに小屋をたてたことが原因であった。一家全員枕をならべて寝こんでしまつては看護するものがない。医者にもかかれず、片っぱしから死んでいった。一家族九人のうちで、妻をはじめ、六人を失つたものがある。一週間のうちに三人の葬式をだすという悲惨このうえもない状態もあらわれる。あの家でも一人死んだ、この家でも亡くなった。あるものは高熱のため、からだ中の皮膚が焼けただれたようにはがれていって、死んだときにはすでに口中にうじがわいていたという、まことに生き地獄とはこのことであろう」と語っている。

「病気のために、せっかく蒔き付けた作物の手入れもできず、その年の収穫は皆無に近かった。持ち金は尽きるし、

全く苦境のどん底に岬吟したが、お互いにはげまし、助け合って暮らしているうちに、さしものマラリアも下火になり、二年目には相当の収穫もあつて、やっと一息ついた（自分はおみを八十俵もとつて、足りない人たちにわけてやった）。あの苦しかった時代に、一株の「さつまいも」の蔓が芽をふきだしたのを見た一人の老婆はひどくよろこんで「ウジノさんや、このバタタ（さつまいも）がこんなのにびたよ、もう私たちは餓死せんでもよかた」と一葉一葉なでるようにしていた姿がいまでも目の前に見えるような気がする。……」と談話は結ばれている。

一つの植民地にはいった人たちは、戦地における一団の兵隊のようなものであつた。苦労はお互いのものであり、よろこびもまた、みんなのものであつた。

一九一六（大正五）年になると、いよいよ入植者が殺到し、この年だけで七十四家族に達した。下アグア・リンパだけではなく、そこから三キロメートル川上の、上アグア・リンパにも入植者があり、エスピゴン（分水嶺）をこえたコーレゴ・エリージオにも数家族の入植者があつた。

ところで、この年は雨量が多かったため山は焼け方が悪く、雨期の豆はほとんど収穫ができず、そのうえ、マラリアが流行しだして植民者を苦しめた。

コーレゴ・エリージオへ入植した一人、長沢直衛の語るところによると（12）――、

「土地の区画はもちろん、道路さえもできておらず、入植者をのせた馬車は途中で荷を下ろすという有様であった。道のないところは新しく道を開き、川には橋をかけ（野営しながら）やっと各自のロッテ（地区）とおぼしきところへたどりついたのは数日のちであった。どこをみても天をおおうような千古の大森林で、どこからどう手を出してよいのやら途方にくれたが、家族をはげまして、まず、掘立て小屋をたて、きつそく伐木にかかった。

慣れない仕事でずいぶん苦勞したが、それでも八月下旬には山焼きをし、蒔き付けもおえてホツと一息、大正六（一九一七）年の新春を迎えた」

こうした入植直後のあわただしいある日、松村初代サンパウロ総領事が、ブリグイ植民地の各区を訪問し、植民者をなぐさめ、あるいは激励し、将来ともコーヒー栽培の有望なことを力説した。

植民者たちは、八月三十一日の天長節（祝日は十月三十一日であったが）を盛大に祝い、村芝居で大いににぎわった。だしものは一心多助とか忠臣蔵などであった。マラリアが各区でしうけつをきわめだしたのは、これから数か月後であった。

「屠蘇（とそ）ならぬピングアの香もうせぬ一月の中ごろか

ら、思いもかけぬ悪性マラリアが発生し、やがて入植者のほとんどすべての家族がこれにかかってしまった。

福島県人O君が死亡したという通知をうけたときの村人の驚きと動揺は大きなものであった。あいついでS君とI氏夫妻が死亡し、またK君や、N氏の家族のTさんの子供が他界した。茫然自失とはこのときのこと、大人は相擁して泣くよりほか、みちはなかった。

下アブア・リンパのM氏が三、四名の青年をひきつれて救援にきてくれたのもこのころであった。とくにきんどくであったのは、前記I大尉夫妻の死で、あとに残された二人の娘と幼い男の子が、暮れかかる森の中の一軒家にしょんぼりとたたずんでいたあわれな姿が、いまでもありありとまぶたにうかぶ。

略 悲惨というか凄惨というか、あの当時の埋葬のことを思いだすと、胸がせまってくる。平野植民地では柳行李におさめて埋葬したという話をきいたことがあるが、当植民地でも、お棺づくりには一苦労したものであった。板一枚あるはずもなく、空き箱をこわしたり、ときには一脚しかない食卓でお棺をつくったこともあった。

二本の丸太棒を縦に通したお棺を、四人のものが交替でかついでいく。血の気のないやせこけた人々の顔、ひげぼうぼうのくぼんだ頬、首にまきつけた赤や青のレンソ（いわば手拭）がこれまたいっそうあたりを無気味な

ものにした。氾濫したバガスー川の濁流の中を、七〇キロに近い白木のお棺をにないながら、よろよろと渡っていく姿は、まことに、この世のものとは思われなかった。

しかし、どうにか埋葬も無事にすんで、往復四〇キロの暗やみの山路を、とぼとぼと帰る人々は、あまりの疲労と空腹のため、ひとことの言葉をかわす元気すらなかった。はうようにして、やっと家にたどりついたとき、またもや新しい死亡者があると聞いて、私たちは泣くにも泣けなかった。貧しい灯火のもとですすり泣く女たち、深いためいきをもらす男たち……。

開拓にまつわる思い出のエピソードはいろいろあるが、いずれも涙なくてはつづれぬことばかりである」

開拓当時の掘立て小屋には、山を焼き払ったあとの野ねずみ共が食を求めて侵入してくる。すさまじい繁殖率をもつ彼らは、安眠中の人の手足までかじりだす。猫など恐れをなして逃げだす有様である。

ところがこの年は（さきには雨が多すぎてこまったことは書いたが）、農作物は一般に上作で余裕ができた植民者たちは、新しい住宅の建築にとりかかるものもでてきた。

これが評判になって入植者がふえる。ブリグイ駅から三〇キロも奥の、コーレゴ・ロベルト、コーレゴ・フェイ

ジョー、リオ・フェイオ等の区へも入植者がおしかけた。

また、上アグア・リンパでは馬車組合（運輸機関を中心とした購買組合）なるものが生まれる。一株五〇ミルの出資で総株八十、日用品の購買や郵便物のとりあつかいを目的とするものであった。

一九一八（大正七）年には前年度の農作が評判になって上下アグア・リンパ、コーレゴ・エリージオ、リオ・フェイオ、コーレゴ・フェイジョーなど、とみに入植者がふえて約二百七十家族の邦人の一大集団が生まれた。青年会ができる。学校がたつ。

ただし、この年の六月二十五日には十数年来の大霜でコーヒーはもちろん、すべての作物を真っ黒に焼きつくす。

さらに、マラリアのほかにフェリーダ・ブラーバ（俗に森林梅毒とよぶ熱帯性かいよう）におかされるものがあり、植民地をみすてて移動するものもでた。

ビリグイ植民地の顔役の一人、山根貫一の主唱によって、アラサツーバからコーレゴ・エリージオ間一六キロの道を、植民者の協力をえて、自動車道に修理した。二トン積みのトラックがアラサツーバに現われたとき、市民はびっくりした。まだ馬車時代であった。田舎道をトラックが走りだすのは、それからと、八年後のことであつた。日本人の植民者が、マキナ（機械）の購入に

トップを切ったのであるから、市民がおどろいたのもむりはない。ところが、道の中でどうしても動かず、とうとう牛車にひかせてサンパウロ方面へ逆もどりせざるをえなかったという。これは『日伯新聞』の三浦鑿の口ききでサントスの運送会社から古手を入手したもので奥地にはむかないものであった。ただし、トラックを動かすことには失敗したが、これによってアラサツバとの交通路がひらけたことは一大収穫であった。

一九一九（大正八）年は綿作で一もうけしようとした植民者たちが害虫クルケレーにやられた年であるが、それでも害をまぬかれたところもあって、ビリグイ植民地全体では三万アローバ（一アローバは一五キロ）を収穫した。

ばったの大軍がおしよせたことは他の植民地と同様であるが、まだ周囲に大森林が多かったせいか、害をまぬかれたものもあった。コレゴ・エリージオにはブラジルの公立小学校が開設され、ブラジル人の教師をむかえたことは、この方面でも先鞭をつけたものといえる。

日本人植民者が年々増加し、各区に日本人会や青年会が生まれ、教育機関もとうようになると、植民地はもはや入植当時の未開状態を脱してにぎやかなものとなる。かくて、一九二四（大正十三）年には、——最初の入植から九年後——このビリグイ植民地内には、日本人の

家族総数は、請負者やコロノをふくめると、三百六十となり、土地所有面積は四、二〇〇アルケール、コーヒー植付け数百五十二万株、コーヒー収穫量二万五千俵、もみ三万俵、綿花三万五、〇〇〇アローバ、豆五千六百俵、とうもろこし一万五千俵、隊六千四百頭と推定されるようになる（13）。

この年の二月十七日には田付七太大使の訪問あり、これを機会にビリグイ植民地全体をふくむビリグイ日本人会が生まれる。

また、コーレゴ・コロニアでは日本人同志三人およびブラジル人一人が協力して一五アルケールの土地を三百六十の宅地（データ）に区分して、市街地を売りだすことになる。一データ三〇〇ミルから一コント（一、〇〇〇ミル）であった。この町は、はじめビラ・コンセイソンとよばれ、その後、ニッポランディアと改名されたが、戦争直前からビラツキとなった。アグア・リンパ方面に対して、もう一つのビリグイ植民地の中心となるべきところである。

だが、こうした植民地も四十年以上をすぎると、全盛期（入植後十五〜二十年ころ）とはすっかり様子が変わってしまう。入植当時、百家族をかぞえた上下のアグア・リンパ区も残っているのは二十四家族である。百六

十家族を数えたところで三十年後には、わずか十二家族に減少したところもあるし、入植後コーヒー栽培にむかないマラリア地帯であったために数年にして全部移動してしまつたところもある。

成功して事業を拡張するもの、都市へでて商業その他の事業に携わるもの、なかには無一文となつて他へ移動するもの、植民者の歴史もさまざまである。

（本項をつづるにあたつて、一九六五年十一月七日ジャバクワラ区の宮崎八郎氏宅を訪問し、筆者はいろいろお話を聞かせていただいた。そのためアラサツーバ五十年史に不足しているような点で追加した部分も多い。宮崎氏に謝意を表しておく。なお氏は一九六八年十二月二十一日おしくも長逝された。行年七十四）

バイベンとブレジョン植民地

奥ソロカバナ線サント・アナスタシオ駅の梅弁植民地を星名謙一郎が売り出したのは一九一六年であつた。こは駅へ四キロメートルの地点から始まる一、二〇〇アルケールの地域であつた。当時は、ソロカバナ線の終着駅とみなされていたところで、そこまで汽車が「行つてはもどる」*vai-e-ve*mと人が呼んでいたのが、いつのまにか、バイ・エ・ベン（バイベン）が地名となつ

てしまったものであった。(14) まもなく、サント・アナスタシオ駅と改名されたが、星名の売り出した植民地は、梅弁の名でのこった。一アルケール六〇ミル・レイス、三か年無利子の年賦払いで、入植は一九一七年からはじまっている。

星名はさらに、一九一七年、北海道から移住してきた小笠原一族の小笠原尚衛の出資と一族(十二家族)の土地代をもつて、アルバレス・マツシャード駅の付近を、これも三年賦無利子の好条件で三〇〇〇アルケールを(15)ブレジョン植民地として売り出した。ブレジョン植民地は星名・小笠原が共同で売り出したものであるが、土地売りや外部との交渉は、主として星名がこれにあたり、小笠原は出資者ではあったが、自分の農場で農業に従事した。

星名謙一郎は一九一五年ブラジルで最初の邦字新聞を出したものとして記憶されている。謄写版刷りの「菊版八切りの一二ページもの(16)」週刊「南米」と弥した(17)。「星名はこの新聞を足場に、一九一六年ソロカバナ線サント・アナスタシオ駅から始まる梅弁植民地を売り出した」(木村幸太郎)もので、土地売り商人として植民地の建設にとりかかった典型的な人物であったといえる。彼の発行した新聞は、「一年足らずで廃刊した(18)」。

そして、一九一七年には現地のアルバレス・

マツシャードへ乗りこんだのであった。

星名は植民地経営について、

「よろしく温情主義をすて、企業であるという方針を採らなければ成立するものではない（19）」

という一貫した主義をもっていた。

星名謙一郎（一八六五―一九二六）は怪傑と評され、ジャカレー（わに）とあだ名されていた。

彼は愛媛県人で、青山学院の第一回の卒業生、同志社大学を中退してハワイに渡り、新聞記者、カンナ園の通訳などをしてからいったん帰国し妻帯したが、今度はアメリカへ渡って米作その他の事業でここに二十六年をすごし、のち妻子を日本へ帰し、単身アルゼンチン経て一九〇九年ブラジルへ渡ってきた者であった。

彼の人物は「怪傑」と評されるだけ、謎につつまれている。若き日、クリスチャンとして人道主義的立場からつぶさに世の辛酸をなめた経験をもっていたという。骨のある人物として、一部では高く評価されているし、彼の事業は生前必ずしも正当の価値をみとめられなかったうらみはあるが、のこした功績は大きい。ただ、温情主義をいれない冷厳な性格に親しみをもてない人間も多かった。彼は自らを「乱世の雄で、治まった世に住む人間ではない」といつていたといわれる（山下定一（20））。

容貌魁偉、「乗ずる寸分のすきもない（21）」人物であつたという。

しかし、晩年にはものに感じやすく、ポロリと涙をながすふうであつた。植民地の茅屋に愛犬とバクを友とし、二人の孤児をやしないながら「俺もやつと金ができた。これから四面楚歌をやぶって宿望をはたすぎ（22）」と勇んでいたといわれる。死の一年前有名な愛人お玉を強盗に殺害されている。

彼の事業の前には、いつも風波がたちあらわれた。むろん、それは、時代と場所のせいもあつた。当時はインチキ地主や土地占有のための無頼漢が手下をしたがえて幅をきかけていた時代であつて、土地の境界あらそいや追い出しの血なまぐさい事件がたえなかつた。彼も土地の係争で苦心した。

彼は一九二六年、二か年越しの低利資金運動が効を奏して、いよいよ銀行へ金をうけとりにプルデンテ市へ向かうべく、アルバレス・マッシヤード駅のプラット・フォームで汽車を待つ間、自分の使用人カマラーダに狙撃されて落命した。理由は支払いがとどこおっていたことから、うらみをかったのだともいい、また、あやまつてうたれたのだともいう。

出資者小笠原尚衛の父吉次は北海道開拓の成功者であつて、一九一八年九十二歳の老齡にもかかわらず、一

族郎党七十三名をひきつれて渡伯した開拓精神の権化のような人物であつた。日本を発つとき、鋤を手にしてみんなに示しながら、「わしはこの鋤をブラジルの大地に打ちうちこめば、死んでも満足じゃ」といったと伝えられている。入植直前、グリッペ・エスパニニョーラ（スペイン風邪）でサンパウロ市に没した。一族は、星名とはかなりちがった理想家肌の人たちであつたことが推察できる。

一九一七、八年ころのソロカバナ鉄道は、まだインディアーナ駅までしか開通していなかった。それからさきは、レゼンテ・フェイジョー、プレジデンテ・プルデンテ（のちのプルデンテ）、アルバレス・マツシヤード、プレジデンテ・ベルナルデス、サント・アナスタシオとみな工事中であつた。

一九一八年には、アルバレス・マツシヤードまで、工事車が通るようになったが、旅客も荷物もはこんでくれないので、一九一七年ころの入植者たちは五〇キロメートルのピカード（測量のための細道）を徒歩で、食料その他をはこばねばならなかった。初期入植者たちの苦労話は、いつもこのことに集中されるのであつた。「家を出るときは、妻は夫の無事を祈り、夫は妻子の恙なきを祈り、町で買物をすまして荷物を肩に、家路をいそぐとき

も、無事でいてくれるようにと足を早めるのであった
(23)

家路といっても五〇キロの山道、妻子は新開地の掘立て小屋に野獣のなき声を耳にしながら空をあおいで待っていたのである。

やがて、要領のいいものは人夫に金をつかませたり、機関車の燃料である薪を山から切りだしたりして工事車を利用することもあった。これにはやはり時間と労力が必要であった。だから、植民地にのこしてきた妻子が気になることに変わりはなかった。

サント・アナスタシオ駅のバイベンには一九一七年、四家族の入植者があり、アルバレス・マツシヤードのプレジョンへは年末になつて二家族、そして翌一八年には、つぎつぎと入植者がふえて四十家族近くに達した。このころになると、馬やラバで人や荷物をはこぶものもあらわれ、また、日本人ではごくめずらしいことであつたが、馬車ひきを専門にするものもあらわれた。

鉄道が開通したのはやつと一九二〇年のことであつた。

植民地の生活は、奥ソロカバナもノロエステも別に変わつたものではなく、コーヒーは植えても、みのるまでの四、五年間は、いわゆる雑作で生きぬかなければならない。しかも、ファゼンダから直接植民地へとびこみ、二

年目には土地代も支払えないというような無資本者が多かったこととて、住居、衣食等ずいぶんきりつめたものであったことは想像にかたくない。ただし、「天恵ゆたかな沃土が幸いして何を植えてもいやというほどのみのり方、就中、白豆に至っては、他の追従をゆるさぬほどのできばえ、ことに値段がいいので、苦しかった経済を助けたことは非常なものであった(24)」というようなこともある。だが、じゃがいもを植えても栽培の知識がないために失敗し、綿も殺虫剤なしで、全部害虫にやられたこともあった(これはノロエステも同様)。しかし、入植当時は、お互いに助けあったし、また元気いっぱい働いた。ファゼンダのように、しいられた労働ではないから、倍も苦勞しながら、苦勞とも思わず、働けたのである。

しかし、まだ鉄道が開通したばかりの新開地で、各地から流れて来た人夫(カマラーダ)たちの気風はすさんでいて、正月など、うっかり祝い酒でもふるまうものなら、凶暴性を発揮し殺人沙汰にまで発展することがあった。

一九二〇年の元旦には、日本人三人、ブラジル人一人がブラジル人カマラーダの毒刃に惨殺された。

入植三年目の一九一九年には日本人会が生まれ、小笠原尚衛がえらばれて、初代プレジョン植民地日本人会の

会長に就任し、小学校も第一、第二と前後して設立され、植民地の形態もとのつていった。

さらに、一九二三年になると綿景気が出て植民者たちは希望にあふれた。このころ田付大使の訪問もあつて植民者一同感激したと伝えられている。だが一九二四年七月には、突如としてイジドウロ將軍の革命となつて交通は遮断され、綿景気はいっぺんに中断、しかも、八、九、十の三か月は、革命軍敗戦兵の略奪暴行がいたるところで行なわれて、みなおそれおののき、「町近くの住民は家ですてて、婦女子をつれて遠く森林中にかくれ、食料その他の必需品は、あらゆる方法でもつて、もち出すやら、かくすやらの騒ぎ。中には穴を掘つて米や豆その他の雑穀類を埋め、もう大丈夫という時分に掘りだしてみれば、大部分腐っていたとか。悲劇の連続はそればかりではなく、ようやく官軍が追撃（？）、賊軍と入れかわつたので安心だと思えば、やはり似たりよつたりのカマラーダ兵であつた（25）」

このとき官軍兵に撃たれた二邦人があり、一人は一眼を失つただけで命に別状はなかったが、もう一人は一日後に落命している。

その他、革命軍に運搬車（カローツサ）二台とラバ十頭以上をうばわれたもの、警備兵と称する官軍に商品を持ち出された商家などがあつて被害は大きかった。しか

も、この年は綿花売買契約は、商人側から破約してくるものが多く経済の行きづまりは底をつく有様であった。そのうえ、この年はまれにみる干魃がつづき、次年度の作物に希望を託することができない状態であった。

こうした農家の窮状からおこったのが、百万円の低利資金融通を日本政府に請願する「八五低資運動」で、奥ソロカバナでこの運動の先頭に立ったのがプレジョン植民地の創設者星名謙一郎であった。百万円の請願は八十五万円として一九二六年に融通されることになったのであるが、これによって実際に救われた農家はごく僅少であつて、植民者たちはすでに自力更生の途上にあつた。

さてその後は、農産物の価格の変動によるいくらかのうきしずみはあつたとしても、奥ソロカバナもしだいに未開状態を脱して、だんだん明るい時代を迎えるようになる。

一九三二年の調査によると、サント・アナスタシオの梅弁植民地は、日本人所有面積七五八アルケール。自作農四十八家族、その他請負者およびコロノを合わせると八十五家族で全人員五百十一に達した。

なお、同駅を中心として百四十家族、八百三十八人がいて、土地所有面積は自作六十五家族の一、一八〇アルケールであつた。

アルバレス・マツシャードのプレジョン植民地は、一

九三二年に、三百八十四家族二千百九人。自作百七十五で、同駅全体の総計は四百二家族二千百九十六人になったのであった。

多くの殺人事件があり、殺伐なところとして世間から恐れられていた奥ソロカバナのアルバレス・マツシャードも、ブラジル拓殖組合のバストスをふくむランシャリア駅にくらべれば、第二位になるが、もしバストスを今日のように、パウリスタ線イアクリー駅にうつしてしまふとすれば、当時としては奥ソロカバナ第一の日本人集団地となっていたのである。

注

(1) 一九三五年七月六日、リンス市のサンタ・カーザ(慈善病院)で死去。

(2) 『移民の父、上塚周平』一〇八ページ。

(3) 同上、一八三ページ。

(4) 同上、一八七ページ。

(5) 同上、一九三ページ。

(6) 同上、一五六ページ。

(7) 同上、一九八―一九九ページ。

(8) 同上、三四八―三四九ページ。

(9) 『移民廿五周年記念鑑』三二六ページ。

(10) サンパウロ土地・木材・植民会社の株主七人

の名。すなわち、Manoel Bento de Cruzは地主でバウル市長をつとめた人。Dr. Elysiode Castroは地主。Robert Clarkはのちの会社総支配人で英国人。Dr. Arlindo Rimaはもとノロエステ鉄道関係の人。Edward Hamelは英国人。Dr. Francis Kefferも英国人。James Mellorも英同人で最初の総支配人。

(11) 『アラサツバ五十年史』一一九ページの「宇治野順次談」。

(12) 『アラサツバ五十年史』一二〇ページ。

(13) 『北西年鑑』一九二四年刊。

(14) 牛窪襄著『上利新吉』(伝記)一六六ページ。

(15) 『コロニア五十年の歩み』(木村幸太郎筆)六二ページ

(16) この新聞に直接関係のあつた輪湖俊午郎の著書には、『週刊南米』とある。

(17) 『移民四十年史』には週刊『南米』とある。なお間接的に関係した鈴木貞次郎は『南米』とだけ書いている(埋れ行く拓人の足跡』四〇五ページ)。

(18) 『移民四十年史』四〇八ページ。

(19) 『上利新吉』一四四ページ。

(20) 『よみもの』一九四九年七月号、四六ページ。

- (21) 『埋れ行く拓人の足跡』三一―ページ。
- (22) 『物故先駆者伝』二五ページ。
- (23) 『上利新吉』一六六ページ。
- (24) 上掲「よみもの」。
- (25) 同上。
- (26) 『移植民廿五周年記念鑑』による。

27 地 権 問 題

――植民者にふりかかる人為的災難

多くの犠牲者を出したマラリアも開墾がすすむにつれて下火となり、ばった軍襲来で地上の作物を丸坊主にされたのちは飢えをしのぎながらも二年、三年とがんばりつづけるうちに永年作物としてのコーヒーがのびて、来年は一儲けできるそうだ、そうしたら家も新築しよう、倉庫もたてようと希望に胸をふくらませているころ、思いがけない災難がめぐってくることもある。一夜の降霜に、丹精のコーヒー園が、真っ黒になってしまうことがある。しかし、天然の災害はまだあきらめがつく。そうではなく、なんとしても気持ちがおさまらないのは、人為的な災難であつた。

全く不意打ちに、数人、ときには十数人の武装兵士をひきつれた警察の一隊が、トラックで植民地へ乗りこん

でくる。そして、まずめぼしい一軒に到着し、「お前らは他人の土地に、不法侵入した土地占有者だ。四十八時間以内に植民者一同二十八家族の立退きを命ずる！」と宣告するのである。「うたがわしく思うものは、これを見ろ、裁判所の命令だ！」と書類を示す。

むろん、なんのことかわからない。だが「おかみーアウトリダーデー」が兵隊をひきつれての立退き命令であることはわかる。植民地中に伝令がとんで、家長たちはもちろん、主婦も青年もみなかけつけるが、不安におののくばかりで、とっさにはどんな知恵もうかばない。

せつかく多くの人命を犠牲にし、あるいは飢えをしのぎ数年、いな十数年もがんばってきて、ようやく希望をとりのどしたところである。「そんな不合理なことがあるものか、もしこの土地が不法占有であつたら、なぜはじめから入植を拒否しないのだ。十年もがんばって、やっと目鼻がついたころ警察が兵隊をつれて追いだしにくる！」植民者たちは、気も狂わんばかりに仰天するのであった。がっかりしてくずおれる婦人もある。ポロポロ涙がこぼれる。どうしようもない。がよく聞いてみると、土地代を二重払いせよ、ということらしい！ 目当ては金であつた。植民者に金のできるころを見はからつての陰謀であつた。

さあ、どうするか、二日間に金ができるか一アルケ―

ル三五〇ミル出せば事はおさまるのだという。一家族一〇アルケールとして三コント五〇〇。二十八家族では九五コントではないか。そんな金がどこにある。まてよ、二十八家族がひとかたまりになって、てこでも動かないとなったら、どうするか？ 剣銃でおいたてるつもりか？

こうなったら、領事館へ訴えるより方法がない。

なんとか急の場をごまかして、今日のうちにサンパウロへ急使をとばせ！ 警官がひきあげたのちは、植民者一同の会議である。

日が暮れても安息はこない。もしやりそこなったら、この植民地は丸つぶれ、百数十人が路頭に迷うのである。

どうしてこんなことがおこりうるのか、それは、ブラジルの新開地であればこそであつた。まだ鉄道が敷設されなかったころ、そのあたりはすべて大森林地帯で、もちろん道路もなかった。しかも、おおざっぱな測量のもとに、土地の売買はあつた。そして、あやふやな地権（あとでわかるものであるが）であつても、人間のはいらないうちは問題にならなかつた。開拓がすすんで土地が細分されるようになると、ときには、二人も三人も、ここはおれの土地だ、というものがでてくるのである。むろん、ただ、おれの土地だ、といったところで、だれも相手にしない。おれの土地だ、といいはるには、一応法定

上の準備をととのえる。警察をうごかすだけの金もつかう。子分を集めて策動する。場合によっては暴力で対抗しなければならぬ。こういうときには、尻尾をまいて退去したほうが負けである。多くの人間を動員できるボスであれば、相手の人間を二人や三人闇に葬っても発覚して問題になるようなことはなかった。個人の犯行として犯人を逃がすことができたのである。

常識では考えられないようなことが新開地ではありえたのであった。

プロミッソン駅上塚植民地の一部バレーロ区に端を發した日本人百数十家族の追い出し事件は、一八八一年における土地売買に関する譲渡証書に不備なところがあつたというので、二十四年後の一九〇五年になって一度問題となったもので、さらに、それが現実に再分割をうけた日本人植民者が迷惑をこうむつたのは一九三四年、すなわち、さらに二十九年後であつた。だから、問題になった土地売買の一八八一年から、すでに三十九年もたつていたのであつた。むろん、その間、土地の所有権は、二重になって、いろいろな人間の手にうつつてのち、一方では日本人へ細分して売り出したが、正当所有権を主張する他の地主が日本人追い出しによって一儲けしようとしたわけである。問題になっている土地は安く買いうけ、裁判と暴力によって、巨利をむさぼろうとする人間が、

當時は各地にいたのであった。

この問題に関係ある日本人植民者は百数十家族に及びその土地面積は二、五二六アルケールにも達するので、領事館もうごいて立ち退きだけはまぬかれたが、ついに裁判は日本人側に不利となった。しかし、このとき、日本人植民者側には、義人・間崎三三一がいて一身をなげうって奔走したので、地主が最初にいいだした二重払いの金額一アルケール三五〇ミルを一〇五ミルまでひき下げることに成功した。

このとき日本人の土地で二重払いしなければならなかったのは、前記の二、五二六アルケールに対する二六五コントであった。

当時「東山」のノロエステ総代理人であった間崎のために、快く金を貸してくれたのが「東山」の君塚慎（第二次大戦後の初代大使）であった。裁判や地権登記などのこともあったのであろう、その金額は四〇〇コントであったといわれる。

こうした問題は各地に起こった。「極端ないい方をする」と、日本人植民地の初期の土地で、大なり小なり、地権をめぐる問題が起きなかったのは、むしろ少ないはうかもしれない。そして所有権のあらそいは、決して入植直後には起こらないのが特長である。開拓され、何年かたって土地の価値が出たころになって、始めて表面化する

る」といわれているとおり、決してめずらしいものではなかった。植民地も集団の大きいところは問題も社会化して、解決の道もでてくるのであるが、数家族の小集団などでは、地主のいいなりに二重払いさせられたところも多かった。

一九二七、二八、二九の三年間にわたるソロカバナ線パラグアツスー駅文化植民地の土地係争は、「一部の邦人の指喉（しそうけしかけ）」と伯人有力者の暗躍（２）」によって、悪化したもので、このときも偽称地主は、裁判所の命令書をもって、武装した兵隊をつれて日本人追放に乗りこんできたのであった。しかも日本人の入れ知恵もあつたときには、同国人だからといって油断はできなかった。

この事件は、ついに流血の惨事をまねき、敵の暴力団の首魁は銃殺され、味方をまもった一団は捕縛されて、牢内でさんざんリンチにあつて片輪にされたものもでた。

しかし、裁判の結果は日本人側の正当性がみとめられ、偽称地主の敗北となったが、この間に使った金は、五千町歩の土地代の一、二〇〇コントに対して二、三〇〇コントにのぼったが、正義の戦いのためにはやむをえなかったのだといわれている。日本人与しやすしとみられたら、累はどんどん他に及ぶことはあきらかだったからである。

文化植民地は新教の牧師・森諄吉と山田登幸の建設にかかるもので、ともに北米をみかぎってブラジルをカーナンの地とさだめた理想家たちであった。

プレジョン植民地の建設者であった怪雄星名謙一郎もながいこと地権や境界の争いで苦勞した。地権争いにおいては、前々地主が、この土地は売ったおぼえがない、というので起こったものであった。

もう一つは、星名が分譲した土地の再測量を行なった上利新吉（の伝記）によると、その土地は、他所へ約三〇〇アルケールも侵入していたものであった。そんなことをしらずに土地を購入した日本人たちは、隣接外人との境界が、あるいはあちらへ入りこみ、あるいはこちらへ入りこまれていたりしていたことが、紛擾のもとであることをしつたのである。ここでは「きりあい、打ちあい」があつて、ながいあいだ植民者は苦勞した。

こうしたことに直接関係があつたかどうか知らないが、常に傲然とかまえていた星名は、はじめに愛人を殺されたのちには自分もまたカマラーダの一人に射殺されたのであった。

はじめからインチキとわかっていながら、事情もわからず、言葉もろくにできない日本人を頭からなめてかかる陰謀家が多い。そういう場合は、中間に立つ同胞が、よほど信用があり、手腕があつて、そのうえ勇氣のある様

犠者を救いだすこものでなければ、陰謀をみやぶり、とはむずかしい。

ここでは、ある個人の伝記（3）から、見事な成果をおさめた調停の一例を再録しよう。

一九二五、六年のころであつたろう。

ソロカバナ線アルバレス・マツシャード駅から、三キロメートルの地点を、二人の日本人が土地の先駆者の一人から購入した。彼らは、さっそく山を伐り、作物を植えたのである。すると一日、隣接の地主が、不法にもこの土地に柵をめぐらし、用心棒をおいて彼ら日本人耕作者を一步も寄せつけないようにしてしまった。困りぬいた二人は、ある日本人を訪ねて、なんとか先方と話をつけてもらいたいと頼みこんだ。この調停をひきうけたのが、この「伝記」の主人公上利新吉であつた。

「彼が地図をしらべ、測量してみると、どうしても日本人側に不利であつた。隣接外人地主は作物を返すどころか、反対に土地侵入罪で訴えると意気まいている。これじゃ調停どころの騒ぎじゃない。

ところが、新吉は（測量師であつた）職業がら、新開地には、よく地主が二人も三人も現われたり、幽霊土地や、架空地主、かたりやペテン師が多いということを知っていたので、なんとかして作物だけでも返してやれ

ないものかと、相手の土地調査にかかった。

プレジデンテ・プルデンテ市（4）、アッシス市と調べた結果、コンセッソン（認可書）がモンテ・アレグレ市にあることがわかった。新吉はさっそくモンテ・アレグレ市に飛び、登記役場を調べたところが、コロネル・ゴラルチ（なるもの）から買った（という隣接地主の）土地は、そこから三〇キロ先の反対側であることがわかった」

「このかたり者奴が！ 彼の体内には油然として義憤がわいた。

しかし、相手はすでに十五年も住みついている。裁判しても、金をつかうだけでらちはあくまい、と考えた新吉は、帰省するとただちにニセ地主の宅を訪ねた。

いまでもそうだが、新開地に行くと人々は、ピストルやファッコン（山刀）をぶらさけて歩いている。物騒な新開地では、自衛上当然なこととなっている。まして相手は、人殺しや腕力を自慢にしている凶状持ちである。いつもカッパンガ（用心棒）の五、六人をしたがえて歩いている暴力団長である。ただごとではすまずまい、と彼は必死の覚悟で乗りこんだのであった。左手にパスメ（手提かばん）、右手はポケットの中に、その人差指は拳銃の引きがねにかかっている。

「おはよう」

と彼は下腹に力を入れて声をかけた。

「どうかね、日本人、おはいり」

相手は、きざみかけたフーモ・デ・コールダ（削り煙草）をメーザ（机）の上において、太い毛むくじやらない手をさしだした。まるで熊のような手だ。身の丈六尺有余、体重は三十五、六貫はあろうか、まるで山のようなある。

「実は、例の日本人のことできたのだが、どうかね、あの土地を日本人にかえしてやってくれないか、あの日本人はなにも知らないんだ。かわいそうに、土地代にも困っているんだ」

「モツソ（青二才）しつつこい。あの日本人は殺してもあきたらぬ奴だ」とどなった。すると、それを合図のように、ドタドタと足音がしたかと思うと、五、六人のカマラーダ（労働者）が彼の背後を取り巻いた。

「私は、あなたと二人だけで話がしたい。すまないが、この人たちに、ちよつと遠慮してもちいたいのだが」

「どういうわけで」

「あなたのために」

男の眼がカツと燃えて、無気味な数秒がたった。

「ちよつと席をはずしてくれ」

と乾児（こぶん）を見まわした。ドスのきく声だった。

「お前どうしても相談にのってくれないのか。あんまり欲

をだすと、元も子もなくなるようなことになりはせんかね」

「それはどういうわけかね」

「あなたの名誉のためにいいたくない。私はモンテ・アレグレ市の登記役場を調べてきている。ネタは全部あがっているのだ」

「なにッ」

相手の眼がギロツと光った。

「悪いことはいわない、土地を日本人に返してやってくれ、そのかわり私は眼を閉じよう」

みるみるうちに男の表情が変わった。彼は相手の眼をみつめたまま、ポケットの中で拳銃を握りしめた。二秒、三秒、と時は刻んでいく。まことに手に汗をにぎる（…………）劇的な場面であった。

よほど度胸がすわっていないくてはできない芸である。

「"Confio te" お前を信じよう」

「よかった、それで二人の男がたすかる」…………

事件が起こってから二か月目、新吉の決死的調停によって、事件はめでたく解決した」のであった。

- (1) 『コロニア五十年の歩み』一一三ページ。
- (2) 小野真禅著『ブラジルに於ける第一線に活躍する人々』上巻、三三八ページ。
- (3) 『上利新吉』一四六―一五一ページ。
- (4) いまのプルデントン市。

(第三部おわり)